埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第479集

久喜市

栗橋宿西本陣跡Ⅰ

首都圏氾濫区域堤防強化対策における
埋蔵文化財発掘調査報告
（第1分冊）

2023

国土交通省　関東地方整備局
公益財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

火災処理土壙出土陶磁器（1）

巻頭図版 2

火災処理土壙出土陶磁器（2）

序

埼玉県北部の県境を流れ下る利根川は、坂東（関東）にある大河であり、河川の長男に擬され「坂東太郎」とも呼ばれています。その流域に育まれた肥沃で広大な大地には、1,280万人にもおよぶ人々が生活を営んでいます。

また、万葉集の東歌に「刀祢河泊」と詠まれるなど、いにしえからその脅威と恵みに対し、人々は畏怖と親愛の想いを抱いてきました。滔々たる流れは交通路として、また農業・生活・工業用水の源として、限りない恩恵をもたらす一方で、過去にはたびたび恐ろしい水害を引き起こしてきました。

そこで、国土交通省では災害を未然に防ぎ、首都圏の安全性を確保するため、氾濫区域の堤防強化対策事業を実施しています。

この事業地に含まれる加須・羽生・久喜地区には、周知の埋蔵文化財包蔵地が多数存在しています。久喜市の栗橋宿西本陣跡はその一つであり、当該事業に伴う事前調査として、国土交通省関東地方整備局の委託を受け、当事業団が発掘調査を実施しました。

江戸時代に日光道中の宿場であった栗橋宿は、商人や職人の住まいが建ち並び、利根川を船で越える房川の渡しには関所が置かれ、交通の要衝として栄えました。今回の調査では、宿場の町屋を構成していた建物跡や池の跡が検出されました。そこからは、江戸時代の人々が使用した陶磁器や金属製品、木製品などの多量の道具類が見つかりました。また、文政五年（1822）の大火により焼けた陶磁器などが多量に廃棄された土壙が検出されたことから、本陣跡における火災関連遺構との関係が確認できました。これらは、宿場町の生活と災害の脅威がうかがえる貴重な資料です。

本書は、これらの発掘調査結果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護及び普及啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として、多くの方々に御活用いただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、御尽力を賜りました国土交通省関東地方整備局、埼玉県教育局市町村支援部文化資源課、久喜市教育委員会、地元関係者等の皆様に厚くお礼申し上げます。

令和５年２月

公益財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長　依田英樹

例　言

1　本書は久喜市に所在する栗橋宿西本陣跡の発掘調査報告書である。

2　遺跡名と代表地番、発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

栗橋宿西本陣跡（№86－008 第1次）
久喜市栗橋北二丁目3422－2他
平成27年7月13日付け教生文第2－24号
栗橋宿西本陣跡（№86－008 第2次）
久喜市栗橋北二丁目3422－2他
平成28年5月28日付け教生文第2－1号
栗橋宿西本陣跡（№86－008 第3次）
久喜市栗橋北二丁目3422－2他
平成29年5月8日付け教生文第2－4号
栗橋宿西本陣跡（№86－008 第4次）
久喜市栗橋北二丁目3422－2他
平成30年4月10日付け教文資第2－4号

3　発掘調査は、首都圏氾濫区域堤防強化対策事業に伴う埋蔵文化財記録保存のための事前調査である。埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課（当時）が調整し、国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所の委託を受け、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4　各事業の委託事業名は、下記のとおりである。

発掘調査事業（平成27年度～平成30年度）
「首都圏氾濫区域堤防強化対策（加須・久喜地区）における平成27年度埋蔵文化財発掘調査」（第1次）
「首都圏氾濫区域堤防強化対策（加須・久喜地区）における平成28年度埋蔵文化財発掘調査」（第2次）
「首都圏氾濫区域堤防強化対策（加須・久喜地区）における平成29年度埋蔵文化財発掘調査」（第3次）
「首都圏氾濫区域堤防強化対策（加須・久喜地区）における平成30年度埋蔵文化財発掘調査」（第4次）
整理・報告書作成事業（平成31年度～令和4年度）
「首都圏氾濫区域堤防強化対策における平成31年度埋蔵文化財発掘調査（整理）」
「首都圏氾濫区域堤防強化対策における令和2年度埋蔵文化財発掘調査（整理）」
「首都圏氾濫区域堤防強化対策における令和3年度埋蔵文化財発掘調査（整理）」
「首都圏氾濫区域堤防強化対策における令和4年度埋蔵文化財発掘調査（整理）」

5　発掘調査・整理報告書作成事業はⅠ－3に示した組織により実施した。

発掘調査は、第1次調査を平成27年8月1日から平成28年3月31日まで実施し、栗岡潤、小野美代子が担当した。

第2次調査は、平成28年4月1日から平成29年3月31日まで実施し、田中広明、栗岡、古谷渉、坂下貴則、近藤洋、桂大介、鈴木志穂が担当した。

第3次調査は、平成29年4月1日から平成30年3月31日まで実施し、山本靖、栗岡、古谷、劒持和夫、昼間孝志、原野真祐、大塚邦明が担当した。

第4次調査は、平成30年4月1日から平成30年9月30日まで実施し、栗岡、赤熊浩一、大塚、近江屋成陽、吉留頌平が担当した。

整理・報告書作成事業は、令和元年度11月1日から令和5年2月28日まで実施した。

このうち、令和元年度は3月まで矢部暹、魚水環、令和2年度は矢部、金子直行、近江屋、令和3年度は矢部、青木弘、滝澤誠、富田和夫、大塚、古間果那子、高橋杜人、令和4年度は水村雄功、古間が担当した。

報告書は令和５年２月20日に埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第479集として印刷、刊行した。

6　発掘調査における基準点測量は、株式会社東京航業研究所に委託した。

7　発掘調査における空中写真は、株式会社東京航業研究所、株式会社ＧＩＳ関東、株式会社新日本エグザ、三和航測株式会社に委託した。

8　発掘調査における自然科学分析は、株式会社パレオ・ラボ、パリノ・サーヴェイ株式会社、株式会社古環境研究所に委託した。

9　発掘調査における写真撮影は各担当者が行い、出土遺物の写真撮影は、木村・古間が行った。巻頭図版用の遺物撮影は、小川忠博氏に委託した。

10　文字資料の釈文については、久喜市教育委員会の協力を得た。また、文献調査に際して、『栗橋宿往還絵図』に関する資料提供を受けた。

11　出土品の整理・図版作成は矢部、青木、魚水、滝澤、金子、富田、水村、大塚、古間、近江屋が行い、陶磁器・瓦については村山卓、木製品は砂生智江、金属製品は瀧瀬芳之・井上真帆、文字資料の釈文の一部は依田英樹の協力を得た。町並の復元、文献調査にあたっては、鯛持、高橋の協力を得た。

12　文献調査に際して、久喜市郷土資料館より「栗橋宿往還絵図」に関する資料提供を受けた。

13　本書の執筆はⅠ－１を埼玉県教育局市町村支援部文化資源課、Ⅳの遺構に関する事実記載を水村が行った。遺物のうち陶磁器を水村・村山、木製品を水村・古間、金属製品を古間が行った。Ⅵ－４は古間、その他の執筆を水村が行った。

14　本書の編集は水村・古間・矢部が行った。

15　本書にかかる諸資料は令和５年３月以降、埼玉県教育委員会が管理・保管する。

16　発掘調査や本書の作成にあたり、下記の関係機関及び方々から御教示・御協力を賜った。記して感謝いたします（敬称略五十音順）。

久喜市教育員会　江戸遺跡研究会
江戸在地土器研究会　池尻　篤　栗原史郎　島村範久　中嶋義明　中村和夫　堀内謙一　巻島千明

凡　例

1　遺跡全体におけるX・Yの数値は、世界測地系、国家標準平面直角座標第Ⅸ系（原点北緯36°00′00″、東経139°50′00″）に基づく座標値を示す。また、各挿図に記した方位は全て座標北を指す。

B5－J3グリッド杭の座標はX＝15810.000m、Y＝-11880.000m、北緯36°08′32″東経139°57′55.24″である。

2　調査に際して使用したグリッド名称は、事業地内の全体を覆うように設定した。座標値X＝16000.000m、Y＝-12300.000mを北西の原点（A1－A1グリッド）とし、100×100mのグリッドを設定し、さらにその中を10×10mの小グリッドに細分した。

3　グリッドの名称は、北西原点を基点に北から南にアルファベット（A・B・C…）、西から東に数字（1・2・3…）を付し、アルファベットと数字を組み合わせた。同様に小グリッドは各グリッドの北西隅を基点に、北から南A～J、西から東に1～10とし、グリッド　　内を100に区分した。これらを合わせた呼称は、ハイフォン（－）をはさみ、大グリッドを左に、小グリッドを右に表記した。(大グリッド)－(小グリッド)

4　本書の本文・挿図・表・写真図版に記した遺構の略号は、以下のとおりである。

SB…建物跡　基礎…基礎状遺構
桶…埋設桶　SE…井戸跡　SA…柵跡
SD…溝跡　SG…池跡　焼土…焼土遺構
SK…土壙　P…ピット

5　本書における挿図は、一部の例外を除き以下の縮尺を原則とした。

全測図　1/600・1/200
遺構図　1/80・1/60・1/30
遺物実測図・拓影図　1/2・1/3・2/3・1/4・1/6

遺構図で、重複する本書報告対象外の遺構については、5％で網かけした。

6　遺構断面図に表記した水準数値は、全て海抜標高（単位m）を表す。

7　遺物観察表の表記方法は以下のとおりである。

・遺物計測値は陶磁器、土器等をcm、銭貨をmm、重さをg単位とした。
・土器計測値の（　）は復元推定値、［　］は現存値を示す。
・瓦の計測値は「長さ」に瓦当面からの長さ（奥行き）、「幅」に全幅、「厚さ」に平瓦部厚さ、「高さ」に接地面からの高さ、「径」に軒丸瓦部分の瓦当面径を記載した。
・陶磁器のうち、輪高台状のつまみを有する蓋は、つまみを口径、受口を底径の欄に記した。
・胎土は特徴的な鉱物等を記号で示した。
A：雲母　B：片岩　C：角閃石　D：長石
E：石英　F：軽石　G：砂粒子
H：赤色粒子　I：白色粒子　J：針状物質
K：黒色粒子　L：その他　M：チャート
・焼成は良好・普通・不良の3段階に分けた。
・残存率は器形に対する大まかな遺存程度を％で示した。
・備考には出土位置、煤の付着、推定生産地、文様の特徴等を記した。

8　遺物実測図の網かけは漆、被熱の範囲を表す。網かけの濃度によって区分し図中に例示した。
赤漆20％　茶漆30％　黒漆35％　炭化50％

9　本書に掲載した地形図類は国土地理院発行の1/50000地形図、久喜市発行の1/2500都市計画図を編集のうえ使用した。

10　遺構番号は、混乱を避けるため、原則、調査時のものを用いた。調査の都合上、遺構検出面

と遺構番号が前後する遺構もある。また、多くの欠番が生じているが、これらについても欠番のまま扱った。整理作業において調査時と遺構の性格が異なると判断したものは遺構名・遺構番号を変更した。変更したものについては下記の表に示した。

11　文中の引用文献等は、（著者　発行年）の順で表記し、参考文献とともに巻末に掲載した。

遺構番号振替え・欠番一覧表

第一面

新	旧	備考
SB3	SB4	統合
基礎 8	SB12P10	名称変更
埋納 1	—	新規発番
SE4	SK501	発掘後 SE15 に整理で再度変更
SE19	桶 35	名称変更
SG2	SK47	名称変更
SG3	SK49	名称変更
杭列 6	SD7	SD7 → SA5 → 杭列 6 と名称変更
SD27	—	新規発番
SD28	SB10（南側）	新規発番
SA1	SA2	統合
SA1	SA3	統合
SK52	SK147	統合
SK64	SK167	統合
SK65	SD13	統合
遺物包含層 1	SG1	名称変更
B5-J4 P1	SB15P10	名称変更
B5-J5 P1	—	新規発番
B5-J5 P2	—	新規発番
欠番	桶 38	
欠番	SK55	
欠番	SK57	
欠番	SK83	
欠番	SK91	
欠番	SK93	

第二面

新	旧	備考
桶 91	SK172	名称変更
SE11	SK186	統合
SE22	桶 57	名称変更
DC 画施設 1	丸太列 1	名称変更
焼土 4	SK230	名称変更
焼土 5	SK241	名称変更
焼土 6	SK154	名称変更
焼土 7	SK156	名称変更
焼土 8	SK157	名称変更
SK150	SK506	統合
SK538	SG5	名称変更
SK539	SK277	SK277 → SG6 → SK539 と名称変更
遺物包含層 2	SG4	名称変更
B5-I7 P2	B5-J7 P8	名称変更
SA18 P5	C5-A6 P7	名称変更
欠番	SK138	
欠番	SK143	
欠番	SK144	
欠番	SK145	
欠番	SK174	
欠番	SK215	
欠番	SK234	
欠番	SK235	
欠番	SK242	
欠番	SK335	
欠番	SK362	

第三面

新	旧	備考
SE20	SK462	名称変更
SE21	SK382	名称変更
SK513	SE16	名称変更
SK537	SK168 下層	名称変更
樹皮堆積層	SX2	名称変更
B5-I7 P1	SA19 P3	
B5-I7 P2	SA19 P4	
B5-I7 P3	SA20 P1	
B5-I7 P4	SA20 P2	
B5-I7 P5	SA20 P3	
欠番	SK381	
欠番	SK433	
欠番	SK503	
欠番	SK505	
欠番	SA19P1	
欠番	SA19P2	

目　次

（第１分冊）

巻頭写真
序
例言
凡例
目次

Ⅰ　発掘調査の概要 …… 1
　1　発掘調査に至る経過 …… 1
　2　発掘調査・報告書作成の経過 …… 2
　　（1）発掘調査 …… 2
　　（2）整理・報告書の作成 …… 3
　3　発掘調査・報告書作成の組織 …… 3
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 6
　1　地理的環境 …… 6
　2　歴史的環境 …… 8
　　（1）中世の栗橋とその周辺 …… 8
　　（2）近世の栗橋とその周辺 …… 12
　　（3）栗橋宿の様子 …… 15
　　（4）幕末から近代の栗橋地区 …… 18
Ⅲ　遺跡の概要 …… 21
Ⅳ　遺構と遺物 …… 39
　1　第一面の遺構と遺物 …… 39
　　（1）建物跡 …… 39
　　（2）基礎状遺構 …… 89
　　（3）胞衣埋納遺構 …… 93
　　（4）埋設桶 …… 94
　　（5）井戸跡 …… 100
　　（6）池跡 …… 108
　　（7）杭列 …… 130
　　（8）溝跡 …… 133
　　（9）柵跡 …… 151
　　（10）土壙 …… 156
　　（11）ピット …… 333
　　（12）遺物包含層 …… 333

（第２分冊）

　2　第二面の遺構と遺物 …… 359
　　（1）埋設桶 …… 359
　　（2）井戸跡 …… 370
　　（3）溝跡 …… 376
　　（4）柵跡・区画施設 …… 380
　　（5）焼土遺構 …… 386
　　（6）土壙 …… 389
　　（7）ピット …… 536
　　（8）遺物包含層 …… 537

（第３分冊）

　3　第三面の遺構と遺物 …… 609
　　（1）埋設桶 …… 609
　　（2）井戸跡 …… 609
　　（3）溝跡 …… 624
　　（4）土壙 …… 631
　　（5）樹皮堆積層 …… 798
　　（6）ピット …… 818
　4　文字資料 …… 819
　5　出土遺物一覧と遺構の時期 …… 825
Ⅴ　自然科学分析 …… 851
　1　堆積物微細構造観察 …… 851
　2　砂粒組成分析・粒度分析 …… 855
　3　花粉分析（1） …… 861
　4　珪藻分析（1） …… 869
　5　花粉分析（2） …… 876
　6　珪藻分析（2） …… 881
　7　テフラの検出同定と重軽鉱物分析 … 891

8　種実同定（1）　……　894
9　種実同定（2）　……　900
10　樹種同定　……　910
11　放射性炭素年代測定（1）　……　914
12　放射性炭素年代測定（2）　……　920
Ⅵ　調査のまとめ　……　925
（第4分冊）
写真図版

挿図目次

（第１分冊）

第１図　埼玉県の地形 …… 6
第２図　栗橋宿跡周辺の地形 …… 7
第３図　周辺の遺跡 …… 9
第４図　遺跡位置図 …… 22
第５図　基本土層（１） …… 23
第６図　基本土層（２） …… 24
第７図　基本土層（３） …… 25
第８図　基本土層（４） …… 26
第９図　基本土層（５） …… 27
第10図　基本土層（６） …… 28
第11図　第一面全体図 …… 29
第12図　第一面分割図（１） …… 30
第13図　第一面分割図（２） …… 31
第14図　第一面分割図（３） …… 32
第15図　第一面分割図（４） …… 33
第16図　第二面全体図 …… 34
第17図　第二面分割図（１） …… 34
第18図　第二面分割図（２） …… 35
第19図　第三面全体図 …… 36
第20図　第三面分割図（１） …… 36
第21図　第三面分割図（２） …… 37
第22図　『絵図』等と調査区の対比 …… 38
第23図　第１号建物跡（１） …… 40
第24図　第１号建物跡（２） …… 41
第25図　第１号建物跡（３） …… 42
第26図　第１号建物跡出土遺物 …… 42
第27図　第３号建物跡（１） …… 44
第28図　第３号建物跡（２） …… 45
第29図　第３号建物跡（３） …… 46
第30図　第３号建物跡（４） …… 47
第31図　第３号建物跡出土遺物（１） …… 48
第32図　第３号建物跡出土遺物（２） …… 49
第33図　第３号建物跡出土遺物（３） …… 50
第34図　第３号建物跡出土遺物（４） …… 51
第35図　第３号建物跡出土遺物（５） …… 52
第36図　第３号建物跡出土遺物（６） …… 53
第37図　第９号建物跡（１） …… 58
第38図　第９号建物跡（２） …… 59
第39図　第９号建物跡（３） …… 60
第40図　第９号建物跡出土遺物 …… 61
第41図　第10号建物跡（１） …… 62
第42図　第10号建物跡（２）・出土遺物 … 63
第43図　第12号建物跡（１） …… 65
第44図　第12号建物跡（２） …… 66
第45図　第12号建物跡トレンチ出土遺物 … 67
第46図　第13・14号建物跡（１） …… 68
第47図　第13・14号建物跡（２） …… 69
第48図　第13号建物跡出土遺物 …… 70
第49図　第14号建物跡出土遺物 …… 71
第50図　第15号建物跡（１） …… 73
第51図　第15号建物跡（２） …… 74
第52図　第15号建物跡トレンチ出土遺物 … 75
第53図　第16号建物跡 …… 76
第54図　第16号建物跡トレンチ出土遺物 … 77
第55図　第17号建物跡 …… 78
第56図　第17号建物跡出土遺物 …… 79
第57図　第18号建物跡（１） …… 80
第58図　第18号建物跡（２） …… 81
第59図　第18号建物跡出土遺物 …… 82
第60図　第20号建物跡（１） …… 84
第61図　第20号建物跡（２） …… 85
第62図　第20号建物跡出土遺物 …… 86
第63図　第42号建物跡（１） …… 88
第64図　第42号建物跡（２） …… 89
第65図　第42号建物跡出土遺物 …… 90
第66図　第５・６・８号基礎状遺構・
　　第５・６号基礎状遺構出土遺物 … 92
第67図　第１号胞衣埋納遺構・出土遺物 … 93

第 68 図　埋設桶（1）…… 95
第 69 図　埋設桶（2）…… 96
第 70 図　第 7 号埋設桶出土遺物…… 97
第 71 図　第33号埋設桶出土遺物…… 97
第 72 図　第34号埋設桶出土遺物…… 98
第 73 図　第37号埋設桶出土遺物…… 98
第 74 図　第47号埋設桶出土遺物…… 99
第 75 図　第 3 号井戸跡・出土遺物 …… 102
第 76 図　第 4 号井戸跡 …… 103
第 77 図　第 4 号井戸跡出土遺物…… 103
第 78 図　第 5 号井戸跡 …… 104
第 79 図　第 5 号井戸跡出土遺物（1）…… 105
第 80 図　第 5 号井戸跡出土遺物（2）…… 106
第 81 図　第19号井戸跡・出土遺物 …… 107
第 82 図　第 2 ・ 3 号池跡（1）…… 109
第 83 図　第 2 ・ 3 号池跡（2）…… 110
第 84 図　第 2 号池跡 …… 111
第 85 図　第 3 号池跡 …… 112
第 86 図　第 2 号池跡出土遺物（1）…… 114
第 87 図　第 2 号池跡出土遺物（2）…… 115
第 88 図　第 2 号池跡出土遺物（3）…… 116
第 89 図　第 2 号池跡出土遺物（4）…… 117
第 90 図　第 2 号池跡出土遺物（5）…… 118
第 91 図　第 2 号池跡出土遺物（6）…… 119
第 92 図　第 3 号池跡出土遺物（1）…… 123
第 93 図　第 3 号池跡出土遺物（2）…… 124
第 94 図　第 3 号池跡出土遺物（3）…… 125
第 95 図　第 3 号池跡出土遺物（4）…… 126
第 96 図　第 3 号池跡出土遺物（5）…… 127
第 97 図　第 3 号池跡出土遺物（6）…… 128
第 98 図　第一面区画施設配置図…… 131
第 99 図　第 6 号杭列 …… 132
第100図　第 1 ～ 4 号溝跡 …… 134
第101図　第 1 号溝跡出土遺物…… 136
第102図　第 5 ・ 6 号溝跡（1）…… 137
第103図　第 5 ・ 6 号溝跡（2）…… 138
第104図　第 5 号溝跡出土遺物（1）…… 139
第105図　第 5 号溝跡出土遺物（2）…… 140
第106図　第 5 号溝跡出土遺物（3）…… 141
第107図　第 5 号溝跡出土遺物（4）…… 142
第108図　第 6 号溝跡出土遺物（1）…… 145
第109図　第 6 号溝跡出土遺物（2）…… 146
第110図　第 9 ～11号溝跡 …… 148
第111図　第 9 号溝跡出土遺物…… 149
第112図　第10号溝跡出土遺物…… 149
第113図　第11号溝跡出土遺物…… 149
第114図　第27・28号溝跡 …… 150
第115図　第 1 号柵跡（1）…… 152
第116図　第 1 号柵跡（2）…… 153
第117図　第 1 号柵跡（3）…… 154
第118図　第 1 号柵跡出土遺物…… 155
第119図　第51号土壙 …… 158
第120図　第51号土壙出土遺物（1）…… 159
第121図　第51号土壙出土遺物（2）…… 160
第122図　第51号土壙出土遺物（3）…… 161
第123図　第51号土壙出土遺物（4）…… 162
第124図　第51号土壙出土遺物（5）…… 163
第125図　第51号土壙出土遺物（6）…… 164
第126図　第51号土壙出土遺物（7）…… 165
第127図　第51号土壙出土遺物（8）…… 166
第128図　第51号土壙出土遺物（9）…… 167
第129図　第51号土壙出土遺物（10）…… 168
第130図　第51号土壙出土遺物（11）…… 169
第131図　第51号土壙出土遺物（12）…… 170
第132図　第51号土壙出土遺物（13）…… 171
第133図　第51号土壙出土遺物（14）…… 172
第134図　第51号土壙出土遺物（15）…… 173
第135図　第51号土壙出土遺物（16）…… 174
第136図　第51号土壙出土遺物（17）…… 175
第137図　第51号土壙出土遺物（18）…… 176
第138図　第51号土壙出土遺物（19）…… 177
第139図　第51号土壙出土遺物（20）…… 178
第140図　第51号土壙出土遺物（21）…… 179
第141図　第51号土壙出土遺物（22）…… 180

第142図　第51号土壙出土遺物（23）…… 181
第143図　第51号土壙出土遺物（24）…… 182
第144図　第51号土壙出土遺物（25）…… 183
第145図　第51号土壙出土遺物（26）…… 184
第146図　第51号土壙出土遺物（27）…… 185
第147図　第51号土壙出土遺物（28）…… 186
第148図　第51号土壙出土遺物（29）…… 187
第149図　第51号土壙出土遺物（30）…… 188
第150図　第51号土壙出土遺物（31）…… 189
第151図　第51号土壙出土遺物（32）…… 190
第152図　第51号土壙出土遺物（33）…… 191
第153図　第51号土壙出土遺物（34）…… 192
第154図　第51号土壙出土遺物（35）…… 193
第155図　第51号土壙出土遺物（36）…… 194
第156図　第51号土壙出土遺物（37）…… 195
第157図　第51号土壙出土遺物（38）…… 196
第158図　第51号土壙出土遺物（39）…… 197
第159図　第51号土壙出土遺物（40）…… 198
第160図　第51号土壙出土遺物（41）…… 199
第161図　第51号土壙出土遺物（42）…… 200
第162図　第51号土壙出土遺物（43）…… 201
第163図　第51号土壙出土遺物（44）…… 202
第164図　第51号土壙出土遺物（45）…… 203
第165図　第51号土壙出土遺物（46）…… 204
第166図　第51号土壙出土遺物（47）…… 205
第167図　第51号土壙出土遺物（48）…… 218
第168図　第51号土壙出土遺物（49）…… 219
第169図　第51号土壙出土遺物（50）…… 220
第170図　第51号土壙出土遺物（51）…… 221
第171図　第51号土壙出土遺物（52）…… 222
第172図　第51号土壙出土遺物（53）…… 223
第173図　第51号土壙出土遺物（54）…… 224
第174図　第51号土壙出土遺物（55）…… 225
第175図　第51号土壙出土遺物（56）…… 226
第176図　第51号土壙出土遺物（57）…… 227
第177図　第51号土壙出土遺物（58）…… 228
第178図　第51号土壙出土遺物（59）…… 229
第179図　第51号土壙出土遺物（60）…… 232
第180図　第51号土壙出土遺物（61）…… 233
第181図　第51号土壙出土遺物（62）…… 234
第182図　第51号土壙出土遺物（63）…… 235
第183図　第51号土壙出土遺物（64）…… 236
第184図　第51号土壙出土遺物（65）…… 237
第185図　第51号土壙出土遺物（66）…… 238
第186図　第51号土壙出土遺物（67）…… 239
第187図　第51号土壙出土遺物（68）…… 240
第188図　第51号土壙出土遺物（69）…… 241
第189図　第51号土壙出土遺物（70）…… 242
第190図　第51号土壙出土遺物（71）…… 243
第191図　第51号土壙出土遺物（72）…… 244
第192図　第51号土壙出土遺物（73）…… 245
第193図　第51号土壙出土遺物（74）…… 248
第194図　第51号土壙出土遺物（75）…… 249
第195図　第52号土壙 …… 258
第196図　第52号土壙出土遺物（1）…… 259
第197図　第52号土壙出土遺物（2）…… 260
第198図　第52号土壙出土遺物（3）…… 261
第199図　第52号土壙出土遺物（4）…… 262
第200図　第52号土壙出土遺物（5）…… 263
第201図　第52号土壙出土遺物（6）…… 264
第202図　第52号土壙出土遺物（7）…… 265
第203図　第52号土壙下層出土遺物…… 268
第204図　第53号土壙 …… 270
第205図　第53号土壙出土遺物（1）…… 271
第206図　第53号土壙出土遺物（2）…… 272
第207図　第53号土壙出土遺物（3）…… 273
第208図　第54号土壙 …… 274
第209図　第54号土壙出土遺物…… 275
第210図　土壙（1）…… 277
第211図　土壙（2）…… 278
第212図　土壙（3）…… 279
第213図　土壙（4）…… 280
第214図　土壙（5）…… 281
第215図　土壙（6）…… 282

第216図　土壙出土遺物（1）…… 283
第217図　土壙出土遺物（2）…… 284
第218図　土壙出土遺物（3）…… 285
第219図　土壙出土遺物（4）…… 286
第220図　土壙出土遺物（5）…… 287
第221図　土壙出土遺物（6）…… 288
第222図　土壙出土遺物（7）…… 289
第223図　土壙出土遺物（8）…… 290
第224図　土壙出土遺物（9）…… 291
第225図　土壙出土遺物（10）…… 292
第226図　土壙出土遺物（11）…… 293
第227図　土壙出土遺物（12）…… 294
第228図　土壙出土遺物（13）…… 295
第229図　土壙出土遺物（14）…… 296
第230図　土壙出土遺物（15）…… 302
第231図　土壙出土遺物（16）…… 303
第232図　土壙出土遺物（17）…… 304
第233図　土壙出土遺物（18）…… 305
第234図　土壙出土遺物（19）…… 307
第235図　土壙出土遺物（20）…… 308
第236図　土壙出土遺物（21）…… 309
第237図　土壙出土遺物（22）…… 310
第238図　土壙出土遺物（23）…… 311
第239図　土壙出土遺物（24）…… 314
第240図　土壙出土遺物（25）…… 315
第241図　土壙出土遺物（26）…… 316
第242図　土壙出土遺物（27）…… 319
第243図　土壙出土遺物（28）…… 320
第244図　ピット …… 333
第245図　ピット出土遺物 …… 333
第246図　遺物包含層1（1）…… 334
第247図　遺物包含層1（2）…… 335
第248図　遺物包含層1出土遺物（1）…… 336
第249図　遺物包含層1出土遺物（2）…… 337
第250図　遺物包含層1出土遺物（3）…… 338
第251図　遺物包含層1出土遺物（4）…… 339
第252図　遺物包含層1出土遺物（5）…… 340
第253図　遺物包含層1出土遺物（6）…… 341
第254図　遺物包含層1出土遺物（7）…… 342
第255図　遺物包含層1出土遺物（8）…… 343
第256図　遺物包含層1出土遺物（9）…… 344
第257図　遺物包含層1出土遺物（10）…… 345
第258図　遺物包含層1出土遺物（11）…… 346
第259図　遺物包含層1出土遺物（12）…… 347
第260図　遺物包含層1出土遺物（13）…… 348
第261図　遺物包含層1出土遺物（14）…… 349
第262図　遺物包含層1出土遺物（15）…… 350

表目次

（第１分冊）

第１表　周辺の遺跡一覧表…… 10
第２表　第一面建物跡一覧表…… 39
第３表　第１号建物跡出土遺物観察表 …… 43
第４表　第３号建物跡出土遺物観察表（１）
…… 53
第５表　第３号建物跡出土遺物観察表（２）
…… 54
第６表　第３号建物跡出土遺物観察表（３）
…… 55
第７表　第３号建物跡出土遺物観察表（４）
…… 55
第８表　第９号建物跡出土遺物観察表 …… 61
第９表　第10号建物跡出土遺物観察表 …… 64
第10表　第12号建物跡トレンチ出土遺物観察表
…… 67
第11表　第13号建物跡出土遺物観察表 …… 71
第12表　第14号建物跡出土遺物観察表 …… 71
第13表　第15号建物跡トレンチ出土遺物観察表
…… 75
第14表　第16号建物跡トレンチ出土遺物観察表
…… 77
第15表　第17号建物跡出土遺物観察表 …… 79
第16表　第18号建物跡出土遺物観察表 …… 83
第17表　第20号建物跡出土遺物観察表 …… 87
第18表　第42号建物跡出土遺物観察表 …… 91
第19表　第一面基礎状遺構一覧表…… 92
第20表　第５・６号基礎状遺構出土遺物観察表
…… 93
第21表　第１号甕棺埋納遺構出土遺物観察表
…… 93
第22表　第一面埋設桶一覧表…… 94
第23表　第７号埋設桶出土遺物観察表 …… 97
第24表　第33号埋設桶出土遺物観察表 …… 97
第25表　第34号埋設桶出土遺物観察表 …… 98
第26表　第37号埋設桶出土遺物観察表 …… 99
第27表　第47号埋設桶出土遺物観察表 …… 99
第28表　井戸跡一覧表 …… 102
第29表　第３号井戸跡出土遺物観察表 …… 102
第30表　第４号井戸跡出土遺物観察表 …… 104
第31表　第５号井戸跡出土遺物観察表 …… 106
第32表　第19号井戸跡出土遺物観察表 …… 107
第33表　第一面池跡一覧表…… 108
第34表　第２号池跡出土遺物観察表（１）
…… 120
第35表　第２号池跡出土遺物観察表（２）
…… 120
第36表　第２号池跡出土遺物観察表（３）
…… 121
第37表　第２号池跡出土遺物観察表（４）
…… 121
第38表　第２号池跡出土遺物観察表（５）
…… 121
第39表　第２号池跡出土遺物観察表（６）
…… 121
第40表　第３号池跡出土遺物観察表（１）
…… 128
第41表　第３号池跡出土遺物観察表（２）
…… 129
第42表　第３号池跡出土遺物観察表（３）
…… 129
第43表　第３号池跡出土遺物観察表（４）
…… 129
第44表　第３号池跡出土遺物観察表（５）
…… 129
第45表　第一面溝跡一覧表…… 133
第46表　第１号溝跡出土遺物観察表 …… 136
第47表　第５号溝跡出土遺物観察表（１）
…… 143

第 48 表　第５号溝跡出土遺物観察表（２）…… 143
第 49 表　第５号溝跡出土遺物観察表（３）…… 143
第 50 表　第５号溝跡出土遺物観察表（４）…… 143
第 51 表　第５号溝跡出土遺物観察表（５）…… 144
第 52 表　第６号溝跡出土遺物観察表（１）…… 147
第 53 表　第６号溝跡出土遺物観察表（２）…… 147
第 54 表　第６号溝跡出土遺物観察表（３）…… 147
第 55 表　第９号溝跡出土遺物観察表…… 149
第 56 表　第10号溝跡出土遺物観察表…… 149
第 57 表　第11号溝跡出土遺物観察表…… 149
第 58 表　第１号柵跡ピット一覧表…… 154
第 59 表　第１号柵跡出土遺物観察表…… 155
第 60 表　第一面土壙一覧表…… 157
第 61 表　第51号土壙出土遺物観察表（１）…… 205
第 62 表　第51号土壙出土遺物観察表（２）…… 229
第 63 表　第51号土壙出土遺物観察表（３）…… 246
第 64 表　第51号土壙出土遺物観察表（４）…… 250
第 65 表　第51号土壙出土遺物観察表（５）…… 250
第 66 表　第52号土壙出土遺物観察表（１）…… 266
第 67 表　第52号土壙出土遺物観察表（２）…… 268
第 68 表　第52号土壙下層出土遺物観察表…… 268
第 69 表　第53号土壙出土遺物観察表（１）…… 273
第 70 表　第53号土壙出土遺物観察表（２）…… 274
第 71 表　第54号土壙出土遺物観察表…… 276
第 72 表　土壙出土遺物観察表（１）…… 297
第 73 表　土壙出土遺物観察表（２）…… 302
第 74 表　土壙出土遺物観察表（３）…… 303
第 75 表　土壙出土遺物観察表（４）…… 306
第 76 表　土壙出土遺物観察表（５）…… 312
第 77 表　土壙出土遺物観察表（６）…… 317
第 78 表　土壙出土遺物観察表（７）…… 319
第 79 表　土壙出土遺物観察表（８）…… 321
第 80 表　第一面ピット一覧表…… 333
第 81 表　ピット出土遺物観察表…… 333
第 82 表　遺物包含層１出土遺物観察表（１）…… 351
第 83 表　遺物包含層１出土遺物観察表（２）…… 353
第 84 表　遺物包含層１出土遺物観察表（３）…… 353
第 85 表　遺物包含層１出土遺物観察表（４）…… 354

写真図版目次

（第１分冊）

巻頭図版１　火災処理土壙出土陶磁器（１）
巻頭図版２　火災処理土壙出土陶磁器（２）

Ⅰ　発掘調査の概要

1　発掘調査に至る経過

国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所では「利根川水系利根川・江戸川河川整備計画【大臣管理区間】」に基づき、首都圏氾濫区域堤防強化対策事業として、利根川右岸の堤防を拡幅し、強化する事業を進めている。

埼玉県教育局市町村支援部文化資源課では、国が実施するこうした公共開発事業に係る埋蔵文化財の保護について、従前より関係機関と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

首都圏氾濫区域堤防強化対策事業に係る埋蔵文化財の所在及び取扱いについては、利根川上流河川事務所長から平成17年1月20日付け利上沿第18号で、埼玉県教育委員会教育長宛て、埋蔵文化財の所在及びその取扱いについて照会がなされた。

事業予定区域については埼玉県指定旧跡や周知の埋蔵文化財包蔵地が所在すること、埋蔵文化財の詳細な状況等を把握するための確認調査を実施する必要がある旨を、平成17年3月17日付け教生文第1780号で回答した。

当該箇所については、「栗橋宿西本陣跡（No.86-008）」に該当しており、遺構の状況等を把握するために平成26年12月に試掘調査を実施した。その結果、包蔵地内及び包蔵地外からも近世の遺構、遺物が検出され、「栗橋宿西本陣跡」（No.86-008）の埋蔵文化財包蔵地の範囲を拡大した。

上記の埋蔵文化財の所在が明確になったことから、利根川上流河川事務所長宛てに、計画上やむを得ず現状を変更する場合は、記録保存のための発掘調査が必要な旨を回答し、取扱いについて協議を重ねたが、現状保存が困難であることから記録保存の措置を講ずることとなった。

調査に際し、発掘調査実施機関である公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と、国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所、生涯学習文化財課（当時）の三者で、工事日程、調査計画、調査期間などについて定期的に会議を開催し、各種の調整を行った。

文化財保護法第94条の規定による埋蔵文化財発掘通知が利根川上流河川事務所長から平成24年2月9日付け国関利上沿第27号で、埼玉県教育委員会教育長宛て提出された。それに対する埼玉県教育委員会教育長からの発掘調査が必要な旨の勧告は下記のとおりである。

平成24年2月9日付け教生文第4－1337号

また、同法第92条の規定により公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された発掘調査届に対する埼玉県教育委員会教育長からの指示通知は下記のとおりである。

〔1次調査〕
平成27年7月13日付け教生文第2-24号
〔2次調査〕
平成28年5月28日付け教生文第2－1号
〔3次調査〕
平成29年5月8日付け教生文第2－4号
〔4次調査〕
平成30年4月10日付け教文資第2－4号

（埼玉県教育局市町村支援部文化資源課）

2　発掘調査・報告書作成の経過

（1）発掘調査

栗橋宿西本陣跡の調査は首都圏氾濫区域堤防強化対策事業（加須・久喜地区）に伴って、平成27年度（第1次）、平成28年度（第2次）、平成29年度（第3次）、平成30年度（第4次）の4回実施した。調査面積は3,830㎡である。

第1次調査は平成27年7月1日から平成28年3月31日まで実施した。

7月1日に発掘届等の事務手続きを行った後、囲柵の設置、発掘調査事務所の設置を行った。

7月29日から重機による表土除去作業を実施し、第一面の調査を開始した。8月1日からは補助員による作業を開始し、遺構確認作業を行った。8月27日に第1回、2月27日に第2回の遺構測量用の基準点測量及びグリッド杭打設作業委託を実施した。遺構確認作業の結果、建物跡、埋設桶、杭列、溝跡、土壙などの遺構が検出された。確認された遺構は掘削・精査を行い、順次写真撮影、遺構断面図、平面図等の記録作成作業を行った。1月下旬に自然科学分析委託を実施した。調査終了部分については、2月25日に空中写真撮影委託を実施した。

第2次調査は平成28年4月1日から平成29年3月31日まで実施した。

4月1日に発掘届等の事務手続きを行った。4月8日から、昨年度調査終了部分の重機による掘削を開始し、第二面の検出を行った。4月18日から補助員作業を開始し、昨年度の継続で、第一面の遺構の掘削、精査・写真撮影、土層断面図、平面図の作成等、記録作成作業を行った。

第一面調査終了後、6月14日から22日にかけて重機による掘削作業を行い、残りの第二面の検出を行った。遺構測量用の基準点測量及びグリッド杭打設作業委託は5月19日と6月22日に実施した。第二面では遺構確認作業の結果、埋設桶、井戸跡、溝跡、土壙が検出された。順次、遺構の精査、遺構断面図、平面図、写真撮影等の記録作成作業を行った。11月22日に自然科学分析、11月25日に空中写真撮影委託を行った。

平成29年3月10日まで補助員作業を実施し、第1次調査出土品と併せて、3月16日に発見届（幸手警察署長宛）と保管証（埼玉県教育委員会宛）を提出した。

第3次調査は平成29年4月1日から平成30年3月31日まで実施した。

平成29年4月1日に発掘調査届等の事務手続きを行った。4月10日からは補助員による作業を開始し、昨年度の継続で、遺構の掘削・精査を行い、順次写真撮影、遺構断面図、平面図等の記録作成作業を行った。9月5日に空中写真撮影委託と高所作業車による写真撮影を行った。第二面の調査終了後、10月2日から18日にかけて重機による掘削作業を行い、第三面の検出を行った。10月18日から26日に基準点測量及びグリッド杭打設作業委託を実施した。遺構確認作業の結果、埋設桶、井戸跡、溝跡、土壙が検出された。順次、遺構の精査、遺構断面図、平面図、写真撮影等の記録作成作業を行った。

12月13日に空中写真撮影委託と、高所作業車による写真撮影、12月19日に自然科学分析委託を実施した。同日と平成30年2月14日に空中写真撮影委託を実施した。

平成30年3月9日まで補助員作業を実施した。3月23日に発見届（幸手警察署長宛）と保管証（埼玉県教育委員会宛）を提出した。

第4次調査は平成30年4月1日から9月30日まで実施した。

平成30年4月2日に発掘調査届等の事務手続きを行った。4月9日からは補助員による作業を開始し、昨年度の継続で、遺構の掘削・精査を行い、順次写真撮影、遺構断面図等の記録作成作業を行った。その後、補足調査として第三面の整地

層にトレンチを入れたところ遺物を包含していることが判明した。さらにその下層の洪水層中から板状の樹皮や竹材の検出がみられたことから、整地層の掘削、洪水層中の樹皮・竹材の検出の順に写真撮影、遺構断面図、平面図等の記録作成作業を行った。また、洪水層の下からも溝跡や土壙等の遺構が検出され、溝跡、土壙の精査を行い、順次写真撮影、遺構断面図、平面図等の記録作成作業を行った。

7月2日に自然科学分析、8月29日に空中写真撮影委託を実施し、9月5日に高所作業車による写真撮影を行った。補助員作業は9月7日まで実施した。

その後、重機による危険箇所の埋め戻し、器材の撤収、発掘調査事務所の撤去を行い、発掘調査を終了した。9月20日に発見届(幸手警察署長宛)と保管証(埼玉県教育委員会宛)を提出した。

(2)整理・報告書の作成

整理報告書の作成作業は、令和元年11月1日から開始し、令和4年度までは主に『栗橋宿西本陣跡Ⅰ』(本書)の報告範囲の整理を行った。

本書にかかる令和元年度から令和4年度の整理作業は、出土遺物の水洗・注記から開始し、接合・復元作業に着手した。復元を終えた遺物は順次実測、トレース、採拓を経て、挿図編集システムで印刷用の挿図を作成した。実測には磁気式3次元位置計測装置、正射投影画像撮影機を活用した。版組が終了した遺物については図版用の遺物写真を撮影し、遺物写真図版を作成した。

同時に、発掘調査で記録した遺構の断面図や平面図等を照合し、修正を加えた第二原図を作成した。第二原図は仮版組を行った上で、スキャナでパソコンに取り込み、挿図編集システムを用いてトレースした。土層説明等を組み込んで印刷用の挿図版下データを作成した。

口絵写真は、特徴的な遺物を対象に令和3年10月に写真撮影を委託した。

遺構・遺物のデータ、自然科学分析結果等を基に、原稿執筆を行った。また、遺構・遺物の挿図と写真図版等を組み合わせて、報告書の割付・編集を行った。入稿後、3回の校正を経て、令和5年2月20日に埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第479集『栗橋宿西本陣跡Ⅰ』(本書)を刊行した。

遺物及び図面類・写真データ類等の諸資料は、令和5年1・2月に整理分類の上、埼玉県埋蔵文化財収蔵施設の収蔵庫へ仮収納した。

3　発掘調査・報告書作成の組織

平成27年度(発掘調査)

理事長	樋田明男
常務理事兼総務部長	木村博昭
総務部	
総務部副部長	瀧瀬芳之
総務課長	安田孝行
調査部	
調査部長	金子直行
調査部副部長	富田和夫
調査監兼調査第一課長	赤熊浩一
主査	栗岡潤
専門員	小野美代子

平成 28 年度（発掘調査）

理事長	塩野谷孝志
常務理事兼総務部長	木村博昭
総務部	
総務部副部長	黒坂禎二
総務課長	曽川浩二

調査部	
調査部長	金子直行
調査部副部長	赤熊浩一
主幹兼調査第一課長	田中広明
主査	栗岡潤
主任	古谷渉
主事	坂下貴則
主事	近藤洋
主事	桂大介
主事	鈴木志穂

平成 29 年度（発掘調査）

理事長	塩野谷孝志
常務理事兼総務部長	川目晴久
総務部	
総務部副部長	黒坂禎二
総務課長	曽川浩二

調査部	
調査部長	赤熊浩一
調査部副部長	田中広明
主幹兼調査第一課長	山本靖
主査	栗岡潤
主任	古谷渉
主任専門員	劒持和夫
専門員	昼間孝志
主事	原野真祐
主事	大塚邦明

平成 30 年度（発掘調査）

理事長	藤田栄二
常務理事兼総務部長	川目晴久
総務部	
総務部副部長	田中広明
総務課長	新井了悟

調査部	
調査部長	瀧瀬芳之
調査部副部長	吉田稔
主幹兼調査第一課長	栗岡潤
主任専門員	赤熊浩一
主事	大塚邦明
主事	近江屋成陽
主事	吉留頌平

令和元年度（報告書作成）

理事長	藤田栄二
常務理事兼総務部長	髙津導
総務部	
総務部副部長	山本靖
総務課長	新井了悟

調査部	
調査部長	黒坂禎二
調査部副部長兼整理第一課長	上野真由美
主任	矢部瞳
主事	魚水環

令和２年度（報告書作成）

理事長	藤田栄二
常務理事兼総務部長	福沢景
総務部	
総務部副部長	山本靖
総務課長	鈴木裕一

調査部	
調査部長	吉田稔
調査部副部長兼整理第一課長	上野真由美
主任	矢部瞳
主任専門員	金子直行
主事	近江屋成陽

令和３年度（報告書作成）

理事長	依田英樹
常務理事兼総務部長	福沢景
総務部	
総務部副部長	上野真由美
総務課長	鈴木裕一

調査部	
調査部長	田中広明
調査部副部長兼整理第一課長	福田聖
主査	矢部瞳
主任	青木弘
主任	滝澤誠
主任専門員	富田和夫
主事	大塚邦明
主事	古間果那子
主事	高橋杜人

令和４年度（報告書作成）

理事長	依田英樹
常務理事	小寺均
総務部	
総務部長	山本靖
総務部副部長	福田聖
総務課長	横田千枝子

調査部	
調査部長	田中広明
調査部副部長	渡辺清志
整理課長	村山卓
主事	水村雄功
主事	古間果那子

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1　地理的環境

栗橋宿西本陣跡は、ＪＲ宇都宮線と東武日光線の栗橋駅から北東へ約１km、埼玉県久喜市栗橋北２丁目3422−２他に所在する。

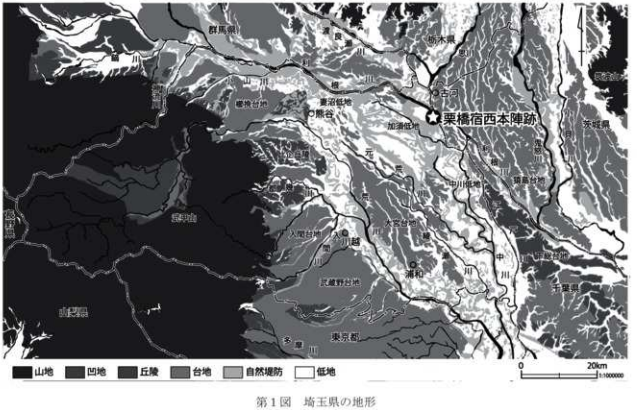
現在の久喜市は平成二十二年（2010）に久喜市、栗橋町、菖蒲町、鷲宮町の１市３町が合併して誕生した新市である。旧制でいうと、栗橋宿跡の在所地は葛飾郡栗橋町となる。

旧栗橋町は埼玉県の北東端に位置し、県境をなす利根川の東岸は茨城県古河市、および猿島郡五霞町である。昔日は日光道中（街道）の宿駅として栄え、利根川の流れを利した舟運も盛んであった。今日では地区内に上掲２路線の鉄道をはじめ、国道４号、同125号、県道３号さいたま栗橋線、同12号川越栗橋線などの幹線道が縦横に走り、広域運輸の要所となっている。この交通網を活かし、近年においては都心部通勤のためのベッドタウン、また物流基地や工業地として新たな発展を遂げつつある。

周辺の地形は概ね平坦であり、郊外には自然堤防に沿って延びる帯状の屋敷林と、それを囲む水田の広がる景観も残されている。栗橋宿跡はこの低平な中川低地の奥部、東流する利根川の河畔に立地している。

中川低地は縄文時代前期に奥東京湾だった部分が、後の海退に伴って形成された沖積低地である。南北に長大で、ともにローム台地（洪積層）である西側の大宮・館林台地、東側の猿島・下総台地を分けている。栗橋地区周辺では沖積層の厚さは30～40mにも達し、縄文海進時に棲息していた貝類の殻を含む、軟弱な泥層の広がりが確認されている（久喜市教育委員会2008）。

弥生時代から古墳時代になると、北部の加須地域で地殻変動（関東造盆地運動）による地盤沈降が発現し、次第に低地（加須低地）の形成をみる



第１図　埼玉県の地形

ようになる。沈降運動の進行とともに、熊谷から南方の川越方面へ流下していた利根川は、やがて東方の加須(低地)方面へ大きく流向を転ずる。結果、大宮・館林台地は南北に分断され、沿川部は埋没して漸次低地化していく。

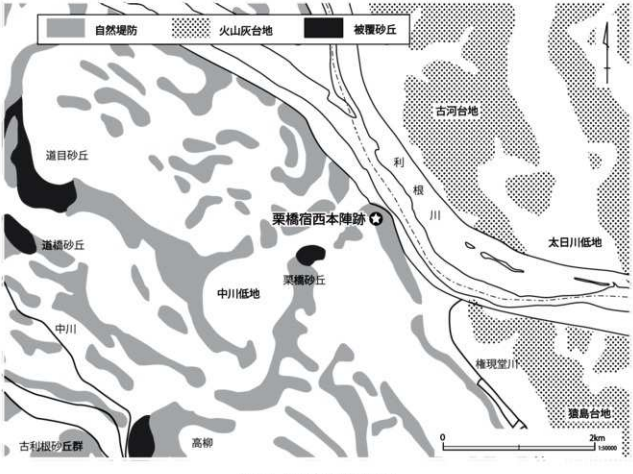
この現象は古墳の調査でも確認されており、行田市の真名板高山古墳（堀口1992）や羽生市の小松１号墳（矢口・瀧瀬1996）などは、地表下３m程に埋没した状態であった。

奈良時代から平安時代になると、加須低地（中川低地）では河川の氾濫が広域化し、関東造盆地運動に伴う地盤沈降と相俟って、利根川や渡良瀬川など、大河川が集中して流れ下る大規模な河成平野が形成されていく。栗橋宿跡の周辺では、表層約20mが河川堆積による沖積層となっている。

両河川をはじめ、会の川、合の川、北川辺蛇行流路、島川、浅間川、大落古利根川、庄内古川の自然流下は加須低地に多くの砂礫を供給し、諸河川の両岸に自然堤防や後背湿地を発達させた。また、浅間川と会の川が大落古利根川に合流する久喜市栗橋町高柳には、大河の証しである河畔砂丘が形成された（埼玉県1993）。

こうした低地部に対する人為的な改変は、徳川家康が関東を領有するようになると急速に進められることになる。いわゆる「利根川東遷」と呼ばれる、利根川流路の改修工事である。

東遷事業は流路そのものを新たに開削し、それまでの自然流下の道筋を締め切るなど、非常に大掛かりな工事であった。事業の進捗とともに、栗橋地区は北西側の古利根川（後に廃川）、東側の利根川（渡良瀬川・権現堂川）、南西側の中川



第２図　栗橋宿跡周辺の地形

（島川）で画され、各堤防が連接して「輪中」の地となっていく。江戸時代には島中川辺領（しまじゅうかわべりょう）と称され、北西の向川辺領、古河川辺領、東の関宿藩領とともに、利根川に沿った輪中地帯を形作った。

とはいえ、栗橋宿は低い自然堤防上に立地すること、河川に取り囲まれた町であること、人工的な流路変更で河流が不安定だったことなどから、大規模な改修や築堤工事を重ねてもなお、洪水の害や排水の難からは逃れきれなかった。実際、堤防上に構えられた日光道中栗橋関所も元禄三年（1690）、同八年、宝永元年（1704）、寛保二年（1742）の四度、利根川の氾濫で流失している。

洪水の被害は現代にまで及び、昭和二十二年（1947）のカスリーン台風では、加須市大利根地区において利根川の堤防が決壊し、栗橋地区も一面湖沼化するほどの災害に見舞われた。

利根川改修は江戸時代初期に本格化したが、決して完遂された訳ではなく、400年以上を経た今日にあっても、それは国土交通省の「首都圏氾濫区域堤防強化対策事業」に継承されているのである。

栗橋宿西本陣跡を含む日光道中栗橋宿は、その成立以前に渡良瀬川が形成した北西－南東方向の長さ約300m、幅120m程の自然堤防上に立地している。土質はシルト質、あるいは砂質である。遺跡付近の標高は11～12mを測り、南側の後背湿地に営まれる水田との比高差は約1.0mである。

明治十年（1877）頃の町や村の様子を記録した『武蔵國郡村誌』栗橋宿の項には、地味として「色赤真土に少しく砂を混ず質美にして稲粱菽麦に宜しく桑茶に適せす水利不便にして時々水旱に苦しむ」とある（埼玉県1955）。作物に挙げる粱は粟、菽は豆のことである。

2　歴史的環境

（1）中世の栗橋とその周辺

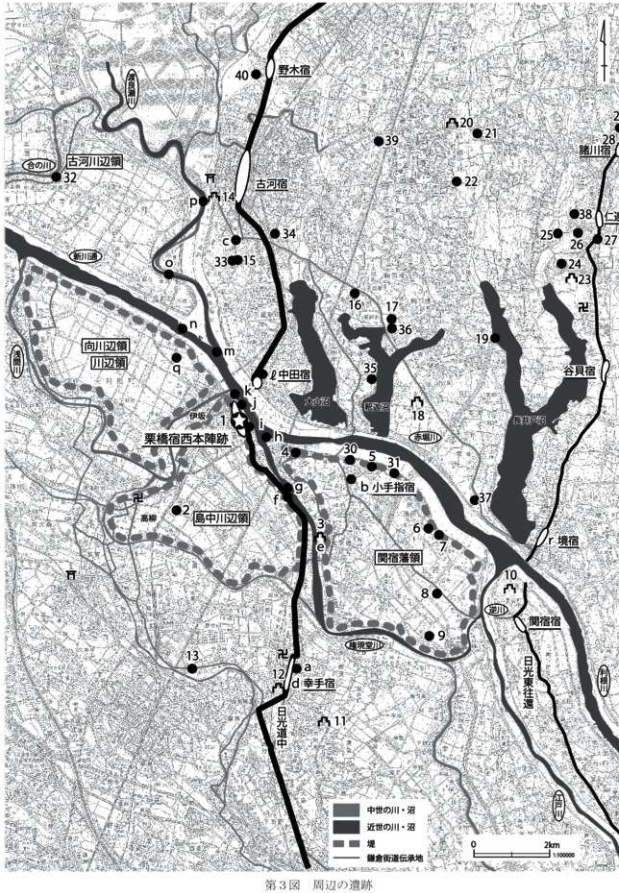
栗橋宿跡の所在する中川低地周辺の地表は、地形の沈降と河川の乱流による堆積土に厚く覆われている。そのため遺跡の分布は未だ不明な部分が多く、現在検出されているよりも多くの遺跡の存在が想される。

栗橋地区では、古代以前に遡る遺跡は確認されていないが、後述するように、栗橋宿跡関連の発掘調査では、縄文土器・石器・土師器などが出土している。縄文時代前期（約6000年前）の海進時には栃木市藤岡付近まで海が入り込み、栗橋地区は海底であった。海退後は河川が乱流し、付近は湿地のような状態が長く続いた。

当地は、平安時代には下総国葛飾郡新居郷に属したものと考えられる。12世紀には摂津源氏源頼政の郎党下河辺氏が関与して八条院領下河辺庄が立荘される。下河辺庄の成立の経緯ははっきりしないが、安元二年（1176）の八条院領目録にはみえないので、それ以後、下河辺行平が下河辺庄の荘司を安堵される治承四年（1180）までの間に成立したと考えられる。下河辺行平が荘司を安堵された記録は『吾妻鏡』にみられ、このことから、寄進者も下河辺氏である可能性が高い。

下河辺氏の本拠地もはっきりしないが、12世紀後半～13世紀前半の遺跡、文化財の伝来状況から、古河市大生郷周辺の可能性が指摘されている。下河辺氏のその後については良く分かっていない。『吾妻鏡』の建長二年（1250）の記事に下河辺左衛門尉がみえるのを最後に動向は追えなくなる。

また、『吾妻鏡』には大河戸兄弟に関する記事があり、三郎行元は地区内の高柳が本貫地とされている。高柳から伊坂にかけては、鎌倉街道に比定される古道が今も一部残っている。近くには静



野木宿
古河川辺領
合の川
古河宿
諸川宿
仁連宿
谷貝宿
向川辺領
川辺領
中田宿
栗橋宿西本陣跡
伊坂
赤堀川
小手指宿
島中川辺領
高柳
関宿藩領
境宿
関宿宿
逆川
日光東往還
幸手宿
日光道中
中世の川・沼
近世の川・沼
堤
鎌倉街道伝承地
0
2km

第３図　周辺の遺跡

第１表　周辺の遺跡一覧表　（第３図）

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	宿及び渡し名等
1	栗橋宿西本陣跡・栗橋宿跡	21	本田山遺跡	a	田宮町
2	佐間小草原遺跡	22	蔵王遺跡	b	小手指宿
3	栗橋城址	23	東の門西の門遺跡	c	徳取院
4	宿北・宿東遺跡	24	北山田北久保遺跡	d	幸手宿
5	釈迦新田遺跡	25	御領遺跡	e	道標
6	同所新田遺跡	26	大膳屋敷跡	f	一里塚
7	新田遺跡	27	関根委託屋敷跡	g	勘平の渡し
8	桜井前遺跡	28	諸川西門城址	h	川妻の渡し
9	瀬沼遺跡	29	本田遺跡	i	下河岸跡
10	関宿城址	30	上原遺跡	j	栗橋河岸
11	天神島城址	31	殿山塚	k	房川の渡し
12	幸手城址	32	笛井陣屋遺跡	l	中田宿
13	渡辺氏屋敷跡	33	城地遺跡	m	本郷渡し
14	古河城址	34	石行塚遺跡	n	中渡し
15	鴻巣館跡	35	羽黒遺跡	o	鈴木の渡し
16	磯部館跡	36	釈迦才仏遺跡	p	古河の渡し
17	香取東遺跡	37	清水遺跡	q	旗井小学校
18	水海城址	38	新屋敷遺跡	r	境宿
19	向坪Ｂ遺跡	39	大塚遺跡		
20	円満寺城址（小堤城址）	40	野木宿遺跡		

御前終焉の地の伝承が残っている。

下河辺庄は13世紀後半には、北条氏一門の金沢氏の手に渡っており（建治元年『金沢実時譲状』金沢文庫古文書）、金沢氏が庇護した称名寺（神奈川県横浜市金沢区）の所領となる。その荘城は極めて広大で、古河市周辺や埼玉県東部地域から、現在の千葉県野田市にまで及んでいた。

下河辺庄は大きく３つの地域に分かれており、北から「野方」（茨城県古河市周辺）・「河辺」（埼玉県幸手市・杉戸町・吉川市・三郷市など）・「新方」（埼玉県春日部市・越谷市・松伏町など）と呼ばれている。13世紀後半以降に下河辺庄を支配した金沢称名寺の諸史料には、新方のエリアが頻繁に登場する。栗橋周辺の様子を伝える史料は少ないが、栗橋地区に当たる狐塚、高柳の両郷は金沢氏の支配を受けていたとされる。

その一部は南北朝期以降も金沢称名寺の所領として伝えられていくが、南北朝期には、小山氏の所領となっていた地域もあったようで（年不詳『小山氏所領注文案』小山文書）、小山政義の乱を経て、14世紀後半には鎌倉府・鎌倉公方の御料所となったらしい（『頼印僧正行状絵詞』）。小山義政の乱後は隣接する太田庄も御料所となっており、こういった経緯から、足利成氏も下河辺庄の北部である古河を拠点としたとみられる。

旧大利根町や旧栗橋町などの地域では、中世の遺跡はほとんど検出されていない。唯一、旧栗橋町の佐間小草原遺跡（２）が知られるのみである。中世墓を中心とした遺跡で、板碑37基、古瀬戸の瓶子、常滑の大甕などが工事中に出土した。板碑の年代は、文和三年（1354）から明応七年（1498）に及んでいるが、特に15世紀代の板碑が主体を占める状況である。平成十七年（2005）の調査では、溝跡や土壙などが検出され、板碑、漆塗り椀などが出土した。留意されるのは、出土遺物のなかに中世瓦が数点含まれている点であり、墓域に伴う仏堂などの施設が存在した可能性が高い（久喜市教育委員会2008）。

中世段階の利根川は、羽生市川俣で会の川、加須市大越で北川辺蛇行流路跡、浅間川に分流して

いた。栗橋地区周辺では、洪水による大量の土砂の堆積と、関東造盆地運動による地盤の沈降が進み、遺跡の存在は定かではない。

ただし、これまでの栗橋宿跡関連の発掘調査では、縄文時代から中世の遺物が若干ながら出土している。

縄文時代の土器類は摩耗したものが僅かに認められるに過ぎず、遺跡の存在を想定できるほどのものではない。栗橋宿本陣跡で出土した縄文時代の石器類も、近世以降の好事家によって蒐集されたものである可能性が高い。一方、古墳時代前期の土師器は、各調査地点から複数の破片資料が得られており、近隣の微高地上に遺跡が存在する可能性は充分にあろう。

栗橋宿跡では、古墳時代後期から奈良平安時代の土器類の出土も少量認められる。さらに、中世段階の舶載磁器（青磁・白磁）・古瀬戸・常滑焼なども各地点から出土しており、長期の利用ではないかもしれないが、周辺城での断続的な土地利用が想定できる。

一方、渡良瀬川（太日川）の左岸、および権現堂川の左岸では、栗橋城址、古河城址をはじめとする数多くの遺跡が知られている。

近世初期までの「栗橋」といえば、現在の茨城県猿島郡五霞町の元栗橋を指す。享徳三年（1454）の享徳の乱後、御座所を古河に移した鎌倉公方足利成氏が古河公方と称して以降、元栗橋にはその支城の栗橋城（3）が置かれた。

鎌倉街道中ツ道（奥州道）の利根川の渡河点があった栗橋城は、水陸の要衝として後北条氏の関宿城（10）攻略の拠点となった。天正二年（1574）に関宿城開城後は北関東攻略の起点となったが、豊臣秀吉の小田原攻めにより天正十八年（1590）に開城する。『鷲宮町史』、『町史五霞の生活誌』によれば、栗橋城の城下町は城の東側に広がり、古河方面への道と関宿方面への道が分岐していたという。また、南側には鎌倉街道中ツ道・奥州街道の渡船場があったとされている。遺跡の分布は、その街道沿い、および東側の福田近辺の関宿・古河を結ぶと考えられる道沿いに分布している。

古河城（14）も栗橋城同様に、後北条支配下の足利氏によって戦国城郭として整えられたが、やはり天正十八年の小田原攻めによって破却された。

その後、徳川家康に従っていた小笠原秀征が古河城を修復し、近世以降も幕閣を含む歴代の城主によって拡張され、古河は城下町として栄えていく（古河市史編さん委員会1985、茨城県古河市教育委員会2004）。

古河城南の御所沼の奥に舌状に突出した台地上には、古河公方の御所として知られる鴻巣館跡（15）がある。初代古河公方足利成氏によって、享徳四年（1455）に築造された連郭式の城郭で、最後の古河公方足利義氏の娘氏姫の居館として知られている。足利氏の後裔、喜連川氏の尊信が寛永七年（1630）に古河を離れた後は、時宗十念寺の寺域となった。

渡良瀬川、利根川の左岸には、現在大小の沼沢地が多く認められる。その多くは利根川改修以後の赤堀川の開削によって形成されたもので、本来は猿島台地を開析した中小河川による支谷であった。その縁辺部に古河公方入府とともに、足利成氏の重臣たちの城や館が造られたと考えられる。小堤城址（20）、磯部館跡（16）、水海城址（18）等が知られるが、詳細についてはほとんど明らかでない。茨城県側の城館跡や周辺の中世遺跡については、既刊の『栗橋関所番士屋敷跡』や『栗橋宿跡Ⅰ』（ともに埼玉県埋蔵文化財調査事業団2018a, b）に詳しいので参照されたい。

なお、近年では古河市東の門西の門遺跡（23）で調査がおこなわれており、大規模な堀が巡らされた城跡が検出されている（古河市教育委員会ほか2021）。瀬戸美濃系陶器は、大窯第

3～4段階のものを中心とした組成で、栗橋宿成立直前の当該地域の遺物様相を考える上で注目される成果である。

（2）近世の栗橋とその周辺

利根川の改修

中世の古河を中心とした栗橋周辺の様相は、徳川家康の江戸入府によって一変する。

特に大きな影響を与えたのが、利根川改修事業、いわゆる利根川の東遷である。徳川幕府は、家康の関東入府後早々に利根川の改修に着手した。それまでの本流であった浅間川、会の川、古利根川の川筋から、新川通、赤堀川を開削して常陸川に結び、合わせて権現堂川を介して江戸川とつなぐ大規模な流路変更で、利根川東遷事業と言われるものである。その目的は、江戸を水害から守るためという治水が第一義とされてきた。また、古河城を合わせた江戸の北の防衛線とする説も重視されている。また、「内川廻し」と呼ばれる内陸航路の確保、水田開発目的とする説も有力である。

栗橋周辺では、文禄三年（1594）の忍城主松平忠吉の命を受けた忍藩家老小笠原三郎左衛門が羽生市上新郷で会の川を締め切ったのに端を発する。元和七年(1621)には、利根川と常陸川を結びつける意図のもとに旧大利根町佐波から旧栗橋町中渡までの新川通、五霞町川妻から境町長井戸への赤堀川が開削された。しかし、当初の赤堀川の掘削は失敗に終わり猿島郡釈迦沼にまでしか至らず、現在の五霞町域に甚大な水害をもたらした。その後、２度の拡幅、増掘（二番堀、三番堀）を経て、漸く承応三年（1654）に通水に成功した。銚子へ至る新たな利根川の主流路が形成されたのである。更に、天保九年(1838)に会の川と浅間川が完全に締め切られ、利根川の流れは新川通の流路へと一本化され、現在に至っている。

利根川本流の開削、整備とは別に、天正四年(1576)の権現堂堤の築堤に始まる五霞町、幸手市域でも大規模な河川改修が行われた。赤堀川通水以前の利根川では、寛永十八年(1641)に逆川が開削される。これにより常陸川と寛永十二年(1635)から開削が進められていた江戸川が、関宿の北で繋がった。江戸川は、更に拡幅工事が進められ正保元年（1644）に完成し、前述の赤堀川三番堀の完成以前は、利根川、渡良瀬川両大河の水は、一部逆川を介して常陸川に注ぐものの、ほとんどはこの江戸川を流れていた。

このような利根川を中心とした河川改修の結果、前述の「内川廻し」の航路とともに、利根川上流域の上野、渡良瀬川上流域の下野との航路が確保され、北関東が江戸を中心とする経済圏の一部となった。また、利根川、荒川両大河川の河川改修は、埼玉平野に広大な新田開発をもたらし、舟運の発達とともに、その経済効果は絶大であった。

一連の工事の結果、栗橋地区を含む島中川辺領は、外縁部に囲堤が造られ河川の流路が固定されるとともに、領域全体が輪中となり、治水環境が整えられた。

日光道中と栗橋宿の成立

日光道中は、元の奥州街道（奥大道）のうちの江戸・宇都宮間を含み込み成立したものと捉えられる。寛永十三年（1636）に日光東照宮の造替が竣工し、徳川家光・家綱が盛んに社参を行うようになる頃には、日光道中としての整備も進んだと考えられる。一方、元栗橋は、利根川の河川改修により度重なる洪水が発生し、宿と渡しは荒廃した。そのため、栗橋宿の位置を現在地に移したようで、『栗橋町史』では、その時期を元和七年（1621）前後と想定している。なお、『新編武蔵風土記稿』（以下『風土記稿』）では、慶長年中に池田鴨之介と並木五郎兵衛による開墾と伝え、明治十年（1877）頃の『武蔵國郡村誌』（以下『郡村誌』）や、明治四十五年（1912）

の『栗橋町郷土誌』では、その時期を慶長十九年（1614）としている。

そのうち『風土記稿』では、

栗橋宿は、江戸より十四里の行程なり、慶長年中下総國栗橋村の民池田鴨之助、並木五郎平と云もの願ひ、伊奈備前守忠次の指揮によりて開墾せしが、民家次第に増加しつひに宿並をなせり、故に下総國の方を元栗橋村と云ひ、當所を新栗橋と云、正保の國圖には上川邊新田と記し、傍に栗橋町ともにと細書し、別に又新栗橋町の名をも載せたり、後一村となりしは當所次第に繁昌し、いつしか上川邊新田の名を失ひ、其地を概して今の名となりしにや　―下略―

と記している。

また、『郡村誌』は「開墾家」池田鴨平の記事中で次のように述べている。

―前略―　慶長十九年鴨之助村民並木五郎平と謀り当所を開墾し竟に一村落をなし栗橋に対して新栗橋と号す元和八年将軍家日光社参の時本陣役を勤む(是より世々本陣となる)　―下略―

池田鴨平は『風土記稿』に見える鴨之助の後裔で、『郡村誌』当時の池田家当主である。

地誌の記述からすれば、栗橋宿は慶長十九年（1614）、五霞町元栗橋の地に住居していた池田鴨之助、並木五郎平（五郎兵衛）を中心とする人々が移り住み、開拓して興した町ということになる。

両書に示された移転年代に対し、『久喜市栗橋町史　通史編上』（久喜市教育委員会2015）は、明確にはできないとしながらも、

寛永元年（1624）には、関所が改めて設置されており、江戸と秋田を度々往返し、栗橋を通った秋田佐竹家家臣の『梅津政景日記』によれば、元和八年（1622）までの記述には「栗橋」とのみあるが、寛永三年には、「今栗橋」と「元栗橋」と区別されて記述されるようになる

と記し、移転が行なわれたのは元和後半から寛永初年の間と考定している。

これまでの発掘調査の成果では、栗橋宿本陣跡などから、17世紀前葉に遡り得る土壙が検出されている。多量のかわらけを伴う様相から一般の集落の様相とは考え難い（『栗橋宿本陣跡Ⅱ』）。遅くとも寛永期頃までには宿場の機能を備えた町として成立していたものと考えられるが、遺構数が極端に少なく、続く時期の遺構がほとんど検出されない点をどう理解するのかが問題である。

前述のように、寛永期に入ると「今栗橋」と「元栗橋」を区別した史料がみられる。宿内深廣寺の石造名号塔群の銘文には、承応三年（1654）７月までに立てられた８基が「新栗橋」とみえるが、同年８月以降に立てられた12基は「栗橋」とのみあり、「新栗橋」「今栗橋」が「栗橋」として定着していく過程が窺われる。その時期（17世紀中葉）までには、今の栗橋が宿場として確立していたはずであるが、発掘調査で検出された当該期の遺構は極めて少なく、初期の栗橋宿を考える上で大きな問題点である。

日光道中と栗橋宿の本陣・脇本陣

栗橋宿を通る日光道中は、江戸日本橋を起点とする五街道の一つで、日本橋から終点の下野国日光坊中まで20宿、36里11町（約142.6km）の道程であった。初め奥州街道とされた道は、徳川歴代将軍が家康を祀る東照宮への参詣道として重要視されるようになる。そして事実上、日光が目的地となったことから日光道中となり、宇都宮から先の東北方面が奥州道中になったものと考えられている（久喜市教育委員会2015）。

日光道中の道筋が確立する以前、奥州へ向かう街道は一般に鎌倉街道中道、または奥大道と呼ばれ、鎌倉幕府にとって軍事上重要な道であった。

中道は幸手において元栗橋へ向かう東回りの道と、鷲宮から北川辺を経由して古河へ達する西廻りの道とに分岐していた。後者は自然堤防上の高まりを縫って北上する道で、江戸時代には旧栗橋町高柳で東へ折れ、古利根川に沿って栗橋宿へ至る新道として整備される。この道は日光御廻道と呼ばれ、将軍の日光社参に際し、本道の日光道中が洪水などで通行不能となった場合の迂回路とされた。

栗橋宿は江戸日本橋から、千住宿－草加宿－越ヶ谷宿－粕壁宿－杉戸宿－幸手宿を経た、日光道中第７番目の宿場である。路程は江戸から14里15町（約56.6km）、幸手宿から２里３町（約8.2km）、次の中田宿まで18町（約２km）、古河宿まで１里20町（約6.1km）であった（久喜市教育委員会文化財保護課編2020）。

利根川対岸の中田宿とは渡船で繋がれ、両宿は合宿で１宿と数えられていた。合宿とは、二つの宿で伝馬（各宿に規定の人馬を常備させ、幕府公用の貨物人員を次の宿へ継送する制度）を月の半分交替で勤めることをいう。

江戸時代の初期に「日光道中」の名称は確立していなかったともいわれるが、いずれにせよ、その宿駅として栗橋宿は成立したのである。街道の整備が先か、町の開拓が先か明らかでないものの、『風土記稿』に関東代官「伊奈備前守忠次の指揮によりて開墾せし」とあるので、おそらく両事業は個別単独ではなく、密接な関連の下、計画的かつ複合的に実施されたに違いない。

『郡村誌』に「開墾家」とされた池田家は代々栗橋宿本陣を勤めた家柄で、今般の堤防強化対策事業に伴う転居まで、本陣の跡地にお住まいになられていた。

本陣の跡地は「栗橋宿本陣跡」として発掘調査した範囲の北部であり、敷地境や建物跡の一部が検出された。池田家家紋の「揚羽蝶文」をデザインした鬼瓦や中国産を含む陶磁器類は、文政五年（1822）の大火で被災した本陣備品を含むものである。並木家も江戸時代を通じ、同じく上町で旅籠屋（萬屋か）を営んだ栗橋宿の名家であり、栗橋宿西本陣跡の区画７にあたるものと考えられる。『栗橋宿絵図』（池田家所蔵・『栗橋町史　資料編一』所収）には、本陣池田家の位置に「御本陣」の記載があるが、その街道を挟んだ反対側に「往古仙基様御本陣」「五郎平」などの記載がある。近年『伊達治家記録』から関所の検討を行った堀内謙一は、仙台藩との関りを示唆するこの注記に注目し「恐らく栗橋宿の開発者である二人、すなわち池田鴨之助の東側住居と並木五郎兵衛の西側住居にそれぞれ相当する敷地の可能性が高い。つまりこの絵図は、栗橋宿が開発された比較的初期の上一（栗橋宿で最初に開発された地区）の状況を描いているものと考えられる」と指摘している（堀内2021）。また『栗橋宿絵図』については、関所番の名前の組み合わせから概ね18世紀中頃と推測している。

栗橋関所

町の移転と同じ頃、栗橋宿から利根川対岸の中田宿への渡河点には、新たに関所が置かれた。これを「栗橋関所」と通称するが、正式には「房川渡（ぼうせんのわたし）中田御関所」あるいは「中田御関所」という。

『風土記稿』には、

> 關所　利根川堤上にあり、其置れし年代詳ならず、見張番所を構へて往来の旅人を改む、是を房川渡中田御關所と唱ふ、往来改の條目を記せし高札を建、往古のことを傳へず、關所番人四人あり、是は寛永元年今の加藤木工兵衛、足立十右衛門、富田定右衛門、嶋田源次郎の祖先御抱となり、世々在住してこれを勤む、此内後年外御關所より來りし者も有と云

とある。開設年代は詳ならずとしながら、寛永元年（1624）以降には４名の番士がその任に当

たっていると記す。

当初の番士は富田茂左衛門、新井喜平次、佐々木長左衛門、森又左衛門であったといわれる。新井は後に落合、森は後に加藤と改称している。後に幾度かの交替があり、寛政十二年（1800）以降は『風土記稿』が挙げる加藤、足立、富田、嶋田（島田）の四家に固定する。近年では落合家と仙台藩の関りについて個別の考察も行われており、各藩と交通の実態についても今後、検討が進むことが期待される（堀内2021）。

関所と番士は関東代官伊奈氏の支配下にあったが、寛保三年（1743）に伊奈忠尊が失脚した後は、栗橋宿周辺を支配する代官が所管するようになった（久喜市教育委員会2015）。

番士は代官所の手代に次ぐ下級武家の身分で、基本的には世襲であった。禄高は足立家のみが前任地（水戸街道の金町松戸関所）から引き継ぐ20俵４人扶持、他の３家は20俵２人扶持であった。因みにいえば、江戸町奉行所同心の禄は30俵２人扶持である。

関所、即ち番士の主たる任務は、女性や負傷者、不審者の通行を厳しく取り締まることにあった。関所の勤務は原則２名ずつの当番制で、明け六つ時から夕七つ時まで関所に詰めた。夜間は番士１名と宿民から雇用された下番１名が宿直した。参勤交代の大名家など、多人数の通行がある場合には全員が勤務することもあった。

番士四家は牛頭天王社（八坂神社）の西方、古利根川の堤防脇に各々屋敷を構えていた。これを拝領屋敷、または居屋敷と称した。屋敷は東から加藤家、足立家、嶋田家、富田家の順で並立していた。調査対象地外の富田家を除く各屋敷の規模や構造などについては、当事業団が発掘調査を実施した、栗橋関所番士屋敷跡の調査報告書（埼玉県埋蔵文化財調査事業団2018a）を参照されたい。

先にも触れたように、堤防上に構えられていた関所は元禄三年、同八年、宝永元年、寛保二年の４度、利根川の氾濫により流失し、その度毎に再建されている。寛保二年の時は加藤家裏の堤防が決壊し、周囲より一段高い盛土上に建てられていたにもかかわらず、屋敷は押し寄せた砂で軒先まで埋め尽くされている（埼玉県教育委員会2002）。

明治二年（1869）、新政府の行政が及ぶに至り、240年以上続いた房川渡中田御関所は廃止となる。番士四家も時を待たず任を解かれ、新たに置かれた葛飾県役所へ奉職することとなった。

（3）栗橋宿の様子

江戸を発した日光道中は幸手宿から北上し、栗橋宿の入り口で直角に左折、直ぐに右折すると長い北向きの直線路となる。宿の北端で再び右折、堤上の関所を経て中田宿へ向かう房川渡（渡船場）となる。この道筋は関所付近を除き、現在も主要地方道羽生外野・栗橋線に踏襲されている。『風土記稿』は栗橋宿の規模を長さ10町（1090m）余、民家419軒とし、その多くは街道左右に透き間なく建ち並び、櫛の歯のごとくであると記す。

宿内には上町、中町、下町、三ツ俣、船戸、鍛治町の小名（地区名）があることが、『風土記稿』に記載されている。上町は街道沿いの北部で、本陣や脇本陣、問屋場、旅籠屋など宿の中枢的な施設が集中していた。北端で右折して関所へ向かう街道沿いは、上横町もしくは横町と呼ばれた。中町は同じく中央部、下町は南部で新町とも称される。本書報告の栗橋宿西本陣跡は上町に位置する。三ツ俣は牛頭天王社と関所番士屋敷の間、船戸は利根川堤防に沿った堤外（河川側）の町で、河岸場があり舟問屋などが建ち並んだ。鍛治町は上町と堤防に挟まれた地区で、渡船や舟運に携わる水主たちの住まいが密集していた。町の中心は北部の上町側で、昭和初期の上町では、本通りに面した家はその全てが瓦葺きであった。そ

れに対して中町、新町（下町）は農家が多く、藁屋根の家々が目立ったという（久喜市教育委員会2011）。

『久喜市栗橋町史　資料編二』（久喜市教育委員会2013）に載る文政十二年（1829）の「栗橋宿外十二ヶ村農間渡世改帳（抄）」には、宿の大きさが記されていないものの、家数434軒、人口1,772人とある。434軒のうち309軒は「農間商并職人」で、建て前上は農業となっている。

一方、『大概帳』によれば、往還（街道）の距離は南隣の小右衛門村の境から房川渡船場まで15町13間（約1,658m）、道幅は６間半（約11.7m）、町並の長さは南北10町30間（約1,140m）である。人口は男869人、女872人の計1,741人、家数は本陣・脇本陣各１軒、旅籠屋25軒を含め、総数404軒とする。

『大概帳』に載る埼玉県内の他の５宿の人口および家数は次のとおりである。

草加宿：3,619人、723軒（うち旅籠屋67軒）
越ヶ谷宿：4,303人、1,005軒（うち旅籠屋52軒）
粕壁宿：3,701人、733軒（うち旅籠屋45軒）
杉戸宿：1,663人、365軒（うち旅籠屋46軒）
幸手宿：3,937人、962軒（うち旅籠屋27軒）

杉戸宿を除くと、栗橋宿の人口や家数は他宿の半数以下で、合宿である中田宿の人口403人、家数69軒を加えてもその数は４宿に遠く及ばない。人口、家数ともに、関所や渡船場を有する街道の要衝にしては意外な数値である。なお、越ヶ谷宿は千住宿、宇都宮宿に次ぎ、日光道中では３番目の規模を有する繁華な宿場であった。

明治時代の『郡村誌』を見ると、栗橋宿の人口は男1,109人、女1,131人の計2,240人である。家数は戸数として本籍476戸、寄留４戸、社１戸、寺５戸が挙げられている。日光道中に該当する道については、これを「陸羽街道」と呼んで、小右衛門村から房川渡場まで15町55間（約1,745m）、道幅は４間（約7.2m）としている。

『大概帳』と比較すると、道幅が２間半（約4.5m）も狭くなっている。試みに『郡村誌』に載る他宿の「陸羽街道」幅を確認したところ、杉戸宿は５間、幸手宿は６間と記されている。両宿の幅からしても、栗橋宿のそれを４間とする『郡村誌』の記述には注意が必要である。現在の主要地方道羽生外野・栗橋線の幅は、路側帯を含めれば10mを超える。

これまでの発掘調査では、本陣跡の北辺部で道路跡が検出されている。硬化面の幅は６～７mで、関所へ続く往昔の街道そのものであることは間違いない（埼玉県埋蔵文化財調査事業団2020a）。第一面で検出された道路跡の両側に敷設された木樋や、第二面で検出された側溝状の溝と土壙の間隔は、7.3～7.5m（およそ４間）と読み取ることができる。発掘調査前、この部分に存在した道路の幅は６m程であった。

この点について、『大概帳』は宿の南北を貫く街道の幅（６間半）で、『郡村誌』の記述は誤記や誤植ではなく、そこから折れて関所へ向かう街道の幅（４間）をそれぞれ示しているのではなかろうか。江戸時代の諸絵図が関所前の街道を心持ち細く描いているのも、故なきことではないのかもしれない。

宿内の生業について、『風土記稿』は宿駅関連と諸商とし、『大概帳』は農業の傍ら旅籠屋（25軒）や食物を提供する茶店の他、諸商を営む者が多いと記す。

天保十四年（1843）～弘化二年(1845)頃に作成されたと考えられる久喜市所蔵の『栗橋宿往還絵図』には、町並の図とともに居住者名と職業が書き込まれている。同図によれば、職種は旅籠屋22軒(うち飯売旅籠屋２軒)、荒物屋12軒、煮売茶屋10軒、青物屋９軒、饂飩屋８軒、小売酒屋６軒、茶屋５軒、春米屋５軒、餅菓子屋５軒、湯屋４軒、髪結４軒、豆腐屋３軒、糸屋３軒、畳職人３軒、塩物屋２軒、煙草屋２軒、足袋屋２

軒、医師２軒、鍛冶屋２軒、乾物屋２軒、甘酒屋２軒、油屋２軒、出穀問屋２軒の他、駕籠屋、苧屋、舟問屋、質屋、古立道具屋、鍋釜屋、左官、附木屋、定足屋、絵師、仕立職人、綿屋、建具屋、飴屋、小間物屋、薬師屋、按摩各１軒などとなっている（他に明家、明地あり）。

一方、前出の「栗橋宿外十二ヶ村農間渡世改帳（抄）」には居酒屋27軒、髪結７軒、湯屋６軒、煮売屋５軒、質屋29軒（休業中８軒）が経営者名とともに記されている。『栗橋宿往還絵図』に比して質屋の軒数が異常に多いが、これは他職を兼業する者も載せたためであろうし、煮売屋が少なく居酒屋が多いのも、酒肴を提供する煮売茶屋や一部の旅籠屋をも含むためと解される。

『郡村誌』では、専ら男は農・工・商、女は農・商に携わるとする。

栗橋宿と舟運

栗橋宿は利根川河畔に拓けた町のため、舟船による物資運輸も盛んであった。船戸町（栗橋河岸）と宿の南端近く（下河岸）には河岸場が備わり、周辺農村の年貢米をはじめ、民間の荷も多数取り扱かわれた。

利根川では舟運による輸送が発達しており、栗橋近辺でも権現堂河岸と関宿河岸が古くから知られている。栗橋河岸は、近世当初の元禄年間には年貢米を江戸へ送る「津出し湊（河岸）」ではなかったが、明和八年(1771)には中里村の、天明期(1781～89)には加須市域の水深村の津出しが行われ、近世中・後期にはその役割があった。栗橋町史に『武蔵国郡村誌』から作成した栗橋町域の明治初期の船の一覧が掲載されているが、その数610艘に上る。いかに栗橋区域が舟運と密接な生活を送っていたかが分かる。

この内、栗橋宿が有していた舟運に関わったいわゆる川船は、高瀬舟10艘、小高瀬舟２艘、似艚(にたりひらた)船８艘、屋形船17艘である。

江戸まで荷を運んだ舟は荷下ろしの後、奥川積問屋を通じて塩、砂糖、肥料、木綿、瀬戸物などを積載して遡行の途に就いた。奥川積問屋とは特定の河岸場との取引権を有する問屋のことで、栗橋河岸を持ち場としたのは、江戸小網町二丁目の利根川屋多吉であった（久喜市教育委員会2015）。

栗橋河岸には、房川渡しから堤沿いに続く舟戸町の船着き場と、やや下った利根川と権現堂川の分岐付近の下河岸があった。

栗橋関所では、船改め役を務める船問屋が船荷を改める「船改め」が行われていた。『栗橋関所史料一』によれば、船改めは享保年間(1716～1736)に下河岸で行われていた。しかし天明三年（1783）浅間山噴火の泥流の影響で、利根川の川筋が変化して下河岸に接岸できなくなり、舟戸町近辺に場所を移したとされている。従って、津出し湊や、江戸との川船の往来に利用されたのは舟戸町の河岸場と推定される。

河岸には舟の手配と荷の積み下ろしを行う舟問屋があり、栗橋舟渡町の河岸場では伊勢屋と菊田屋が著名である。栗橋の関所では舟荷も改める必要があったが、実際の業務はこれら舟問屋に委託されていた。

近世の栗橋村

近世初頭では栗橋宿を含む井坂、松長、佐間、島川、広島、河原代、狐塚、中里、小右衛門の各村は幕府の蔵入地で、代官伊奈半十郎忠治によって支配されていた。伊奈氏の支配は関東諸国に及び、特に武蔵国東部の低地開発を強力に推し進めたことで知られている。その結果、開発された広大な新田は伊奈氏の支配地として引き継がれていった。利根川東遷事業による新田開発もその一環とも言えるだろう。

元禄十年（1697）のいわゆる元禄の地方直しでは、高柳村、高柳新田は酒井対馬守、島平村は酒井監物、広島村は久津見斧太郎、河原代村は久津見斧太郎・榊原大膳の旗本知行へ支配替えが行

われた。

加えて、松長、間鎌、間鎌新田、佐間、佐間新田、井坂の各村は、18世紀中葉の延享年間（1744～1748）、19世紀前半から中葉の文政年間から安政年間に徳川御三卿領への支配替えとなった。

周辺の近世遺跡

栗橋周辺の近世遺跡は、日光道中と古河城を中心に展開する。

古河城（14）は、小笠原氏［天正十八年（1590）～慶長七年（1602）］、戸田松平氏［～慶長十七年（1612）］、小笠原氏［～元和五年（1619）］、奥平氏［～元和八年（1622）］、永井氏［～寛永十年（1633）］、土井氏［～天和元年（1681）］、堀田氏［～貞享二年（1685）］、藤井松平氏［～元禄六年（1693）］、大河内松平氏［～正徳二年（1712）］、本多氏［～宝暦九年（1759）］、松井松平氏［～宝暦十二年（1762）］、土井氏［～明治二年（1869）］と藩主が変遷した。歴代古河藩主によって、城の拡張、城下町の整備が続けられた。特に、たびたび将軍の日光参詣の宿城となったため、その都度、特別な手当金が支給され整備が進んだ。

利根川の東側は、利根川の河川改修以降も、この古河城を中心として遺跡が展開している。

旧総和町香取東遺跡（17）では18～19世紀の土壙（墓壙）、井戸跡、溝跡が検出された。南側に隣接する釈迦才仏遺跡（36）（茨城県教育財団1998）には、南北11.4m、東西8.4m、高さ1.0mの不整隅丸方形を呈する近世後半の塚が造られた。

長井沼の奥となる本田山遺跡（21）は、中世に引き続き近世でも墓地として継続している。柳橋城の南側となる旧総和町向坪B遺跡（19）（茨城県教育財団1986）からは近世の土壙、溝跡が検出され、土壙墓が含まれていると考えられる。

長井沼東側の旧鎌倉街道は栃木県多功に通ずる日光東街道として、元和年間には整備されていたとされている。街道には仁連宿、谷貝宿が設けられた。仁連宿の北、諸川には中世から続く本田遺跡（29）（技研測量設計株式会社2010）があり、17世紀後半を中心とする掘立柱建物跡、竪穴状遺構、地下式坑、土壙、墓壙、井戸跡、溝跡が検出された。

利根川の西側では、近年の堤防強化対策事業に関わる発掘調査成果がある。栗橋宿跡から10kmほど上流の本田遺跡（埼玉県埋蔵文化財調査事業団2021b）では、利根川に隣接する水塚の調査が行われ、水塚の盛土・石積みと、その上の建物跡・隣接する蔵跡などが検出された。水塚を広範囲に発掘調査した事例は少なく、建物構造等を把握する上で貴重な成果となった。

一方で、水塚と建物の構築順序などを遺構の観察から明確にすることは予想外に困難であった。特殊な近世構築物に関わる調査方法の確立が必要となろう。建物の基礎からは幕末～明治期の生活道具・建築材が多く出土し、清朝磁器や赤瓦の出土が特筆される。地方農村の遺物様相を窺うことができる好例である。

（4）幕末から近代の栗橋地区

幕末の栗橋宿

幕末の19世紀中葉には、天保の飢饉に端を発する打ちこわし、慶應二年（1866）から始まる武州世直し一揆、元治元年（1864）の水戸浪士による天狗党の乱など、社会情勢が不安定になった。栗橋でも、慶應四年（1868）、羽生陣屋焼き払いに始まる打ちこわしが波及した。『足立家文書御関所日誌』には、9000人余りが宿内へ侵入し、名主良右衛門宅に放火し、仲町百姓弥平次宅、本陣池田由右衛門宅を打ちこわし、また関所へも押し入り、番士が関所から退去したとある。

明治二年（1896）２月には、葛飾県役所から関所廃止の通知が出された。番士四家は関所道

具を栗橋宿へ預け、関所改めの廃止を各所に通知し、関所を引き払った。一方栗橋宿は、明治二十二年（1889）に町村制が施行され、北葛飾郡栗橋町となった。交通の要衝としての役割は引き継がれていった。

近代の栗橋地区

本陣池田家の池田鴨平は、明治新体制下において、葛飾県の組合取締役・勧農取締役方を務め、行政区画が埼玉県に移行すると、第八区区長となった。明治九年（1876）の明治天皇行幸に際しては、案内人を務めている。

交通網における大きな変化は、大宮～宇都宮間の鉄道敷設で、明治十八年（1885）７月に栗橋駅までが開通する。当初、渡船連絡であった利根川の渡河も、翌年７月には鉄橋が架設された。四号国道の利根川渡河は大正期に至ってもあいかわらず渡船であったが、大正十三年（1924）に利根川橋が開通した。

一方、明治十年（1877）には内国通運会社が東京深川から栗橋を経て、思川の生井村（栃木県小山市）まで蒸気船通運丸を就航させた。内国通運会社は、江戸飛脚問屋仲間を中心に、京都・大阪の飛脚問屋仲間などが参加し、明治五年（1872）に設立された運輸会社である。

内国通運会社の代理店として荷客を取り扱ったのは、運送業を営む上町の小林家である。小林家は、近世には旅籠屋「會津屋」として営業していたが、近代に入り、運送業へ業種転換を図った。

なお、明治四年（1871）に郵便制度が開始されると、栗橋町にも郵便取扱所（のちの郵便局）が設置された。設置場所は内国通運会社の代理店にも指定される小林家（會津屋）宅である。政府は郵便制度を普及させるにあたり、その土地の名望家や素封家に役人並みの待遇と引き換えに郵便制度への協力を行わせたのである（久喜市教育委員会2014）。

明治六年（1873）には、政府は太政官布告第230号により、国内の陸上・水上交通をほぼ独占する権限を内国通運に与え、各地の輸送を同社に統合していく政策をとった。通運会社の資料によると、栗橋が寄港地として掲載されるのは、明治十年（1877）８月21日の運航からで、扇橋－乙女（栃木県小山市）間を毎日運航する就航路であった。寄港地は扇橋・行徳・松戸・加村・野田・宝珠花・関宿・境・中田・栗橋・古河・生井・生良の順であった。また、同十三年（1880）７月10日開設の扇橋－北河原（行田市）間の就航路にも、栗橋の地名が記される。

明治十三年には長島良幸が長島丸を、同三十五年（1902）には栗橋の廻船問屋古川平兵衛が古川丸を就航させるが、内国通運会社との競争に敗れ撤退している。その後、鉄道の発達により、舟運は衰退し、大正八年(1919)、内国通運も撤退している（栗橋町教育委員会2010）。

このころの栗橋町の様子は、明治三十五年(1902)の『埼玉県営業便覧』にみることができる。旧日光道中の表通りには商家が連なり、回漕、運送業に関わる店が多いのも特徴である。明治三十一年(1898)に町の地主や商人による出資で開業した栗橋銀行や、明治三十三年開業の栗橋商業銀行、いずれも池田鴨平が設立に関わった栗橋学校（明治五年（1872）に私塾として開校）・淑徳女学館(明治二十二年（1889)開校）等、主要な施設が旧宿場内に設置されていたことが分かる。

利根川沿いの船戸町には回漕業や料理店等が立ち並び、文豪田山花袋が度々訪れたという鯉料理店の稲荷楼（稲荷屋）も船戸町にあった。稲荷楼は利根川の上に張り出すように店を構えており、川岸には桟敷を作るなど風情ある店であった。ちなみに『風土記稿』には、利根川の産物として、鯉、鮒、鰻、鮠、さい（ニゴイ）、いなは（種不明）の６種の川魚が挙げられ「味ひ最美なり」とある。

稲荷楼は、国会開設に先立つ大同団結運動期に政治活動にも用いられた。明治二十一年（1888）には栗橋町の町制が敷かれるにあたって、埼玉県知事らが巡視後に投宿している。翌二十二年１月には「町村制講義会」が栗橋学校で講習会を開くが、その聴衆は300余人に上り、夜には稲荷楼で盛大な懇親会が行われたという。同年には、幸手・杉戸地域の有志によって結社「蘭交会」が発足、例会が行われている。また、明治二十四年（1891）９月には自由党派の政談演説会が開かれ、稲荷楼で小宴が開かれている（久喜市教育委員会2011）。

近世の宿場町を骨子としつつ、近代化を遂げた栗橋町であったが、前代に引き続き水害・災害と直面することも多かった。明治四十三年（1910）の水害では冠水を逃れたが、それ以前の明治二十三年（1890）の水害では栗橋町の戸数の25%強が冠水したとされる。

明治三十三年（1900）からは、利根川の抜本的な改修計画（利根川改修計画）が始まり船戸・鍛冶町は河川敷となる。利根川における近代治水事業は以後、継続的に実施されている。

栗橋宿跡の利根川渡河地点という立地は、交通の要衝としての発展と、水害によるリスクが表裏一体の関係にあったと言えよう。

引用・参考文献については、紙数の都合上全てを挙げることができない。埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第473集『栗橋宿跡Ⅵ』（埼玉県埋蔵文化財調査事業団2022a）の引用・参考文献一覧を参照されたい。

Ⅲ　遺跡の概要

栗橋宿西本陣跡の調査は、首都圏氾濫区域堤防強化対策に伴って実施したものである。所在地は久喜市栗橋北２丁目である。

栗橋宿は、慶長年間に池田鴨之助、並木五郎平らが元栗橋から移住して開宿した宿場と伝わる。南北に走る日光道中を挟んで町屋が並んでいた。『日光道中宿村大概帳』には、宿高689石余、宿往還の長さ15町13間余、宿町並10町30間、宿の家数404軒、本陣・脇本陣各１軒、旅籠屋25軒、人口1,741人（男性869人、女性872人）と記されている。

栗橋宿関連の発掘調査は、既に報告された平成二十四年（2012）の栗橋関所番士屋敷跡・栗橋宿跡第１地点（埼玉県埋蔵文化財調査事業団2018a,b、以下、埼埋文）に始まり、継続的に続けられ、範囲も広範囲に及ぶ。そのため、全ての調査地点を網羅するように、大グリッドと小グリッドを組み合わせて方眼を組んでいる。詳細は凡例と第４図に示した。本報告で扱う栗橋宿西本陣跡は、大グリッドのＢ５、Ｃ５、Ｃ６グリッドにまたがり、宿場の北部に位置する。

「栗橋宿西本陣跡」は脇本陣「虎屋」の敷地を含む町屋跡である。日光道中は北端で北東方角にクランクし、利根川右岸にあった関所へと延びる。クランクの南側一帯に池田家が代々勤めた本陣の敷地があり、その対面である。つまり、本陣から日光道中を挟んだ西側が西本陣跡である（第４図）。

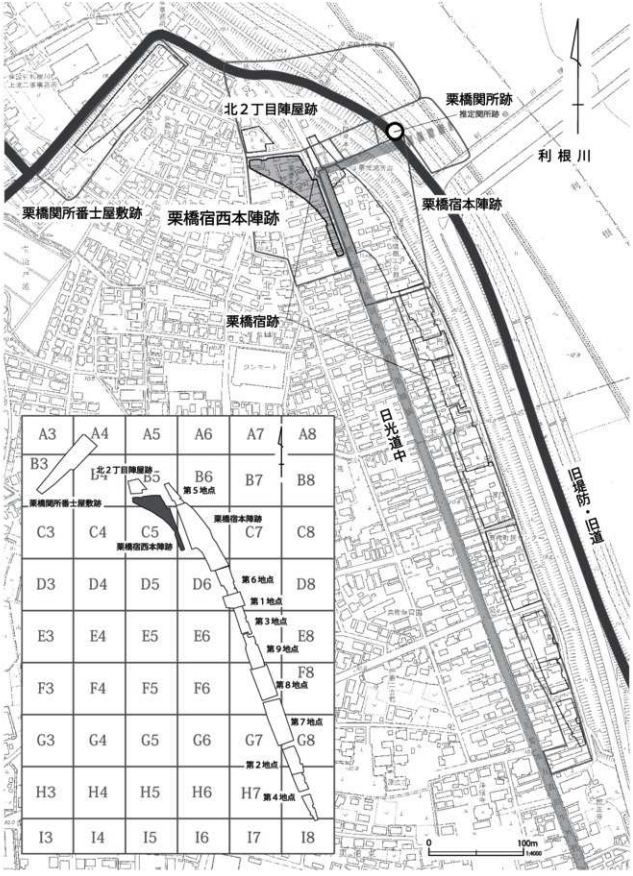
また、北側には八坂神社（牛頭天王社）が所在し、「北２丁目陣屋跡」として本殿下の発掘調査が行われた。なお、境内南西部を対象に行われた調査の成果は、『北２丁目陣屋跡』（埼埋文2021a）として刊行されている。

各調査地点は、『栗橋宿往還絵図』（以下、『絵図』）及び明治三十五年（1902）刊行の『埼玉県営業便覧』（以下、『営業便覧』）と、発掘調査で検出された区画施設との対比が行われている。本書でも検出遺構と、『絵図』・『営業便覧』の対比を行った（第22図）。

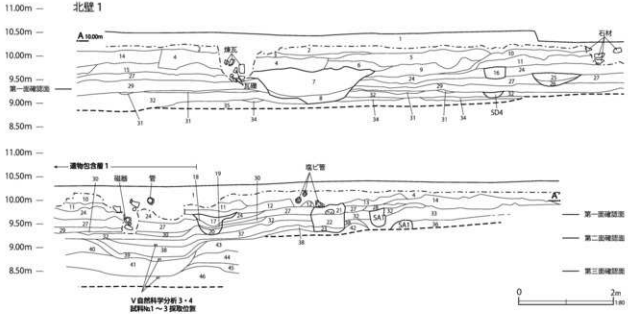
なお、西本陣跡の第一面は調査区の北側を中心に区画施設が検出されているが、南側では明確な施設が検出されず、実態に即した区画の推定は困難であった。そのため、南側の区画では『絵図』と明治六年（1873）の『深廣寺所蔵絵図』（埼埋文2021a）、『営業便覧』を比較し、南側の区画に世帯の変動がないことを精査したうえで、検出された近代の建物跡を区画推定の基準とした。第22図「『絵図』等と調査区の対比」では、区画施設から推定した区画を実線、近代の建物跡から推定した区画を破線で示した。

西本陣跡における区画番号は本陣跡、栗橋宿跡第１～９地点とは敷地に連続性がないため、新たに区画１、２、３…の順に北から番号を振った。なお、第１号柵跡から西の遺物包含層については、対比ができないため区画から除外した。『絵図』『営業便覧』との対応は次のとおりである（第22図）。

区画１「煮売茶屋　三七郎」「根岸紋蔵」
区画２「こしうとんや　金蔵」
　　「凍氷貯蔵営業　笹屋號　池田宗三郎」
区画３「煮売茶屋　平兵衛」
　　「凍氷貯蔵営業　笹屋號　池田宗三郎」
区画４「百姓　藤八」
　　「荒物商　高橋忠二郎　高橋熊二郎」
区画５「旅籠屋　会津屋　三右衛門」
　　栗橋郵便電信局兼会津屋小林運送本店」
区画６「青物屋　久兵衛店　宇兵衛」
　　「青物糀商　菊田屋號　古川新五郎」
区画７「旅籠屋　五郎平」
　　「林彦九郎　並木松蔵」

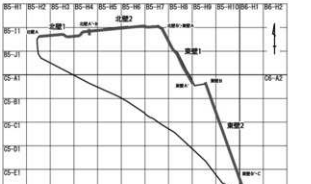

北２丁目陣屋跡
栗橋関所跡
推定関所跡
利根川
栗橋関所番士屋敷跡
栗橋宿西本陣跡
栗橋宿本陣跡
栗橋宿跡
日光道中
旧堤防・旧道
A3 A4 A5 A6 A7 A8
B3 B4 B5 B6 B7 B8
C3 C4 C5 C7 C8
D3 D4 D5 D6 D8
E3 E4 E5 E6 E8
F3 F4 F5 F6 F8
G3 G4 G5 G6 G7 G8
H3 H4 H5 H6 H7
I3 I4 I5 I6 I7 I8
北２丁目陣屋跡
栗橋関所番士屋敷跡
栗橋宿西本陣跡
栗橋宿本陣跡
第５地点
第６地点
第１地点
第３地点
第９地点
第８地点
第７地点
第２地点
第４地点
0
100m
1:4000

第４図　遺跡位置図



北壁 1

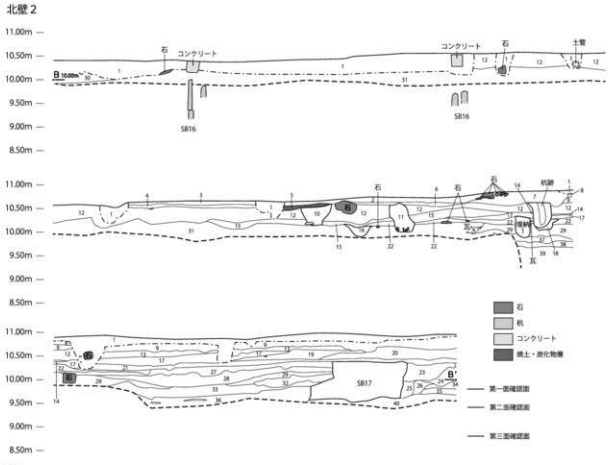
1 近現代の盛土・攪乱
2 暗褐色土　しまり強　粘性弱　ビニール片含む　現代
3 灰褐色土　しまり・粘性弱　酸化鉄多量
4 暗褐色土　しまり・粘性弱　焼土粒子・炭化物（φ5～10㎜）多量
5 灰褐色土　しまり強　粘性弱　炭化物（φ5～10㎜）多量
6 灰褐色土　しまりあり　粘性弱　炭化物（φ1～5㎜）多量
7 灰色土　しまりあり　粘性弱　炭化物（φ5～10㎜）多量
8 灰色粘土　しまり・粘性あり　炭化物（φ1～5㎜）多量
9 灰褐色土　しまりあり　粘性弱　酸化鉄多量
10 灰色土　しまりあり　粘性弱　炭化物（φ1～5㎜）少量
11 暗褐色土　しまりあり　粘性弱　炭化物（φ5～10㎜）多量
12 灰褐色土　しまりあり　粘性弱
13 黄褐色土　しまりあり　粘性弱
14 黒褐色土　しまりあり　粘性弱　焼土粒子・炭化物（φ5～10㎜）多量
15 暗褐色土　しまりあり　粘性弱　炭化物（φ5～10㎜）多量
16 黒褐色砂　しまり・粘性弱　木片多量　遺構覆土（近代）
17 黒褐色粘土　しまり・粘性あり　木質多量　遺構覆土（近代）
18 暗褐色粘土　しまり・粘性あり　木質少量　遺構覆土（近代）
19 灰褐色粘土　しまりあり　粘性強　木質多量　遺構覆土（近代）
20 黒褐色粘土　しまりあり　粘性強　木質多量　遺構覆土（近代）
21 黄褐色砂　しまり・粘性弱　石材少量　遺構覆土（近代）
22 灰色土　しまり・粘性弱　石材・瓦辺少量　遺構覆土（近代）
23 黒褐色粘土　しまり・粘性あり　遺構覆土（近代）
24 灰褐色土　しまりあり　粘性弱　炭化物（φ5～10㎜）多量
25 暗褐色土　しまりあり　粘性弱　炭化物（φ5～10㎜）少量　遺構覆土（近代）
26 灰褐色土　しまり・粘性弱　木質多量　遺構覆土（近代）
27 暗褐色土　しまり強　粘性弱　白色粒子・炭化物（φ1～5㎜）多量　敲痕
28 灰褐色土　しまりあり　粘性弱
29 黒褐色粘土　しまり・粘性あり　白色粒子・炭化物（φ1～5㎜）少量
30 黒褐色粘土　しまり弱　粘性あり　木質多量
31 灰褐色砂　しまりあり　粘性弱　細粒　鉄水層か　敲痕
32 黒褐色粘土　しまりあり　粘性弱　白色粒子（φ1～5㎜）少量
33 黒褐色土　しまりあり　粘性弱　酸化鉄多量
34 灰色砂　しまり・粘性弱　粗粒　鉄水層か　敲痕
35 灰色粘土　しまりあり　粘性強
36 暗褐色土　しまりあり　粘性弱　炭化物（φ5～10㎜）多量
37 黒褐色土　しまりあり　粘性弱　一部にラミナ状の木質層あり　水性堆積
（遺物包含層 1）（池沼湿地層）
38 暗褐色粘土　しまりあり　粘性強　一部にラミナ状の木質層あり　水性堆積
（遺物包含層 1）（池沼湿地層）



39 灰褐色粘土　しまりあり　粘性強　一部にラミナ状の木質層あり　水性堆積
（遺物包含層 1）（池沼湿地層）
40 灰褐色粘土　しまりあり　粘性強　（遺物包含層 1）（池沼湿地層）
41 暗褐色土　しまりあり　粘性強　部分的に砂層あり
42 灰褐色粘土　しまりあり　粘性強　白色粒子（φ1～5㎜）多量
43 灰褐色粘土　しまりあり　粘性強
44 灰色粘土　しまりあり　粘性強
45 黄褐色砂　しまり・粘性弱
46 灰色粘土　しまり弱　粘性強　炭化物（φ5～10㎜）多量
一部にラミナ状の砂層あり　水性堆積

第５図　基本土層（１）

区画８「龍鈍屋　吉蔵」「菓子商　野原兵蔵」
区画９「春米屋　善兵衛」
「五十集商　並木惣二郎」
区画10「龍鈍屋　平兵衛店　源七」
「米穀薪炭商　早乙女弥惣次」
区画11「薬師屋　百姓　文吉」「鶴岡辰蔵」
区画12「豆腐屋　彦四郎」
「酒醤油商　新中屋　関幸次郎」
区画13「煮売屋　権蔵」
「茶煙草木炭商　菊田屋　坂本駒吉」



北壁2

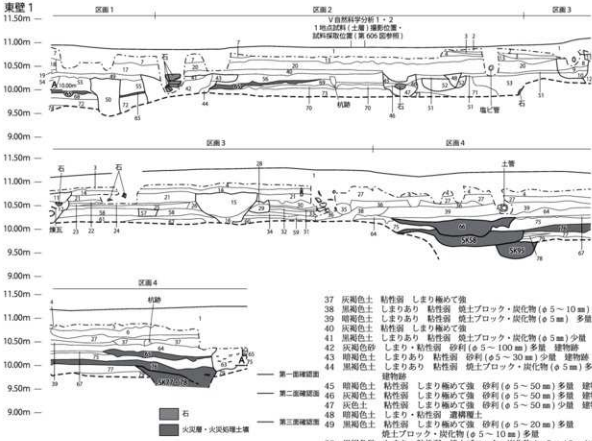
1 近現代の盛土・攪乱
2 黄褐色土 しまりあり 粘性弱 間に黒色硬化面を挟む
3 暗褐色土 しまりあり 粘性弱
4 黄褐色土 しまりあり 粘性弱
5 赤褐色土 しまりあり 粘性弱 焼土層
6 黄褐色土 しまりあり 粘性弱
7 褐色土 しまりあり 下部に炭化物少量
8 黄褐色土 しまりあり 粘性弱
9 暗褐色土 しまりあり 粘性弱 炭化物(φ1～5mm)少量
10 暗褐色土 しまりあり 粘性弱 遺構覆土
11 暗褐色土 しまり・粘性弱 陶器片多量(施釉) 遺構覆土
12 暗褐色土 しまりあり 粘性弱 焼土ブロック・炭化物(φ5～10mm)少量
13 暗褐色土 しまりあり 粘性弱 白色粘土ブロック(φ5～20mm)多量
湧水層か
14 黄褐色砂 しまり・粘性弱
15 黄褐色土 しまりあり 粘性弱 白色粒子(φ1mm)多量
16 灰褐色度 しまりあり 粘性弱 炭化物(φ5～10mm)多量 遺構覆土
17 黄褐色土 しまりあり 粘性弱 白色粒子(φ1mm)多量
18 暗褐色土 しまりあり 遺構覆土
19 暗褐色土 しまりあり 粘性弱 灰色シルトブロック(φ5～20mm)多量
湧水層か
20 暗褐色土 しまりあり 粘性弱 白色シルトブロック(φ5～20mm)多量
湧水層か
21 灰褐色土 しまりあり 粘性あり 白色粒子(φ1～5mm)多量 瓦片少量
礎層
22 黒色土 しまり・粘性弱 炭化物層 炭化物(φ5～10mm)主体 焼土含む
23 暗褐色土 しまり・粘性弱 焼土ブロック・炭化物(φ5～10mm)多量
24 黒褐色土 しまり・粘性弱 焼土ブロック・炭化物(φ5mm)多量
25 黒褐色土 しまり・粘性弱 焼土ブロック・炭化物(φ5mm)多量
26 灰色土 しまり・粘性弱 黒色シルトブロック(φ10～30mm)多量
27 黒褐色土 しまりあり 粘性弱 焼土ブロック・炭化物(φ5～20mm)多量
28 黄褐色砂 しまりあり 粘性弱
29 灰色土 しまりあり 粘性弱 焼土粒・炭化物(φ1～5mm)多量
30 暗褐色土 しまり・粘性弱 焼土粒子・炭化物(φ5～10mm)多量
31 黄褐色砂 しまりあり 粘性弱 灰褐色シルトブロック(φ5～100mm)多量
湧水砂か
32 黒褐色土 しまりあり 粘性弱 炭化物(φ5～20mm)多量
33 灰褐色土 しまりあり 粘性弱 焼土ブロック・炭化物(φ5～10mm)多量
34 灰色粘土 しまりあり 粘性弱
35 黒褐色土 しまりあり 粘性弱 焼土ブロック・炭化物(φ5mm)多量
36 灰色粘土 しまりあり 粘性あり 焼土ブロック・炭化物(φ5～30mm)多量
37 灰褐色粘土 しまりあり
38 明褐色土 しまりあり 13層より砂多量
39 明褐色土 しまりあり 砂含む
40 暗褐色土 しまりあり 粘性弱 硬質シルト層
焼土ブロック・炭化物(φ5～10mm)少量

第6図 基本土層(2)

区画14「糸屋 文右衛門」
「小間物屋 松本清次郎」

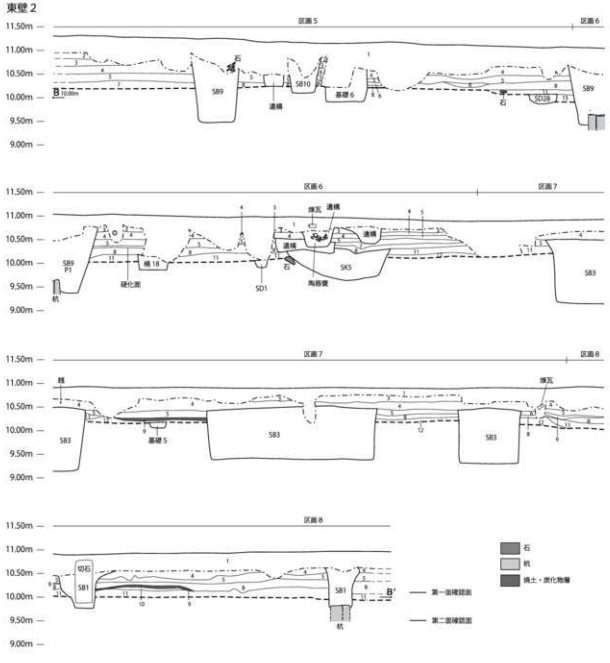
区画14の南隣は脇本陣「虎屋」だが、検出された第42号建物跡が調査区域外へ続くため調査区に脇本陣はかからないと思われる。

本書報告範囲は調査区北半である。具体的には、区画1～3に対応する各調査面の遺構および調査区西部の遺物包含層である。また、基本土層を示す関係上、区画4～14の基本土層(東・南壁)にかかるすべての遺構を対象とした。それ以



東壁1
1　近現代の盛土・攪乱
2　灰褐色土　しまりあり　粘性弱
3　黒褐色土　粘性弱　しまり極めて強
4　暗褐色土　しまりあり　粘性弱
5　暗褐色土　粘性弱　しまり極めて強　黄褐色粒子(φ1～5㎜)多量
6　黒色土　粘性弱　しまり極めて強　白色粒子(φ1㎜)多量
7　暗褐色土　しまりあり　粘性弱　炭化物(φ1～5㎜)少量　北壁2第9層相当
8　灰褐色土　しまりあり　粘性弱　遺構覆土(近代)
9　黄褐色土　粘性弱　しまり極めて強　煉瓦少量　遺構覆土(近代)
10　灰褐色土　しまりあり　粘性弱　砂利(φ5～100㎜)少量　遺構覆土(近代)
11　灰色土　しまりあり　粘性弱　砂利(φ5～30㎜)少量　遺構覆土(近代)
12　灰褐色土　しまり・粘性弱　煉瓦・石少量　遺構覆土(近代)
13　黄褐色土　粘性弱　しまり極めて強　白色粒子(φ1㎜)多量
14　黄褐色土　しまりあり　粘性弱　砂利(φ5㎜)少量
15　暗褐色土　しまり・粘性弱　焼土ブロック・炭化物(φ5～10㎜)多量　遺構覆土
16　黄褐色土　しまり・粘性弱　遺構覆土
17　黄褐色土　しまりあり　粘性弱
18　暗褐色土　しまりあり　粘性弱　白色シルトブロック(φ5～20㎜)多量　洪水層か　北壁2第20層相当
19　灰褐色土　しまりあり　粘性あり　白色粒子(φ1～5㎜)多量　瓦片少量　鍵層　北壁2第21層相当
20　灰褐色土　しまりあり　粘性弱　白色シルトブロック(φ5～30㎜)多量　洪水層か
21　黒褐色土　しまりあり　粘性弱　砂利(φ5～20㎜)多量
22　黄褐色土　粘性弱　しまり極めて強
23　暗褐色土　粘性弱　しまり極めて強　砂利(φ5～30㎜)多量
24　黄褐色土　粘性弱　しまり極めて強
25　黒褐色土　粘性弱　しまり極めて強
26　暗褐色土　しまり・粘性弱　もろく崩れている
27　暗褐色土　しまりあり　粘性弱　焼土ブロック・炭化物(φ5㎜)少量
28　黄褐色土　しまりあり　粘性弱　遺構覆土(近代)
29　黒褐色土　しまり・粘性弱　炭化物(φ5～10㎜)多量　遺構覆土(近代)
30　黄褐色土　しまりあり　粘性弱　白色粒子(φ1㎜)多量
31　黒褐色土　しまりあり　粘性弱　焼土ブロック・炭化物(φ5～10㎜)多量
32　暗褐色土　しまりあり　粘性弱
33　黒褐色土　しまりあり　粘性弱　砂利(φ5～50㎜)多量
34　暗褐色土　しまりあり　粘性弱
35　暗褐色土　しまり・粘性弱
36　黄褐色土　粘性弱　しまり極めて強
37　灰褐色土　粘性弱　しまり極めて強
38　黒褐色土　しまりあり　粘性弱　焼土ブロック・炭化物(φ5～10㎜)多量
39　暗褐色土　しまりあり　粘性弱　焼土ブロック・炭化物(φ5㎜)　多量
40　灰褐色土　粘性弱　しまり極めて強
41　黒褐色土　しまりあり　粘性弱　焼土ブロック・炭化物(φ5㎜)少量
42　灰褐色砂　しまり・粘性弱　砂利(φ5～100㎜)多量　建物跡
43　暗褐色土　しまりあり　粘性弱　砂利(φ5～30㎜)少量　建物跡
44　黒褐色土　しまりあり　粘性弱　焼土ブロック・炭化物(φ5㎜)多量　建物跡
45　暗褐色土　粘性弱　しまり極めて強　砂利(φ5～50㎜)多量　建物跡
46　灰褐色土　粘性弱　しまり極めて強　砂利(φ5～50㎜)多量　建物跡
47　灰色土　粘性弱　しまり極めて強　砂利(φ5～50㎜)少量　建物跡
48　暗褐色土　しまり・粘性弱　遺構覆土
49　黒褐色土　粘性弱　しまり極めて強　砂利(φ5～20㎜)多量　焼土ブロック・炭化物(φ5～10㎜)多量
50　黒褐色砂　しまり・粘性弱　焼土ブロック・炭化物(φ5～10㎜)多量　遺構覆土
51　灰色土　粘性弱　しまり極めて強
52　黒褐色土　しまり・粘性弱　焼土ブロック・炭化物(φ5～30㎜)多量　遺構覆土
53　暗褐色土　しまり・粘性弱　焼土ブロック・炭化物(φ5～10㎜)多量
54　黒褐色土　しまり・粘性弱　焼土ブロック・炭化物(φ5㎜)多量　北壁2第24層相当
55　暗褐色土　しまりあり　粘性弱　焼土ブロック・炭化物(φ5～10㎜)少量
56　暗褐色土　粘性弱　しまり極めて強　焼土ブロック・炭化物(φ5～20㎜)多量
57　白色砂　しまり・粘性弱　遺構覆土
58　灰色粘土　しまりあり　粘性強
59　黒褐色土　しまりあり　粘性弱　焼土ブロック・炭化物(φ5～10㎜)多量
60　黒褐色土　しまり・粘性弱　焼土ブロック・炭化物(φ5～20㎜)多量
61　灰色土　粘性弱　しまり極めて強
62　黄褐色砂　しまり・粘性弱
63　暗褐色土　しまり・粘性弱　瓦片多量　遺構覆土
64　黒褐色土　しまりあり　粘性弱　焼土ブロック・炭化物(φ5～10㎜)多量
65　赤褐色土　しまり・粘性弱　焼土・炭化物層　焼土ブロック・炭化物(φ5～50㎜)主体　火災層
66　赤褐色土　しまり・粘性弱　焼土・炭化物層　焼土ブロック・炭化物(φ5～50㎜)主体　火災処理土壙(文政五年)
67　黒色土　粘性弱　しまり極めて強
68　灰色粘土　しまりあり　粘性弱　北壁2第34層相当
69　灰色土　粘性弱　しまり極めて強　白色粒子(φ1㎜)多量
70　黄褐色土　粘性弱　54層よりしまり強
71　灰色土　しまりあり　粘性弱
72　黒褐色土　しまりあり　粘性弱　焼土ブロック・炭化物(φ5㎜)多量　北壁2第35層相当
73　黄褐色砂　しまりあり　粘性弱　灰色シルトブロック(φ5～50㎜)多量　洪水層か
74　暗褐色土　しまりあり　粘性弱　硬質シルト層　焼土ブロック・炭化物(φ5～10㎜)少量　北壁2第37層相当
75　黄褐色砂　しまりあり　粘性弱　灰色シルトブロック(φ5～30㎜)多量　洪水層か
76　黒褐色土　しまりあり　粘性弱　焼土ブロック・炭化物(φ5～30㎜)多量　火災層(文化期)
77　黒色土　粘性弱　しまり極めて強
78　黄褐色砂　しまりあり　粘性弱
79　暗褐色土　しまりあり　粘性弱　焼土粒・炭化物(φ1～5㎜)多量

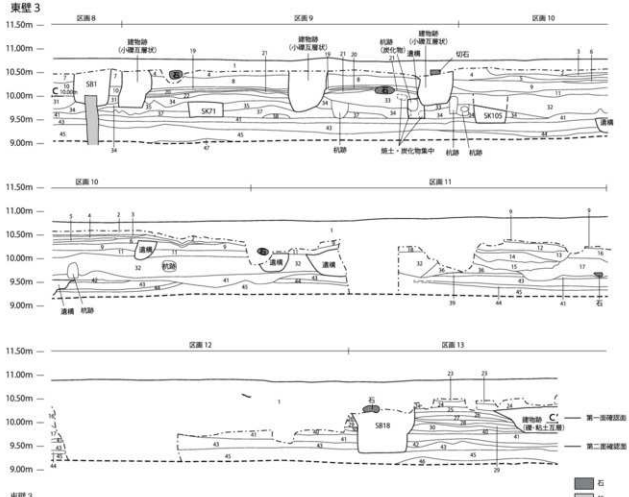
第7図　基本土層(3)



東壁2
1　近現代の盛土・撹乱
2　暗褐色土　3層との境界に硬化面
3　黒褐色土　2・4層との境界の一部に硬化面
4　灰褐色土　3・5層との境界の一部に硬化面（5層との境界のごく一部に焼土が伴う）
5　暗褐色土　部分的に灰色土が層状に入るが4・6・8・9層との境界に硬化面（一部には焼土が伴う）
6　黄褐色砂　5・8層との境界の一部に焼土を伴う硬化面（5層との境界には焼土が伴う）
7　褐色土
8　灰褐色土　5・6・11・12層との境界に硬化面（5・11・12層との境界の一部に焼土が伴う）
9　赤褐色土　一部に焼土主体層・炭化物主体層がみられる　5層との境界に焼土が伴う硬化面
10　黄褐色土
11　黒褐色土　部分的に焼土・炭化物層が入る　下部・8層との境界に硬化面（8層との境界には焼土が伴う）
12　黒色土　一部炭化物の薄い堆積が上部を中心にみられる　下部・8層との境界に硬化面（一部には焼土が伴う）
13　褐色砂

0　2m

第8図　基本土層（4）



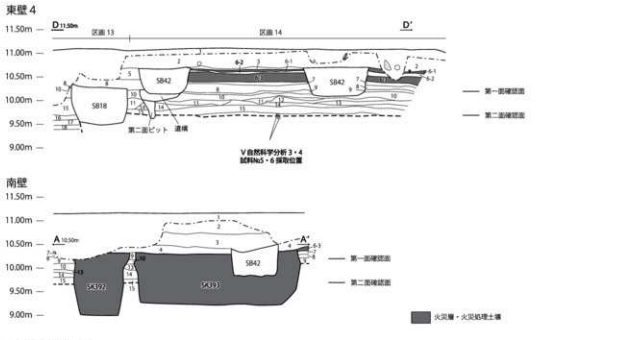
東壁3

1	近現代の盛土・攪乱				
2	暗褐色土	しまりあり	粘性弱	粘土ブロック（Φ10㎜）少量	
3	灰色土	しまりあり	粘性弱		
4	褐色土	しまりあり			
5	暗褐色土	しまりあり	粘性弱	炭化物・焼土ブロック多量	
6	灰色土	しまりあり	粘性弱	縞状の灰・褐色層 硬化面	
7	褐色土	しまりあり	粘性弱	焼土ブロック（Φ5～15㎜）微量	
8	黄色砂	しまりあり	粘性弱	シルトブロック（Φ10～50㎜）少量	
9	褐色土	しまりあり	粘性弱	灰色シルト少量	
10	灰色土	しまりあり	粘性強	炭化物・焼土ブロック少量	
11	暗灰色土	しまりあり	粘性弱	炭色土・焼土含む	
12	褐色土	しまりあり	粘性弱		
13	暗褐色土	しまりあり	粘性弱		
14	白色土	しまり・粘性弱			
15	褐色土	しまりあり	粘性弱		
16	褐色土	灰色土ブロック多量			
17	褐色土	しまりあり	粘性弱		
18	暗灰色土	しまりあり	粘性弱	灰少量 縞状	
19	灰色土	しまりあり	粘性弱	縞状の硬化面	
20	黄色土	しまりあり	粘性弱	焼土ブロック少量	
21	灰色土	しまりあり	粘性弱	縞状の硬化面	
22	褐色土	しまりあり	粘性弱	黒い硬化面あり	
23	白灰色砂	しまり・粘性弱			
24	褐色土	しまりあり	粘性弱		
25	褐色土	しまりあり	粘性弱		
26	暗褐色土	しまりあり	粘性弱		
27	暗褐色土	しまりあり	粘性弱	砂少量	
28	暗褐色土	しまりあり	粘性弱	炭化物・焼土少量	
29	褐色土	しまりあり	粘性弱		
30	褐色土	しまりあり	粘性弱	小礫主体（φ10～40㎜）	
31	灰褐色土	しまりあり	粘性強		
32	灰色土	しまりあり	粘性弱	粘土ブロック・焼土少量 堆灰し層	
33	褐色土	しまりあり	粘性弱	焼土ブロック少量	
				一部に焼土・炭化物集中	
34	褐色土	しまりあり	粘性弱	砂少量	
35	灰褐色土	灰色ブロック多量			
36	灰褐色粘土	しまりあり	粘性強		
37	褐色土	しまりあり	粘性強		
38	灰色土	しまりあり	粘性強		
39	褐色土	しまりあり	粘性弱	砂少量	
40	白灰色砂	しまり・粘性弱			
41	灰褐色土	炭化物少量	焼土ブロック多量		
42	砂	細粒 しまり弱			
43	灰褐色土	酸化鉄分多量	上面しまり極めて強（部分的）	粘性あり	炭化物少量
44	砂質土	白色砂多量			
45	明灰色土	部分的に青灰色	土色の境界は酸化鉄分が沈着		
46	灰褐色土	部分的に青灰色	しまり弱 20層に類似	中世の常滑焼甕片出土	
47	青灰色砂	遺物を含まない	粗粒 しまり弱		

第9図　基本土層（5）

外の遺構については『栗橋宿西本陣跡Ⅱ』で報告とし、遺構挿図中では、うすいトーンで示した。

発掘調査は、三面の遺構確認面を設定して実施した。調査区の標高は、第一面が9.3～10.2m前後、第二面で9.40～9.70m、第三面で8.80～9.20m前後である。調査区北側の方が低く、第一面の日光道中側は9.8m前後である。また、南端部は10.2m前後と高い。なお、西部には珪藻



1 近現代の盛土・攪乱
2 灰褐色土　砂利・礫塊少量　しまり極めて強　上部は硬化面（旧地表面）
3 灰褐色土　しまり弱　炭化物少量　焼土微量　砂少量　整地層
4 灰褐色土　しまりあり　炭化物・シルトブロック少量　整地層　上部は硬化面（旧地表面か）
5 灰褐色土　3・4 層相当か
6 暗赤褐色土　焼土（壁土含む）ブロック・炭化物（木片・繊維状）・灰褐色シルトブロック多量　しまり弱　火災後の整地層
3 層に細分化される　6-1 は 6-3 に整似　6-2 は灰色シルトブロックを含み、焼土・炭化物がほぼ含まれない灰褐色土
6-3 は最下部に焼けた硬化面・薄い炭化物層あり
7 暗灰褐色土　しまり極めて強　上部は硬化面（旧地表面か）
8 灰褐色土　黄褐色シルトブロック多量　砂少量　しまりあり　粘性弱　整地層　上部は硬化面（旧地表面）
9 暗灰褐色土　砂・シルトブロック多量　整地層
10 暗灰色土　黄褐色シルトブロック・炭化物多量　上部は硬化面
11 灰色砂　粗粒・砂鉄少量　しまりなし
12 灰褐色砂　細粒　しまりなし
13 暗褐色土　しまり弱　砂多量　黄褐色シルトブロック・砂鉄少量
14 灰褐色土　粗砂・シルトブロック少量　整地層
15 暗灰褐色土　しまり弱　シルトブロック・砂少量　整地層　下部は硬化面
16 砂　細粒　しまり弱　東壁 3 第 42 層相当
17 灰褐色土　酸化鉄分多量　上面しまり極めて強（部分的）　粘性あり　炭化物少量　東壁 3 第 43 層相当
18 明灰色土　部分的に青灰色　土色の境界は酸化鉄分が沈着　東壁 3 第 45 層相当

0　2m

第 10 図　基本土層（6）

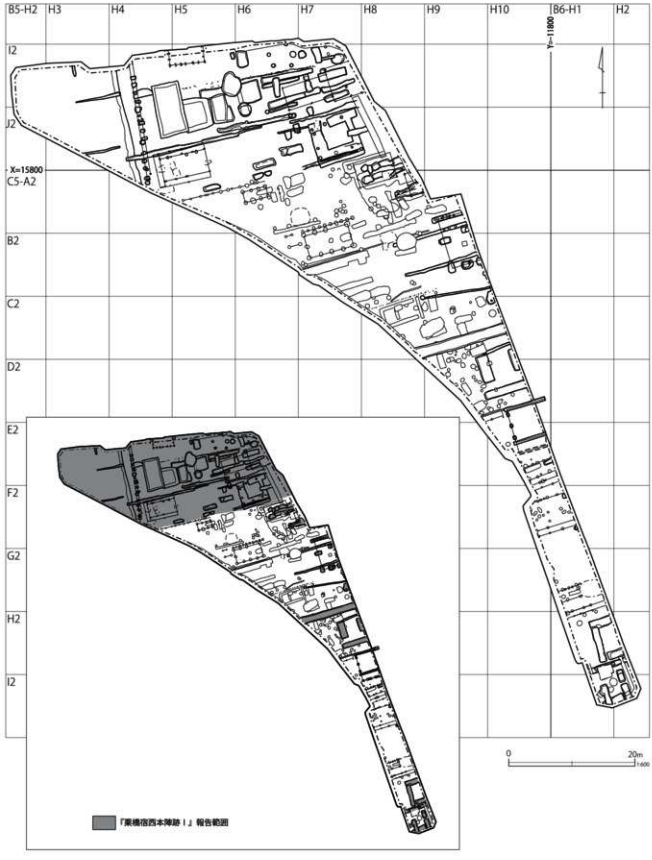
分析によって池沼湿地跡と推定された自然地形の落ち込み（遺物包含層）がみられ、西へ向かって標高は低くなる（V　自然科学分析 3・4 参照）。

以下に、本書で報告する範囲で検出された遺構を中心に概観する。第一面は、19世紀初頭頃の地表面と考えられる。表土掘削は、西へ向かって落ち込んでいく地形に沿って行った。遺構は、日光道中に直交するように建物跡・杭列・柵跡・溝跡等の区画施設が並ぶが、南側では区画施設が検出されなかった。遺構確認面の高さの問題なのかは判然としない。また建物跡は、堅固な地業が多くみられるが、基本土層の検証から日光道中に面した建物跡のほとんどは近代以降に帰属する。

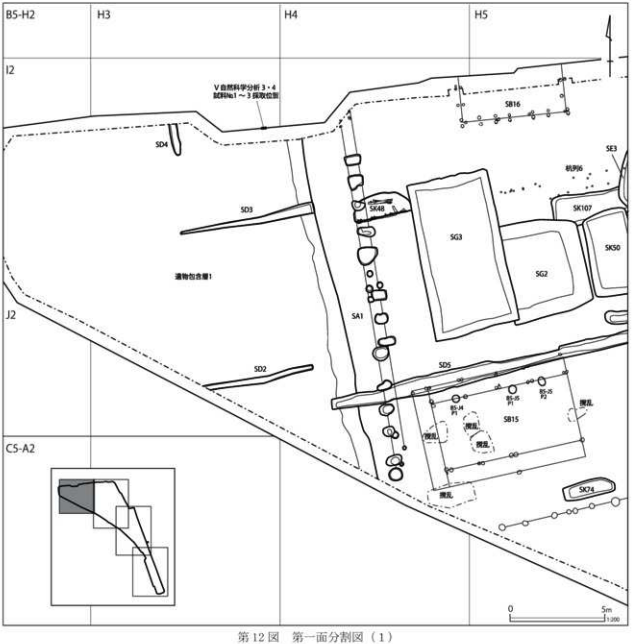
日光道中側から見た敷地の奥では池跡が検出されたほか、池沼湿地跡を埋め立てたと考えられる遺物包含層 1 がみられた。遺物包含層 1 は北 2 丁目陣屋跡から続いており、19世紀後葉段階に埋め立て、土地を広げた点で注目される。

検出された土壙には火災処理土壙がみられ、後述するように、文化・文政期に比定される。本陣跡で確認された火災と一連のものと考えられる。

第二面は、18世紀後半頃の地表面と考えられる。表土掘削は、第一面の遺物包含層 1 より東側


B5-H2
H3
H4
H5
H6
H7
H8
H9
H10
B6-H1
H2
I2
J2
X=15800
C5-A2
B2
C2
D2
E2
F2
G2
H2
I2
Y=11800
0
20m
「栗橋宿西本陣跡Ⅰ」報告範囲

第 11 図　第一面全体図



第12図　第一面分割図（1）

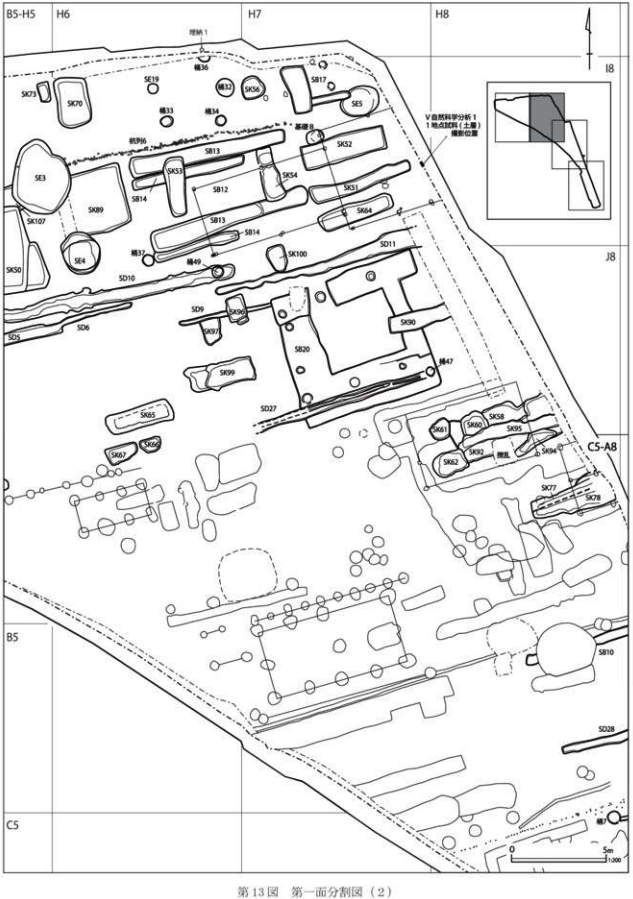
を対象に、包含層検出面に合わせて概ね水平に掘削を行った。

遺構は、溝に木材を設置した構造物や柵跡が検出された。検出は部分的だが、区画を意図したものである。一方で、明確な建物跡は検出されず、第一面とは遺構の様相に違いがみられる。また、敷地の奥では第一面で検出された遺物包含層1の東側に、継続する遺物包含層2が検出された。

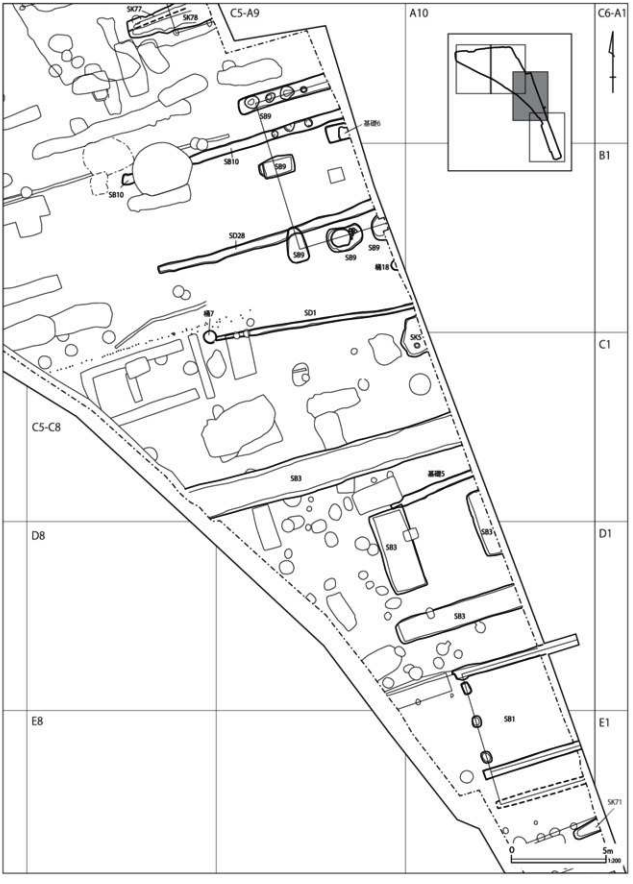
遺物包含層1と同様に埋め立てられているが、19世紀中葉頃の土地造成跡である。区画1～3では19世紀中葉～後葉にかけて2回の造成により、西へ敷地を広げたことが明らかとなった。

第三面は18世紀前半～中葉を中心に利用された面である。表土掘削は、遺物包含層2の底面に合わせて概ね水平に掘削した。遺構は、区画施設、建物跡は検出されず、土壙にも区画を意識するようなまとまりはみられなかった。

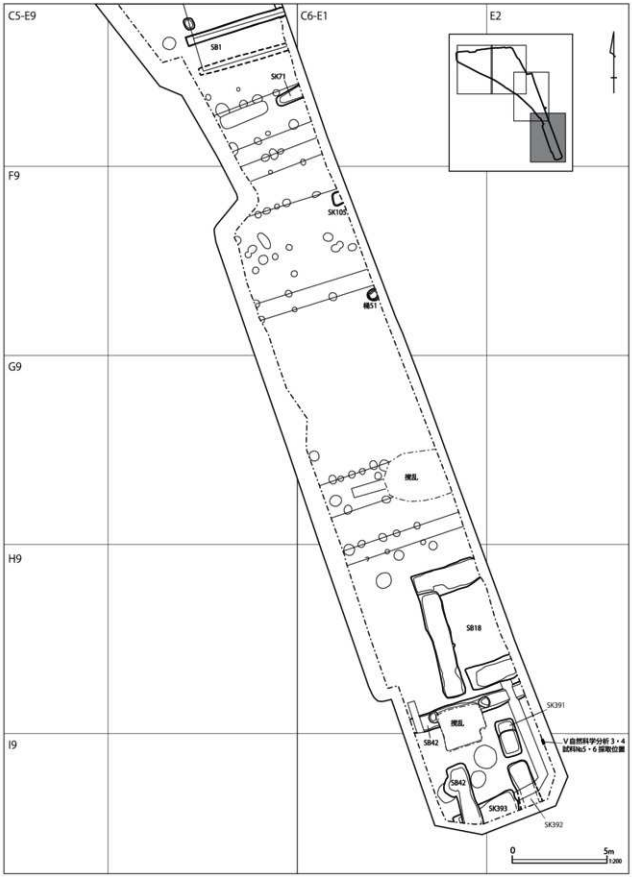
第三面より下層の検出遺構で注目されるのは、第24・26号溝跡、樹皮堆積層である。溝跡は北2丁目陣屋跡で検出された流路跡に類似してお



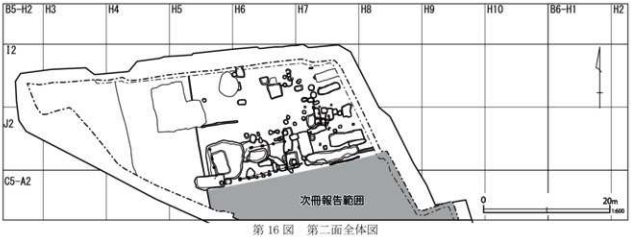
第 13 図　第一面分割図（2）



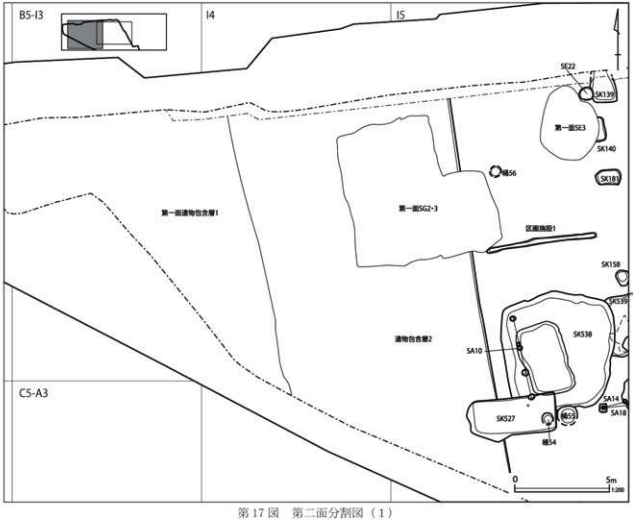
第14図　第一面分割図（3）



第 15 図　第一面分割図（4）



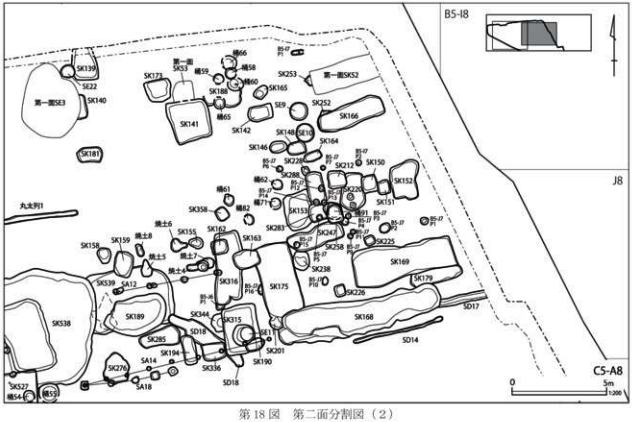
第 16 図　第二面全体図



第 17 図　第二面分割図（１）

り、洪水との関連性が示唆される。また、樹皮堆積層は、竹と樹皮で組まれた柵状の構造物が同一方向に、押し流されるように堆積したもので、18世紀中葉に起きた洪水との関連性が窺われる。

第５～10図に基本土層を示した。日光道中に面する調査区東壁、八坂神社側に面する北壁、調査区南端部である南壁の３箇所で、土層断面を記



第18図　第二面分割図（２）

録した。なお、西壁も部分的に記録を行ったが、次冊報告とする。

基本土層では、二枚の火災層が検出された。これらは栗橋で大火があったとされる文化・文政の対応層の可能性がある。土壙の廃絶時期との相対関係から、基本土層東壁１の第65層（第７図）、東壁２の第９層（第８図）は文政期、東壁１の第76層（第７図）は、文化期の火災に関わる焼土・炭化物層と考えられる（図中トーン掛け部分）。

また、東壁４・南壁の第６層（第10図）も火災層である。同一層にみえるが、第６－１層と第６－３層の間に、焼土や炭化物を含まない薄いシルト層（第６－２層）がみられる。したがって、二枚の火災層と捉えられ、第392・393号土壙との相対関係から、第６－３層は文化期、第６－１層は文政期と考えられる。

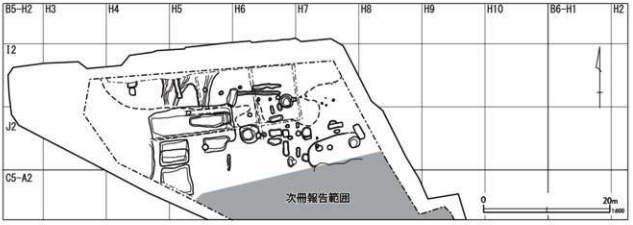
第一面の遺構確認面は、二枚の火災層より下に設定された。火災層は部分的にみえない箇所があるが、概ね調査区東部を中心に広がっていた。

また、基本土層東壁１を対象に、堆積物微細構造観察、砂粒組成分析・粒度分析を行った（V自然科学分析１・２）。その結果、18世紀末以降の複数枚の洪水層が確認された。

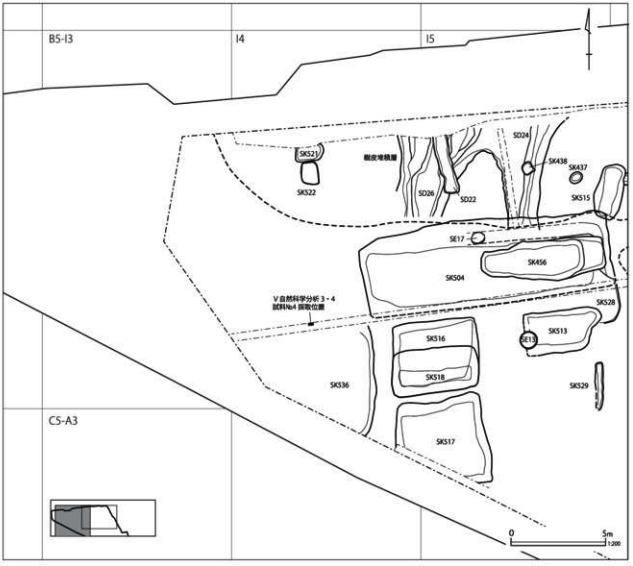
基本土層北壁１では、池沼湿地跡と、その上に形成された遺物包含層１が捉えられた。遺物包含層２よりさらに古い段階の池沼湿地跡も確認されているが、全面的な検出は行われていない。

遺物は、土壙を中心に陶磁器類や瓦、木製品等が出土した。陶磁器は各遺構の最新期のものや特徴的なものを中心に挿図・観察表で示した。

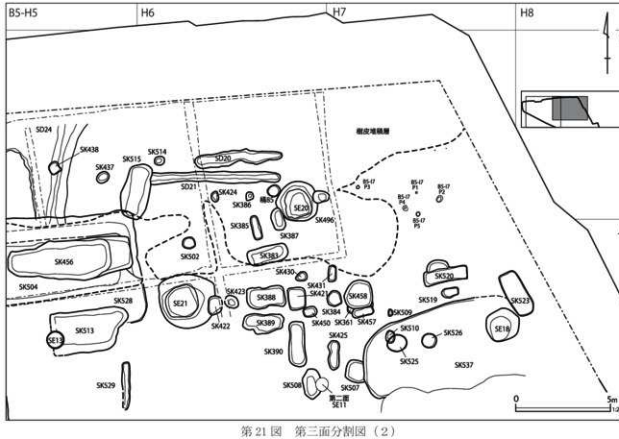
第一面の磁器は瀬戸美濃系・肥前系、第二・三面は肥前系を主体とし、組物の碗や皿、鉢が多く認められる。舶載陶磁器では清朝徳化窯系のほか、中国産が僅かにみられる。土製品では江戸在地系、京都系の玩具・人形類がみられる。



第 19 図　第三面全体図



第 20 図　第三面分割図（1）



第21図　第三面分割図（2）

瓦についてはすべて回収することは難しいため、種別ごとに分類し、記録した。出土した瓦は第205～207表の瓦計測表にまとめた。瓦は江戸式に類似する文様を主体とし、大阪式、東海式はあまりみられない。特筆すべき遺物として、栗橋宿跡では例が少ない屋根の棟を飾る棟込瓦が出土した。瓦には刻印資料が僅かに認められる。

調査地点には、木製品も多量に残存していた。しかし、遺存状態が悪いものも多く存在した。木製品は可能な限り遺構内の出土状況図を作成し、回収した木製品は記録写真の撮影と大まかな器種分類を行い、記録した。

木製品は土壙から多く出土し、建築部材や桶等から、生活用品まで多様である。木札や樽・桶には墨書や焼印がみられた。漆椀は、『図説江戸考古学研究事典』の「江戸遺跡資料　4漆椀編年表」の凡例から、腰丸椀、一文字腰椀、壺椀、平椀に分類し、本文中で記載した（中井2001）。

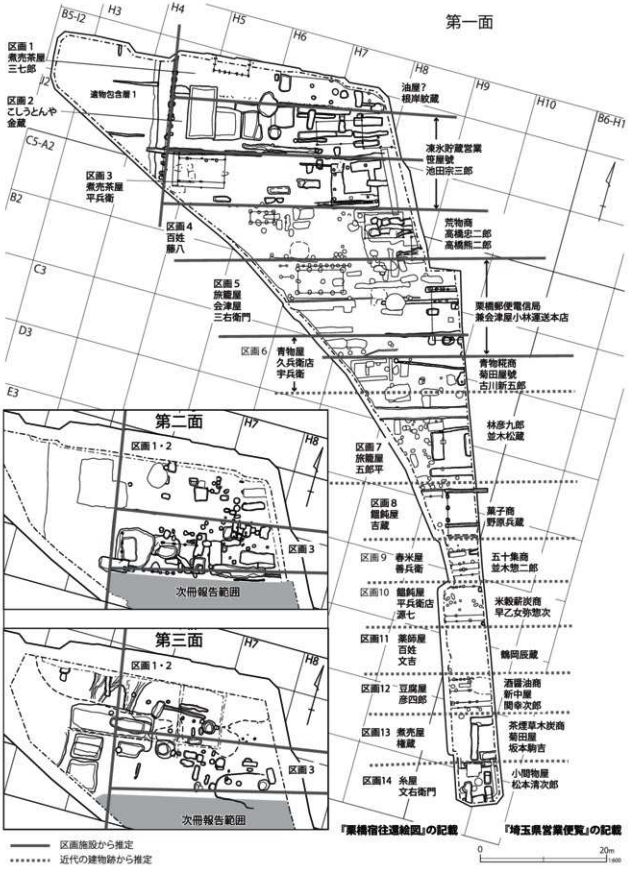
金属製品は土壙から多く出土した。建築部材である釘や針金が多く出土している。また、煙管も多い。銭貨は寛永通寶が主体である。

石製品は砥石を主体に、磨石や硯、火打石、石臼等、生活に関わる道具が多い。多孔質の角閃石安山岩の転石を使用した磨石が多く出土し、近年、利根川流域の遺跡で報告例が増加している（水村・久永2019）。

砥石は、工具痕が判別できるものを可能な限り掲載した。また、磨石は明確な使用痕があるものを図示した。

その他に建物の構築材である焼けた壁材が出土した。文化・文政期の火災で生じたものが主体と考えられる。

また、笄などの硝子製品、貝杓子、炭化した布製品、炭化米が出土した。自然遺物では貝類、動物骨、魚骨、種子類が出土した。



第 22 図 『絵図』等と調査区の対比

Ⅳ 遺構と遺物

1 第一面の遺構と遺物

第一面から検出された本書掲載分の遺構は、建物跡13棟、基礎状遺構3基、胞衣埋納遺構1基、埋設桶10基、井戸跡4基、池跡2箇所、杭列1条、溝跡11条、柵跡1条、土壙36基、ピット3基、遺物包含層1箇所である。

(1) 建物跡

建物跡は13棟が検出された。位置、規模等の基本的な情報は第2表に示した。遺構の平面図は、原則、日光道中を上にして示した。

建物跡は堅固な地業を伴うものが多く、瓦が葺かれた重厚な建物が想定される。多種多様な構造の地業が認められ、近世・近代における基礎工事方法の複雑さが垣間みえる。

とりわけ、捨て杭を打ち込む建物跡が多く、軟弱な地盤である低地では、重量のある建物を支えるための基本的な技術と考えられる。

建物跡の地業は深く掘り込むことが多いため、掘り込み内には、下層遺構や整地層等に由来する混入遺物が認められる。そのため、建物跡の構築時期を直接示す遺物は少ないと思われる。掲載遺物の抽出にあたっては、時期の新しい陶磁器に留意した。

調査区域外へ延びる建物跡については、対応する基本土層（北・東・南壁面）を挿図内に示し、構築面の検証を行い、構築年代の指標とした。また、建物跡の周囲に散在する大形の自然礫については、建物跡に伴うか判断し難いため、建物跡の内外に分布するものすべてを挿図中に示した。

第1号建物跡（第23～26図）

C5－D10、E10グリッドに位置し、東部は調査区域外へ延びていた。より高い位置で検出された第2号建物跡と重複していたが、新旧関係は不詳であった。なお、第2号建物跡は本書の報告対象外であり、『栗橋宿西本陣跡Ⅱ』で報告する。

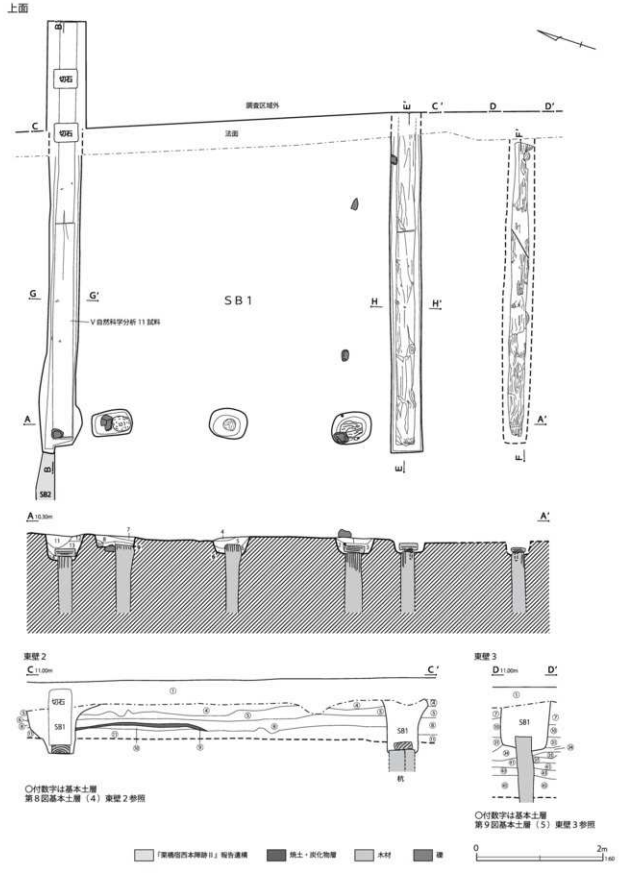
検出された規模は、長軸7.75ｍ以上、短軸6.85ｍ以上、長軸方位はN－18°－Wである。

南・北部は布地業で、西部は壺地業であった。南・北部の地業の間隔は約5.40ｍで、さらに南部にみえる地業との間隔は約1.80ｍであった。南端の地業は掘り込みが検出されず、捨て杭と捨て土台のみが検出された。

西側の壺地業は、1.80ｍ間隔で構築されてお

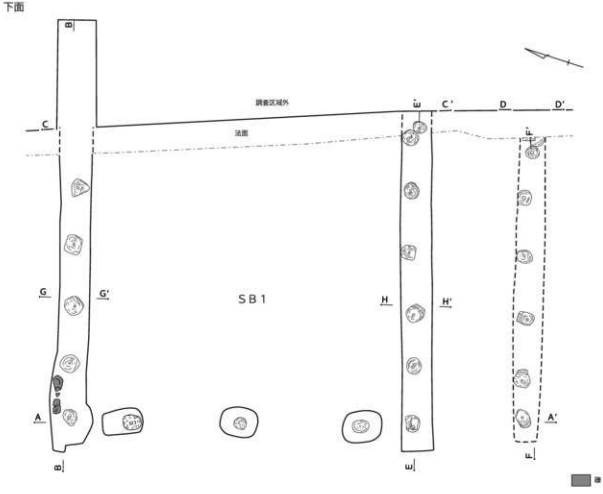
第2表 第一面建物跡一覧表　　単位：m

番号	区画	グリッド	長軸	短軸	深さ	長軸方位	備考
1	8	C5-D10,E10	[7.75]	[6.85]	0.11～0.32	N-18° -W	SB2と重複
3	7	C5-C8/9/10,D9/10	[14.60]	11.0	0.74～1.02	N-73° -E	桶20,SK7,C5-D10P1より古 基礎5,桶21,焼土2,SK19・36より新
9	5	C5-A9,B9	9.20	[5.40]	1.45	N-17° -W	SD28より新 SB10,基礎6,SK17と重複
10	5	C5-A9,B8/9	[12.15]	－	0.10～0.18	N-72° -E	SE1より古 SB9,基礎6,SK17と重複
12	2	B5-16/7,J6	[12.10]	5.65	－	N-73° -E	基礎8,SK52・54・64より新 SB13・14,SE5,SK51と重複
13	2	B5-16/7,J6	8.65	5.20	0.11～0.50	N-73° -E	SB14,SK53・54より新 SB12と重複
14	2	B5-16/7,J6	6.07	4.55	0.25～0.50	N-73° -E	SB13より古 SK53より新 SB12と重複
15	3	B5-J4/5,C5-A4/5	8.20	5.55	－	N-78° -E	SD5と重複
16	1	B5-14/5	5.65	[2.28]	－	N-84° -E	
17	1	B5-17	[3.05]	2.55	0.20～0.30	N-79° -E	SE5より新
18	13	C6-H1/2	6.75	[3.95]	0.50～0.98	N-16° -W	
20	3	B5-J7/8	7.90	7.30	0.07～0.25	N-70° -E	桶47,SD27,SK90より古
42	14	C6-H1/2,I1/2	[6.55]	[6.20]	0.14～0.48	N-18° -W	SK393・432より新 SK391・392・411・434と重複



第 23 図　第 1 号建物跡（1）

下面



SB1

1	褐色土	小礫（φ1～3㎜）少量　しまり強　上面に石（φ約20㎝）
2	灰褐色土	しまり強　砂多量
3	暗灰色土	粘性弱　しまり強　木材混置
4	暗褐色土	粘性なし　砂利（φ10～15㎜）少量
5	褐色土	しまり強　粘性なし
6	灰褐色砂	しまり極めて強　炭化物（φ20～30㎜）少量
7	暗褐色土	しまり強　粘性なし　水分が少ない
8	褐灰色土	しまり強
9	灰黒色砂	しまり強　柱根上部の層　炭化物（φ5～8㎜）少量
10	灰褐色砂	しまり極めて強　自然礫（φ16㎝）埋る
11	褐灰色土	黒色粒子・砂利の混土層　角材上面に堆積した土
12	暗黄褐色土	しまり強　角材上面に堆積した土
13	黄褐色土	しまり強　角材上面に堆積した土
14	暗黄褐色土	粘性あり　しまり強　酸化鉄分少量　基礎木材を埋めた土
15	黄褐色土	粘性弱　砂利（φ5㎜前後）少量　炭化物少量　基礎木材を埋めた土

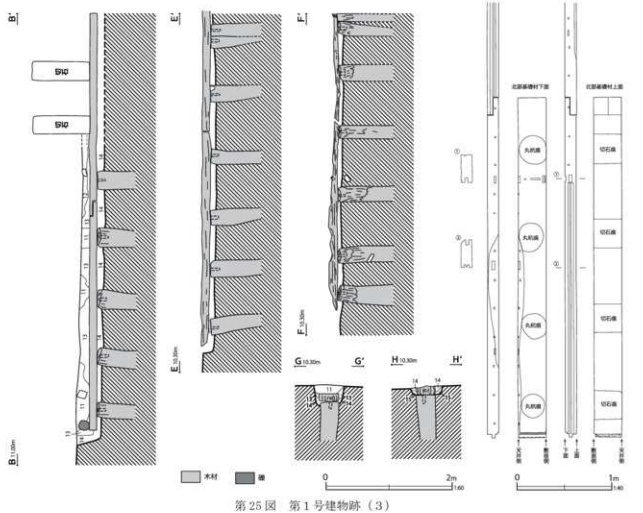
東壁2（C-C'）

①	近現代の盛土・攪乱	
④	灰褐色土	⑤・⑤層との境界の一部に硬化面（⑤層との境界のごく一部に焼土が伴う）
⑤	暗褐色土	部分的に灰色土が層状に入るが④・⑧・⑧・⑧層との境界に硬化面（一部には焼土が伴う）
⑥	黄褐色砂	⑤・⑧層との境界の一部に焼土を伴う硬化面（⑤層との境界には焼土が伴う）
⑧	灰褐色土	⑤・⑧・⑪・⑫層との境界に硬化面（⑤・⑪・⑫層との境界の一部に焼土が伴う）
⑨	赤褐色土	一部に焼土主体層・炭化物主体層がみられる　⑤層との境界に焼土が伴う硬化面
⑩	黄褐色土	
⑪	黒褐色土	部分的に焼土・炭化物層が入る　下部・⑧層との境界に硬化面（⑧層との境界には焼土が伴う）

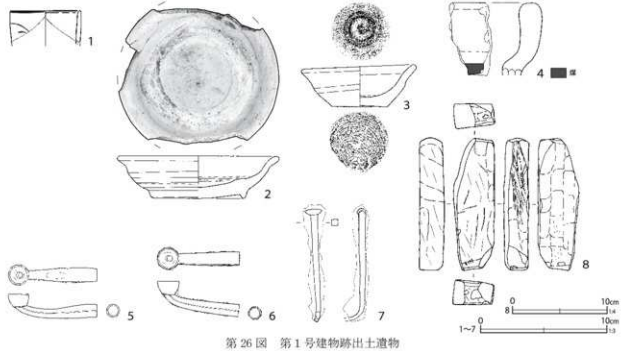
東壁3（D-D'）

①	近現代の盛土・攪乱	
⑦	褐色土	しまりあり　粘性弱　焼土ブロック（φ5～15㎜）微量
⑩	灰色土	しまりあり　粘性強　炭化物・焼土ブロック少量
⑪	灰褐色土	しまりあり　粘性強
⑭	褐色土	しまりあり　粘性弱　砂少量
⑮	灰褐色土	炭色ブロック多量
⑰	褐色土	しまりあり　粘性強
⑪	灰褐色土	炭化物少量　焼土ブロック多量
⑬	灰褐色土	酸化鉄分多量　上面しまり極めて強（部分的）　粘性あり　炭化物少量
⑭	明灰色土	部分的に青灰色　土色の境界は酸化鉄分が沈着

第24図　第1号建物跡（2）



第 25 図　第 1 号建物跡（3）



第 26 図　第 1 号建物跡出土遺物

第３表　第１号建物跡出土遺物観察表（第 26 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	坏	(5.6)	[2.8]	－	－	10	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・酸化コバルト染付	
2	陶器	皿	12.4	3.3	6.9	DIK	80	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 内面蛇の目状釉剥	
3	かわらけ	小皿	8.5	3.2	4.4	CDEGHIK	100	普通	灰白	底部糸切痕（右）胎土砂質 口縁部煤付着	101-1
4	土製品	土管	－	[5.7]	－	AHIK	5	普通	にぶい赤褐	内面一部煤付着	
5	銅製品	煙管	長さ 7.0 火皿径 1.6 小口径 1.0 重さ 10.9							雁首 儀かにつぶれる	279-1
6	銅製品	煙管	長さ 6.5 火皿径 1.7 小口径 1.0 重さ 14.8							雁首	279-1
7	鉄製品	釘	長さ [9.0] 幅 0.5 厚さ 0.5 重さ 37.8								
8	石製品	砥石	長さ 13.9 幅 4.3 厚さ 2.6 重さ 248.6							流紋岩（緑色）表・裏・側面削痕 表・側面刃物痕多数 砥面 3	293-2

り、底面には捨て杭が打ち込まれていた。その上には自然礫を据えているものが認められた。

南・北部の布地業は、掘り込み幅 0.45 ～ 0.66 m、底面幅 0.36 ～ 0.42 m を測り、断面は逆台形である。底面に捨て杭が打ち込まれ、その上に捨て土台が据えられていた。捨て土台は長さ約 3.40 m の差し鴨居二本を転用したもので、北側は相欠きの仕口で二本がつながれていた（第 25 図右側）。

さらに、捨て土台の上に、約三尺ごとに大谷石と思われる角柱状切石（蝋燭石）が配され、いわゆる「蝋燭石地業」であった。

痕跡は認められなかったが、南側の捨て土台上にも、蝋燭石が据えられていたと思われる。

充填した土砂は、小礫、砂粒で構成され、突き固めたようなしまりの強い層であった。第 23 図Ａ－Ａ’の第 11 層は捨て杭の延長上に堆積していたことから、蝋燭石を抜き取った痕跡と考えられる。

出土遺物には酸化コバルト染付の磁器の坏と急須のほか、土管がみられた。また、基本土層東壁２・３（第８・９・23 図）をみると、建物跡は第４層の近代以降と考えられる水平堆積層を構築面とし、蝋燭石は現地表面付近まで届いていた。したがって、構築時期は 19 世紀第Ⅳ四半期以降と考えられる。第 26 図に出土遺物を示した。

１は筒形と思われる瀬戸美濃系磁器の坏で、酸化コバルト染付が施される。２は内底面を蛇の目状釉剥ぎする瀬戸美濃系陶器の皿で、浅黄色の灰釉が掛けられる。17 世紀代に遡る遺物である。

３は厚手のかわらけで、底部に右回転の回転糸切痕を残す。内底面は、指頭幅でやや浅く渦巻き状のナデが施される。17 世紀に遡る可能性が高く、２とともに下層から巻き上げられたものであろう。４は土管の破片で、内面の下部には煤の付着が認められる。

５と６は銅製品で、煙管の雁首である。７は鉄釘である。

８はやや青味がかった緑色味を帯びる流紋岩製の砥石で、ノミ状工具による削痕が遺存している。３面を砥面とし、そのうち１面には刃ならしと思われる断面「Ｖ」字状の刃物痕がみえる。裏面を除く全面に酸化鉄分が付着している。

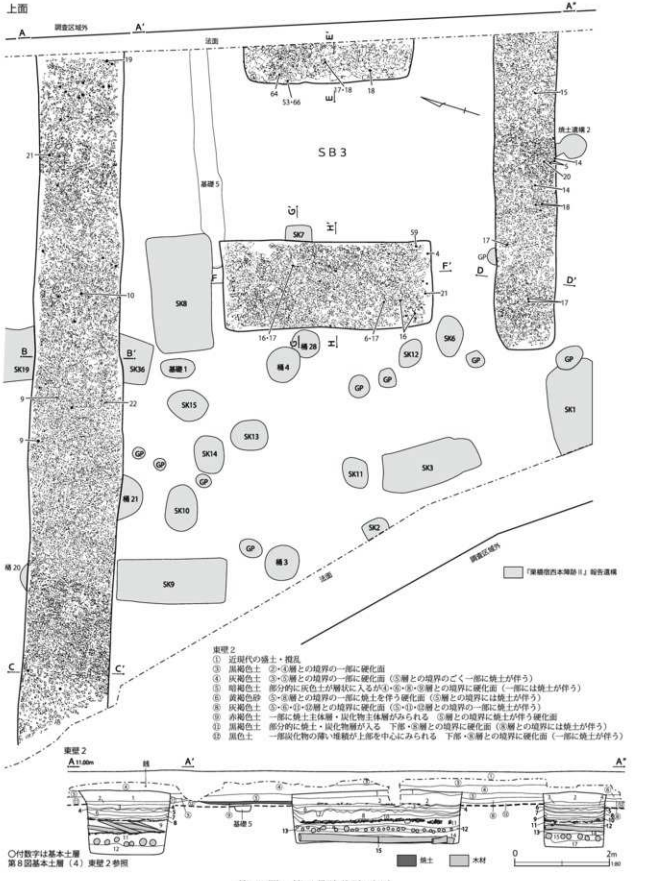
第３号建物跡（第 27 ～ 36 図）

Ｃ５－Ｃ８・９・10、Ｄ９・10 グリッドに位置し、東部は調査区域外へ延びていた。

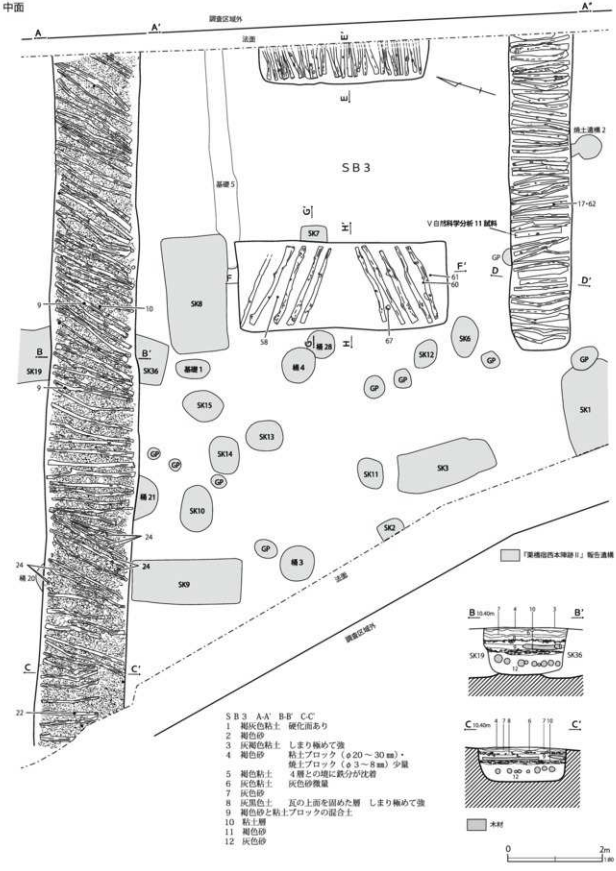
第 20 号埋設桶、第７号土壙、Ｃ５－Ｄ 10 グリッドピット１より古く、第５号基礎状遺構、第 21 号埋設桶、第２号焼土遺構、第 19・36 号土壙より新しい。なお、一部の重複遺構については、『栗橋宿西本陣跡Ⅱ』で報告する。

発掘段階では第３・４号建物跡として扱ったが、整理段階で地業の構造と構築面が共通することから１棟の建物跡とした。

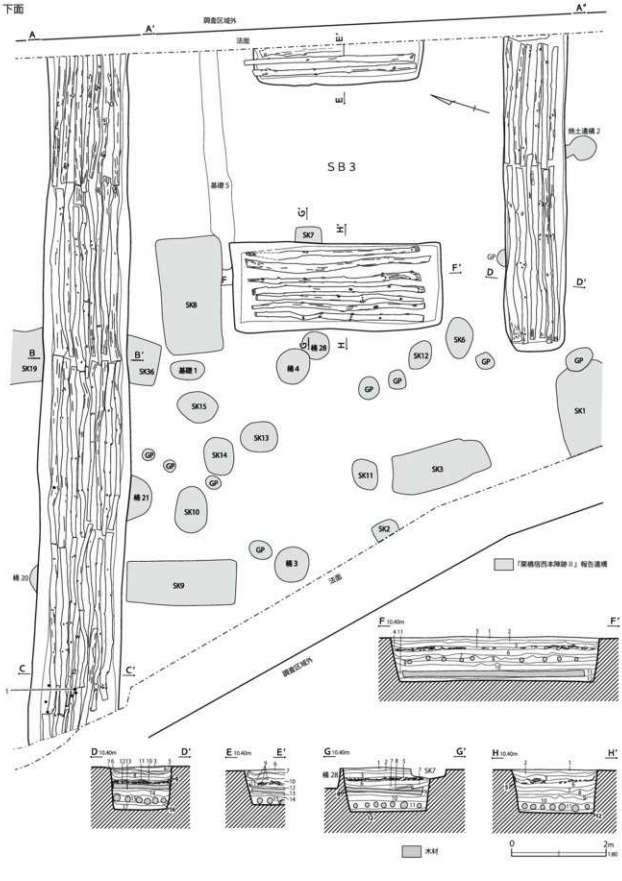
検出できた部分の規模は、長軸 14.60 m以上、短軸 11.00 m、長軸方位Ｎ－ 73°－Ｅであった。布地業は北側と中央・南側とで若干構造が異なっていた。



第 27 図　第 3 号建物跡（1）



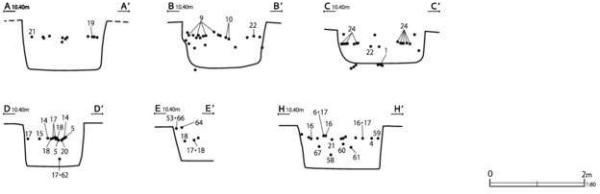
第 28 図　第 3 号建物跡（2）



第 29 図　第 3 号建物跡（3）

SB3　A'-A"　D-D'　E-E'
1　褐色砂
2　灰褐色粘土　しまり極めて強
3　灰褐色砂　しまり強　下部に鉄分が薄く堆積
4　暗灰色粘土　しまり極めて強　下部に鉄分が薄く堆積　炭化物（φ3～8㎜）微量
5　灰褐色砂　しまり強　下部に鉄分が薄く堆積
6　暗灰色粘土　しまり極めて強　下部に鉄分が薄く堆積　炭化物（φ3～8㎜）微量
7　灰褐色砂　しまり強　下部に鉄分が薄く堆積
8　暗灰色粘土　しまり極めて強　下部に鉄分が薄く堆積　炭化物（φ3～8㎜）微量
9　灰褐色砂　しまり強　下部に鉄分が薄く堆積
10　暗灰色粘土　しまり極めて強　下部に鉄分が薄く堆積　炭化物（φ3～8㎜）微量
11　灰褐色砂　しまり強　下部に鉄分が薄く堆積
12　褐色砂
13　粘土層
14　暗灰色砂
15　灰色砂
16　粘土層
17　灰色砂

SB3　F-F'　G-G'　H-H'
1　褐色砂　しまり強　底面に鉄分が沈着
2　灰褐色砂　しまり極めて強　1層に比し粒子が細かい　灰色粘土ブロック（φ20～30㎜）少量
3　褐灰色土　しまり極めて強　粘性強　シルトブロック少量　焼土ブロック（φ10～20㎜）・炭化物（φ3～8㎜）少量
4　暗灰黄色土　しまり強　褐色砂多量　炭化物（φ10～15㎜）多量
5　褐色砂　しまり強　貝多量
6　褐色砂
7　黄褐色粘土
8　灰黄色粘土
9　褐色砂
10　暗灰色粘土
11　灰色砂
12　灰色砂



第30図　第3号建物跡（4）

極めて堅固な構造で、幅約2mの布地業内は複雑な構造がみられた。下層には「筏地業」が採用されていた。

最下層は布地業の長軸方向に沿って、径15.0cm前後、長さ3.80m前後の樹皮が残る丸木が敷き詰められていた。丸木の径・長さがほぼ揃っていたことから、素材の選択に規格性が窺われる。

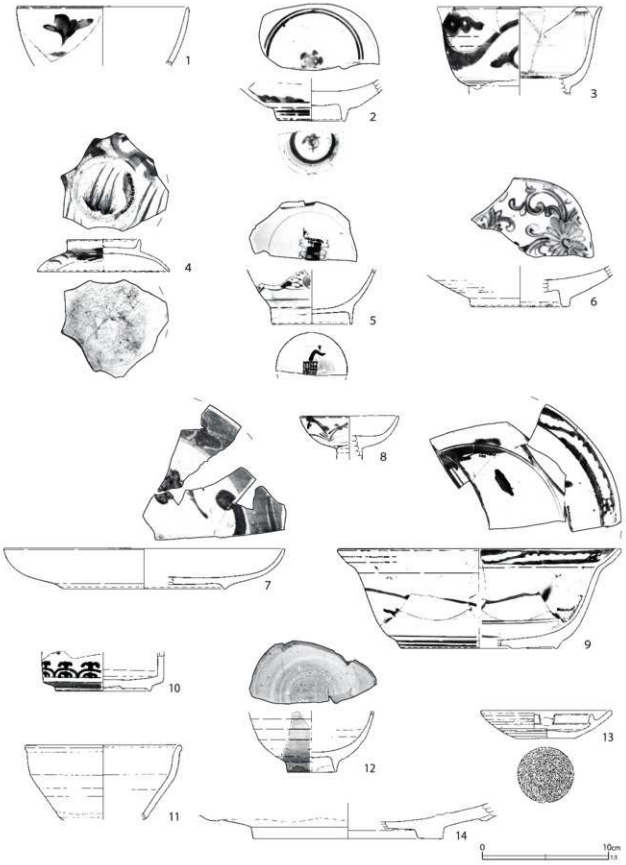
北部の布地業の中層には、砕いた瓦を敷き詰めて、栗石としていた。その上に径12.0cm前後、長さ1.80m前後の樹皮が残る丸木を枕木として敷き詰めていた。

丸木の軸が地業の長軸に対して斜交しているものが多いのは、布掘り幅の制約によるものと思われる。そのほかの布地業の中層には瓦敷きがみられず、丸木を敷き詰めるのみに留まっていた。すべての布地業の丸木直上には、砕いた瓦を栗石として敷いていた。

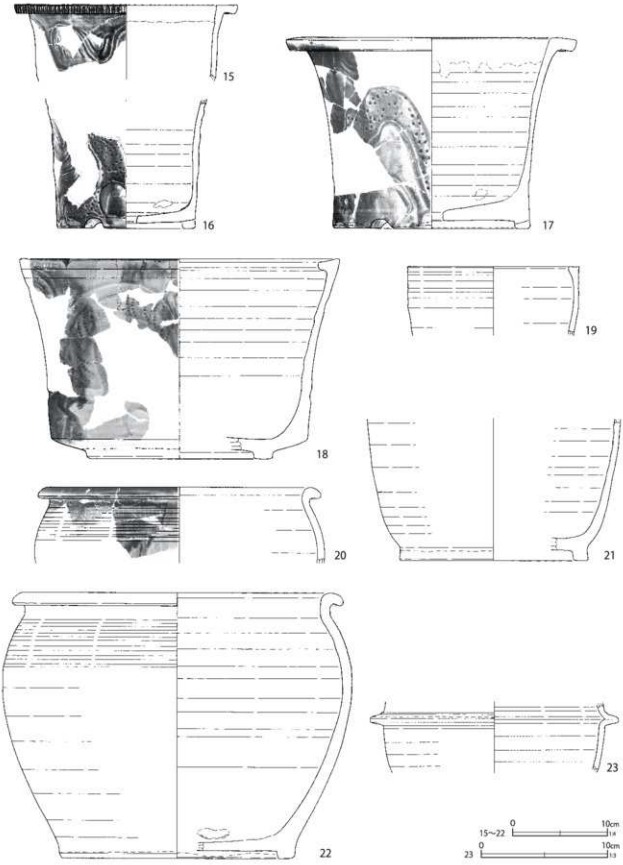
布地業内の大部分は、粘土と砂が交互に敷かれ、粘土層は硬化していた。このことから、版築していたことが窺える。

出土した陶磁器には被熱したものが多く、磁器では半球形碗の大碗・広東碗、陶器では京都信楽系の小杉碗・瀬戸美濃系の半胴甕・擂鉢・蛇の目状高台の灰釉大皿、土器では堀炉の風口などに明確な被熱痕が認められた。非掲載遺物には酸化コバルト染付の磁器土瓶片がみられる。

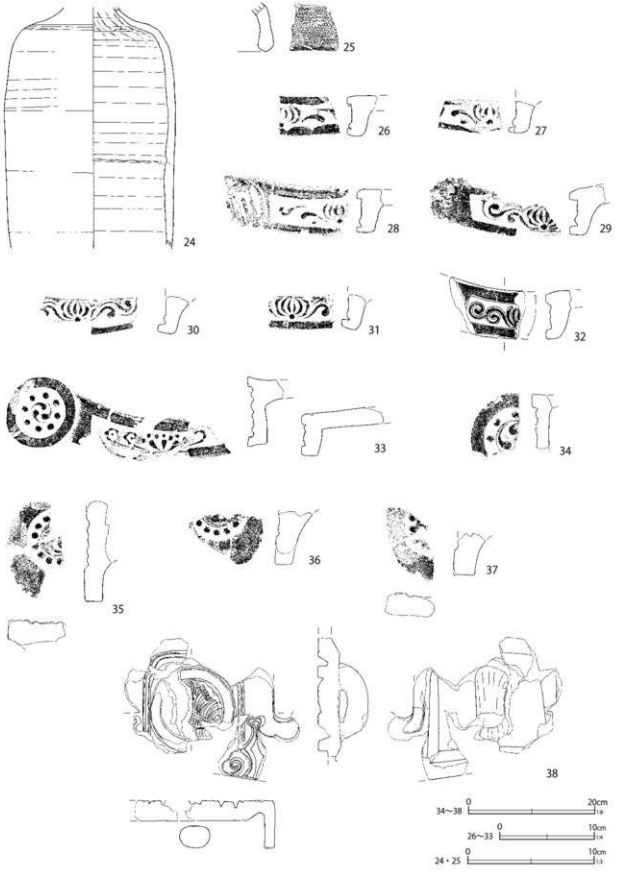
出土陶磁器の多くは18世紀末の様相を示す。しかし、建物の地業は、文化・文政期と思われる



第 31 図　第 3 号建物跡出土遺物（1）

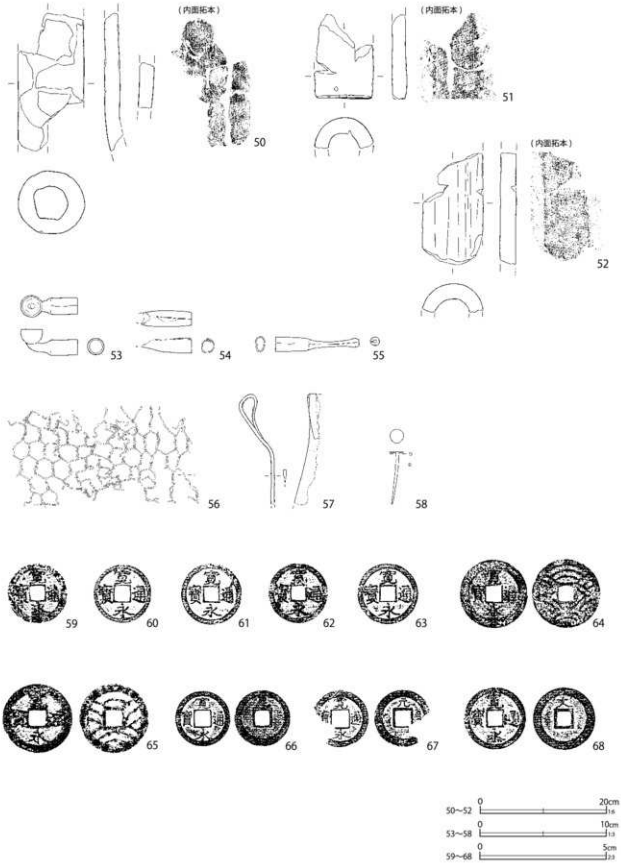


第 32 図　第 3 号建物跡出土遺物（2）

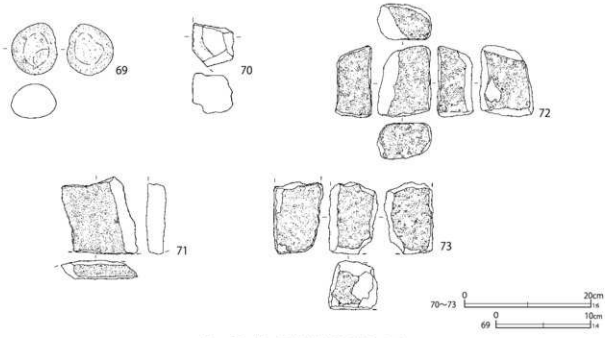


第 33 図　第 3 号建物跡出土遺物（3）

第 34 図　第 3 号建物跡出土遺物（4）



第 35 図　第 3 号建物跡出土遺物（5）



第 36 図　第 3 号建物跡出土遺物（6）

第 4 表　第 3 号建物跡出土遺物観察表（1）（第 31 ～ 33 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	(13.4)	[4.6]	−	−	15	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	
2	磁器	碗	−	[3.3]	5.2	−	35	良好	灰白	肥前系 内外面施釉・染付 高台畳付砂付着 弱く被熱（煤付着）	
3	磁器	碗	(12.8)	[7.0]	−	−	30	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 中央布地業	
4	磁器	蓋	5.7	2.5	(10.4)	−	75	良好	灰白	肥前系 内外面施釉・染付 被熱（広東碗の蓋）	101-2
5	磁器	碗	−	[4.3]	(6.2)	−	20	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 焼継痕・焼継印（赤）（広東碗）	101-3
6	磁器	皿	−	[3.2]	(7.7)	−	10	良好	灰白	肥前系 内外面施釉 高台畳付部砂付着（初期伊万里様式）	101-4
7	磁器	皿	(22.0)	3.1	(12.9)	−	10	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 焼継痕 強く被熱 南布地業	
8	磁器	仏飯器	(7.6)	[3.4]	−	−	20	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	
9	磁器	鉢	(22.2)	7.8	(12.0)	−	50	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 焼継痕 強く被熱	
10	磁器	香炉	−	[3.1]	(7.4)	−	35	良好	白	肥前系 外面施釉・染付 蛇の目凹形高台 被熱	
11	陶器	碗	(12.2)	[5.8]	−	K	20	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面鉄釉 外面体部下位ケズリ 南布地業（天目碗）	
12	陶器	碗	−	[4.8]	(3.8)	BIK	35	良好	灰白	肥前系 内外面刷毛目釉	
13	陶器	灯明皿	9.9	2.2	4.4	EIK	100	普通	にぶい黄橙	瀬戸美濃系 底部離糸切後ナデ 内外面柿釉 外面下位拭き取り 重ね焼き痕	101-5
14	陶器	皿	−	[2.8]	(15.0)	EIK	15	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 内面目跡 1 遺存 強く被熱 南布地業	
15	陶器	植木鉢	(23.4)	[7.9]	−	EIK	20	良好	灰白	瀬戸美濃系 内面下位鉄化粧刷毛塗状・内外面緑釉 外面ヘラ彫り状施文 弱く被熱	
16	陶器	植木鉢	−	[13.7]	14.4	BD	35	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面鉄化粧（内面刷毛塗状）・緑釉 外面ヘラ彫り状施文 内面目跡 5 遺存	
17	陶器	植木鉢	(27.4)	20.3	(20.6)	K	35	良好	灰白	瀬戸美濃系 口縁部～外面緑釉・外面施文 被熱・一部赤化	101-6
18	陶器	水甕	(33.8)	21.0	(19.0)	EK	15	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 外面施文 緑釉流し掛け 被熱	101-7
19	陶器	半胴甕	(18.0)	[7.3]	−	I	20	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面柿釉 被熱	
20	陶器	甕	(27.8)	[8.0]	−	K	10	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面柿釉 外面緑釉流し掛け 強く被熱 南布地業	101-8
21	陶器	甕	−	[15.0]	(19.8)	EK	15	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面柿釉 弱く被熱 内底面に二次的な削痕	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
22	陶器	碗	(32.8)	28.0	(24.0)	D	25	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面柿釉 内面目跡（砂目）3遺存 高台部内外施釉後拭き取り 被熱して細片化 上部は接点無い同一個体から図上復元	102-1
23	陶器	羽釜	—	[5.6]	—	IK	5	良好	黄灰	外面柿釉 弱く被熱	
24	陶器	徳利	—	[19.1]	—	EK	45	良好	灰白	瀬戸美濃系 外面施釉	102-2
25	瓦質土器	蓋	—	[3.8]	—	HIK	5	普通	黒	外面格子状文（ローラー文か）・粗くミガキ 燻す	

第5表　第3号建物跡出土遺物観察表（2）（第33～35図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	高さ	径	胎土	焼成	色調	備考	図版
26	瓦	軒桟瓦	[3.2]	[7.2]	1.9	[4.4]	—	ACIK	普通	にぶい黄橙		243-1
27	瓦	軒桟瓦	[2.5]	[6.7]	2.0	[3.4]	—	ACHIK	普通	にぶい黄橙		243-2
28	瓦	軒桟瓦	[3.1]	[13.4]	2.5	[5.6]	—	AIK	普通	灰白		243-3
29	瓦	軒桟瓦	[4.2]	[14.2]	2.8	[7.0]	—	AIK	普通	灰白		243-4
30	瓦	軒桟瓦	2.3	[10.6]	1.9	[4.0]	—	AIK	普通	灰白		243-5
31	瓦	軒桟瓦	[2.1]	[7.3]	1.7	[6.7]	—	AIK	普通	灰白		243-6
32	瓦	軒桟瓦	[2.5]	[8.2]	2.0	[6.1]	—	AHIK	普通	灰白	紙具転用 右側面使用痕	243-7
33	瓦	軒桟瓦	[10.7]	[23.5]	2.1	[8.0]	7.3	AHIK	普通	灰白	右巻き	243-8
34	瓦	軒丸瓦	[4.1]	[3.3]	1.9	[8.7]	(14.0)	ACIK	普通	灰白	左巻き	243-9
35	瓦	鬼瓦	[4.7]	[10.3]	[4.2]	[16.3]	—	AIK	普通	灰白	右巻き	243-10
36	瓦	鬼瓦	[5.7]	(2.3)	[13.3]	[5.7]	—	AIK	普通	灰白	右巻き	243-11
37	瓦	鬼瓦	—	[10.4]	4.0	[11.8]	—	AIK	普通	灰白		243-12
38	瓦	鬼瓦	[20.3]	[26.6]	3.4	7.6	—	ADIK	普通	にぶい黄橙	揚羽蝶の家紋	243-13
39	瓦	鬼瓦	9.7	[12.6]	3.6	[4.2]	—	AIK	普通	灰白		243-14
40	瓦	鬼瓦	[11.9]	[7.0]	1.9	[7.8]	—	AHIK	普通	灰黄		244-1
41	瓦	鬼瓦	[12.0]	[8.1]	2.2	[7.8]	—	AIK	普通	灰白		244-2
42	瓦	鬼瓦	[7.0]	[13.3]	3.4	[7.1]	—	AIK	普通	灰白	裏面把手遺存	244-4
43	瓦	鬼瓦	[13.1]	[6.1]	2.6	[8.1]	—	AIK	普通	灰白		244-3
44	瓦	鬼瓦	[7.4]	[7.2]	2.3	[3.8]	—	ACIK	普通	灰		244-5
45	瓦	鬼瓦	12.7	[10.9]	2.6	[7.6]	—	AIK	普通	灰白		244-6
46	瓦	鬼瓦	[6.7]	[5.7]	1.5	[5.8]	—	AIK	普通	灰白	把手部	244-7
47	瓦	丸瓦	29.9	14.6	2.2	7.0	—	AIK	普通	灰白		244-8
48	瓦	丸瓦	[25.9]	[7.9]	1.9	[7.1]	—	DIK	普通	灰	ナデ痕	244-9
49	瓦	丸瓦	[7.7]	[14.9]	2.3	[6.3]	—	ACHIK	普通	灰白		244-11
50	瓦	筒状製品	[22.1]	10.7	2.6	—	10.7	ADIK	普通	灰	上部被熱	244-10
51	瓦	筒状製品	13.5	9.5	2.4	—	9.5	AIK	普通	灰白	下部被熱	244-12
52	瓦	筒状製品	[18.0]	9.7	2.5	—	(9.0)	AIK	普通	灰白	ヘラナデ痕あり	244-13

火災層を掘り込んでいるため、これらの被熱遺物は下層遺構や整地層からの混入であると判断される。

また、基本土層東壁2（第8・27図）をみると、建物跡は第5層を構築面とし、第4層に覆われていた。そのため、酸化コバルト染付の磁器が構築時期に伴う陶磁器と思われる。

したがって、建物跡は19世紀後葉に構築されたと考えられる。なお、直接的な重複関係はないが、東壁2の第4層に覆われていることから、先に述べた第1号建物跡より古い。

第31～36図に出土遺物を示した。第31～33図1～25は陶磁器・土器である。1～5は肥前系磁器の碗である。4・5は広東碗で蓋・身である。いずれも被熱が認められる。5の身に焼継痕と焼継印が認められる。

6は肥前系磁器で、いわゆる初期伊万里様式の大皿（ないし鉢）である。被熱は認められない。7は肥前系磁器の腰が張る皿で、内面には墨弾きを用いた染付が施される。また、焼継痕が認められる。強く被熱して表面は荒れている。

8は肥前系磁器の仏飯器である。器壁は厚く、

第６表　第３号建物跡出土遺物観察表（３）（第 35 図）

番号	種別	器種	法量	備考	図版
53	銅製品	煙管	長さ 4.5 火皿径 1.7 小口径 1.3 重さ 13.4	雁首	279-1
54	銅製品	煙管	長さ [4.0] 小口径 1.2×1.0 重さ 6.7	雁首 火皿欠失	
55	銅製品	煙管	長さ 6.6 小口径 1.2×0.8 口付径 0.8×0.7 重さ 4.6	吸口 中央布地巻	279-2
56	銅製品	金網	縦 8.0 横 15.1 厚さ 0.1 重さ 15.1	南布地巻	280-4
57	銅製品	不明	長さ [8.8] 幅 [1.0] 厚さ 0.3 重さ 13.9	中央布地巻	
58	銅製品	鋲	長さ 4.1 幅 1.1 重さ 1.4		
59	銅製品	銭貨	径 24.2 厚さ 1.8 重さ 3.7	寛永通寶（古）	
60	銅製品	銭貨	径 23.6 厚さ 1.2 重さ 2.6	寛永通寶（古）	
61	銅製品	銭貨	径 24.9 厚さ 1.5 重さ 2.6	寛永通寶（古）	
62	銅製品	銭貨	径 24.4 厚さ 1.6 重さ 3.2	寛永通寶（古）	
63	銅製品	銭貨	径 24.7 厚さ 1.5 重さ 3.4	寛永通寶（古）	
64	銅製品	銭貨	径 27.7 厚さ 1.7 重さ 4.7	寛永通寶（新）11 波	
65	銅製品	銭貨	径 28.0 厚さ 1.7 重さ 4.1	寛永通寶（新）11 波	
66	銅製品	銭貨	径 22.5 厚さ 1.1 重さ 2.8	寛永通寶（新）背足	
67	銅製品	銭貨	径 22.8 厚さ 1.1 重さ 1.6	寛永通寶（新）背元	
68	銅製品	銭貨	径 25.2 厚さ 1.5 重さ 3.2	寛永通寶（新）背文	

第７表　第３号建物跡出土遺物観察表（４）（第 36 図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考	図版
69	石製品	磨石	5.4	4.8	3.6	46.1	角閃石安山岩	多孔質 自然面遺存 使用面１	295-2
70	石製品	焜炉	－	－	[6.3]	268.0	砂岩	軟質 口縁部被熱（赤色化）多角形	289-1
71	石製品	切石材ヵ	[12.3]	[12.2]	[3.0]	455.9	凝灰岩	サキノミ状工具痕ヵ 被熱（一部黒色化）	297-3
72	石製品	切石材	11.4	8.4	5.7	616.6	砂岩	粗粒 サキノミ状工具痕 被熱（黒色化）全面摩耗	297-3
73	石製品	切石材	[11.6]	[7.8]	[7.8]	856.1	安山岩	サキノミ状工具痕 下面摩耗 上・側面被熱（赤色化）	297-3

いわゆる波佐見系のものである。外面に草花文の染付が施される。９は肥前系磁器の鉢で、強く被熱する。断面に焼継痕が認められる。

10 は肥前系磁器の香炉と思われ、被熱している。蛇の目凹形高台で、内底面・高台部と断面に土砂の付着があるが、被熱した際のものと思われる。

11 は瀬戸美濃系陶器の天目碗の破片で、口縁部は明瞭な玉縁になり、体部は直線的に窄まる。釉薬は褐色味の強い鉄釉で光沢がある。17 世紀前葉～中葉の所産である。12 は肥前系陶器の碗。13 は瀬戸美濃系陶器の灯明皿である。

14 は瀬戸美濃系陶器の大皿で、蛇の目状高台のものである。強く被熱して細片化している。

第 32 図 15 ～ 17 は瀬戸美濃系陶器の緑釉植木鉢で、このうち 15・16 は同一個体の可能性がある。17 は一回り大きなサイズのものである。いずれも細片化しており、地業の固めとして細かく砕かれたものであろう。15・16 の口縁部下の釉薬（緑釉）が赤色化し、被熱していることが分かるが、全体として強い被熱を受けた痕跡は見いだせない。したがって、文化・文政の火災に係わるものか否かは判断し難い。

18 は瀬戸美濃系陶器の水甕である。外面はヘラ彫り状の施文がある。灰釉の施釉後に緑釉が流し掛けされる。被熱し、緑釉の一部は赤色化する。

19 は瀬戸美濃系陶器の柿釉半胴甕で、やや小形のものである。弱く被熱し、部分的に黒化が認められる。

20 ～ 22 は瀬戸美濃系陶器の柿釉甕で、同一個体の可能性もある。被熱が認められ、特に 20 は明確に被熱している。22 は大形のもので、上下接点の無い２破片より図上復元したものである。内底面を中心に、被熱による黒化が認められる。

23 は釜形の陶器で、胎土は硬質、外面の鍔より下位にやや暗色の柿釉が施される。弱く被熱し

ている可能性がある。第33図24は瀬戸美濃系陶器の一升徳利で、光沢のある灰釉が施される。被熱は認められない。

25は瓦質土器の火消壺の蓋で、外面に細かい格子状施文がみられる。このようなタイプは19世紀後半頃にみられる。全体が強く燻されている。

第33～35図26～52は地業内の瓦敷から出土した瓦である。26～33は軒桟瓦である。26～32は江戸式に類似した瓦当文様で、中心弁が三重である。26・27、29～31は同文であろう。26・27は被熱し、橙色気味の色調である。

33は東海式である。八連珠の右巻き三巴文で、表面は銀化光沢が認められる。黒色粒子を多分に含んだ灰白色の硬い胎土である。

34は軒丸瓦である。左巻きの三巴文で、八連珠と思われる。被熱により、一部が橙色気味の色調である。胎土は明るい灰白色で、黒色粒子が目立つ。

第33・34図35～46は鬼瓦である。第33図35～37は同文で、連珠三巴文である。全体の形状は判然としないが、35と37は同一部位の別個体である。胎土はいずれも砂質で、暗い色調の灰白色である。表面は銀化状の光沢がみられる。

38は揚羽蝶の家紋の鬼瓦で、栗橋宿本陣跡第26号土壙（埼埋文2020b）に同文資料がみられる。揚羽蝶は、本陣の役割を持つ池田家の家紋である。被熱により全面が橙色気味の色調を帯びる。同様の被熱状況がみられる第34図41は、同一個体である可能性が高い。本陣跡第26号土壙は文化・文政期に比定される火災処理土壙である。本資料も同様の火災で焼け出されたものを、後世に地業の素材として転用したと思われる。

47～49は丸瓦である。47・48は凸面をヘラナデ調整し、48の凹面にはコゲメがみられる。

第35図50～52は瓦樋と思われる円筒形の瓦製品で、これまでに栗橋宿跡で出土している瓦樋より径が小さい。第33図35～37の鬼瓦の胎土に酷似する砂質胎土である。50・51は被熱し、一部が橙色化、表面は剥落している。

第35図53～58は銅製品、59～68は銭貨である。53～55は煙管で、53・54は雁首、55は吸口である。56は金網である。58は鋲である。

59～68は寛永通寶で、そのうち59～63は古寛永である。66は「足」の背文字がある。67は「元」の背文字がある。68は文銭である。

第36図69～73は石製品である。69は多孔質の角閃石安山岩転石を素材とした磨石である。自然面に弱い使用痕がみられる。

70は粗粒且つ軟質な砂岩製堤炉の口縁部である。平面形は多角形と考えられる。被熱により、破断面が赤・黒色化している。

71は凝灰岩製の切石材と思われる。大部分が欠損しているが、正面は著しく摩耗している。

72は粗粒且つ硬質な砂岩製の切石材である。構成する砂の粒度は、70に示した堤炉より大きく粗い。摩耗が著しく、欠損部が判然としないが、正面、右側面に工具痕と思われる短い溝状の削痕がみられる。被熱により、一部が黒化している。また、全面に酸化鉄分が著しく付着する。

73は安山岩製で、小形の切石材である。正面、裏面、左側面には工具痕と思われる削痕がみられる。裏面は摩耗し、光沢がみられる。被熱により赤色化しているが、裏面に被熱痕跡がみられないことから、接地面である可能性が示唆される。

第9号建物跡（第37～40図）

C5－A9、B9グリッドに位置し、東部は調査区域外へ延びていた。

第28号溝跡より新しく、第10号建物跡、第6号基礎状遺構、第17号土壙と重複していたが、新旧関係は不詳であった。なお、第17号土壙については『栗橋宿西本陣跡Ⅱ』で報告する。

検出できた部分の規模は長軸9.20m、短軸5.40m以上、長軸方位はN－17°－Wであった。

地業は布地業と壺地業を組み合わせており、い

ずれも拳大以下の自然礫を敷く特徴がある。底面には2～8本一組の捨て杭を打ち込み、杭の上部は砂やシルト、若干の小礫を含んだ土で固められていた。

南部と西部は隅丸長方形ないし楕円形の掘り方の壺地業である。南部の壺地業1～3は、捨て杭の上に玉石が配されていた。その上は砂利で覆われていた。

西部の壺地業4には捨て杭の上に短い捨て土台が据えられていた。また、北部は布地業であった。南部のように砂利が敷き詰められ、捨て杭の上に捨て土台が据えられていた。

捨て土台には、幅約0.45mの抉り加工が施され、蝋燭石を設置した部分と思われる。この加工面直上に堆積していた第9層や、南部の壺地業2の玉石上に堆積していた第1・2層は、蝋燭石の抜き取り痕と考えられる（第39図参照）。

また、南西部の壺地業1・3では、玉石の上に切石材が据えられていた。壺地業3の切石の下面は、玉石の形状に合わせて加工されていた。

基本土層東壁2（第8・38図）では、地業の上部構造が認められた。北辺の布地業の上部は、下部と同様に拳大以下の自然礫が多く含まれていた。一方で、南辺の壺地業1の上部は、粘土と砂が交互に充填されていた。

出土遺物には、産地不詳陶器の土瓶蓋や京都産の涼炉、瀬戸美濃系磁器の端反碗等があり、19世紀前葉～中葉頃の様相を示すが、第40図1に示した銅版転写染付磁器の蓋が1点含まれる。

基本土層の第8図と東壁2の第38図をみると、建物跡は表土直下の第3層が構築面であった。したがって、第40図1の蓋は構築時に帰属すると考えられ、その時期は19世紀後葉以降である。

第40図に出土遺物を示した。1は瀬戸美濃系磁器の蓋で薄手である。銅版転写で染付される。高台内に「山宝園製」の銘款がみられる。北部の壺地業4から出土した。

2は瀬戸美濃系陶器の柿釉灯明皿（油受皿）である。腰の張る形態で、受け部は高くしっかりしている。切り込みは逆台形で鋭い。体部下位の重ね焼き痕は径8.30cm、受け部の重ね焼き痕は径8.60cmである。

3は瀬戸美濃系陶器の水甕である。全体に貫入が入る黄色っぽい灰釉が掛けられ、外面の一部に緑釉が流し掛けされる。内底面などの一部の釉薬が荒れており、被熱しているものと思われる。壺地業2から出土した。

4は産地不詳の陶器で、土瓶の蓋である。胎土は赤褐色を帯び、硬質である。上面に黄色味の強い灰釉が掛けられ、つまみ部を中心に茶色っぽい鉄釉が少量流し掛けされる。

5は京都産と考えられる白色土器質の涼炉である。色調は僅かに橙色味を帯びる灰白色である。上部の突起はケズリによって面取りされる。壺地業4から出土した。

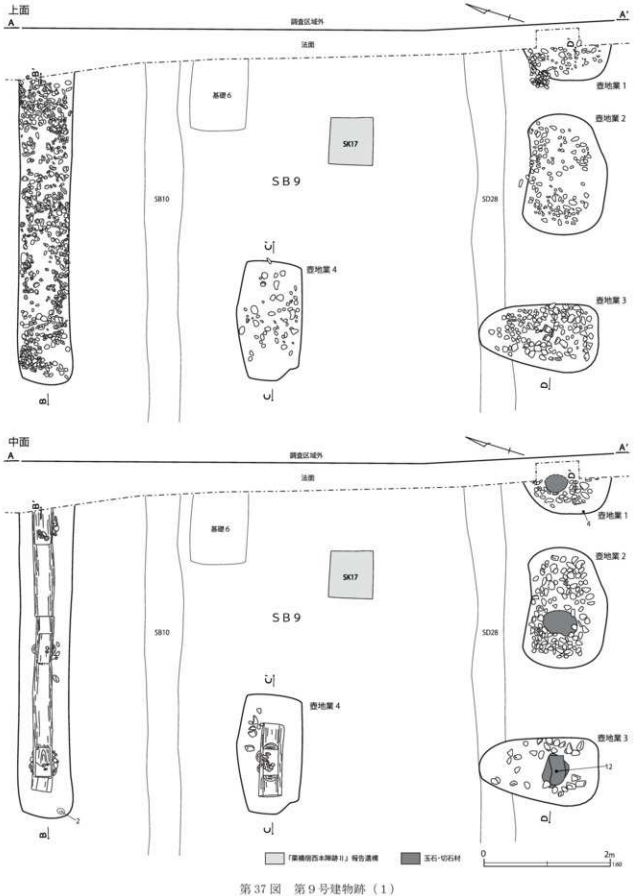
6は土師質土器の火鉢で、やや大形の丸火鉢である。第317号土壙から出土した破片と接合した。外面は細かく施文された後に、ミガキが加えられる。内面に火箸による擦痕が少しみられるが、使用頻度はさほど高くないようである。胎土には微細な雲母を含み、江戸在地系土器と考えられる。壺地業2から出土した。

7は第317号土壙から出土したものであるが、6と同一個体と考えられる。6との接点は無かったが、ここに掲載する。体部外面の施文や、内面の火箸痕跡等は、6と同じである。底部に工具で二次穿孔が認められ、植木鉢に転用されている。底部の脚は3箇所とも剥離している。なお、3以外に明確な被熱痕跡はみられなかった。

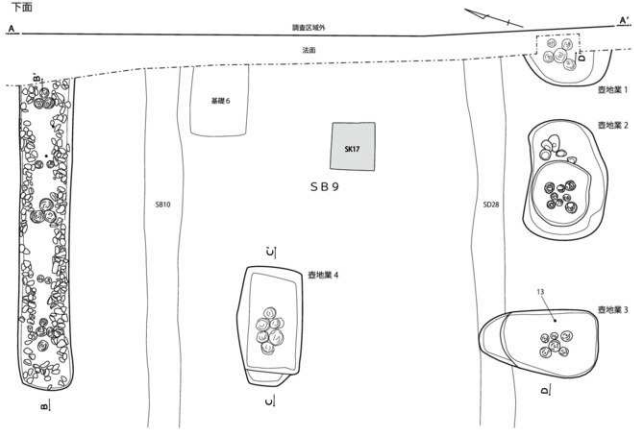
8は銅製の煙管の吸口である。9は鉛製品で、器種は不詳である。「TOKIO」の文字が入っている。

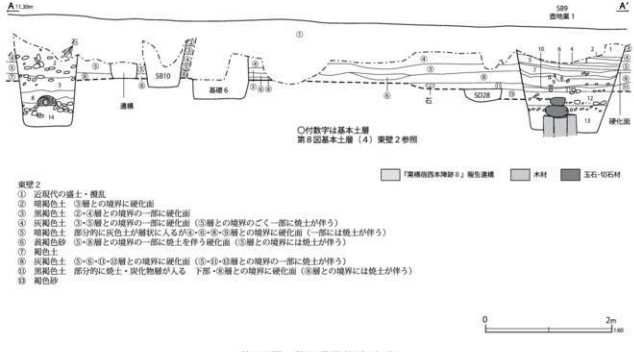
10は鉄釘である。

11～13は寛永通寶である。そのうち11は古寛永である。



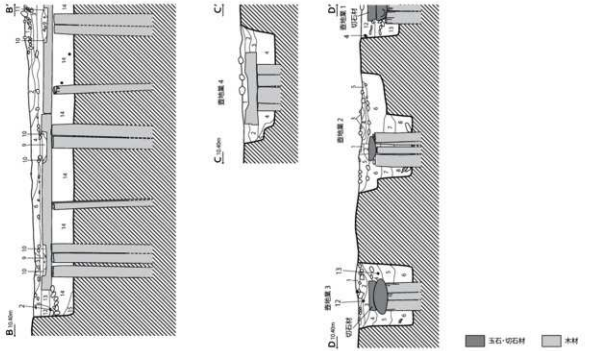
第 37 図　第 9 号建物跡（1）





東壁2
① 近現代の盛土・撹乱
② 暗褐色土　③層との境界に硬化面
③ 黒褐色土　②~④層との境界の一部に硬化面
④ 灰褐色土　③~⑤層との境界の一部に硬化面（⑤層との境界のごく一部に焼土が伴う）
⑤ 暗褐色土　部分的に灰色土が層状に入るが④・⑥・⑧層との境界に硬化面（一部には焼土が伴う）
⑥ 黄褐色砂　⑤~⑧層との境界の一部に焼土を伴う硬化面（⑤層との境界には焼土が伴う）
⑦ 褐色土
⑧ 灰褐色土　⑤・⑥・⑪・⑫層との境界に硬化面（⑤・⑪・⑫層との境界の一部に焼土が伴う）
⑪ 黒褐色土　部分的に焼土・炭化物層が入る　下部・⑧層との境界に硬化面（⑧層との境界には焼土が伴う）
⑬ 褐色砂

第38図　第9号建物跡（2）



SB9　A-A'　B-B'
1　暗灰色砂　しまり弱　炭化物（φ5㎜）多量
2　灰褐色砂　しまり弱　灰色シルトブロック（φ30㎜）多量
3　暗灰色砂　しまり強　炭化物（φ5～10㎜）多量
4　灰褐色砂　しまり強　灰色シルトブロック多量　酸化鉄分多量
5　灰褐色砂　しまり弱　細かな木片多量　柱痕跡か
6　暗灰色砂　しまり弱　焼土粒子（φ5㎜）・炭化物多量
　　シルトブロック（φ30㎜）少量
7　暗灰色砂　しまり弱　炭化物（φ2㎜）少量
8　灰褐色砂　しまり弱　炭化物（φ2㎜）少量
9　灰黄褐色土　しまり弱　小礫（φ30～40㎜）少量
10　灰黄色土　しまり強　炭化物（φ2～5㎜）少量
11　暗灰色土　しまり強
12　灰黄色土　しまり極めて強
13　暗灰色土　横木を固定した土
14　灰褐色土　横木周囲の礫（φ100㎜）と杭を固めた土
15　褐色砂　14層との境目に鉄分が固く沈着

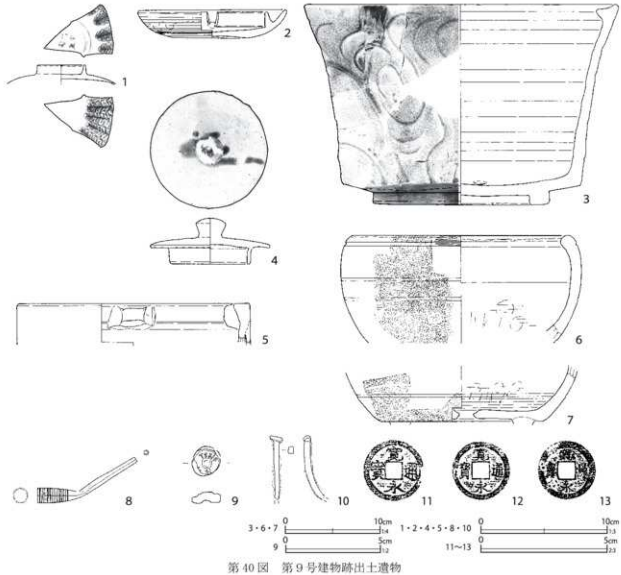
SB9　遺地業1
1　粘土層
2　砂層
3　粘土層
4　砂層
5　粘土層
6　砂層
7　粘土層
8　砂層
9　粘土層
10　砂層
11　粘土層
12　黄色砂　小礫（φ20～60㎜）少量　中心に切り石
13　灰色砂　小礫（φ50～100㎜）少量

SB9　遺地業2
1　暗褐色土　柱痕　しまり強　粘性なし
2　灰褐色土　柱痕　礫に柱状の痕跡　黒褐色土少量　しまり強　粘性なし
3　暗灰色土　しまり強　粘性なし
4　黄色砂　灰黄色土ブロック（φ20～30㎜）多量　酸化鉄分多量
5　灰黄色土　しまり弱　4層の砂少量　酸化鉄分多量
6　灰色砂　礫周囲に堆積
7　暗褐色土　焼土・炭化物が混在　しまり強
8　黒褐色土　粘性弱　しまり強　下部に木の小片少量

SB9　遺地業3
1　灰褐色土　しまり強　粘性なし
　　焼土ブロック（φ2～3㎜）・炭化物（φ2～5㎜）少量
2　褐灰色土　しまり強　粘性なし　瓦片少量
3　灰黄褐色土　しまり強　炭化物（φ20～40㎜）・木片少量
4　灰黄色土　しまり強　炭化物（φ2～3㎜）微量
　　部分的に円礫（φ70～100㎜）少量
5　黄褐色砂層　焼土ブロック（φ8～10㎜）・粘土ブロック（φ30～40㎜）微量
6　暗赤褐色土　焼土ブロック・炭化物多量　下部に瓦片・木片少量

SB9　遺地業4
1　暗黄褐色土　しまり極めて強　礫（φ30～140㎜）少量
2　灰色砂　しまり強
3　灰黄色土　粘性弱　しまり強
4　灰褐色砂　酸化鉄分多量
5　灰褐色土　粘性弱　しまり強

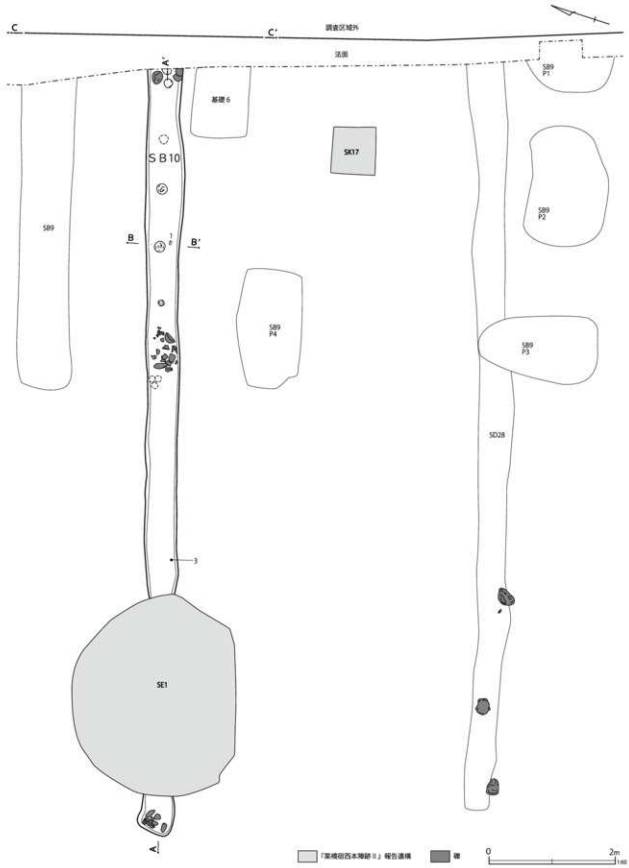
第39図　第9号建物跡（3）



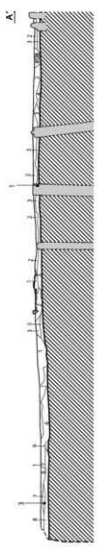
第 40 図　第 9 号建物跡出土遺物

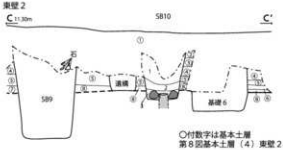
第 8 表　第 9 号建物跡出土遺物観察表（第 40 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	蓋	(3.7)	[1.6]	—	—	15	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・銅版転写染付 壺地業 4	
2	陶器	灯明皿	11.4	2.3	5.7	IK	95	良好	褐灰	瀬戸美濃系 内外面柿釉・体部下位拭き取り・直重ね焼き痕	
3	陶器	水甕	(32.6)	21.3	15.2	DMK	45	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 外面施文・緑釉流し掛け 内底面に目跡 2 遺存 弱く被熱 壺地業 2 SK314・317 と接合	102-3
4	陶器	蓋	—	3.6	6.2	IK	95	良好	にぶい赤褐	上面灰釉・鉄釉を散らす（土瓶蓋） 最大径 9.4 cm	102-4
5	陶器	涼炉	(18.2)	[3.3]	—	BI	5	普通	灰白	京都系 白色土器質 壺地業 4	
6	土師質土器	火鉢	(22.8)	[11.4]	—	ADI	30	普通	にぶい黄橙	江戸在地系 外面施文・ミガキ 内面僅かに火箸状痕 胎土粉質 7 と同一個体とみられる 壺地業 2 SK317 と接合	
7	土師質土器	火鉢	—	[5.9]	17.2	ADI	40	普通	褐灰	江戸在地系 外面施文 内面僅かに火箸状痕 底部二次穿孔（植木鉢転用）6 と同一個体とみられる SK317 出土	
8	銅製品	煙管	長さ 7.9 小口径 1.2 × 1.1 口付径 0.4 重さ 7.4							吸口 折れ曲がる 壺地業 3	279-2
9	鉛製品	不明	縦 [1.6] 横 [1.5] 厚さ 0.6 重さ 7.5							「TOKIO」銘	
10	鉄製品	釘	長さ [5.1] 幅 0.4 厚さ 0.5 重さ 4.8								
11	銅製品	銭貨	径 24.6 厚さ 1.2 重さ 3.0							寛永通寶（古）	
12	銅製品	銭貨	径 23.6 厚さ 1.2 重さ 2.5							寛永通寶（新）11 波	
13	銅製品	銭貨	径 23.6 厚さ 1.0 重さ 2.1							寛永通寶（新）壺地業 3	



第 41 図　第 10 号建物跡（1）





○付数字は基本土層
第 6 図基本土層（4）東壁 2 参照

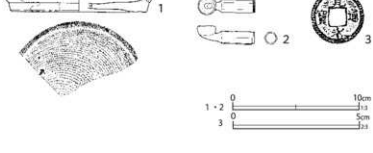
SB10 A-A'
1 暗灰色土 しまり極強 整地層か
2 褐灰色土 しまり強
3 黒色土 炭化した土 焼土（φ3～8mm）多量
4 褐灰色土 しまり強 砂含む
5 暗褐色土 炭化物（φ3～8mm）多量
6 褐色砂 しまり強
7 灰黄色砂 鉄分・炭化物（φ2～5mm）多量
8 灰褐色土 しまり強
9 灰色砂

SB10 B-B'
1 褐色砂 杭の周辺に入り込んだ砂層
2 褐灰色土 しまり強
3 黒色土 焼土ブロック（φ3～8mm）多量

SB10 C-C'
1 褐灰色土 炭化物・焼土粒少量
2 褐灰色土 しまり強 砂含む
3 灰褐色土 しまり強 炭化物（φ3～8mm）少量

東壁 2
① 近現代の盛土・撹乱
② 暗褐色土 ③層との境界に硬化面
③ 黒褐色土 ②・④層との境界の一部に硬化面
④ 灰褐色土 ③・⑤層との境界の一部に硬化面（⑤層との境界のごく一部に焼土が伴う）
⑤ 暗褐色土 部分的に灰色土が層状に入るが⑤・⑥・⑧・⑨層との境界に硬化面
（一部には焼土が伴う）
⑥ 黄褐色砂 ⑤・⑧層との境界の一部に焼土を伴う硬化面（⑧層との境界には焼土が伴う）
⑦ 褐色土
⑧ 灰褐色土 ⑤・⑥・⑪・⑫層との境界に硬化面（⑤・⑪・⑫層との境界の一部に焼土が伴う）

杭 礎 0 2m



第 42 図 第 10 号建物跡（2）・出土遺物

第９表　第10号建物跡出土遺物観察表（第42図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	陶器	徳利	－	[1.2]	(10.6)	1K	10	良好	灰黄	瀬戸美濃系　底部糸切痕　外面灰釉	
2	銅製品	煙管	長さ4.5　火皿径1.4　小口径1.0×0.9　重さ10.0							雁首　北布地業	279-1
3	銅製品	銭貨	径21.6　厚さ1.1　重さ2.0							寛永通寶（新）	

第10号建物跡（第41・42図）

Ｃ５－Ａ９、Ｂ８・９グリッドに位置し、東部は調査区域外へ延びていた。第１号井戸跡（『栗橋宿西本陣跡Ⅱ』報告）より古く、第９号建物跡、第６号基礎状遺構、第17号土壙（『栗橋宿西本陣跡Ⅱ』報告）が重複していたが、新旧関係は不詳であった。検出できた部分の規模は長軸12.15ｍ以上、長軸方位はＮ－72°－Ｅであった。

布地業の底面付近を１条検出した。第９号建物跡と第10号建物跡の布地業は、走行方向が揃っており、近接していたため、同一の建物跡の可能性も考えられる。第41図では第９号建物跡、第６号基礎状遺構と共に示した。

なお、発掘段階では南側で検出された溝状の遺構を第10号建物跡の地業と考えていたが、基本土層東壁２（第８図）をみると、構築面が異なる。そのため整理段階で別の遺構と判断した（第28号溝跡）。

布地業の底面には捨て杭が遺存し、周囲は砂を入れ込んでいた。拳大から20㎝以上の大形自然礫の集中が部分的に遺存していた。

出土遺物は18世紀後半の様相を示すが、基本土層東壁２（第８・42図）をみると、第９号建物跡とほぼ同じ標高から掘り込まれた地業とみられる。したがって、構築時期は19世紀後葉以降と考えられる。

第42図に出土遺物を示した。１は瀬戸美濃系陶器の灰釉徳利（一升）の底部である。底部に糸切痕が明瞭に残る。

このほかに肥前系磁器の皿・筒形碗、瀬戸美濃系陶器の五合徳利・柿釉甕・せんじ碗・坏、京都信楽系陶器の半球形碗が出土した。

２は煙管の雁首、３は寛永通寶である。

第12号建物跡（第43～45図）

Ｂ５－Ｉ６・７、Ｊ６グリッドに位置し、東部は調査区域外へ延びていた。第52･54･64号土壙、第８号基礎状遺構より新しい。さらに、第13・14号建物跡、第５号井戸跡、第51号土壙と重複していたが、新旧関係は不詳であった。

検出できた部分の規模は長軸12.10ｍ以上、短軸5.65ｍ、捨て杭は、深さ0.87ｍ以上打ち込まれていた。長軸方位はＮ－73°－Ｅであった。

捨て杭のみが検出されており、掘り方等の上部は削平されたためか検出されなかった。

直接年代を示す出土遺物はないが、捨て杭はかなり上層から打ち込まれていたと思われ、近代の建物跡と推定される。

第45図に出土遺物を示した。杭の下部を確認調査した際に出土したもので、建物跡に直接伴うものではない。しかし、第12号建物跡よりも確実に古いと考えられるため、建物の時期の上限を示す出土遺物として掲載した。

１は、杭11付近から出土した肥前系磁器の碗である。やや体部が丸みを帯びるが、絵付けの特徴は広東碗に近い。

２は杭７付近から出土した中世の遺物で、古瀬戸の折縁大皿である。15世紀頃の所産である。

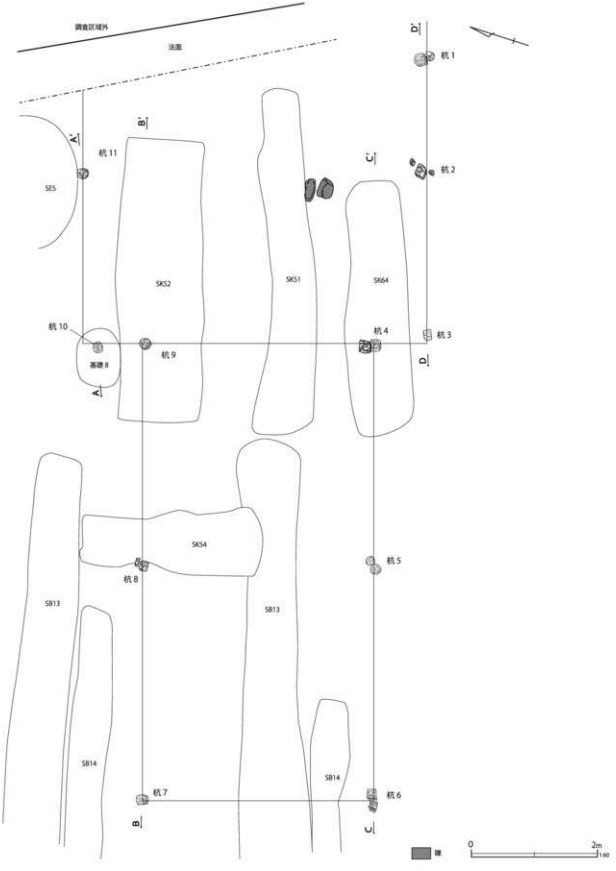
３は杭11付近から出土した遺物である。鉄製の包丁であろうか。４は鉄釘である。

５は杭11付近から出土した寛永通寶である。

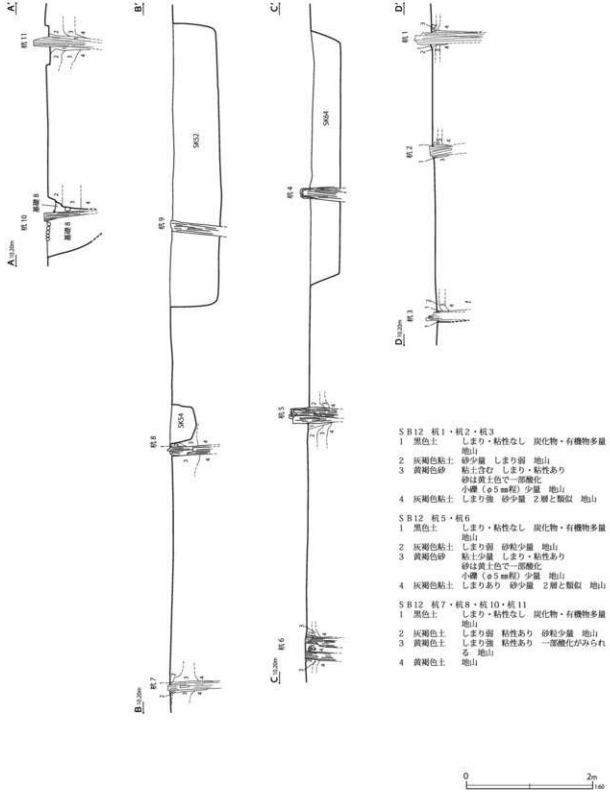
６は硝子製の笄である。

第13号建物跡（第46～48図）

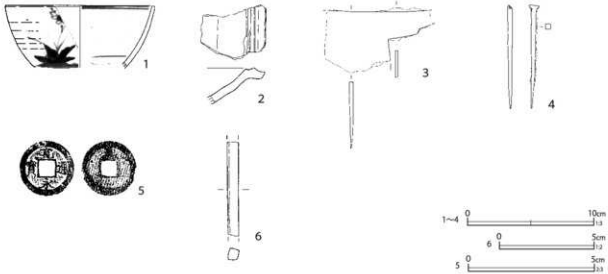
Ｂ５－Ｉ６・７、Ｊ６グリッドに位置してい



第 43 図　第 12 号建物跡（1）



第44図 第12号建物跡（2）



第 45 図　第 12 号建物跡トレンチ出土遺物

第 10 表　第 12 号建物跡トレンチ出土遺物観察表（第 45 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	(11.6)	[4.9]	—	—	20	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 杭 11Tr	
2	陶器	折縁大皿	—	[2.9]	—	K	5	良好	明褐灰	古瀬戸 後期様式 内外面灰釉 縦（5.1）cm 横（3.6）cm 杭 7Tr	
3	鉄製品	包丁ヵ	長さ［8.4］刃長［5.2］刃幅［4.9］背幅 0.3 重さ 44.1							杭 11Tr	
4	鉄製品	釘	長さ 8.2 幅 0.4 厚さ 0.4 重さ 6.7							杭 11Tr	
5	銅製品	銭貨	径 22.1 厚さ 1.1 重さ 2.3							寛永通寶（新）背元ヵ 杭 11Tr	
6	硝子製品	竿	長さ［4.9］幅 0.6 厚さ 0.6 重さ 6.8							透明 中実 被熱 杭 11Tr	299-1

た。第 14 号建物跡、第 53・54 号土壙より新しく、第 12 号建物跡とは重複していた。長軸 8.65 m、短軸 5.20 mの建物が想定される。長軸方位はN－73°－Eであった。

布地業の建物跡で、北部の布地業は主軸がやや南へずれていた。南部の布地業は、東側に段がつく構造であった。

充填された土は概ね砂とシルトの互層で、シルトは固くしまっていた。捨て杭や捨て土台のような構造物がみられず、他の地業と比べると簡素なつくりであった。重複する第 14 号建物跡と構造が酷似していることから、建て直したものと思われる。

南部の布地業からは、瀬戸美濃系磁器の細片や真壁系土器の甕が出土した。北部の布地業からは、瀬戸美濃系磁器の端反碗の蓋、真壁系土器甕の破片が多数出土した。出土した陶磁器は、第 14 号建物跡から出土した破片と接合するものが多い。

また、北部の布地業には被熱した陶磁器が多くみられる。

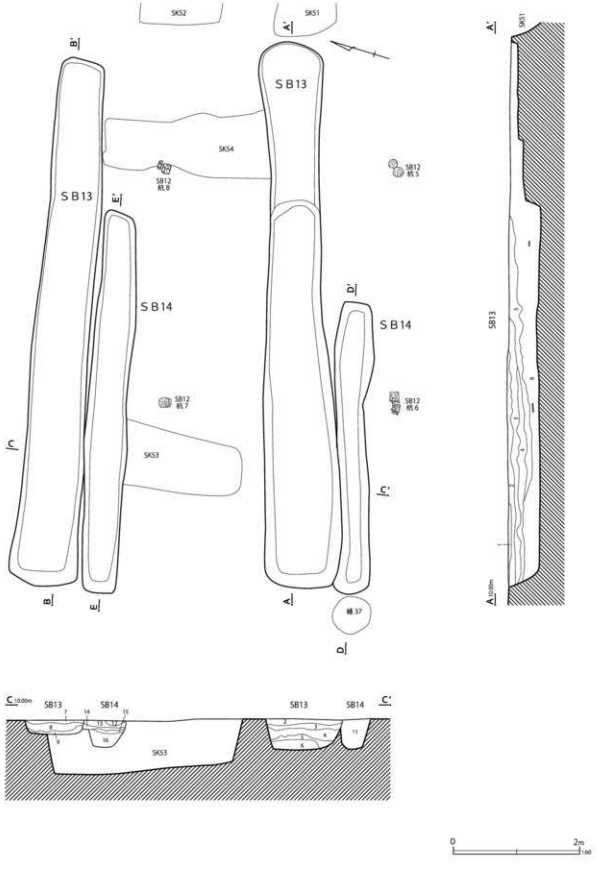
構築時期は 19 世紀中葉頃と考えられる。

第 48 図に出土遺物を示した。1は肥前系磁器の広東碗、2は肥前系磁器の皿である。いずれも僅かに煤の付着が認められるが、被熱によるものか否かはっきりしない。

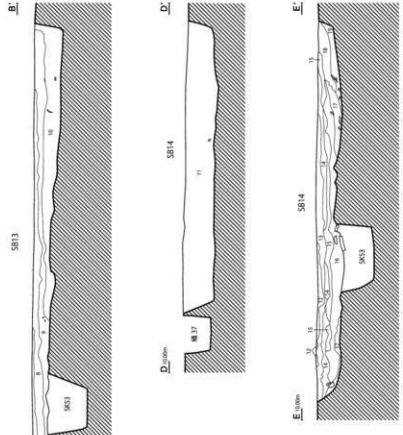
2の皿は蛇の目凹形高台のもので、北部の布地業から出土した。重複する第 14 号建物跡の北部の布地業から出土した破片と接合したので、どちらに帰属する遺物かは判然としない。

3は南部の布地業から出土した陶器の灯明皿（油皿）で、柿釉が施される。極めて扁平である。瀬戸美濃系陶器と考えられる。内面に径 4.4 cmの環状の重ね焼き痕が認められる。

4は北部の布地業から出土した灯明皿（油受皿）



第 46 図　第 13・14 号建物跡（1）

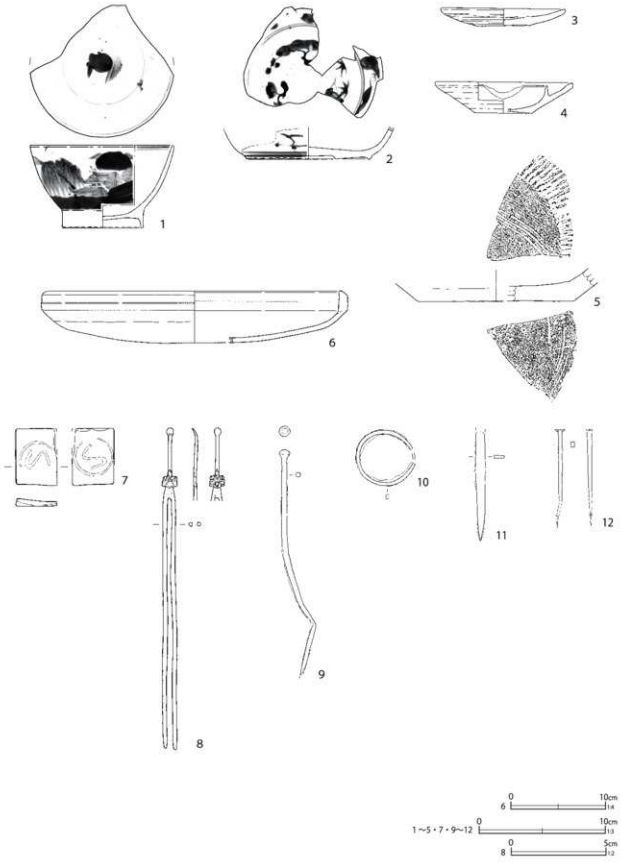


SB13
1　黄褐色砂　しまり弱
2　灰色土　しまり強　粘性弱　焼土（φ1～5㎜）・炭化物少量
3　黄褐色砂　しまり弱
4　灰色土　しまり強　粘性弱　炭化物（φ1～5㎜）少量　砂少量
5　灰色土　しまり強　粘性弱
4層より砂が少なく、4層と5層の間に酸化鉄分の薄い層がみられる
6　黄褐色砂　しまり弱
7　暗褐色土　しまり強　粘性弱　焼土粒子（φ1～5㎜）・炭化物少量
8　黄褐色砂　しまり弱
9　暗褐色土　しまり・粘性強　炭化物（φ1～5㎜）多量
10　暗灰褐色砂　しまり弱

SB14
11　黄褐色砂　しまり弱　粗粒
12　黄褐色砂　しまり弱　粗粒
13　灰色土　しまり強　粘性弱　焼土（φ1～5㎜）・炭化物多量
14　黄褐色砂　しまり弱　灰色土シルトブロック少量
15　灰色土　しまり強　粘性弱　炭化物（φ1～5㎜）少量
16　黄褐色砂　しまり弱　焼土ブロック（φ5～30㎜）・炭化物少量
17　暗褐色土　しまり強　粘性弱　炭化物（φ1～5㎜）少量
18　黄褐色砂　しまり弱
19　暗褐色土　しまり・粘性強　炭化物（φ1～5㎜）少量

0　2m
1:60

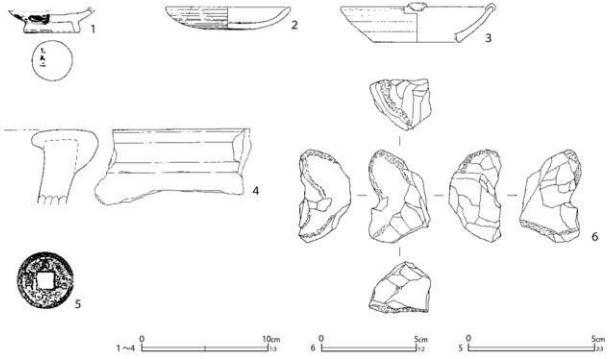
第47図　第13・14号建物跡（2）



第 48 図　第 13 号建物跡出土遺物

第 11 表　第 13 号建物跡出土遺物観察表（第 48 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	(11.2)	6.5	6.2	—	60	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付（広東碗）	
2	磁器	皿	—	[2.5]	9.7	—	30	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 北布地業 SB14 と接合	
3	陶器	灯明皿	9.7	1.4	3.8	IK	50	良好	褐灰	瀬戸美濃系 内外面柿釉・底部拭き取り 内面重ね焼き痕 南布地業	
4	陶器	灯明皿	(10.8)	2.4	(4.6)	I	40	良好	灰白	京都信楽系 内面～口縁部施釉 被熱・煤付着 北布地業	
5	陶器	擂鉢	—	[2.5]	(12.3)	EHIK	5	良好	褐灰	堺明石系 内面擂目 北布地業	
6	土師質土器	焙烙	(31.0)	[5.5]	—	CHIK	20	普通	にぶい橙	底部シワ状痕 体部外面と内面の一部煤付着 南布地業	
7	木製品	木札	長さ 4.5 幅 3.3 厚さ 0.6 板目							表裏面焼印「⑥」炭化	
8	銅製品	簪	長さ 17.0 幅 0.6 厚さ 0.2 重さ 9.3							花文飾り	280-1
9	鉄製品	火箸	長さ [17.9] 厚さ 0.4 重さ 17.4							箸頭宝珠状	280-2
10	鉄製品	環金具	径 4.6 × 4.4 幅 0.3 厚さ 0.2 重さ 4.8								
11	鉄製品	釘	長さ [8.7] 幅 0.8 厚さ 0.2 重さ 8.1								
12	鉄製品	釘	長さ 7.8 幅 0.3 厚さ 0.4 重さ 4.0								



第 49 図　第 14 号建物跡出土遺物

第 12 表　第 14 号建物跡出土遺物観察表（第 49 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	—	[2.0]	4.2	—	40	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付 焼継印（赤）「トム二」北布地業（湯呑碗）	167-1
2	陶器	灯明皿	9.7	1.8	3.7	BD	—	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面柿釉 外面下位拭き取り 内面重ね焼き痕 南布地業	
3	陶器	灯明皿	(11.8)	3.1	(6.9)	IK	10	良好	灰白	瀬戸美濃系 内面～口縁部灰釉 外面煤付着 南布地業	
4	土師質土器	甕	—	[5.9]	—	ADEHK	5	普通	褐灰	真壁系 北布地業	
5	銅製品	銭貨	径 22.8 厚さ 1.3 重さ 2.8							寛永通寶（新）	
6	石製品	火打石	長さ 4.9 幅 3.2 高さ 2.7 重さ 41.5							玉髄 使用痕あり 強く被熱（白色化）	291-4

で、京都信楽系陶器である。外面に顕著に煤が付着するが、器面の釉薬の荒れもみられ、被熱によるものと思われる。

5は北部の布地業から出土した堺明石系陶器の擂鉢である。底部に回転ケズリが施される。

6は南部の布地業から出土した土師質土器の焙烙で、在地系である。7は木製品の木札である。

8は銅製の簪である。9は鉄製の火箸である。持ち代の先端が丸く収められている。10は鉄製の環金具である。11・12は鉄釘である。11はとても薄いものである。

第14号建物跡（第46・47・49図）

B5－I6・7、J6グリッドに位置する。第53号土壙より新しく、第13号建物跡より古い。第12号建物跡とは重複していた。検出規模は長軸6.07m、短軸4.55m、長軸方位はN－73°－Eである。

布地業の建物跡で、北部の布地業の充填土は概ね砂とシルトの互層であった。シルトは固くしまっていた。一方、南部の布地業は粗粒砂の単層で、充填の方法に若干の違いが認められた。

出土遺物には、瀬戸美濃系磁器の湯呑碗や真壁系土器の甕がみられる。構築時期は19世紀中葉頃と考えられる。

第49図に出土遺物を示した。1は北部の布地業から出土した瀬戸美濃系磁器の湯呑碗で、厚手で大振りである。高台内に焼継印が認められる。

2は南部の布地業から出土した瀬戸美濃系陶器灯明皿で、やや薄く柿釉が施される。内面に環状の重ね焼き痕が認められる。

3は南部の布地業出土の瀬戸美濃系陶器の灰釉灯明皿で、痕跡的な舌が付く。小破片から展開復元して図示したものであり、推定径には若干の誤差も想定される。外面に少量の煤が付着する。

4は真壁系土器の甕で、北部の布地業から出土した。本跡からは、同一個体の可能性がある土器片が多く出土した。

5は寛永通寶である。6は玉髄製火打石である。稜に潰れがみられ、使い込まれている。強い被熱により、全面が白色化し、黒色化した部分がマーブル状にみえる。

第15号建物跡（第50～52図）

B5－J4・5、C5－A4・5グリッドに位置する。第5号溝跡と重複しているが、新旧関係は不詳であった。検出できた部分の規模は長軸8.20m、短軸5.55m、長軸方位はN－78°－Eであった。

北部の第5号溝跡に打ち込まれた杭には、大きさや打ち込み間隔が、建物跡と一致するものがみられた。それらは、整理段階で第15号建物跡を構成するものと判断した。

地業の西部と南部の杭の検出が部分的だが、下屋の構造をもった建物の可能性がある。

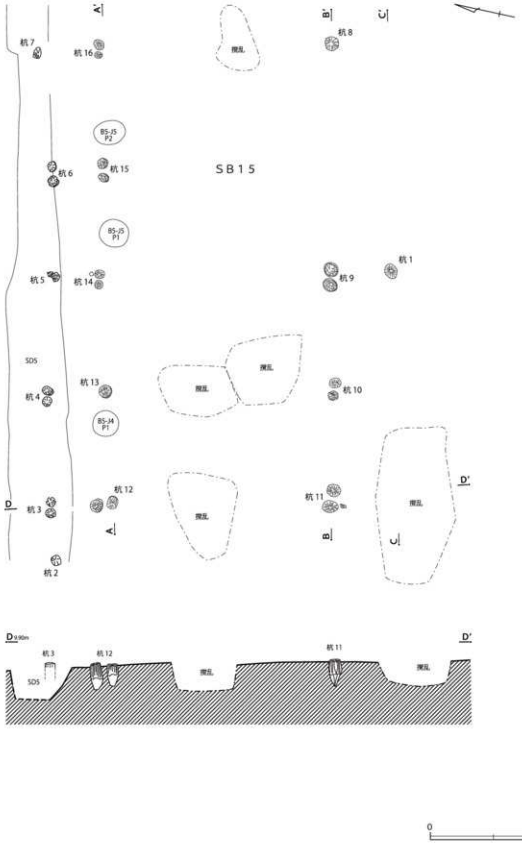
地業は、捨て杭の先端部（最大長0.60m）のみが遺存していた。杭はかなり上層から打ち込まれていたと考えられることから、近代の建物跡であろう。西・南部には、1箇所ずつ捨て杭が遺存し、その他は杭の抜き取り等により検出されなかった可能性がある。

第52図に出土遺物を示した。杭の下部を確認調査した際に出土したもので、建物跡に直接伴うものではない。しかし、第15号建物跡よりも確実に古いと考えられるため、建物の時期の上限を示す出土遺物として掲載した。

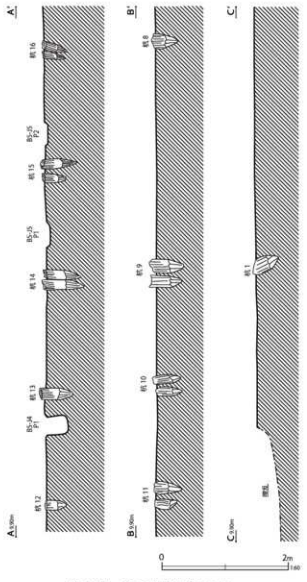
1は杭1付近から出土した瀬戸美濃系磁器の坏である。2は杭9付近から出土した肥前系磁器の湯呑碗である。

3は杭9付近から出土した瀬戸美濃系陶器の灯明皿（油受皿）である。受け部は断面三角形で低く、切り込みは「U」字形に近いが、まだ鋭さを保っている。外面の下位と受部上端に重ね焼き痕がみられ、受け部上端は径10.0cm、体部下位は径7.0cmである。

4は杭14付近から出土した陶器の青緑釉土瓶



第 50 図　第 15 号建物跡（1）



第 51 図　第 15 号建物跡（2）

の蓋である。第 20 号建物跡から出土した破片と接合した。

5は杭 1 付近から出土した陶器の土瓶で、薄手である。外面に褐色の釉薬が掛けられ、斑状に白色の釉が浮き出ている。さらにイッチン描き状の施文が見られる。

6は杭 1 付近から出土した、銅製の花弁状の飾金具である。中央に孔があり、鋲などを刺したものと思われる。

7は杭 15 付近から出土した、鉄製の鍋である。

8は鉄釘である。

9は粗粒で硬質な砂岩製の砥石である。石英粒が多い石質である。表面に窪み状の使用痕がみられる。そのほかの砥面は平滑である。

第 16 号建物跡（第 53・54 図）

Ｂ５－Ｉ４・５グリッドに位置し、北部は調査区域外へ延びていた。検出された部分の規模は長軸 5.65 m、短軸 2.28 m以上、長軸方位はＮ－84° －Ｅである。

地業は約 0.90 m間隔で打ち込まれた捨て杭のみが検出された。

基本土層（第６図）と北壁２（第６・53 図）をみると、捨て杭の上端は表土直下に位置していた。その直上にはコンクリートがみられ、現地表面に露出していた。ただし、このコンクリートが本跡に伴うものか否かは、検証し得なかった。

第 54 図に出土遺物を示した。杭の下部を確認調査した際に出土したもので、建物跡に直接伴うものではない。しかし、遺物は第 16 号建物跡よりも確実に古いと考えられるため、建物の時期の上限を示す出土遺物として掲載した。

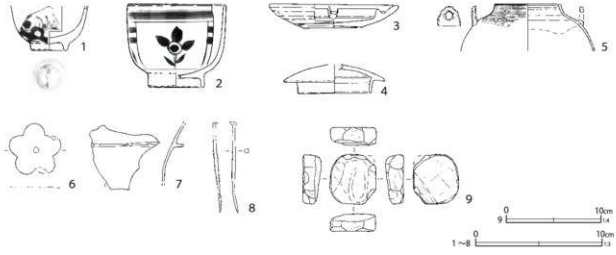
1は杭２付近から出土した陶器の坏で、小形のものである。京都信楽系陶器である。２は杭６付近から出土した瀬戸美濃系陶器の灯明皿（油受皿）で、柿釉が施される。内面に環状の重ね焼き痕があり、径 4.8 cmを測る。

3は杭５付近から出土した瀬戸美濃系陶器で、小形の有耳壺である。光沢のある黄色味の強い灰釉が施される。内面に油脂状の付着物が顕著に残り、外面肩部にも少量付着している。底部に焦げた痕がみられる。耳部には銅線が遺存しており、蓋を留めていたものかと推定される。

4は鉄製の火格子である。５は鉄釘である。

第 17 号建物跡（第 55・56 図）

Ｂ５－Ｉ７グリッドに位置していた。北部は調査区域外へ延びていた。重複する第５号井戸跡より新しい。検出規模は長軸 3.05 m以上、短軸 2.55 m、長軸方位はＮ－79° －Ｅであった。



第 52 図　第 15 号建物跡トレンチ出土遺物

第 13 表　第 15 号建物跡トレンチ出土遺物観察表（第 52 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	坏	－	[3.5]	2.7	－	55	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付 杭 1Tr	
2	磁器	碗	(7.6)	6.5	(4.2)	－	45	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面染付（湯呑碗） 杭 9Tr	
3	陶器	灯明皿	10.0	1.9	4.6	－	100	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面柿釉 底部拭き取り 外面下位重ね焼き痕 杭 9Tr	
4	陶器	蓋	－	[2.3]	(5.7)	K	40	良好	灰白	外面青緑釉 最大径（8.0）cm 杭 14Tr SB20 と接合	
5	陶器	土瓶	(5.1)	[3.7]	－	K	10	良好	灰	外面施釉・白盛り（イッチン状）絵付 杭 1Tr	
6	銅製品	飾金具	縦 4.1 横 4.1 厚さ 0.04 重さ 2.6							花弁状 杭 1Tr	280-6
7	鉄製品	鏃	縦 [5.1] 横 [5.6] 厚さ 0.2 重さ 20.8							杭 15Tr	
8	鉄製品	釘	長さ 7.2 幅 0.3 厚さ 0.3 重さ 2.9							杭 10Tr	
9	石製品	砥石	長さ 5.2 幅 4.8 厚さ 1.9 重さ 67.1							砂岩 砥面 6	293-2

基本土層（第 6 図）と北壁 2（第 6・55 図）をみると、地業の一部とみられる版築を施した掘り込みがみられた。第 55 図 D－D’では、覆土の下部しか記録されていないが、調査区壁面が法面となっていたためである。また、挿図では建物跡との関連性を考慮して、周辺に分布する大形の自然礫も示した。

東側は根石が残り、西・南部は布地業であった。西部の布地業の下部は、いわゆる「算盤地業」が施されていた。南北に 3 本ずつ丸木の枕木として設置し、その上に直交するように角木の捨て土台を設置していた。南辺の地業には瓦片が敷かれていた。充填土には砂やシルト、小礫がみられた。

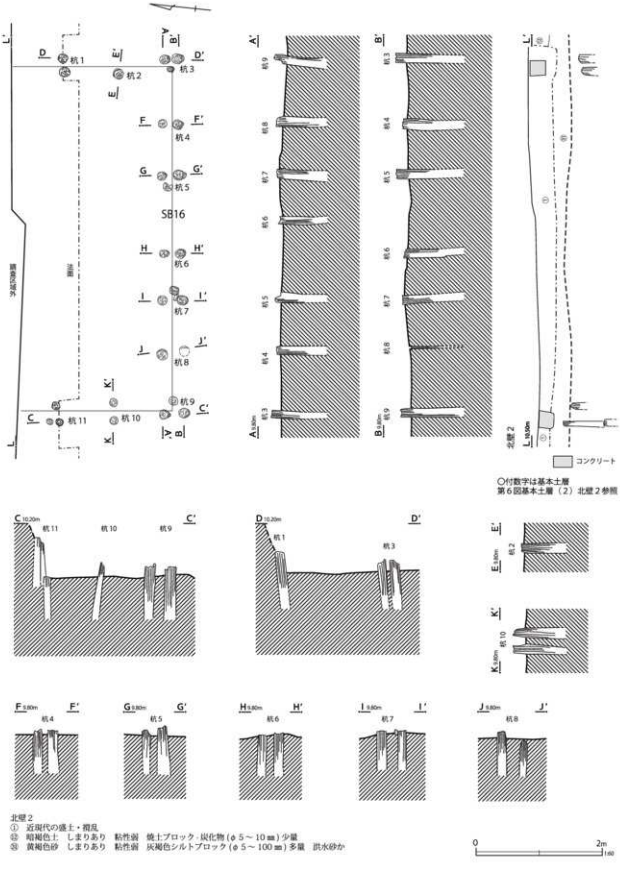
出土遺物には、瀬戸美濃系磁器の端反碗（第 56 図 1）や、陶器の白土絵付け土瓶の破片がみられる。土師質土器の丸底焙烙はすべて在地産であり、出土遺物の様相は 19 世紀中葉である。

基本土層（第 6 図）と北壁 2（第 55 図）をみると、第 21 層直下の第 23・27 層を構築面としていることから、構築時期は陶磁器の年代より下るかもしれない。

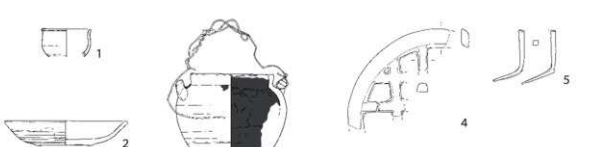
第 56 図に出土遺物を示した。1 は瀬戸美濃系磁器の端反碗で、器壁は厚手である。

2 は京都信楽系陶器の土瓶で、薄手である。灰釉が施釉される。3 は陶器の蓋で、小形のものである。下面は、一方向からのケズリで処理される。施釉は認められない。

4 は瓦質土器火鉢の口縁部で、口縁部は二次的に敲打される。内面は顕著に煤が付着するが、敲打部分にも煤が付着する。外面の口縁部沈線



第 53 図　第 16 号建物跡



第 54 図　第 16 号建物跡トレンチ出土遺物

第 14 表　第 16 号建物跡トレンチ出土遺物観察表（第 54 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	陶器	坏	(3.7)	[2.2]	—	—	25	良好	灰白	京都信楽系 内外面施釉 杭 2Tr	
2	陶器	灯明皿	(9.4)	1.9	4.3	K	60	良好	灰	瀬戸美濃系 内外面柿釉・底部拭き取り 内面重ね焼き痕 杭 6Tr	
3	陶器	有耳壺	6.5	7.6	4.9	—	95	良好	灰白	瀬戸美濃系 外面灰釉（口唇部露胎）内面～外面肩部に油脂状の付着物顕著 耳部に鋸線遺存 杭 5Tr	
4	鉄製品	火格子	縦 [8.0] 横 [8.1] 厚さ 0.7 重さ 88.8							杭 10Tr	281-4
5	鉄製品	釘	長さ [4.1] 幅 0.4 厚さ 0.4 重さ 4.6							杭 3Tr	

内と唐草文内が黒色に塗られる。

5は現在の茨城県桜川市（旧真壁町）で生産されたと思われる真壁産の土器甕で、口唇部にヘラ書きが認められる。類例が栗橋宿本陣跡第 33 号土壙にみられる（埼埋文 2020b）。

6は、かわらけの小皿であり、油煙が付着することから灯明具としての用途が推定される。

7は類例との比較から瓦質土器の焙烙としたが、焼成はほぼ酸化炎焼成である。体部の外面下位は広くケズリが施される。内面が部分的に黒化しており、使用痕と思われる。

8は土製品の玉である。手捻り成形で、胎土に細粒な雲母片と思われる鉱物が含まれる。

9は漆椀である。内面に赤漆、外面に黒漆が塗布される。10 と 11 は寛永通寶である。

12はやや黄色味を帯びた白色の流紋岩製砥石である。裏面には段が残るノコギリ状工具痕（観察表ではノコギリ痕と表記）が遺存する。右側面には溝状の使用痕がみえ、砥面は 4 面である。

第 18 号建物跡（第 57 ～ 59 図）

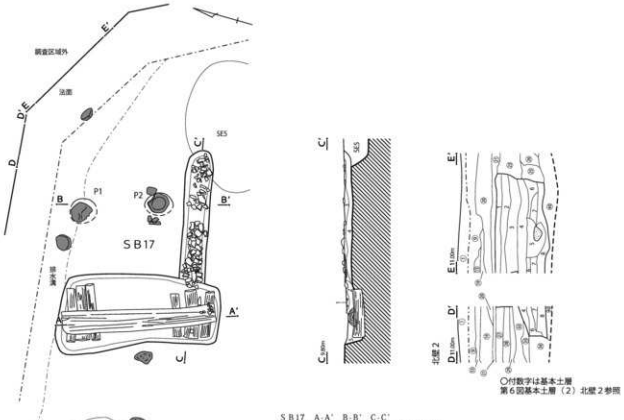
C 6－H 1・2 グリッドに位置し、東部は調査区域外へ延びていた。

検出できた部分の規模は長軸 6.75 m、短軸 3.95 m以上、長軸方位はN－16°－Wである。平面形状は、「ロ」字状と思われる。南西隅はブリッジ状に掘り残されていた。

布地業内には、沈下を防ぐために枕木として丸木が敷き詰められていた。その上には、木の幹を玉切りした径 60.0 ㎝、高さ 40.0 ㎝前後の切株が設置されていた。北西隅には丸木が、7本を一組とし、縦位置に設置されていた。

布地業の充填土は、小礫、砂、粘土で強固に突き固められ、概ね互層をなしていた。下部は砂を厚く入れ、上部は小礫と粘土が互層に薄く敷かれていた。

基本土層東壁 3・4（第 9・10・57 図）をみると、布地業の最上層には自然礫がみられる。また、布地業の外周に接して、北辺に自然礫、西辺に裏返した石臼（第 59 図 15）と破損した土器の火鉢（第 59 図 4）が据えられて検出された。石臼と火鉢の間隔は 3.60 m、その延長線上と直交する自然礫の軸線上の間隔は約 1.90 mである。なお、布



○付数字は基本土層
第６図基本土層（２）北壁２参照

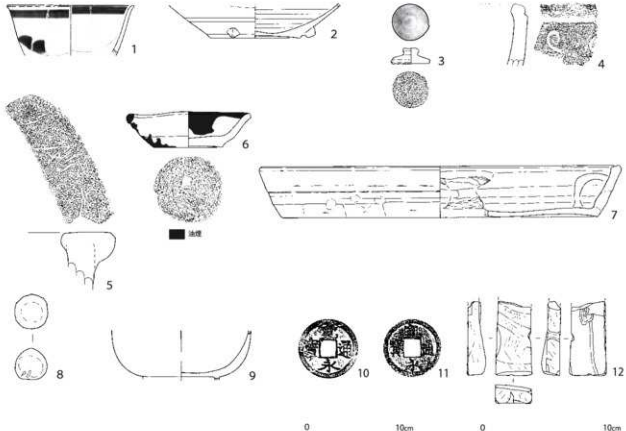
SB17 A-A' B-B' C-C'
1 褐色砂 しまり強 粘性弱 小礫（φ20～30㎜）少量
2 灰褐色砂 しまり強 粘性弱
3 白灰色砂 しまり弱 粘性弱
4 灰色砂 しまり強 粘性弱
5 暗灰褐色土 しまり強 粘性弱
6 暗灰褐色土 しまり・粘性強
7 灰色土 しまり弱 粘性なし （P１・２）
8 灰褐色砂 しまり弱 粘性なし（P１）

SB17 D-D' E-E'
1 灰褐色土 しまり強 粘性弱 焼土粒（φ1～5㎜）・炭化物・白色粒子多量
2 暗褐色土 しまり強 粘性弱 焼土粒（φ1～5㎜）・炭化物・白色粒子多量
3 灰褐色土 しまり強 粘性弱 白色粒子（φ1㎜）多量
4 灰色土 しまり強 粘性弱 黒色シルトブロック（φ5～20㎜）多量
5 黄褐色砂 しまり弱 粘性弱 砂利・石含む
6 灰色粘土 しまり強 粘性弱 黒色シルトブロック（φ10～30㎜）多量
7 灰褐色粘土 しまり強 粘性弱 黒色シルト層と白色砂層を帯状に含む
8 灰褐色土 しまり強 粘性弱 黒色シルト層と白色砂層を帯状に含む
※ 1～6層間はそれぞれ砂利を挟む

北壁２
① 近現代の盛土・撹乱
⑨ 暗褐色土 しまりあり 粘性弱 炭化物（φ1～5㎜）少量
⑩ 暗褐色土 しまりあり 粘性弱 白色粘土ブロック（φ5～20㎜）多量 洪水層か
⑱ 暗褐色土 しまりあり 粘性弱 灰色シルトブロック（φ5～20㎜）多量 洪水層か
⑲ 暗褐色土 しまりあり 粘性弱 白色シルトブロック（φ5～20㎜）多量 洪水層か
㉑ 灰褐色土 しまりあり 粘性あり 白色粒子（φ1～5㎜）多量 瓦片少量 礫層
㉓ 暗褐色土 しまり・粘性弱 焼土ブロック・炭化物（φ5～10㎜）多量
㉕ 黒褐色土 しまり・粘性弱 焼土ブロック・炭化物（φ5㎜）多量
㉖ 灰色土 しまり・粘性弱 黒色シルトブロック（φ10～30㎜）多量
㉗ 黒褐色土 しまりあり 粘性弱 焼土ブロック・炭化物（φ5～20㎜）多量
㉘ 黄褐色砂 しまりあり 粘性弱
㉙ 灰色土 しまりあり 粘性弱 焼土粒・炭化物（φ1～5㎜）多量
㉝ 黒褐色土 しまりあり 粘性弱 炭化物（φ5～20㎜）多量
㉞ 灰褐色土 しまりあり 粘性弱 焼土ブロック・炭化物（φ5～10㎜）多量
㊱ 灰色粘土 しまりあり 粘性あり 焼土ブロック・炭化物（φ5～30㎜）多量
㊲ 暗褐色土 しまりあり 粘性弱 硬質シルト層 焼土ブロック・炭化物（φ5～10㎜）少量

0 2m
1:60

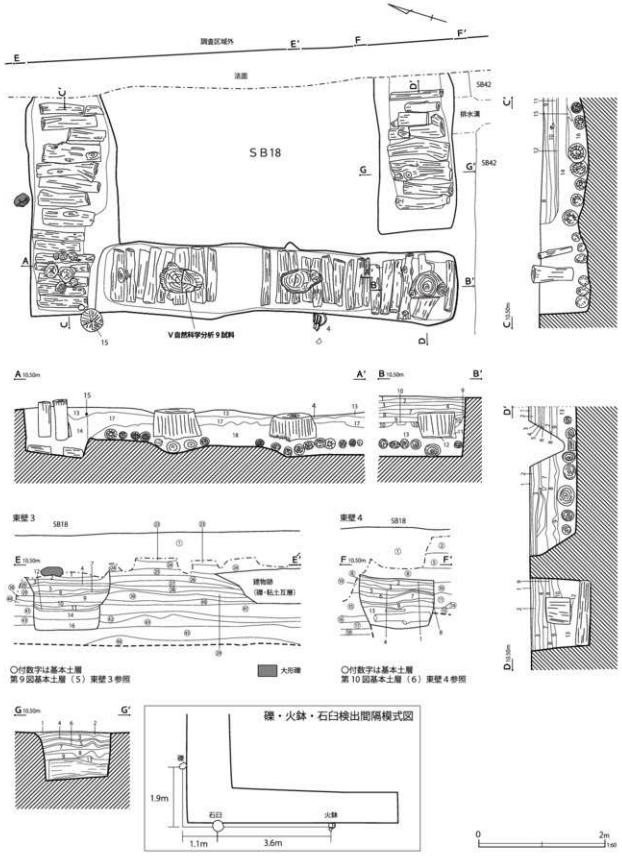
第 55 図　第 17 号建物跡



第 56 図　第 17 号建物跡出土遺物

第 15 表　第 17 号建物跡出土遺物観察表（第 56 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	(9.8)	[3.9]	－	－	15	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 焼継痕（端反碗）	
2	陶器	土瓶	－	[2.7]	7.0	K	10	良好	灰白	京都信楽系 内外面施釉 弱く被熱（黒化）	
3	陶器	蓋	－	1.2	2.9	－	100	普通	明褐灰	瀬戸美濃系	
4	瓦質土器	火鉢	－	[5.0]	－	HIK	5	普通	にぶい橙	外面施文・沈線内黒痕 内面煤付着 口唇部殻打痕 やや酸化炎焼成	
5	土師質土器	甕	－	[4.5]	－	ADEHIK	5	普通	にぶい褐	真壁系 口唇部ヘラ書き 内面黒色付着物	167-2
6	かわらけ	小皿	9.4	2.8	5.4	HK	100	普通	にぶい橙	底部糸切痕（右） 胎土砂質 油煙多く付着	102-5
7	瓦質土器	焙烙	(37.6)	5.4	(33.2)	CHIK	25	普通	にぶい橙	底部シワ状痕 内耳欠失 内面一部黒化 ほぼ酸化炎焼成	102-6
8	土製品	玉	径 1.7 厚さ 1.6 重さ 4.9			A	－	良好	橙	手捻り成形	240-2
9	木製品	漆椀	高さ [3.9] 横木取り							内面赤漆 外面黒漆	
10	銅製品	銭貨	径 24.1 厚さ 1.3 重さ 3.5							寛永通寶（新ヵ）	
11	銅製品	銭貨	径 23.3 厚さ 1.0 重さ 2.0							寛永通寶（新）	
12	石製品	砥石	長さ [7.9] 幅 3.8 厚さ 1.9 重さ 90.6							流紋岩 側面ノコギリ痕遺存 砥面 4	293-2



第 57 図　第 18 号建物跡（1）

東壁3
① 近現代の盛土・撹乱
⑦ 白灰色砂　しまり・粘性弱
⑧ 褐色土　しまりあり　粘性弱
⑨ 褐色土　しまりあり　粘性弱
⑩ 暗褐色土　しまりあり　粘性弱
⑪ 暗褐色土　しまりあり　粘性弱　砂少量
⑫ 暗褐色土　しまりあり　粘性弱　炭化物・焼土少量
⑬ 褐色土　しまりあり　粘性弱
⑭ 褐色土　しまりあり　粘性弱　小礫主体（φ10～40㎜）
⑮ 白灰色砂　しまり・粘性弱
⑯ 灰褐色土　炭化物少量　焼土ブロック多量
⑰ 砂　細粒　しまり弱
⑱ 灰褐色土　酸化鉄分多量　上面しまり極めて強（部分的）　粘性あり
　　炭化物少量
⑲ 明灰色土　部分的に青灰色　土色の境界は酸化鉄分が沈着
⑳ 灰褐色土　部分的に青灰色　しまり弱　20層に類似
　　中世の常滑焼甕片出土

東壁4
① 近現代の盛土・撹乱
② 灰褐色土　砂利・礫少量　しまり極めて強
　　上部は硬化面（旧地表面）
③ 灰褐色土　3・4層相当か
④ 灰褐色土　黄褐色シルトブロック多量　砂少量　しまりあり　粘性弱
　　整地層　上部は硬化面（旧地表面）
⑤ 暗灰色土　黄褐色シルトブロック・炭化物多量　上部は硬化面
⑥ 灰色砂　粗粒・砂礫少量　しまりなし
⑦ 灰褐色土　粗砂・シルトブロック少量　整地層
⑧ 暗灰褐色土　しまり弱　シルトブロック・砂少量　整地層　下部は硬化面
⑨ 砂　細粒　しまり弱　東壁3第42層相当
⑩ 灰褐色土　酸化鉄分多量　上面しまり極めて強（部分的）　粘性あり
　　炭化物少量　東壁3第43層相当
⑪ 明灰色土　部分的に青灰　土色の境界は酸化鉄分が沈着
　　東壁3第45層相当

SB18　A-A'　C-C'　E-E'
1　暗色土　しまり強　粘性弱
2　白灰色土　礫層　しまり強　粘性弱
3　灰色粘土　しまり強　粘性弱
4　白灰色土　礫層　しまり強　粘性弱
5　灰色粘土　しまり強　粘性弱
6　白灰色土　礫層　しまり強　粘性弱
7　灰色粘土　しまり強　粘性弱
8　灰色粘土　しまり強
9　赤褐色土　しまり強　粘性弱　礫（φ10～30㎜）多量
10　灰色粘土　しまり強
11　白灰色土　礫層　しまり強　粘性弱
12　灰色粘土　しまり強　粘性弱
13　灰色土　しまり強　粘性弱　礫（φ10～50㎜）多量
14　灰色砂　しまり強
15　灰色粘土　しまり強
16　暗灰色粘土　しまり強
17　灰色粘土　しまり強
18　灰色砂　しまり強

SB18　B-B'　D-D'　F-F'　G-G'
1　暗灰色土　暗灰色シルトブロックと灰色シルトブロックの混土　暗灰色土の割合高い
2　黄褐色砂　扁平な角砂利（φ10～3㎜）を充填
3　暗灰色土　暗灰色シルトブロックと灰色シルトブロックの混土　暗灰色土の割合高い
4　黄褐色砂　扁平な角砂利（φ10～3㎜）を充填
5　暗灰色土　暗灰色シルトブロックと灰色シルトブロックの混土　暗灰色土の割合高い
6　黄褐色砂　扁平な角砂利（φ10～3㎜）を充填
7　灰色土　暗灰色シルトブロックと灰色シルトブロックの混土　灰色土の割合高い
8　黄褐色砂　扁平な角砂利（φ10～3㎜）を充填
9　暗灰色土　暗灰色シルトブロックと灰色シルトブロックの混土　暗灰色土の割合高い
10　灰色土　暗灰色シルトブロックと灰色シルトブロックの混土　灰色土の割合高い
11　暗灰色土
12　暗灰色土
13　黄褐色砂　土台の切株・丸太材周辺に充填された砂　粒子粗い　白色の軽石状粒子含む

第58図　第18号建物跡（2）

地業の中軸からの距離は約0.90ｍである。建物跡との関連性が示唆的であるため、第57図で位置と模式図を示した。

また、平面では検出されていないが、東壁3の南端部に土層の類似する建物跡がみられた。構築面がほぼ一致することから、本建物跡に伴うもの、もしくは建て替え後の建物跡かもしれない。

出土遺物には瀬戸美濃系磁器の蛇の目状高台皿（第59図1）、真壁系土器の甕があり、19世紀前半の様相である。

東壁3・4をみると、建物跡は東壁4の第8層に覆われていた。文化・文政期の火災層より、下位に位置するため、遺物は建物の解体以降に混入したものとみるのが妥当かもしれない。

したがって、19世紀初頭以前に構築された建物跡と考えられる。

第59図に出土遺物を示した。1は瀬戸美濃系磁器の皿で、蛇の目状高台のものである。2は肥前系磁器の皿で、内面には龍文が染付される。文様は輪郭線を描いた後、内部を濃塗りする丁寧な絵付けである。

3は瓦質土器火鉢の脚と判断した。下面から大きく孔が穿たれるように窪む。軟質で、角閃石が多く含まれる。4は在地系の瓦質土器火鉢である。胎土は還元炎焼成されるが、表裏面は黄色味が強い。外面下位はケズリ整形、内面下位はヘラナデ調整である。脚は一部のみの遺存だが、平面形が楕円形になるものと思われる。

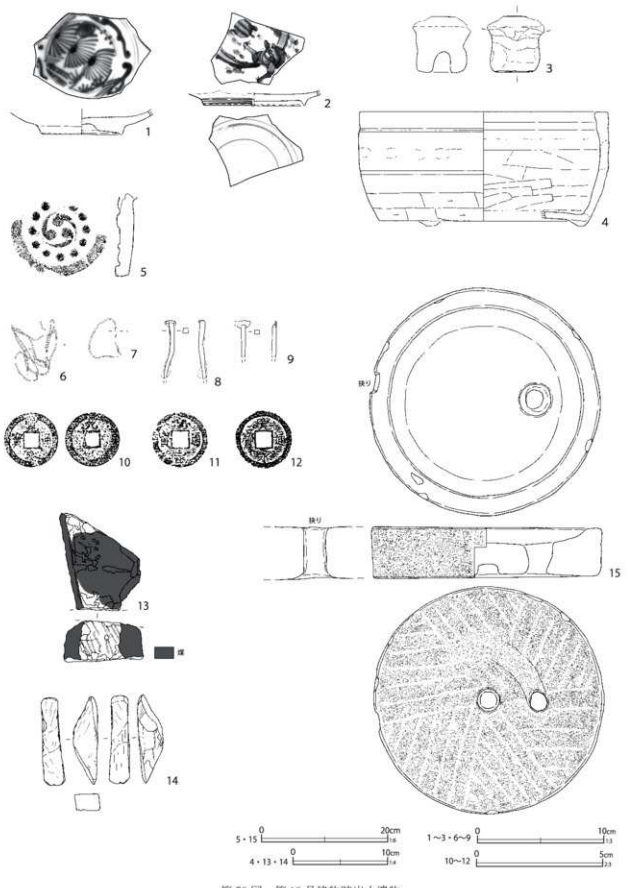
5は軒丸瓦である。左巻きの三巴文で、十二連珠である。粉っぽさが感じられる緻密な胎土に、雲母と角閃石が少量含まれる。

6・7は銅製の鉦金である。8・9は鉄釘である。先端が欠損している。10～12は寛永通寶である。10は「元」の背文字がある。

13は凝灰岩製の石製品で、表面が滑らかな状態であったことから砥石と判断した。側面にはチョウナ状工具と思われる刃幅の広い工具痕が連続的にみられる。表面と破断面に煤が付着する。

14は流紋岩製の砥石で、青味がかった緑色を呈する。形状から持ち砥として利用されたのであろう。砥面は4面である。

15は花崗岩製石臼の上臼である。黒雲母とカ



第 59 図　第 18 号建物跡出土遺物

第16表　第18号建物跡出土遺物観察表（第59図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	皿	－	[2.0]	6.2	－	20	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 内面染付 蛇の目状高台	
2	磁器	皿	－	[1.2]	(8.0)	－	15	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付	102-7
3	瓦質土器	火鉢	－	[4.4]	－	CHK	5	普通	灰白	脚部破片 燻す	
4	瓦質土器	火鉢	(25.9)	12.1	(22.0)	CEHK	25	普通	にぶい黄橙	砂目底 やや酸化炎焼成 内面煤付着	
5	瓦	軒丸瓦	幅15.2 厚さ2.6 径15.2			ACIK	－	普通	灰白	左巻き 十二連三巴文	245-1
6	銅製品	針金	縦4.9 横3.7 厚さ0.1 重さ1.9								
7	銅製品	針金	縦3.2 横2.6 厚さ0.1 重さ0.4								
8	鉄製品	釘	長さ[4.6] 幅0.4 厚さ0.4 重さ3.0								
9	鉄製品	釘	長さ[2.9] 幅0.4 厚さ0.3 重さ1.6								
10	銅製品	銭貨	径22.0 厚さ1.3 重さ2.1							寛永通寶（新）背元	
11	銅製品	銭貨	径22.4 厚さ0.9 重さ1.4							寛永通寶（新）	
12	銅製品	銭貨	径23.3 厚さ1.1 重さ2.6							寛永通寶（新）	
13	石製品	砥石	長さ[10.4] 幅[8.4] 厚さ[4.3] 重さ364.3							凝灰岩 側面幅広工具痕 一部煤付着	298-4
14	石製品	砥石	長さ9.3 幅2.6 厚さ2.3 重さ56.7							流紋岩（緑色）裏面側痕 砥面4	293-2
15	石製品	石臼	径37.0 器高8.9 重さ17000.0							花崗岩 上臼 下面摺目（摩耗・光沢）側面挟り 供給孔1 芯棒受穴1 上面摩耗	289-2

り長石に富んだ、いわゆる「桜御影石」に類似する。側面の挟りは挽き手の接続部であろう。摺目は強く摩耗しており、光沢が部分的に認められる。

第20号建物跡（第60～62図）

ピットや桶の配列や掘り方が一定でない歪な形状の布地業であること等、建物の地業として規格性がみられないことについて、やや疑問が生じるが、発掘調査時の所見にしたがって建物跡と判断した。

Ｂ５－Ｊ７・８グリッドに位置し、重複する第47号埋設桶、第27号溝跡、第90号土壙より古い。規模は長軸7.90ｍ、短軸7.30ｍ、長軸方位Ｎ－70°－Ｅである。地業の底面付近を検出した。

幅にばらつきがある「ロ」字状の布地業で、北西の隅がブリッジ状に掘り残されていた。さらに、北東の隅が東へ張り出していた。北西の隅、南東の隅は底面に段が付いていた。

埋設桶が遺存したピットがみられることから、「樽地業」の可能性も考えられる。地業内は固くしまった砂が充填され、遺存状態が良好な桶１内部の覆土は固くしまったシルトであった。

桶１を地業の一部とするならば、地業の深さは、0.5ｍ程度と考えられる。ただし、桶１・２で底面の高さにかなり差があり、地業の一部としては不自然な点もある。

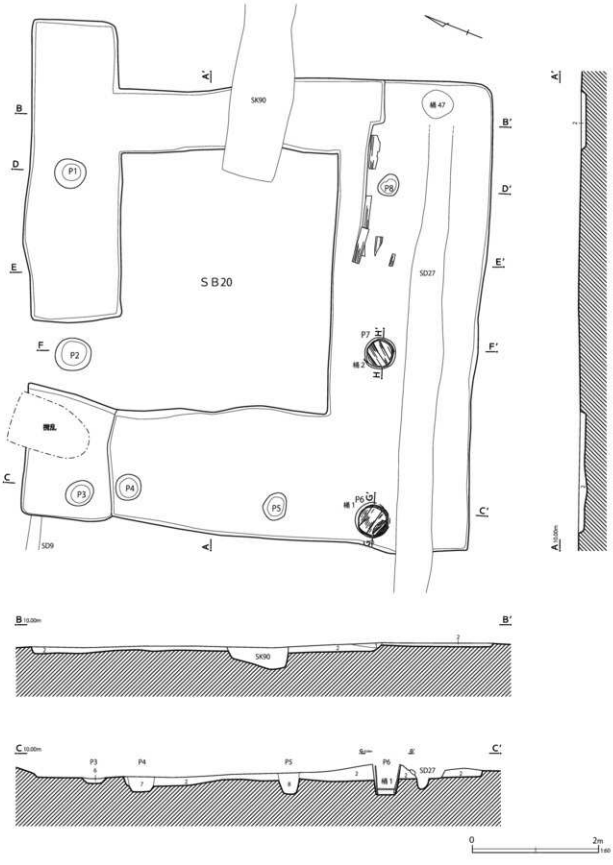
出土遺物には18世紀後葉頃の陶磁器が多くみられるが、瀬戸美濃系磁器の端反碗の細片や肥前系磁器の蛸唐草文御神酒徳利等がみられ、19世紀前葉まで下る可能性がある。重複している第90号土壙は19世紀前葉に廃絶しているため、建物跡は18世紀後葉から19世紀前葉の間に構築されたと考えられる。

第62図に出土遺物を示した。１は肥前系磁器の広東碗の蓋である。薄手で、崩れた草花文が描かれる。

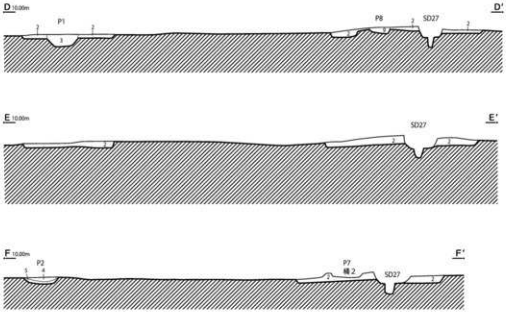
２は肥前系磁器の広東碗である。３は肥前系磁器の筒形碗で、胎質・釉調ともに悪く、釉薬はやや灰色がかっている。外面に菊花文が描かれる。断面に煤が付着しており、若干被熱しているかもしれない。

４は陶器の柿釉鍋で小形・薄手のものである。外面下位に細かなケズリが確認され、顕著に煤が付着する。使用痕と考えられる。このほか、磁器の小広東碗に、第17号建物跡から出土した破片と接合した個体がみられた（非掲載）。

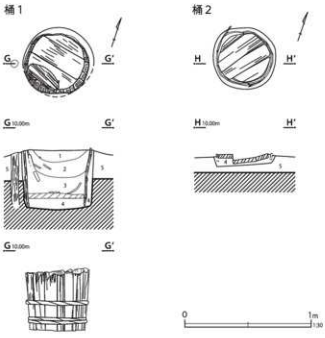
５は木製品で、無眼下駄である。６は鉄製品で、刀子である。７は器種不詳の鉄製品である。８・９は鉄釘である。



第 60 図　第 20 号建物跡（1）

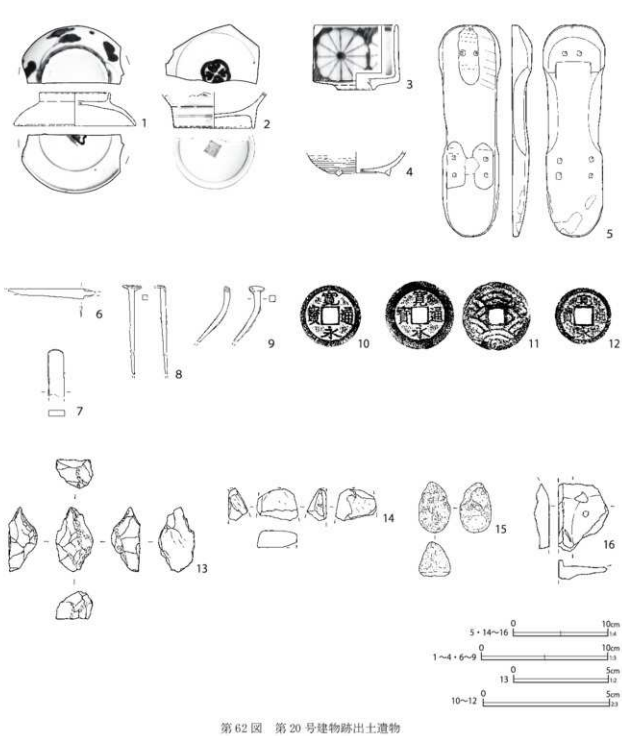


SB20
1　暗褐色土　しまり・粘性強
2　暗褐色砂　しまり強　炭化物（φ5㎜程）少量　黄褐色シルトブロック多量
3　黒褐色土　しまり強　粘性弱　炭化物（φ5～10㎜）多量（P1）
4　黄褐色土　しまり強　粘性弱　焼土粒子（φ1～5㎜）・炭化物少量（P2）
5　黒色土　　炭化物層　しまり弱　粘性強（P2）
6　暗褐色砂　しまり強　炭化物（φ5～10㎜）多量（P3）
7　暗褐色砂　しまり強　炭化物（φ5～10㎜）多量（P4）
8　黒褐色土　しまり強　粘性弱　焼土ブロック（φ5～10㎜）・炭化物多量（P5）
9　赤褐色土　焼土層　しまり強　粘性弱　焼土が現に堆積（P8）



SB20　桶1・2
1　灰褐色土　しまり強　粘性弱
2　灰色土　　しまり強　粘性弱　炭化物（φ1～5㎜）少量
3　黒褐色土　しまり・粘性強　炭化物（φ5～10㎜）多量
4　青灰色土　しまり強　黄褐色シルトブロック多量
5　暗褐色砂　しまり強　炭化物（φ5㎜程）少量
　　黄褐色シルトブロック多量　SB20の掘方

第61図　第20号建物跡（2）



第 62 図　第 20 号建物跡出土遺物

10 ～ 12 は寛永通寶で、そのうち 10 は古寛永である。

13 は玉髄製の火打石である。やや潰れた使用痕がみられる。14 は流紋岩製の砥石で、持ち砥の先端部と思われる。酸化鉄分が著しく付着する。

15 は軽石製の磨石で、使用面には段が認められる。16 は凝灰岩製の硯で、中央は使用により窪んでいる。

第 42 号建物跡（第 63 ～ 65 図）

Ｃ６－Ｈ１・２、Ｉ１・２グリッドに位置し、布地業の東、西、南部は調査区域外へ延びていた。第 393・432 号土壙より新しい。また、第 391・

第17表　第20号建物跡出土遺物観察表（第62図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	蓋	(5.4)	2.6	(9.5)	－	45	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付（広東碗の蓋）	
2	磁器	碗	－	[2.8]	6.2	－	10	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付（広東碗）	
3	磁器	碗	(6.4)	5.1	(3.0)	－	30	良好	灰白	肥前系 内外面施釉・染付（筒形碗）櫛1	
4	陶器	鍋	－	[1.7]	(4.0)	K	10	良好	にぶい黄橙	内外面柿釉 外面下位煤付着 小形	
5	木製品	下駄	長さ22.4 幅5.6 高さ2.1 板目							無眼下駄 木釘6 釘孔1	
6	鉄製品	刀子	長さ[7.0] 刃長[6.0] 刃幅0.8 背幅0.2 重さ2.8							P2	
7	鉄製品	不明	縦[3.8] 横1.3 厚さ0.5 重さ11.3								
8	鉄製品	釘	長さ[7.1] 幅0.4 厚さ0.4 重さ5.3								
9	鉄製品	釘	長さ[4.4] 幅0.5 厚さ0.5 重さ4.6								
10	銅製品	銭貨	径24.8 厚さ1.1 重さ3.4							寛永通寶（古）	281-9
11	銅製品	銭貨	径27.8 厚さ1.3 重さ3.9							寛永通寶（新）21波	
12	銅製品	銭貨	径22.9 厚さ1.3 重さ2.4							寛永通寶（新）	
13	石製品	火打石	長さ3.4 幅1.9 厚さ1.5 重さ8.5							玉髄 使用痕あり	291-4
14	石製品	砥石	長さ[3.4] 幅4.3 厚さ2.0 重さ25.6							流紋岩 砥面4	
15	石製品	磨石	長さ5.3 幅3.3 厚さ3.6 重さ16.6							軽石 使用面1 使用痕あり	295-2
16	石製品	硯	長さ[7.2] 幅[5.3] 器高[2.1] 重さ47.8							凝灰岩 内面黒色物質付着・回み	296-1

392・411・434号土壙と重複していたが、新旧関係は不詳である。

検出できた部分の規模は長軸6.55 m以上、短軸6.20 m以上、深さ0.14～0.48 m、長軸方位はN－18°－Wである。

調査区の南東隅では、地業の一部が僅かに検出された。東西に延びる短い布地業ないし壇地業と思われる。北部の布地業と西部の布地業との間はブリッジ状に掘り残されていた。発掘段階では北部の地業と西部の地業が独立したものと認識された。しかし、両者の布地業の底面のレベルが同じであったため、整理段階で同一の建物跡とした。

北部と南西部の地業底面には、6本一組を単位とした長さ1.40 m以上の捨て杭が打ち込まれていた。北の捨て杭の周囲は、若干堀り窪められていた。また、南西部の地業には丸木が枕木として並べられていた。建物跡の検出面には、2箇所に大形の自然礫が複数まとめて設置されていた。

充填土は小礫、砂、シルトで強固に突き固められていた。堅固な地業であったことから、瓦葺きの重厚な建物であったと考えられる。

出土遺物は肥前系磁器の広東碗の蓋が最新で、全体的には17～18世紀後半の陶磁器が多い。

基本土層東壁4・南壁（第4・63図）をみると、地業は焼土ブロックと炭化物を多量に含む。火災層（第6－1層）を構築面としていた。火災層は、文政期の火災によるものと思われる。この層の下には暗灰色シルトがみられ、その直下には文化期の火災によると考えられる火災層（第6－3層）がみえた。また、次冊報告である基本土層西壁でも文化・文政期と考えられる火災層がみられ、北部布地業の構築面とされていた。

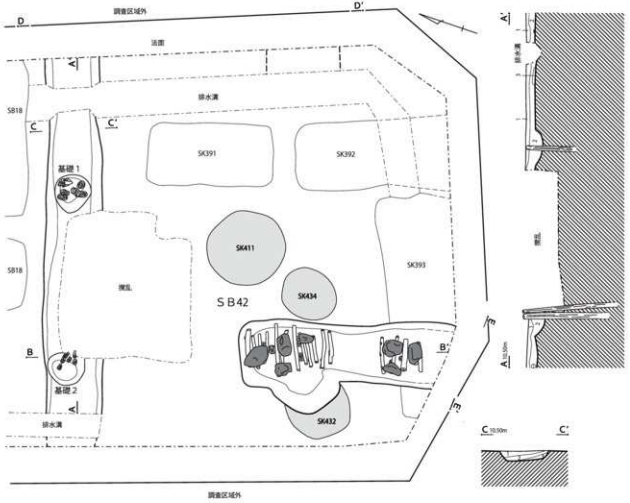
したがって、建物は文政期の火災直後に構築されたと推定される。出土遺物は下層の遺構から混入したと考えられ、直接年代を示すものは認められなかった。

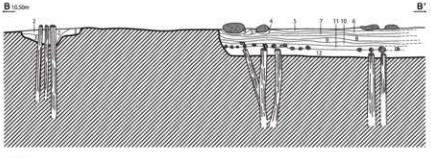
第65図に出土遺物を示した。1は西部の地業から出土した肥前系磁器の広東碗で、表裏・断面に煤が付着する。

3は瀬戸美濃系陶器の刷毛目碗で、高台脇の削り込みはほとんど痕跡化しており、全体は扁平である。18世紀後葉以降に位置づけられ、1とほぼ同時期であろう。高台内に墨書が認められる。

本遺構からは、下層からの巻き上げられたと思われる17世紀段階の遺物が多く出土した。このうち、2は西部の地業から出土した瀬戸美濃系陶器の天目碗で、いわゆる白天目である。

4は瀬戸美濃系陶器の鉄絵志野皿、5は瀬戸

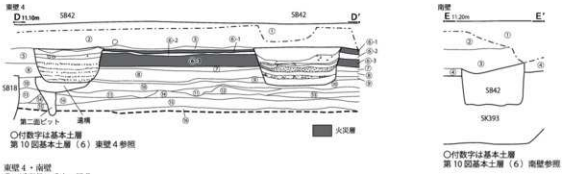




SB42

1	暗灰色土	シルトブロック・焼土ブロック多量
2	暗灰色土	瓦片・砂利（丸・角半々）からなる層
3	暗灰色砂	細粒
4	暗灰色粘土	炭化物少量
5	褐色砂	酸化鉄分少量　粗砂
6	暗灰色土	焼土ブロック（φ1㎝以下）多量
7	砂利	川砂利（φ3㎝以下）・砂少量
8	暗灰色土	炭化物（φ1㎝前後）・焼土ブロック多量
9	褐色土	細かい砂　酸化鉄分多量
10	暗灰色土	炭化物（φ3㎝以下）・焼土ブロック少量
11	砂利	川砂利（φ3㎝前後）・砂少量
12	暗灰色土	炭化物（φ3㎝前後）・焼土ブロック少量

第63図　第42号建物跡（1）



東壁4・南壁
① 近現代の盛土・撹乱
② 灰褐色土　砂利・瓦礫少量　しまり極めて強　上部は硬化面（旧地表面）
③ 灰褐色土　しまり弱　炭化物少量　焼土微量　砂少量　整地層
④ 灰褐色土　しまりあり　炭化物・シルトブロック少量　整地層　上部は硬化面（旧地表面か）
⑤ 灰褐色土　③～⑥層相当か
⑥ 暗赤褐色土　焼土（壁土含む）ブロック・炭化物（木片・繊維状）・灰褐色シルトブロック多量　しまり弱　火災後の整地層
3層に細分化される　⑥-1は⑥-3に酷似　⑥-2は炭色シルトブロックを含み、焼土・炭化物がほぼ含まれない灰褐色土
⑥-3は最下部に焼けた硬化面・厚い炭化物層あり
⑦ 暗灰褐色土　しまり極めて強　上部は硬化面（旧地表面か）
⑧ 灰褐色土　黄褐色シルトブロック多量　砂少量　しまりあり　粘性弱　整地層　上部は硬化面（旧地表面）
⑨ 暗灰褐色土　砂・シルトブロック多量　整地層
⑩ 暗灰色土　黄褐色シルトブロック・炭化物多量　上部は硬化面
⑪ 灰色砂　粗粒・砂礫少量　しまりなし
⑫ 灰褐色砂　細粒　しまりなし
⑬ 暗褐色土　しまり弱　砂多量　黄褐色シルトブロック・砂粒少量
⑭ 灰褐色土　粗砂・シルトブロック少量　整地層
⑮ 暗灰褐色土　しまり弱　シルトブロック・砂少量　整地層　下部は硬化面
⑯ 砂　細粒　しまり弱　東壁3第42層相当

0　2m
1:60

第64図　第42号建物跡（2）

美濃系陶器の灰釉皿で、口縁部は少し端反りになる。内面に直重ねによる重ね焼き痕が残る。高台は削り出し高台で、畳付部が鋭く尖る。

6は肥前系陶器の皿で、全体に藁灰釉が掛けられるが、釉が激しく発泡してピンホール状になる。削り込み高台である。高台内に砂目が遺存し、内底面にも目跡が残る。これらはいずれも17世紀前葉頃の遺物である。

7は瀬戸美濃系陶器の柿釉灯明皿で、油受皿である。外面下位には二重写し状の重ね焼き痕がみられる。その痕跡は各々の径が異なり、8.1cmと8.6cmである。受部上端の径は8.5cmである。

8は瀬戸美濃系陶器のべこかん徳利であるが、釉は通常の柿釉と異なり、色調が淡い茶色、強い光沢がある。外面のみならず、内面にも同様の釉が均等にまわっている。

9はかわらけの小皿で、径5cm強と小形のものである。器壁は厚手、胎土は粉っぽい印象だが、在地系である。

10は煙管の雁首である。11～13は鉄釘である。14～25は銭貨である。14は元豊通寶である。15～20は古寛永である。21～24は新寛永である。25は雁首銭である。

26は青味がかった緑色味を帯びる流紋岩製の砥石である。形状から持ち砥として利用されたと考えられる。砥面は4面である。

（2）基礎状遺構

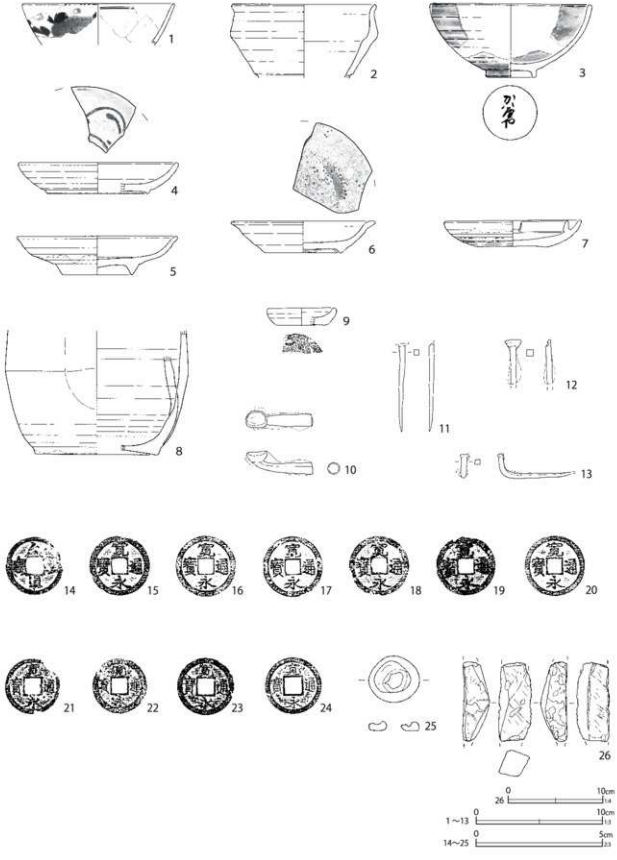
建物を構成する地業跡と考えられるが、一部分の検出に留まり、周囲の遺構との関連が把握し難い遺構を基礎状遺構として報告する。本書掲載分は3基である。

第5号基礎状遺構（第66図）

C5－C9・10グリッドに位置し、第3号建物跡、第8号土壙（次掲報告）より古い。覆土の状況は確認し得なかったが、西部に礫が集中していた。掘り込みが浅く、区画溝等の可能性もあるが、さらに西側には検出されなかった。

基本土層東壁2（第8・66図）をみると、構築面は文化・文政期の火災層と考えられる第9層より下位であった。

出土した陶磁器は極めて僅かだが、図示した陶磁器と構築面から、18世紀後葉に構築されたと



第 65 図　第 42 号建物跡出土遺物

第 18 表　第 42 号建物跡出土遺物観察表（第 65 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	(11.8)	[3.2]	－	－	5	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 弱く被熱（広東碗）西布地業	
2	陶器	碗	(11.2)	[5.8]	－	EIK	10	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面長石釉（白天目碗）西布地業	102-8
3	陶器	碗	(12.4)	5.7	3.4	I	15	良好	淡黄	瀬戸美濃系 内外面刷毛目釉 高台内墨書「かハ辺や」上下接点無い 2 破片から図上復元 北布地業	103-1 167-3
4	陶器	皿	(12.4)	2.4	(8.0)	－	15	良好	にぶい橙	瀬戸美濃系 内外面長石釉 内面鉄絵（鉄絵志野） 北布地業	
5	陶器	皿	(12.4)	3.0	(5.4)	IK	35	良好	灰	瀬戸美濃系 内外面灰釉 内面底重ね焼き痕 西布地業	
6	陶器	皿	(10.2)	2.5	(6.0)	IK	25	良好	にぶい黄橙	肥前系 内外面蘿灰釉 高台内砂目痕 内底面目跡 西布地業	
7	陶器	灯明皿	10.6	2.1	5.6	IK	75	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面柿釉・外面下位拭き取り・重ね焼き痕 西布地業	
8	陶器	徳利	－	[9.8]	(9.7)	IK	15	良好	灰黄褐	瀬戸美濃系 内外面柿釉（淡い）・底部拭き取り（べこかん徳利）西布地業	
9	かわらけ	小皿	(5.2)	1.3	(4.0)	GHK	25	普通	にぶい黄橙	底部糸切痕（右） 西布地業	
10	銅製品	煙管	長さ 5.3 火皿径 1.6 × 1.3 小口径 0.9 重さ 11.6							雁首	
11	鉄製品	釘	長さ [7.0] 幅 0.4 厚さ 0.4 重さ 4.0								
12	鉄製品	釘	長さ [3.4] 幅 0.5 厚さ 0.5 重さ 4.0								
13	鉄製品	釘	長さ [1.9] 幅 0.4 厚さ 0.4 重さ 5.0								
14	銅製品	銭貨	径 23.7 厚さ 1.1 重さ 2.2							元豊通寶	
15	銅製品	銭貨	径 24.5 厚さ 1.2 重さ 2.7							寛永通寶（古）	
16	銅製品	銭貨	径 24.8 厚さ 1.6 重さ 4.0							寛永通寶（古）	
17	銅製品	銭貨	径 24.7 厚さ 2.0 重さ 4.1							寛永通寶（古）	
18	銅製品	銭貨	径 24.7 厚さ 1.6 重さ 3.7							寛永通寶（古）	
19	銅製品	銭貨	径 24.1 厚さ 1.9 重さ 3.0							寛永通寶（古）	
20	銅製品	銭貨	径 24.6 厚さ 1.3 重さ 3.1							寛永通寶（古）	
21	銅製品	銭貨	径 22.6 厚さ 1.2 重さ 2.6							寛永通寶（新）	
22	銅製品	銭貨	径 22.3 厚さ 1.4 重さ 2.0							寛永通寶（新）	
23	銅製品	銭貨	径 23.2 厚さ 1.1 重さ 2.6							寛永通寶（新）	
24	銅製品	銭貨	径 22.9 厚さ 1.2 重さ 2.4							寛永通寶（新）	
25	銅製品	雁首銭	径 20.0 × 18.2 厚さ 0.4 重さ 2.8								281-13
26	石製品	砥石	長さ [8.4] 幅 3.4 厚さ 2.8 重さ 92.5							流紋岩（緑色）砥面 4	293-2

考えられる。

第 66 図 1 ～ 3 に出土遺物を示した。1 は肥前系磁器の碗で、高台が「ハ」字状に開き、腰が張るものである。

2 は鉄釘、3 は寛永通寶の四文銭である。

第 6 号基礎状遺構（第 66 図）

Ｃ５－Ａ９グリッドに位置し、重複する第９・10 号建物跡の内側で検出された。遺構は調査区域外の東側へ延びていた。形状は隅丸長方形と推定される。底面の東側には段が認められた。

覆土は小礫としまりの強いシルト、砂の互層で、最下層は瓦片を含んでいた。第９号建物跡の覆土に類似していた。第６層は土層断面の形状から切石材を抜き取った痕跡と考えられる。基礎内からは切石材の破片（第 66 図４）が出土した。

基本土層東壁２（第８・66 図）をみると、上部は撹乱を受けているが、第４層を掘り込んでいたため、第９号建物跡に関連する施設の可能性が疑われる。構築時期は 19 世紀後葉以降と考えられる。

第 66 図４に切石材の破片を示した。軽石質の凝灰岩で、いわゆる「大谷石」である。側面には工具による削痕が認められる。

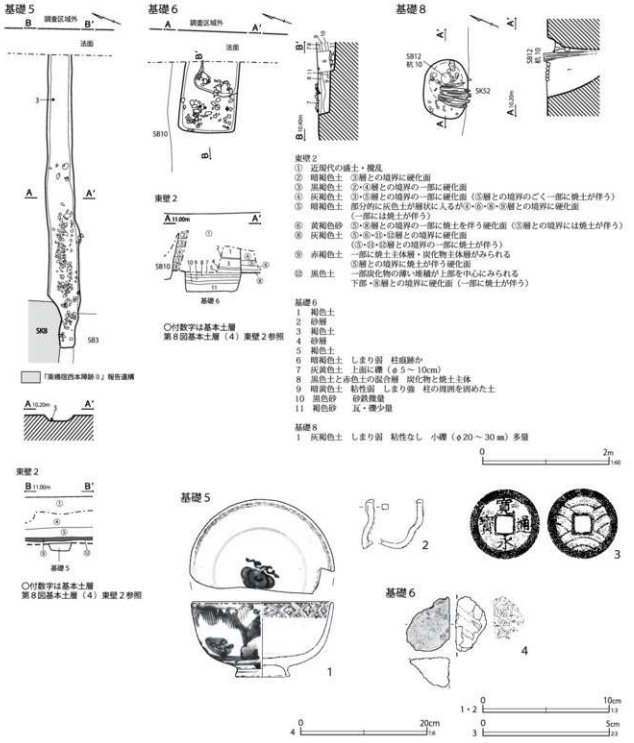
第８号基礎状遺構（第 66 図）

Ｂ５－Ｉ７グリッドに位置し、第 12 号建物跡より古い。発掘段階では、第 12 号建物跡の地業を構成するものとされていたが、建物跡が捨て杭のみ遺存している状況であったことから、整理段

第 19 表　第一面基礎状遺構一覧表

単位：m

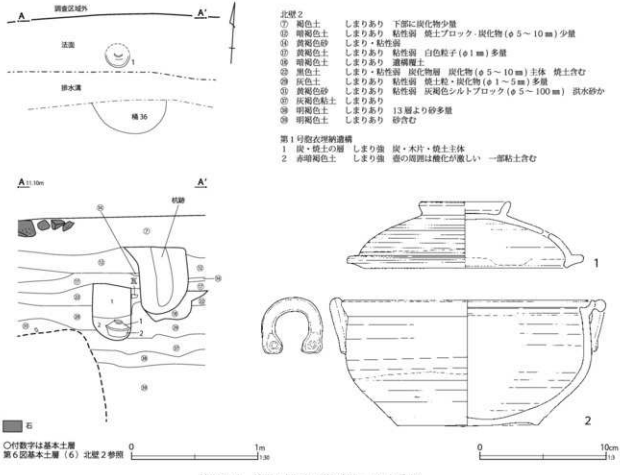
番号	区画	グリッド	形態	長軸	短軸	深さ	方位	備考
5	7	C5-C9/10	不整形	[4.64]	0.48	0.10	N-69° -E	SB3, SK8 より古
6	5	C5-A9	隅丸長方形	[1.14]	0.90	0.75	N-76° -E	SB9・10 と重複
8	2	B5-17	楕円形	0.94	0.70	[0.75]	N-70° -E	SB12 より古 SK52 と隣接



第 66 図　第 5・6・8 号基礎状遺構・第 5・6 号基礎状遺構出土遺物

第 20 表　第５・６号基礎状遺構出土遺物観察表（第 66 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	磁器	碗	(11.0)	5.9	4.2	－	50	良好	灰白	基礎５	肥前系　内外面施釉・染付	103-2
2	鉄製品	釘	長さ[3.9] 幅 0.5 厚さ 0.4 重さ 4.4							基礎５		
3	銅製品	銭貨	径 28.3 厚さ 1.0 重さ 4.1							基礎５	寛永通寶（新）11 波	
4	石製品	切石材	長さ[8.7] 幅[6.9] 厚さ[4.9] 重さ 159.4							基礎６	凝灰岩（大谷石）　側面削痕　上面摩耗	297-3



第 67 図　第１号胞衣埋納遺構・出土遺物

第 21 表　第１号胞衣埋納遺構出土遺物観察表（第 67 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	陶器	蓋	7.1	5.2	16.0	EIK	100	良好	橙	内面透明釉 外面鉄釉 胞衣容器の蓋として使用	103-3
2	陶器	鍋	19.5	10.1	11.1	EIK	100	良好	橙	内面透明釉 外面鉄釉 体部外面煤付着 胞衣容器として使用	103-3

階で第８号基礎状遺構に振り替えた。

楕円形のピット状の掘り込みで、底面は検出できなかった。充填土は小礫を多量に含む単層で、検出面には５本の丸太が並んで設置されていた。

周辺に関連性を示唆する建物はなく、遺物は出土していない。時期は不明である。

（３）胞衣埋納遺構

調査区北部の壁際で、胞衣埋納遺構が１基検出された。第 67 図では基本土層北壁２（第６図）の一部を示した。

第１号胞衣埋納遺構（第 67 図）

Ｂ５－Ｉ６グリッドの調査区北壁際に位置し、底面では胞衣容器が検出された。遺構は北壁２の

第22層を掘り込み面とし、第17層に覆われていた。掘り方の上層は、炭化物、木片、焼土で構成され、下層は粘土を含み著しく酸化したシルトであった。

掘り方は径0.32m、深さ0.44mのピット状で、容器は陶器の鍋を転用したものである。

掘り込み面と使用された鍋の特徴から19世紀後葉以降に埋納されたと考えられる。建物跡との位置関係が問題になるが、周囲に建物跡は検出されなかった。

第67図に出土した胞衣容器を示した。1・2は胞衣容器に用いられた陶器の両手鍋と蓋である。産地は不詳で、地方窯系と考えられる。胎土は赤味のある橙色である。釉薬は外面が飴釉状の鉄釉、内面が透明釉である。

1は蓋で、環状のつまみは大きい。孔が1つ認められる。2は鍋の身で、底部から体部下位（露胎部）は回転ケズリ痕が認められる。体部外面に煤が付着し、内底面中心も僅かに黒化している。

（4）埋設桶

本書掲載分の第一面埋設桶は10基である。第37・47号埋設桶等、桶の端部が炭化しているものがみられ、一部の埋設桶は文化・文政期の火災を受けた可能性がある。また、第7号埋設桶は第1号溝跡に、第47号埋設桶は第27号溝跡に接続する一連の遺構である可能性が高い。

位置・規模等の基本的な情報は第22表にまとめた。遺構は第68・69図、遺物は第70～74図に各遺構ごとに掲載した。

第7号埋設桶（第68・70図）

C5－B8、C8・9グリッドに位置する。第1号溝跡と重複するが、埋設桶に接続すると思われ、同時期に機能していたと考えられる。集水桝としての機能が示唆される。下部のみが検出されており、側板は抜きとられていた。底面に底板の一部と箍が遺存していた。残存する掘り方の径は0.65m、深さ0.20mである。

覆土はしまりの強いシルトで、最下層は腐植土層が堆積していた。

出土遺物に瀬戸美濃系磁器の湯呑碗がみられることから、推定廃絶時期は19世紀中葉である。

第70図に出土遺物を示した。1は肥前系磁器の湯呑碗である。口唇部は角張り、内面に角渦文が染付される。2は瀬戸美濃系磁器の湯呑碗である。

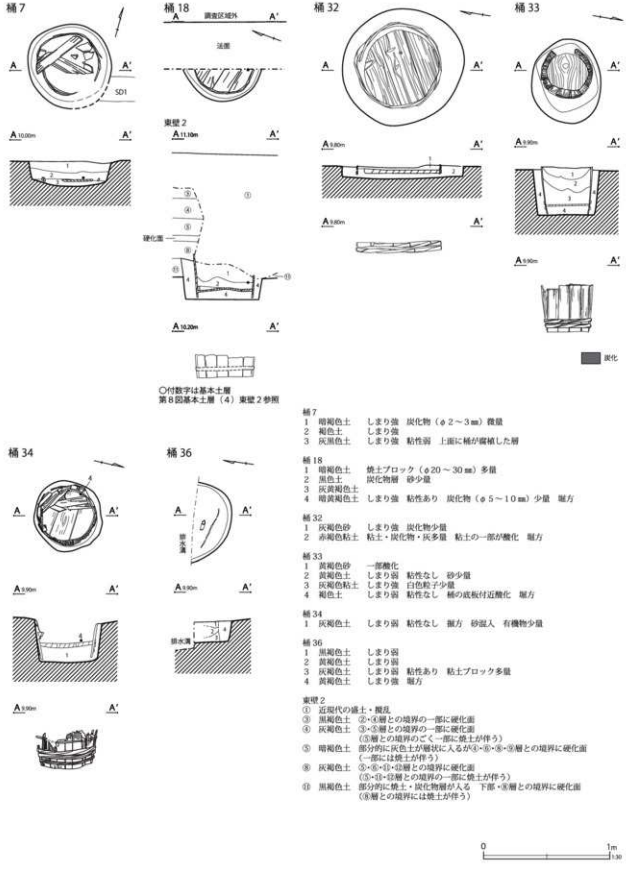
3は鉄釘である。4は白色の流紋岩製砥石である。表面にはノコギリ状工具痕に伴う段差が、左側面にはノコギリ状工具痕が遺存する。右側面には刃幅の広い工具痕がみられる。砥面は2面遺存している。形状から置き砥として用いられたと考えられる。

第18号埋設桶（第68図）

C5－B9グリッドに位置し、東側は調査区域外であった。径0.62mの掘り方内に、残存径

第22表　第一面埋設桶一覧表　　単位：m

番号	区画	グリッド	外径	高さ	内法		掘り方径	深さ	備考
					内径	深さ			
7	5	C5-B8, C8/9	－	－	－	－	0.65	0.20	SD1と重複
18	6	C5-B9	[0.50]	[0.34]	[0.43]	[0.30]	0.62	0.36	
32	1	B5-I6	0.68	[0.08]	－	－	0.96	0.10	
33	1	B5-I6	0.41	[0.38]	0.36	0.30	0.68	0.40	
34	1	B5-I6	[0.48]	[0.33]	[0.42]	[0.16]	0.57	0.32	
36	1	B5-I6	－	－	－	－	(0.64)	0.15	
37	2	B5-J6	[0.52]	[0.42]	[0.46]	[0.28]	0.62	0.45	
47	3	B5-J7/8	[0.48]	[0.40]	[0.40]	[0.27]	0.51	0.40	SB20より新
49	2	B5-J6	[0.50]	[0.30]	[0.48]	[0.25]	0.58	0.30	SD10と重複
51	10	C6-F1	－	－	－	－	[0.54]	0.10	



桶 7
1　暗褐色土　しまり強　炭化物（φ２～３㎜）微量
2　褐色土　しまり強
3　灰黒色土　しまり強　粘性弱　上面に桶が腐植した層

桶 18
1　暗褐色土　焼土ブロック（φ20～30㎜）多量
2　黒色土　炭化物層　砂少量
3　灰黄褐色土
4　暗灰褐色土　しまり強　粘性あり　炭化物（φ５～10㎜）少量　堀方

桶 32
1　灰褐色砂　しまり強　炭化物少量
2　赤褐色粘土　粘土・炭化物・灰多量　粘土の一部が酸化　堀方

桶 33
1　黄褐色砂　一部酸化
2　黄褐色土　しまり弱　粘性なし　砂少量
3　灰褐色粘土　しまり強　白色粒子少量
4　褐色土　しまり弱　粘性なし　桶の底板付近酸化　堀方

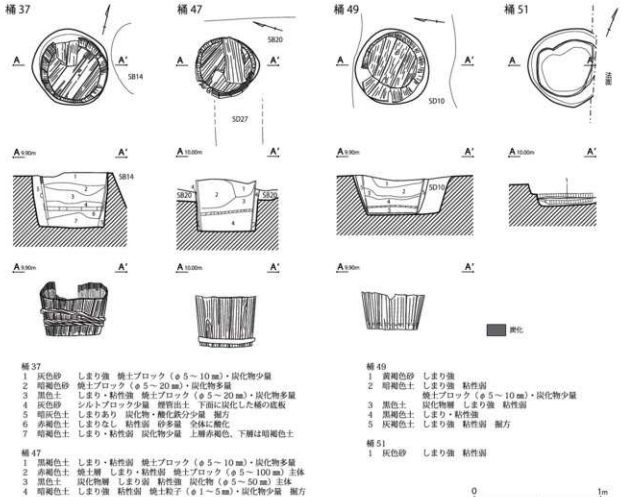
桶 34
1　灰褐色土　しまり弱　粘性なし　撹乱　砂混入　有機物少量

桶 36
1　黒褐色土　しまり弱
2　黄褐色土　しまり弱
3　灰褐色土　しまり弱　粘性あり　粘土ブロック多量
4　黄褐色土　しまり強　堀方

東壁 2
①　近現代の盛土・撹乱
③　黒褐色土　②・④層との境界の一部に硬化面
④　灰褐色土　③・⑤層との境界の一部に硬化面
（⑤層との境界のごく一部に焼土が伴う）
⑤　暗褐色土　部分的に灰色土が縞状に入るが④・⑥・⑧・⑨層との境界に硬化面
（一部には焼土が伴う）
⑥　灰褐色土　⑤・⑧・⑪・⑫層との境界に硬化面
（⑤・⑪・⑫層との境界の一部に焼土が伴う）
⑪　黒褐色土　部分的に焼土・炭化物層が入る　下部・⑧層との境界に硬化面
（⑧層との境界には焼土が伴う）

0　1m
1:30

第 68 図　埋設桶（１）



第69図　埋設桶（2）

0.50ｍ、高さ0.34ｍの桶が埋設されていた。桶底板は4枚一組でつなぎ合わされており、底面から6㎝程度浮いた状態で固定されていた。

基本土層東壁2（第8・68図）をみると、二度にわたる削平を受けていた。一度目の削平は第8層の整地で、二度目は表土層から掘り込まれている現代の撹乱であった。

覆土は焼土、炭化物を含んだ土で埋め戻されていた。文化・文政期の火災後の整地により、上部が削平された可能性がある。出土遺物は肥前系磁器の輪高台の猪口のみで、破片の状態である。推定廃絶時期は19世紀以降である。

第32号埋設桶（第68図）

Ｂ５－Ｉ６グリッドに位置する。遺構の最下部を検出したのみであった。径0.96ｍの掘り方内に、径0.68ｍを測る桶の底板と、二重に巻かれた箍の一部が遺存していた。側板は抜き取られたものと思われる。

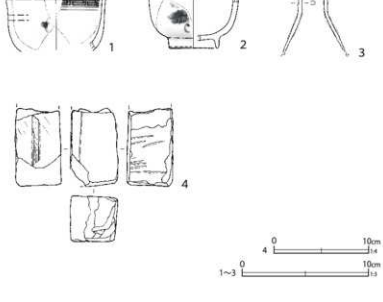
出土遺物がなく、時期は不明である。

第33号埋設桶（第68・71図）

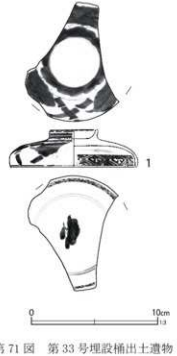
Ｂ５－Ｉ６グリッドに位置する。第13号建物跡の北側に隣接していた。最大径0.68ｍの楕円形の掘り方内に、径0.41ｍ、高さ0.38ｍの桶を埋設していた。

桶の遺存状態は良好で、下部には箍が二重に巻かれていた。桶の底板は一枚板で作られており、底面から6㎝程度浮いた状態で固定されていた。

桶内最下部の粘土層には白色粒子が含まれ、最



第 70 図　第 7 号埋設桶出土遺物



第 71 図　第 33 号埋設桶出土遺物

第 23 表　第 7 号埋設桶出土遺物観察表（第 70 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	(7.6)	[4.1]	－	－	15	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付（湯呑碗）	
2	磁器	碗	－	[3.9]	(3.8)	－	20	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付（湯呑碗）	
3	鉄製品	釘	長さ［5.1］幅 0.3 厚さ 0.25 重さ 2.0								
4	石製品	砥石	長さ［8.3］幅 5.0 厚さ 4.8 重さ 309.5							流紋岩 表・側面ノコギリ痕 裏面削痕 砥面 2 全面に酸化鉄付着	

第 24 表　第 33 号埋設桶出土遺物観察表（第 71 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	蓋	3.7	2.4	(10.0)	－	60	良好	灰白	肥前系 内外面施釉・染付 蛸方	

上層は砂層であった。

出土遺物は、第 71 図に示した肥前系磁器の蓋のみである。高台が「ハ」字状に開き、腰が張る碗に伴うものである。推定廃絶時期は 18 世紀後葉である。

第 34 号埋設桶（第 68・72 図）

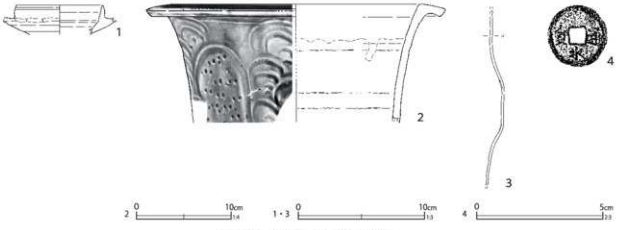
Ｂ５－Ｉ６グリッドに位置し、第 13 号建物跡の北側に隣接していた。桶の下半部が遺存し、径 0.57 ｍの掘り方内に、残存径 0.48 ｍ、高さ 0.33 ｍの桶を埋設していた。

桶内部の覆土は２層に分かれ、下層は焼土ブロック、炭化物を多量に含むしまりの弱い土で埋め戻されていた。上層はしまりの強い灰色シルト質土で覆われていた。なお、桶内部の土層は断面調査の途中で崩落したため、桶内覆土の堆積状況は図示できなかった。

出土遺物は極めて少なく、第 72 図に一部を示した。１は掘り方から出土した備前系陶器の灯明皿（油受皿）である。

２は瀬戸美濃系陶器の植木鉢で、緑釉の施釉を基調とするが、内面下位は拭き取ったような痕跡になる。かなり大形のものである。

このほかに、肥前系磁器の色絵半球形碗の破片、瀬戸美濃系陶器の腰錆碗の細片が出土した。廃絶



第 72 図　第 34 号埋設桶出土遺物

第 25 表　第 34 号埋設桶出土遺物観察表（第 72 図）

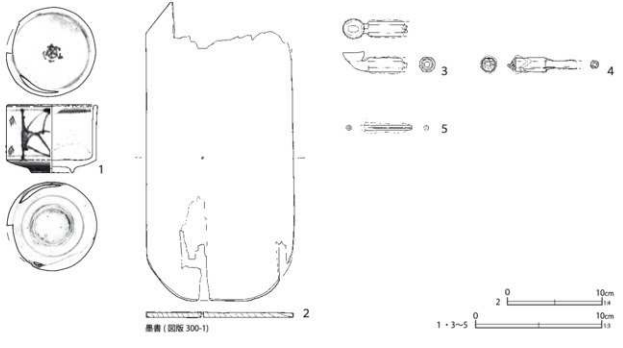
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	陶器	灯明皿	(6.8)	[2.3]	—	1K	15	良好	黄灰	備前系 堀方	103-4
2	陶器	植木鉢	(26.2)	[12.5]	—	1K	20	良好	灰白	瀬戸美濃系 内面上位～外面緑釉 内面拭き取り 外面ヘラ彫り状施文 SE22 と接合	
3	銅製品	不明	長さ [13.8] 厚さ 0.2 重さ 5.7							簪の一部ヵ 堀方	
4	銅製品	銭貨	径 24.7 厚さ 1.3 重さ 2.8							寛永通寶（古ヵ）	

時期は不詳である。

3は銅製品である。簪の一部であろうか。4は寛永通寶である。

第 36 号埋設桶（第 68 図）

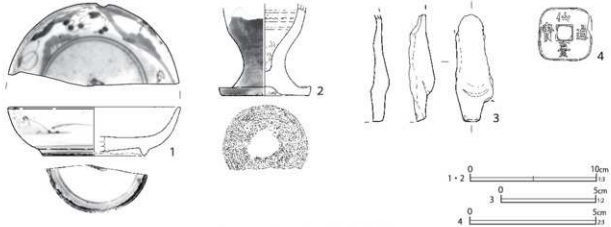
Ｂ５－Ｉ６グリッドに位置する。調査区の北東端に位置し、北半分は調査時に設定した排水溝に



第 73 図　第 37 号埋設桶出土遺物

第 26 表　第 37 号埋設桶出土遺物観察表（第 73 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	7.0	5.3	3.2	—	75	良好	灰白	肥前系 内外面施釉・染付（筒形碗）	
2	木製品	折敷	長さ［31.6］幅 15.6 厚さ 0.5 板目							底板転用 裏面銘痕 木釘孔 1 表面墨書（文字資料 1）表裏面炭化	
3	銅製品	煙管	長さ［4.9］火皿径 1.7 × 1.5 小口径 1.2 × 1.1 重さ 13.6							雁首 小口六角 内部に羅宇残存	
4	銅製品	煙管	長さ［4.9］小口径 1.1 口付径 0.6 重さ 6.3							吸口 小口六角 内部に羅宇残存 銀歯状文あり 3 と同一製品ヵ	
5	銅製品	煙管	長さ［3.8］口付径 0.4 重さ 3.0							吸口	



第 74 図　第 47 号埋設桶出土遺物

第 27 表　第 47 号埋設桶出土遺物観察表（第 74 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	皿	(13.4)	3.9	(8.0)	—	40	良好	灰白	肥前系 内外面施釉・染付 弱く被熱 掘方	
2	陶器	花生	—	［7.2］	6.8	K	40	良好	灰白	瀬戸美濃系 底部糸切痕・中央窪む 外面上位灰釉・下位鉄釉 被熱	
3	土製品	人形	長さ［5.7］幅［2.0］厚さ 0.8 重さ 6.6			AD	—	良好	にぶい橙	江戸在地系 ぶら人形 前後合型成形 中空	
4	鉄製品	銭貨	縦 21.0 横 21.0 厚さ 1.6 重さ 2.2							仙寿通寶 堀方	281-8

壊されていた。遺存状態は悪く、掘り方内に側板と箍の一部が遺存していた。桶そのものは、廃絶にあたり抜き取られたと思われる。掘り方の径は約 0.64 mであった。

覆土の第 1 ～ 3 層は桶内部の堆積土で、しまりが弱く、下層に粘土ブロックが多量に含まれていた。第 4 層は掘り方の埋土でしまりが強かった。

出土遺物は極めて少なく、図示し得るものがなかった。非掲載だが産地不詳陶器の灰釉土瓶が、最も新しい時期の陶磁器である。推定廃絶時期は 19 世紀以降である。

第 37 号埋設桶（第 69・73 図）

Ｂ 5 － Ｊ 6 グリッドに位置し、第 14 号建物跡の西側に隣接していた。径 0.62 mの掘り方内に、残存径 0.52 m、高さ 0.42 mの桶が埋設されていた。箍は三重に巻かれており、底板は底面から 14 ㎝程度浮いた状態で固定されていた。また、側板は底面から 6 ㎝程度浮いていた。

桶の側板上端部は炭化しており、火災によるものと考えられる。周辺に分布する第 51 号土壙等の火災処理土壙の状況から推して、文化・文政期の火災によって焼けたと考えられる。

桶内部の覆土は、上層の 2 層が焼土ブロック、炭化物を主体とする遺物を包含する層で、下層は灰褐色シルトに覆われていた。火災によって機能を失い、埋め戻されたと考えられる。

出土遺物は極めて少なく、第73図に一部を示した。1は肥前系磁器の筒形碗で、外面に半菊文、内底面に著しく崩れた五弁花文が染付される。

このほかに、肥前系磁器の蛸唐草文御神酒徳利の破片、瀬戸美濃系陶器の二合半灰釉徳利の細片が出土した。文化・文政期の火災に関わるとすれば、推定廃絶時期は19世紀前葉である。

2は木製の折敷である。表面に「くりはし」、「紺屋元兵衛」、「十一月廿八日/□」の墨書がある。

3は煙管の雁首である。4と5は煙管の吸口である。4は鋸歯状文があり、3と同一製品の可能性がある。

第47号埋設桶（第69・74図）

B5－J7・8グリッドに位置し、第20号建物跡より新しい。第27号溝跡の延長線上に位置したことから、溝に接続すると考えられる。

径0.51mの掘り方内に、残存径0.48mの桶が埋設されていた。下部は箍が巻かれ、固定されていた。底板は、底面から15cm程度浮いた状態で検出された。側板の内面側の一部が炭化しており、文化・文政期の火災によるものと考えられる。第37号埋設桶と機能・廃絶時期は同じであろう。

覆土は焼土ブロック、炭化物を多量に含む土で埋め戻されていた。火災により機能が失われ、埋め戻されて廃絶したと考えられる。推定廃絶時期は19世紀前葉である。

出土遺物は少なく、第74図に一部を示した。

1は肥前系磁器の粗製皿で、僅かに被熱する。2は瀬戸美濃系陶器の花生で、外面に灰釉と鉄釉が掛け分けされる。底部は糸切痕があり、中心の窪みには砂（長石粒）が付着する。やはり被熱している。

3は土製品の人形で、ぶら人形の背面左半身である。前後合わせの二枚型成形で、中空である。

4は仙臺通寶である。仙臺通寶は1784年に初鋳された隅丸方形の鉄銭である。仙台藩内の流通ということで、幕府の許可を得て発行されたが、実際には広範囲に分布していたと考えられている（桜井2016）。栗橋宿跡でも数点見つかっている。

第49号埋設桶（第69図）

B5－J6グリッドに位置し、第10号溝跡の東端部に設置されていた。埋設桶底面と溝跡底面の高さが一致しており、一連の遺構である可能性もあるが、第10号溝跡の幅が広く、両者の関係性は判然としなかった。

径0.58mの掘り方内に、残存径0.50m、高さ0.30mの桶が埋設されていた。側板の下部には箍の痕跡がみられた。底板は底面から6cm浮いた状態で検出された。

桶内部の覆土は4層に分かれ、焼土ブロック、炭化物を含む層が、下層のシルト層と上層の砂層に挟まれるように堆積していた。

出土遺物は江戸在地系土器の丸底焙烙の底部破片のみである。推定廃絶時期は重複する第10号溝跡と同時期か、それ以降である。したがって、19世紀前半以降と考えられる。

第51号埋設桶（第69図）

C6－F1グリッドに位置し、東端部は調査区域外である。調査区の東壁に僅かにかかるが、法面であったため、基本土層東壁では掘り込みが検出されなかった。

径0.54mの掘り方内に径0.52mを測る二重の箍のみが検出された。桶側板・底板は抜き取られたと考えられる。出土遺物はなく、廃絶時期は不明である。

（5）井戸跡

井戸跡は調査区北部で4基検出された。第3号井戸跡のようにコンクリート製井戸側を利用するものがあり、現代までの使用状況が認められた。なお、コンクリート製井戸側のほか、近代に帰属する遺物がみられるが、最終廃絶期を示すものであり、設置時期は近世段階まで遡る可能性がある。

位置、規模等の基本的な情報は第28表に、遺構図は第75・76・78・81図に遺構を示した。遺

物図は第75・77・79～81図に各遺構ごとにまとめて図示した。以下、各井戸跡の特徴について記述する。

第3号井戸跡（第75図）

Ｂ5－Ｉ5・6グリッドに位置し、第107号土壙より新しい。遺構確認時に、第6号杭列の杭が井戸の範囲にみられなかった。そのため、本跡は第6号杭列より新しいと考えられる。また、第89号土壙と重複していたが、新旧関係は不詳であった。

コンクリート製井戸側を利用しており、最終使用時期は近・現代であるが、設置時期が近世に遡る可能性もある。

遺構の基盤層が砂質土であり、崩落の危険性があった。そのため、第一面の調査では深さ0.90ｍまで掘削し、第三面調査時に下部の調査を行った。コンクリート製井戸側は下層まで届いていることが確認されたが、底面は検出できなかった。

不整形の掘り方径は、長軸4.00ｍであり、外径0.93ｍの井戸側は中心から北東側へずれた位置に設置されていた。井戸側内にはコンクリート片等、上部からの落下物が多量にみられた。

出土遺物は近代に帰属する磁器の蓋物や軟質陶器碗、碍子、土管等が出土したほか、肥前系磁器の広東碗や筒形碗、梅樹文の粗製碗、陶器の青土瓶等、近世の陶磁器もみられた。

掘り方が大きく、重複遺構もあるため、近世の遺物が混入であるか否か判断が難しい。推定廃絶時期は19世紀末以降である。

第75図に出土遺物を示した。1は産地不詳の陶器の蓋である。身を受ける部分以外は施釉され、貼付文とみられる盛り上がった加飾部に、彩色が施される。彩色は施釉前に施される。

第4号井戸跡（第76・77図）

Ｂ5－Ｉ6、Ｊ6グリッドに位置し、第89号土壙より新しい。

平面形状は楕円形で、掘り方は南北軸2.26ｍ、東西軸1.96ｍ、深さ1.19ｍであった。底面には、取水のための竹筒が打ち込まれていた。底面で箍のみが検出されたことから、廃絶時に井戸側を抜き取って埋め戻したと考えられる。

掘り方の基盤層は砂質であり、崩落の危険性があった。そのため、第一面の調査では深さ約0.80ｍまで掘削し、第三面調査時に下層を精査した。

なお、下層は第三面調査時に第501号土壙としたが、後日、第15号井戸跡に変更された。その後、整理段階で第4号井戸跡と位置が重なったことから、同一遺構と判断した。挿図では断面図の上層と下層（くびれ部から下）を合成して示した。

掘り方の覆土は、焼土粒子、炭化物、砂を少量含んだシルトが主体で、下層に砂、粘土が堆積していた。掘り方底面の基盤層は砂層であった。

出土遺物には、瀬戸美濃系磁器の端反碗や真壁系土器の甕、常滑系陶器の甕等がみられる。19世紀前半の様相を示すが、酸化クロム青磁釉の磁器坏や三河産土器の焜炉がみられるため、推定廃絶時期は19世紀後葉である。

第77図に出土遺物を示した。1は瀬戸美濃系磁器の碗である。外面は陰刻状に施文され、酸化クロム青磁釉が施される。高台内は露胎とする。

2は瀬戸美濃系磁器の水滴である。外面には細かい線刻状の施文がなされ、その後施釉・染付される。型合せの位置で破損しているものらしい。内面には指圧による成形痕が顕著に残る。

3は瀬戸美濃系陶器の坏で、灰白色の灰釉が施される。被熱し、黒化している。内面と外面の一部に赤色物質のような付着物がみられるが、あるいは、被熱による赤化かもしれない。4は磁器の紅坏で、小形のものである。

5は銅製の煙管の雁首である。6は器種不詳の鉄製品である。

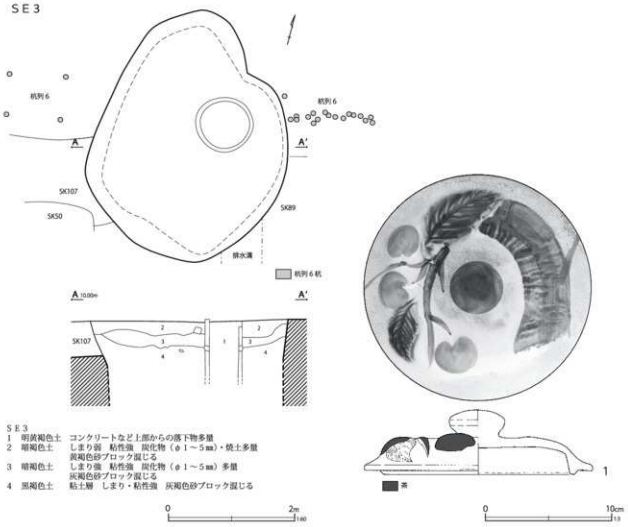
第5号井戸跡（第78～80図）

Ｂ5－Ｉ7グリッドに位置する。第17号建物

第 28 表　第一面井戸跡一覧表

単位：m

番号	区画	グリッド	外径	高さ	内径	深さ	掘り方径	深さ	備考
3	1	B5-15/6	0.93	[0.90]	0.77	−	4.00	[0.90]	杭列 6, SK107 より新 SK89 と重複
4	2	B5-16, J6	−	−	−	−	2.26	1.19	SK89 より新
5	1	B5-17	−	−	−	−	2.10	[0.58]	SB17 より古 SB12P11 と重複
19	1	B5-16	0.54	[0.79]	0.40	−	0.64	[0.80]	



第 75 図　第 3 号井戸跡・出土遺物

第 29 表　第 3 号井戸跡出土遺物観察表（第 75 図）

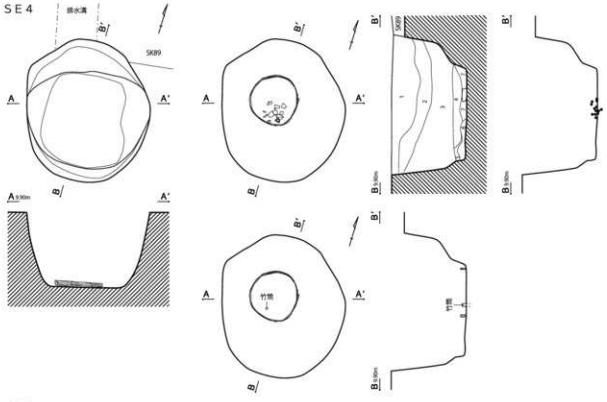
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	陶器	蓋	−	5.1	14.8	K	100	良好	灰白	内外面白化粧後施釉・加飾部（貼付文カ）に緑・茶・橙色の彩色　最大径 17.8 cm	

跡より古く、第 12 号建物跡と重複していたが、新旧関係は不詳である。

掘り方は長軸 2.10 m の楕円形で、深さ 0.58 m以上である。底面は検出されなかった。

井戸側は抜き取られており、籠のみが遺存していた。籠の径、土層断面から井戸側の径は 0.85 mと推定される。籠は捩じり編みであった。

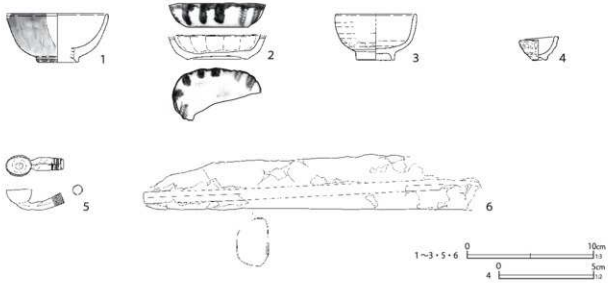
掘り方の北東部には竹樋と継手が検出された。継手は二枚の板材で挟み、固定されていた。竹樋は北東の調査区域外へと延びていた。導水管の役



SE4
1　灰褐色土　　砂・シルトブロック多量　瓦片・陶磁器片少量
2　暗灰色土　　しまり弱　シルト・炭化物・砂少量
3　暗灰色土　　炭化物・地山の暗灰色シルトブロック多量　焼土（壁土）少量
4　黒褐色土　　青灰色粘土ブロック（φ10～50㎜）多量　炭化物少量　焼土ブロック（φ10㎜）少量
　　青灰色砂少量　しまり強　粘性弱
5　黄灰色砂　　しまり・粘性弱
6　青灰色粘土
7　黒褐色土　　青灰色粘土ブロック（φ10～50㎜）多量　青灰色砂少量　しまり強　粘性弱

0　2m
1:60

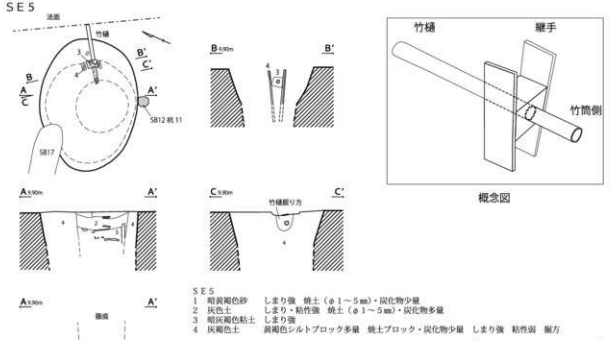
第76図　第4号井戸跡



第77図　第4号井戸跡出土遺物

第 30 表　第 4 号井戸跡出土遺物観察表（第 77 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	(7.9)	3.8	(3.0)	—	20	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面酸化クロム青磁釉 外面陰刻状施文	
2	磁器	水滴	—	[1.9]	4.8	—	35	良好	白	瀬戸美濃系 外面施釉・施文・染付 上下型合成形 底部露胎	103-5
3	陶器	坏	6.2	3.6	2.8	K	95	良好	明褐灰	瀬戸美濃系 内外面灰釉 赤色物質付着ヵ 被熱（黒化）	103-6
4	磁器	紅坏	2.1	1.3	0.8	—	100	良好	白	施釉 外面陽刻文 底部砂付着 重さ 2.7g	240-1
5	銅製品	煙管	長さ 4.6 火皿径 2.0 × 1.7 小口径 0.8 重さ 6.6							雁首 歪む	279-1
6	鉄製品	不明	長さ〔26.9〕幅 4.4 厚さ 0.1 重さ 74.3							箔状	



第 78 図　第 5 号井戸跡

割を果たしていると思われるが、竹樋の傾斜方向は不明であった。

なお、竹樋は調査区壁面の際まで検出されたが、どの面から掘り込まれているのかまでは、確認するに至らなかった。井戸跡の構築面も検出面より上方とみられ、いずれの遺構も上部は大きく削平されていると考えられる。

井戸跡の覆土は、井戸側の抜き取り跡が建築材や木片と共に、粘土、シルト質土、砂の順で埋め戻されていた。第 4 層は掘り方の覆土である。

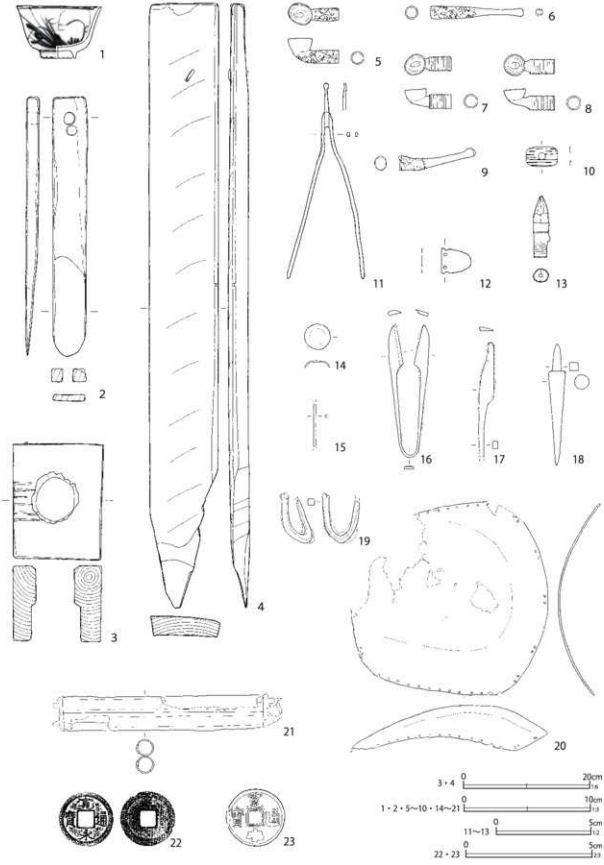
出土遺物は、肥前系磁器の外面青磁釉が施された筒形碗や京都信楽系陶器の鉄絵せんじ形碗、瀬戸美濃系陶器の腰錆碗等、18 世紀後半のものが目立ったが、掘り方内から瀬戸美濃系磁器の型押し寿文皿や赤絵の端反碗がみられた。

また、一括で取り上げられた遺物に酸化コバルト染付磁器がみられた。構築・廃絶時期は 19 世紀後半である。

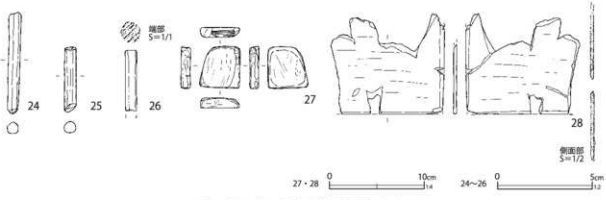
第 79・80 図に出土遺物を示した。1 は瀬戸美濃系磁器の端反形の坏で、酸化コバルト染付で絵付けされる。

2 ～ 4 は木製品である。2 は筒である。3 は竹樋の継手である。4 は桶ないし樽の側板で、先端を尖らせ杭に転用したものである。

5 ～ 23 は金属製品である。5 と 6 は草花文が陰刻された煙管の雁首と吸口で、同一製品である。



第 79 図　第 5 号井戸跡出土遺物（1）



第 80 図　第 5 号井戸跡出土遺物（2）

第 31 表　第 5 号井戸跡出土遺物観察表（第 79・80 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	坏	6.6	4.1	2.6	－	95	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面酸化コバルト染付	
2	木製品	箆	長さ 20.5 幅 2.7 厚さ 1.0 板目							孔 1 孔の近くに丸い溝	
3	木製品	継手	長さ 18.5 幅 14.3 厚さ 12.2 芯持材							木釘 1 刃物痕	
4	木製品	桶・樽	長さ 96.7 幅 11.1 厚さ 3.1 板目							側板 下端部加工 鉄釘 1 杭に転用	
5	銅製品	煙管	長さ 4.0 火皿径 1.9 × 1.8 小口径 1.0 重さ 10.2							雁首 草花文陰刻 6 と同一製品	279-4
6	銅製品	煙管	長さ 7.3 小口径 1.0 口付径 0.6 重さ 9.2							吸口 草花文陰刻 5 と同一製品	279-4
7	銅製品	煙管	長さ 3.7 火皿径 1.7 × 1.6 小口径 1.1 重さ 8.9							雁首 火皿歪む	279-1
8	銅製品	煙管	長さ 4.0 火皿径 1.7 小口径 1.1 重さ 10.9							雁首	279-1
9	銅製品	煙管	長さ 6.1 小口径 1.1 × 1.0 重さ 8.0							吸口 被熱し口付窄がる	
10	銅製品	煙草入れの金具	縦 11.5 横 2.5 厚さ 0.08 重さ 2.0							前金具の裏金	279-5
11	銅製品	簪	長さ 10.4 幅 0.6 厚さ 0.3 重さ 6.0							脚変形 堀方	280-1
12	銅製品	こはぜ	長さ 1.3 幅 1.6 厚さ 0.03 重さ 0.5								
13	銅製品	鉛筆補助軸	長さ [1.8] 径 0.7 厚さ 0.01 重さ 0.9							鉛筆・芯残存	
14	銅製品	不明	径 2.0 厚さ 1.0 重さ 2.1							堀方	
15	銅製品	不明	長さ [3.4] 厚さ 0.2 重さ 0.2							簪の一部ヵ	
16	鉄製品	握鋏	長さ [10.5] 刃幅 1.0 背幅 0.3 重さ 13.7								280-9
17	鉄製品	握鋏	長さ [9.0] 刃幅 1.1 背幅 0.3 重さ 7.6							片方の刃部のみ残存	
18	鉄製品	不明	長さ 9.7 幅 1.2 厚さ 0.7 重さ 33.6								
19	鉄製品	釘	長さ [4.0] 幅 0.5 厚さ 0.5 重さ 8.3							堀方	
20	鉄製品	不明	縦 [15.3] 横 [15.6] 厚さ 0.1 重さ 118.1							周縁小孔廻る	281-6
21	鉄製品	不明	長さ [18.2] 幅 2.7 厚さ 0.1 重さ 31.6							円筒状 2 連	
22	銅製品	銭貨	径 22.1 厚さ 1.1 重さ 2.3							寛永通寶（新）背元ヵ	
23	鉄製品	銭貨	径 23.0 厚さ 1.7 重さ 2.3							寛永通寶（新）堀方	
24	石製品	石箱	長さ 5.4 幅 0.6 厚さ 0.6 重さ 4.2						灰白	滑石 両端使用	
25	石製品	石箱	長さ 3.2 幅 0.6 厚さ 0.6 重さ 2.4						灰白	滑石 両端使用	
26	石製品	石箱	長さ [3.2] 幅 0.6 厚さ 0.6 重さ 2.2						灰白	滑石 端部工具痕	
27	石製品	砥石	長さ 4.4 幅 4.2 厚さ 1.0 重さ 31.6						灰白	粘板岩 端部削痕 側面ノコギリ痕 砥面 4	
28	石製品	石板	長さ 12.2 幅 [12.0] 厚さ 0.3 重さ 77.8						黒	粘板岩 側面工具痕 両面擦痕	

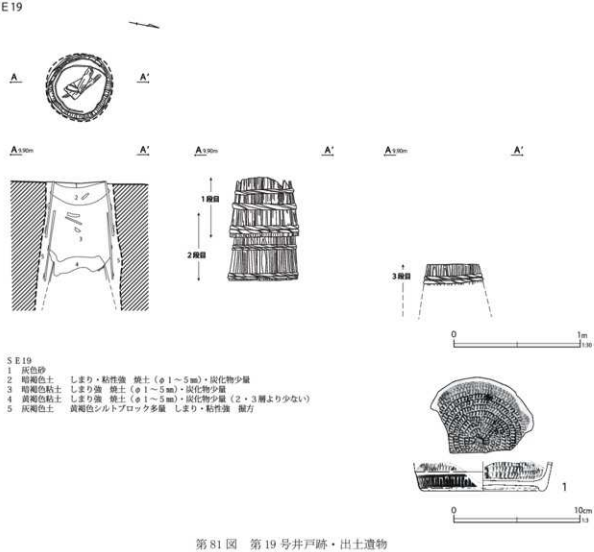
7 と 8 は煙管の雁首である。9 は煙管の吸口である。10 は煙草入れの金具である。11 は簪である。12 はこはぜである。16 と 17 は握鋏である。

22 と 23 は寛永通寶である。22 は「元」と思われる背文字がある。23 は鉄銭である。

第 80 図 24 ～ 28 は石製品である。24 ～ 26 は滑石製の石箱である。

24・25 は両端が使用されており、26 は端面に切断痕がみられる。

27 は灰白色の粘板岩製砥石である。密なノコ



第 81 図　第 19 号井戸跡・出土遺物

第 32 表　第 19 号井戸跡出土遺物観察表（第 81 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	蓋物	－	[2.3]	(9.4)	－	20	良好	白	肥前系 内外面施釉・酸化コバルト染付 井戸側内（二段目）	

ギリ状工具痕がみられ、上端面に段が付く。砥面は４面で、左側面から上端面にかけての角が丸みを帯びる。

28 は黒色の粘板岩製石板である。側面には切断痕が認められる。罫線はみられない。

第 19 号井戸跡（第 81 図）

Ｂ５－Ｉ６グリッドに位置する。当初は第 35 号埋設桶として調査されたが、２段目の桶が検出されたため、第 19 号井戸跡に振り替えた。

掘り方の埋土は基盤層と同質であり、範囲確認が困難であった。３個体の井戸側が入れ子状に連結しており、設置状況を考慮すると掘り方は、より広かった可能性もある。

井戸側は、桶を三段以上重ねる構造であった。下部の基盤層が砂質であることから崩落の危険性があり、確認面より深さ約１ｍまで精査した。三段目の桶下部、及び底面は検出できなかった。

出土遺物は極めて少なく、第 81 図に磁器を示した。１は肥前系磁器の蓋物で、酸化コバルト染付で絵付けされる。上から二段目の井戸側内から

出土した。推定廃絶時期は19世紀後葉である。

（6）池跡

池跡は2箇所検出された。2箇所とも同一敷地の裏手に位置する。

遺構検出・精査時には、周辺や遺構内に20～50cmを測る大形の自然礫が多数出土した。池跡との関連性があるかもしれないが、まばらに出土しており、判然としなかった。第82図では周辺に散在している自然礫も含め、すべての位置を示し、トーン掛けした。

位置・規模等の基本的な情報は第33表にまとめた。遺構は第82～85図、遺物は第86～97図に示した。

第2号池跡（第82～84、86～91図）

B5－I5、J5グリッドに位置する。重複する第3号池跡より古く、第107号土壙より新しい。

検出できた部分の規模は、長軸5.30m、短軸は推定4.30mで、深さは約0.65mである。長軸方位はN－15°－Wである。西部は第3号池跡に壊されていたが、南西部の隅が遺存していた。掘り方の平面形は隅丸方形である。

掘り方内を壁に沿って囲う横木と杭は、土留めの役割を果たしていたと考えられる。丸木・角木の横木を差し込み、内側に径約9cmの杭を約40cm間隔で打ち込み、横木を支えていた。横木は丸木が主体であった。土留めに裏込めはみられなかった。

覆土にシルトブロックを多量に含むことから、人為的に埋め戻されたと考えられる。下層は、極めて多量の木片を主体とした覆土であった。上層は、シルトブロックを多量に含んだ覆土であった。第3号池跡を構築した際に出た土で埋め戻した可能性もある。

出土遺物は炭化した木材や建築材を主体に、杭、竹、木札やその他の木製品、瓦片、陶磁器、大形の自然礫などが出土した。

磁器類には、湯呑碗や上絵付けが施された卵殻手酒坏が複数あるが、木型打ち込み施文の磁器はみられない。したがって、推定廃絶時期は19世紀中葉である。

第86図11の磁器坏は混在とみられる。なお、掘り方からも瀬戸美濃系磁器の湯呑碗が出土しているため、構築・廃絶時期にはそれほど差がないと思われる。

第86～91図に出土遺物を示した。第86～88図1～31は陶磁器・土器である。

第86図1～3は瀬戸美濃系磁器の端反碗である。1は掘り方から出土した。1・2は厚手で、特に腰の部分が肥厚する。3は、1・2よりやや薄手で高台部の作りもよりシャープである。4は肥前系磁器の端反碗である。

5～10は瀬戸美濃系磁器で湯呑碗である。このうち、5・6・9は大振りのものである。9は僅かに内湾ぎみで、焼継痕が認められる。

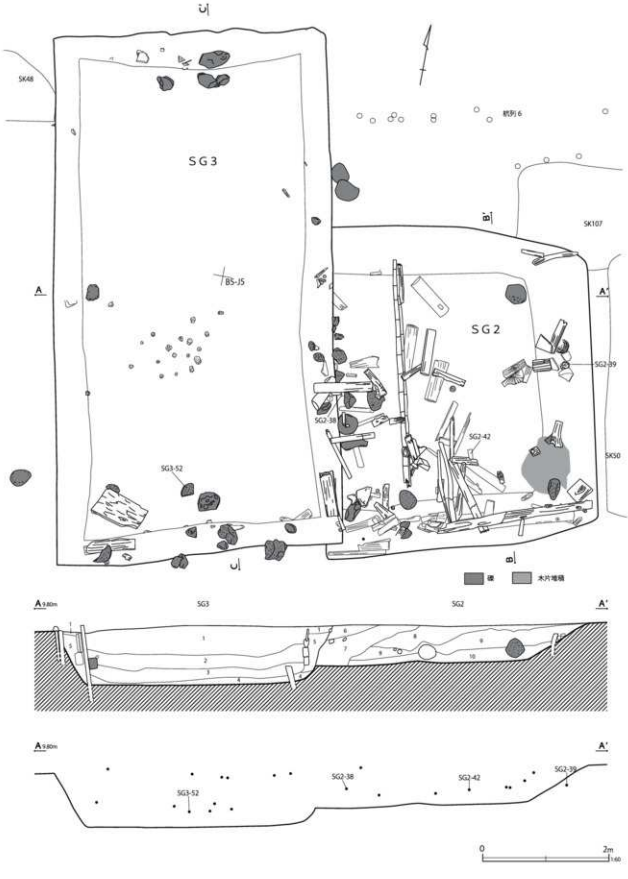
7・8は中形のもので、このうち7は掘り方から出土した破片、第3号池跡から出土した破片と接合した。

11は瀬戸美濃系磁器の坏で、端反り形態のものである。外面は酸化コバルトで染付される。

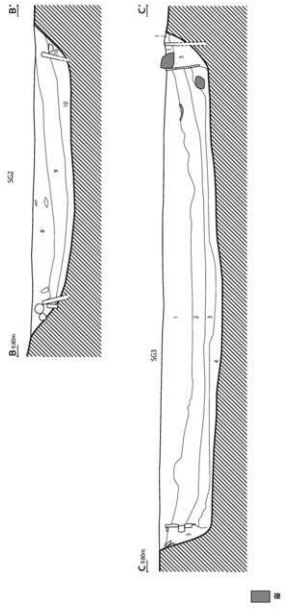
12～15は瀬戸美濃系磁器の卵殻手酒坏である。12は内面に青の上絵付を中心とした江戸絵付けが施され、一部に金彩を加える。「武丞／深川／新地」の文字がみられる。享保十九年（1734）に、越中島の北端を埋め立てた深川築立新地を示すと思われる。13は内面に青を主体として山などが描かれる。漢詩を表現したと思われる部分は点の

第33表　第一面池跡一覧表　　単位：m

番号	区画	グリッド	長軸	短軸	深さ	方位	備考
2	2	B5-15、J5	5.30	[4.30]	0.65	N-15°-W	SG3より古 SK107より新
3	1	B5-14/5、J4/5	8.45	4.50	0.95	N-15°-W	SG2、杭列6、SK48より新



第82図　第2・3号池跡（1）



SG3
1　灰褐色砂　細粒径　しまりあり
　灰色シルトブロック（φ30～50㎜）多量
　炭化物（φ1㎜以下）少量　草木質の有機物多量
　上層は酸化、下層は青灰色となる
2　灰オリーブ色粘土　しまりなし　草木質の有機物・炭化物少量
　黄褐色シルトブロック（φ20㎜）多量
　砂・粘土・シルトがしまりに混雑
3　灰オリーブ色土　2層に比べ炭化物が多くシルトブロック少量
　砂・粘土・シルトがしまりに混雑
4　灰色砂　炭化物少量　1層より粗粒　草木質の有機物少量
5　暗灰色砂　炭化物少量　砂多量　しまりあり　板材の裏込め

SG2
6　灰褐色砂　酸化鉄分多量　シルトブロック多量　埋戻し
7　暗灰色土　灰色シルトブロック・暗灰色粘土ブロック・炭化物多量
　しまり・粘性あり　埋戻し
8　灰褐色土　シルトブロック・砂・炭化木材多量　しまり弱　埋戻し
9　黒色土　木質物層　手斧痕のある木材・屋根材と思われる杉皮の
　小片多量　鋸で切断した建築部材多量
10　暗灰色土　木材片少量　しまり弱　シルトブロック・炭化物少量
　埋戻し

第83図　第2・3号池跡（2）

集合で、文字になっていない。14は内面に青・高台内に赤の上絵付がみられる。15は青で船を描き、帆に金で十字の文が描かれる。

16・17は肥前系磁器の八角鉢である。17には焼継痕が認められる。18は肥前系磁器の戸車で、側面のみ施釉される。

第87図19は舟形の花生と考えられる。上面には七宝繋ぎ文等を、外面には上位に花唐草文、下位に波涛文が染付される。

20は瀬戸美濃系陶器の坏で、黄色味の強い灰釉が施される。

21・22は瀬戸美濃系陶器の柿釉灯明皿である。21は油皿で、やや赤みを帯びる柿釉が施される。内底面に長径5.0、短径4.6㎝の重ね焼き痕がある。口縁部内面にも重ね焼き痕状の痕跡があるが、窯内での溶着によるものだろうか。体部外面中位にも径6.6㎝の重ね焼き痕が認められる。

22は油受皿で、やや薄めの柿釉が施される。体部外面の重ね焼き痕は径6.9㎝、内面の受け部径も6.9㎝である。

23は京都信楽系陶器の灯明皿で、内面に円形の低い突起が貼付けられる。

24は瀬戸美濃系陶器の皿で、灯明皿として用いられたものと考えられる。25は瀬戸美濃系陶器のヒダ皿で、全体に貫入の多い灰釉が施される。

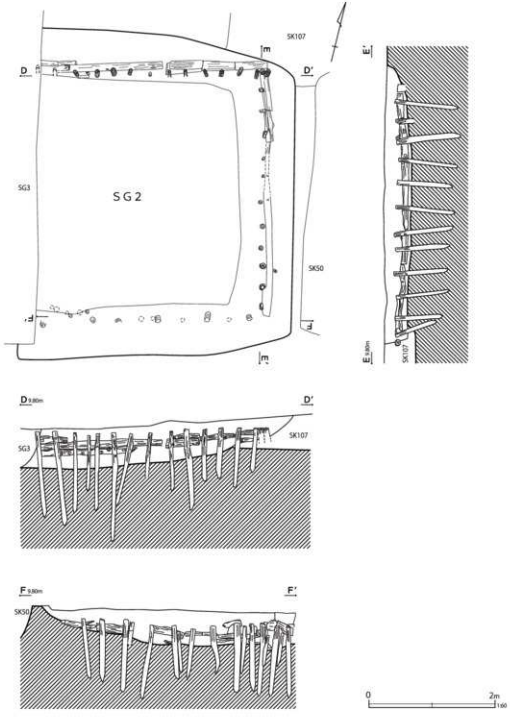
26は瀬戸美濃系陶器の片口鉢で黄色味の強い灰釉が施される。

第88図27は堺明石系陶器擂鉢である。内面の擂目は一単位9条である。底部は砂目がヘラナデで調整される。体部外面は強くナデ調整される。

28は瀬戸美濃系陶器の徳利で、一升徳利である。被熱し、外面の釉薬が弱く変色（黒化）する。

29・30は瓦質土器の火鉢としたが、いずれも酸化炎焼成気味で土師質に近い。29の口縁部には、部分的に二次的な敲打痕がみられる。31は瓦質土器の火消壺である。

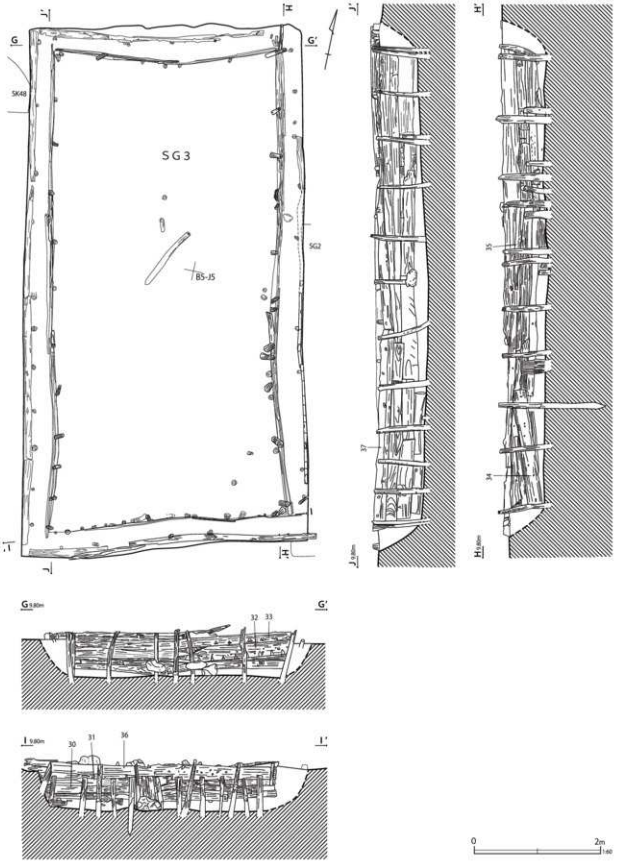
第88図32～35は土製品である。



第 84 図　第 2 号池跡

32 は江戸在地系の碁石で、手捻り成形である。33 は京都系のミニチュアで、モチーフは不詳である。型成形で、外面に緑釉と黄色釉が施釉される。34 は徳利のミニチュアで、京都系である。中空の二枚型成形で、体部に緑釉が施釉される。

35 は江戸在地系のミニチュアで、竈をモチー



第85図　第3号池跡

フとしたものである。板作り成形である。焚口が二連の竈の左側前面の破片とみられる。

第89図36・37は平瓦である。右下に隅切りが遺存する。凹面は銀化状の光沢が認められる。

第89・90図38～56図は木製品である。第89図38は腰丸椀である。内面に赤漆、外面に黒漆が塗布されている。39は柄杓である。「俞」の焼印がみられる。

40は調度品の一部である。41は木釘である。

42・43・46は木札である。42は「堀口宗八／生［　　］」と思われる焼印がある。43は表面に「日光道中　唐臼」などの墨書がある。裏面には人名等の墨書があり、「市郎右衛門／甚右衛門／直右衛門／勘左衛門／戸ヶ崎／一百貫文／大安／名手」などの文字がみえる。このうち、「市郎右衛門」と「勘左衛門」は元禄10年（1697年）の『栗橋町検地水帳』にみられる（久喜市教育委員編2013）。

46は木札で、表面に墨書がみえる。「武州栗橋／伊勢屋長三郎殿［　　］」と読めるが、「伊勢屋長二郎」の可能性がある。伊勢屋長二郎は『絵図』の「質屋　年寄　長次郎」に該当すると思われる。裏面には「いつ屋三左衛門／居所／入谷」の墨書がある。「入谷」は現在の東京都台東区の入谷を示すものであろうか。

44は器種不詳で、厚手の端材のようなものである。表、裏面、左右の側面に墨書がある。

第89～90図45・47～52は、大形木製品加工時の端材と考えられるものである。第89図45は表裏面・右側面に墨書がある。

第90図53は刳り下駄である。表面に黒漆が塗布される。54は木札と思われる。表裏面に墨書がある。56は器種不詳のもので、棒状角材である。表面墨書がある。裏面、右側面に工具痕がみられる。

第91図57～70は金属製品である。57・58は煙管で、57は雁首である。58は吸口で、草花文の陰刻が認められる。59・60は銅製の針金である。61は三叉銛である。62は銛の口金である。61と同一製品であろうか。63～65は器種不詳の鉄製品である。66・67は鉄釘である。

68～70は寛永通寶で、そのうち68は古寛永である。

第91図71～76は石製品の砥石である。71は灰白色を帯びる石材である。緻密だが軟質で、一見すると凝灰岩ないし流紋岩のようにもみえる。黒色の柱状鉱物が多量に含まれ、表面にも柱状鉱物が抜け落ちた跡が無数にみられる。風化した角閃石安山岩（地質調査所1953、佐藤2005、茂木2021）の可能性があり、群馬県甘楽郡小坂村中小坂で産出する砥石の可能性がある。なお、茂木睦は原岩は火砕流起源の溶結凝灰岩と指摘している（茂木2021）。

表・側面にノコギリ状工具痕が遺存し、左側面には削痕がみられる。砥面は3面である。

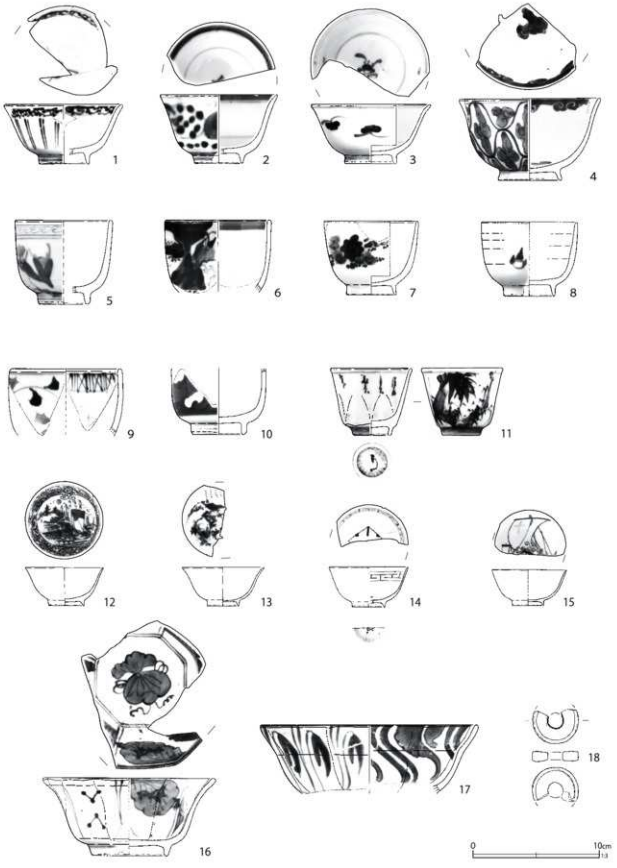
72は流紋岩製で、裏面にノコギリ状工具痕が遺存する。砥面は3面で、右側面は丸みを帯びている。73は白色の流紋岩製で、右側面に刃幅の広い工具痕、左側面にノコギリ状工具痕が遺存する。右側面には「V」字状の刃物痕が一定の間隔で刻まれている。表面の右側角から中心にかけて、切断を試みたと思われる痕跡がみられる。砥面は2面である。

75は粗粒・硬質な砂岩製で、荒砥である。表、側面にノミ状工具と思われる削痕がみられる。砥面は3面である。

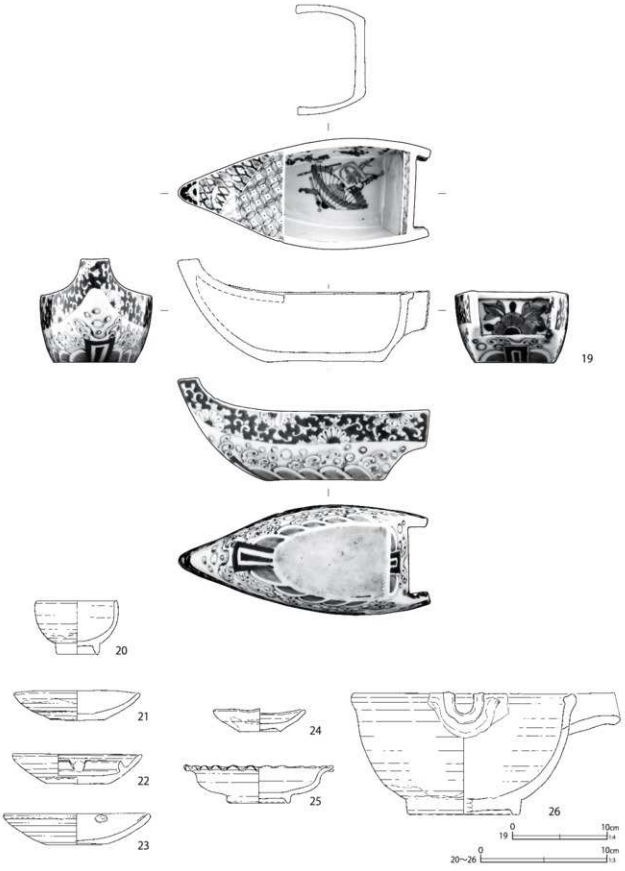
76は白色の流紋岩製で、側面、裏面にチョウナ状工具と推定される、刃幅の広い工具痕がみられる。右側面にはノコギリ状工具痕が遺存する。出荷時の原形をよく留めている資料である。砥面は2面である。

第3号池跡（第82・83・85・92～97図）

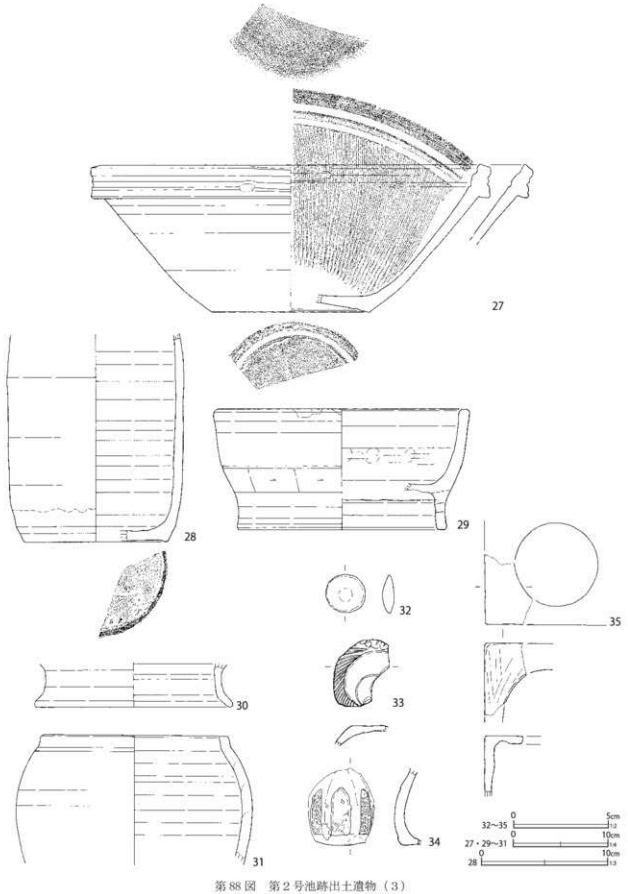
Ｂ5－Ｉ4・5、Ｊ4・5グリッドに位置する。第2号池跡を埋め戻した後、隣接する西側に構築



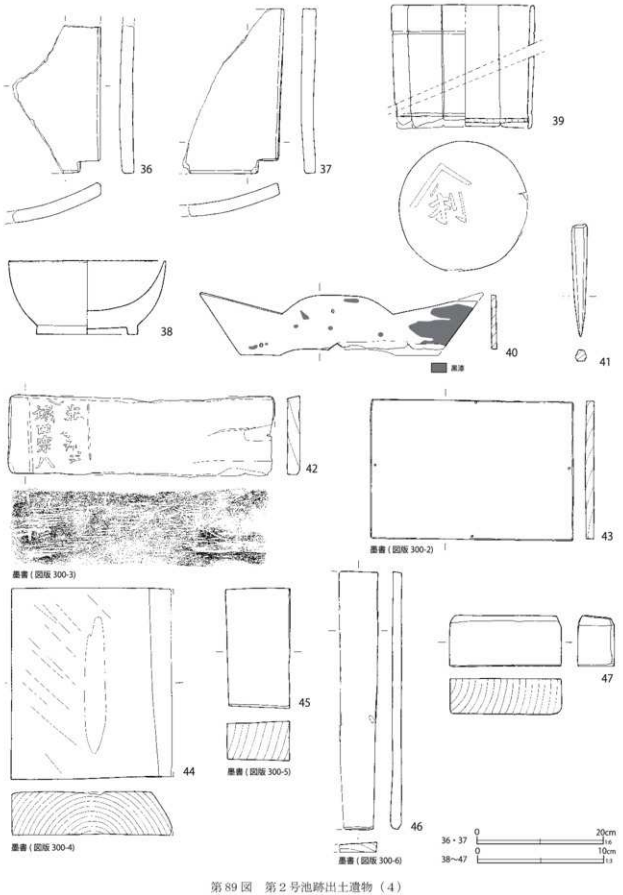
第 86 図　第 2 号池跡出土遺物（1）



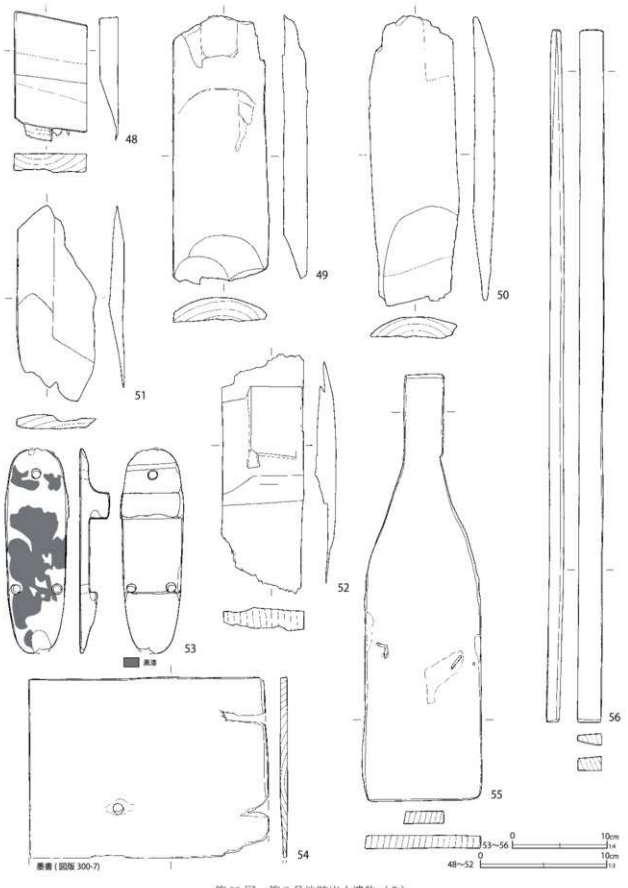
第87図　第2号池跡出土遺物（2）



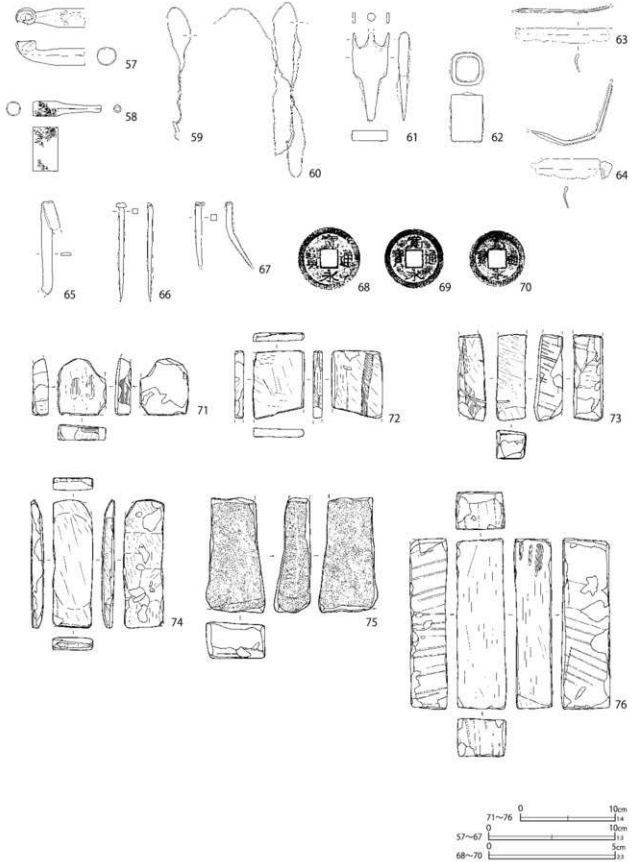
第88図　第2号池跡出土遺物（3）



第 89 図　第 2 号池跡出土遺物（4）



第 90 図　第 2 号池跡出土遺物（5）



第91図　第2号池跡出土遺物（6）

第 34 表　第 2 号池跡出土遺物観察表（1）（第 86 ～ 88 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	(9.2)	4.7	3.9	－	40	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付（端反碗）掘方	
2	磁器	碗	(9.2)	5.4	(3.7)	－	40	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付（端反碗）	103-7
3	磁器	碗	(9.3)	4.7	3.9	－	55	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付（端反碗）	103-8
4	磁器	碗	(11.0)	6.4	(5.0)	－	25	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付（端反碗）	
5	磁器	碗	(7.6)	6.6	(3.9)	－	30	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付（湯呑碗）	104-1
6	磁器	碗	(8.2)	[5.7]	－	－	40	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付（湯呑碗）	
7	磁器	碗	(7.3)	5.8	3.8	－	60	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付（湯呑碗）掘方 SG3 と接合	104-2
8	磁器	碗	(7.4)	5.8	3.8	－	35	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付（湯呑碗）	
9	磁器	碗	(8.4)	[5.3]	－	－	15	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 焼継痕（湯呑碗）	
10	磁器	碗	－	[5.2]	4.0	－	30	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付（湯呑碗）	
11	磁器	坏	6.2	5.3	2.8	－	100	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面酸化コバルト染付	104-3
12	磁器	坏	6.0	3.0	2.8	－	100	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 内面上絵付（青・金）口唇部金縁（卵殻手酒坏）	104-4
13	磁器	坏	(6.4)	3.0	2.4	－	45	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 内面上絵付（青・赤）（卵殻手酒坏）	104-5
14	磁器	坏	(6.1)	3.1	(2.5)	－	45	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 内面上絵付（青）高台内上絵付（赤）（卵殻手酒坏）	105-1
15	磁器	坏	(5.8)	2.8	2.4	－	50	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 内面上絵付（青・金）（卵殻手酒坏）	105-2
16	磁器	鉢	(13.1)	6.1	5.8	－	40	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付	
17	磁器	鉢	(17.0)	[5.4]	－	－	25	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 焼継痕	
18	磁器	戸車	3.1	0.8	3.2	－	65	良好	白	肥前系 側面施釉 最大径 3.6 cm	
19	磁器	花生	長さ 26.7 幅 11.7 高さ 10.9			－	100	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付（舟形花生）	104-6
20	陶器	坏	6.2	4.2	3.1	I	95	良好	淡黄	瀬戸美濃系 内外面灰釉	
21	陶器	灯明皿	9.7	2.3	4.3	IK	100	良好	にぶい橙	瀬戸美濃系 内外面柿釉・底部拭き取り 内外面直重ね焼き痕 やや歪む 掘方	
22	陶器	灯明皿	10.1	2.3	5.0	K	95	良好	にぶい黄橙	瀬戸美濃系 内外面柿釉・底部拭き取り 外面直重ね焼き痕	
23	陶器	灯明皿	11.4	2.5	4.6	I	50	良好	灰白	京都信楽系 内面～口縁部施釉 内面に円形の貼付あり 外面少量煤付着 掘方	
24	陶器	皿	7.0	1.8	3.2	K	95	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉	
25	陶器	皿	(11.6)	3.0	4.7	IK	35	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉（ヒダ皿）	
26	陶器	片口鉢	(17.2)	9.6	(8.7)	IK	40	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 内面目跡 1 遺存	
27	陶器	擂鉢	(39.8)	15.6	(16.7)	CDEIK	80	良好	赤	堺明石系 底部ヘラナデ 内面擂目 SG2 掘方・SG3 接合	
28	陶器	徳利	－	[16.3]	(11.2)	BI	35	良好	灰白	瀬戸美濃系 底部糸切痕 外面灰釉 体部下位～底部拭き取り 被熱	
29	瓦質土器	火鉢	(26.0)	12.7	(21.8)	CHIK	25	普通	にぶい橙	ほぼ酸化炎焼成 脚部穿孔 口唇部二次敲打痕・少量煤付着	105-3
30	瓦質土器	火鉢	－	[4.8]	(20.6)	BCHIK	10	普通	灰白 黄灰	やや酸化炎焼成	
31	瓦質土器	火消壺	(19.0)	[13.5]	－	CHIK	10	普通	明褐灰 灰	燻す	

第 35 表　第 2 号池跡出土遺物観察表（2）（第 88 図）

番号	種別	器種	法量	重量	胎土	焼成	色調	備考	図版
32	土製品	碁石	長さ 2.0 幅 2.1 厚さ 0.6	2.3	E	普通	橙	江戸在地系 表裏とも器面にシワ状の指紋痕ｶが ある	240-3
33	土製品	ミニチュア	長さ [3.5] 幅 [2.9]	5.9	EI	良好	浅黄橙	京都系 外面施文 施釉（緑）	240-4
34	土製品	ミニチュア	高さ [4.0] 幅 [3.5]	12.4	AE	良好	淡黄	京都系 徳利 前後合型成形 外面施文緑釉 中空	240-5
35	土製品	ミニチュア	長さ [3.8] 幅 [2.2] 高さ [3.2]	16.0	AH	普通	にぶい橙	江戸在地系 竈 板作り成形 胎土粉質 上面・正面に孔 内面煤付着	240-6

第 36 表　第 2 号池跡出土遺物観察表（3）（第 89 図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	高さ	径	胎土	焼成	色調	備考	図版
36	瓦	平瓦	[24.7]	[14.2]	2.1	[6.4]	—	AIK	普通	灰白		
37	瓦	平瓦	[25.1]	[16.2]	2.2	[5.3]	—	AIK	普通	灰白		

第 37 表　第 2 号池跡出土遺物観察表（4）（第 89・90 図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	口径 / 径	高さ	底径	木取り	備考	図版
38	木製品	漆椀	—	—	—	(12.2)	5.8	8.0	横木取り	内面赤漆 外面黒漆	249-1
39	木製品	柄杓	—	—	—	11.4	9.8	—	板目	柄穴 2 外面溝 2 段 底板焼印「食」 底板径 10.2cm	
40	木製品	調度品	4.8	(22.5)	0.4	—	—	—	板目	黒漆 孔 2	
41	木製品	釘	9.0	1.2	0.9	—	—	—	削出		
42	木製品	木札	20.9	6.3	1.0	—	—	—	板目	焼印「堀口宗八／生［　　］」（文字資料 2）	
43	木製品	木札	11.0	16.0	0.7	—	—	—	板目	木釘 3 木釘孔 1 表裏面墨書（文字資料 3）	
44	木製品	不明	15.1	[12.7]	3.4	—	—	—	板目	鍬痕 表裏面・右左側面墨書（文字資料 4）	
45	木製品	端材	9.5	5.1	3.1	—	—	—	板目	表裏面・右側面墨書（文字資料 5）	
46	木製品	木札	20.3	[3.0]	0.9	—	—	—	板目	桶・樽側板転用 表裏面墨書（文字資料 6）	
47	木製品	端材	4.0	8.8	2.8	—	—	—	板目	建築材端部ヵ	
48	木製品	端材	10.3	5.7	1.5	—	—	—	板目	加工時の木片	
49	木製品	端材	21.3	7.6	1.7	—	—	—	板目	加工時の木片	249-2
50	木製品	端材	22.8	6.8	1.5	—	—	—	板目	加工時の木片	
51	木製品	端材	15.5	6.2	1.1	—	—	—	板目	加工時の木片	
52	木製品	端材	18.8	6.5	1.5	—	—	—	柾目	加工時の木片	
53	木製品	下駄	[21.7]	6.7	—	—	3.1	—	板目	刳り下駄 表面黒漆	249-3
54	木製品	木札ヵ	[19.1]	25.4	0.8	—	—	—	板目	表裏面墨書（文字資料 7）	
55	木製品	不明	45.1	12.6	1.3	—	—	—	板目	鉄釘 2 釘孔 1	
56	木製品	不明	73.1	2.6	1.5	—	—	—	板目	裏面・右側面工具痕 表面墨書	

第 38 表　第 2 号池跡出土遺物観察表（5）（第 91 図）

番号	種別	器種	法量	備考	図版
57	銅製品	煙管	長さ 5.4 火皿径 1.4 × 0.9 小口径 1.5 × 1.4 重さ 11.4	雁首 草花文陰刻ヵ 南堀方	279-1
58	銅製品	煙管	長さ 5.4 小口径 1.1 口付径 0.6 重さ 9.4	吸口 草花文陰刻 南堀方	279-2
59	銅製品	針金	縦 10.6 横 1.9 厚さ 0.1 重さ 1.2		
60	銅製品	針金	縦 13.9 横 7.3 厚さ 0.1 重さ 2.4		
61	鉄製品	鋲	長さ [7.0] 幅 2.8 厚さ 0.8 重さ 45.6	三叉鋲	281-3
62	鉄製品	口金	縦 3.7 横 2.5 厚さ 0.3 重さ 55.1	鋲の口金	281-3
63	鉄製品	不明	縦 [1.2] 横 [7.5] 厚さ 0.2 重さ 3.2	縁肥厚し反る	
64	鉄製品	不明	縦 [1.6] 横 [6.5] 厚さ 0.2 重さ 8.7	縁肥厚し反る 63 と同一製品ヵ	
65	鉄製品	不明	長さ [7.4] 幅 0.8 厚さ 0.2 重さ 10.0		
66	鉄製品	釘	長さ [7.7] 幅 0.4 厚さ 0.4 重さ 5.3		
67	鉄製品	釘	長さ [5.1] 幅 0.5 厚さ 0.5 重さ 3.8		
68	銅製品	銭貨	径 25.1 厚さ 1.2 重さ 2.9	寛永通寶（古）	281-9
69	銅製品	銭貨	径 23.7 厚さ 1.1 重さ 2.5	寛永通寶（新）	
70	銅製品	銭貨	径 22.5 厚さ 1.1 重さ 2.2	寛永通寶（新）	

第 39 表　第 2 号池跡出土遺物観察表（6）（第 91 図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考	図版
71	石製品	砥石	[6.0]	5.1	1.6	75.9	角閃石安山岩ヵ	表・側面ノコギリ痕 黒色柱状鉱物多量 風化ヵ 砥面 3	292-2
72	石製品	砥石	[7.1]	5.4	0.9	67.1	流紋岩	裏面ノコギリ痕 削痕 線条痕あり 砥面 3	
73	石製品	砥石	[9.1]	3.2	3.0	130.4	流紋岩	右側面幅広工具痕 左側面ノコギリ痕 砥面 2	293-2
74	石製品	砥石	13.5	4.2	1.3	111.3	凝灰岩	砥面 5	293-2
75	石製品	砥石	[12.1]	[6.2]	3.8	374.2	砂岩	粗粒 砥面 3	293-2
76	石製品	砥石	17.9	4.9	3.9	740.1	流紋岩	裏・側面幅広工具痕 側面ノコギリ痕 被熱（黒色化） 砥面 2	298-5

されていた。重複する第6号杭列、第48号土壙より新しい。

規模は長軸8.45m、短軸4.50mである。平面形状は長方形である。長軸方位はN－15°－Wである。

本跡は、第2号池跡と同様に、土留めの役割を果たす長手の板材と、丸木ないし角木で囲まれていた。囲いは、二重であった。

外側の囲いは、遺構検出面で確認された。掘り方に沿って、丸木もしくは角木と思われる木材が配され、その内側に60～70cm程度の間隔で打ち込まれた杭で支えられていた。

内側の囲いの横板材は、掘り方の底面に沿って配され、径約8cmの杭が約90cm間隔で打ち込まれ、固定されていた。また、一部には留め金で板材を補強していた。板材の遺存状態は極めて良好であった。北壁の側板など、一部の側板には舟材が転用されていた。

池跡の中心には打ち込み杭が乱立していたが、本跡に伴うものか否か、判然としなかった。

覆土は、下層の第3・4層が炭化物や草木質の有機物を包含する。上層の第1・2層はシルトブロックを多量に含む埋土であった。また、第5層は板材の裏込め土と考えられる。

遺構内から建築材などの木製品を中心に、大形の自然礫、陶磁器片などが散在して出土した。陶磁器には、瀬戸美濃系磁器の湯呑碗や卵殻手酒坏がみられ、19世紀中葉から後葉の様相である。

銅版転写染付磁器の燗徳利も出土しているが、細片で後世の混入とみられる。掘り方には瀬戸美濃系磁器の湯呑碗、端反碗、陶器の青土瓶等がみられ、構築・廃絶時期には差がないと思われる。

第92～97図に出土遺物を示した。第92図1～22は陶磁器・土器である。1は肥前系磁器の小丸碗である。胎質はやや粗雑である。2は瀬戸美濃系磁器の坏で、外面に色絵が上絵付けされる。上絵付けの色調は黒っぽいが、本来は赤で絵付けされたものと考えられる。

3～5は瀬戸美濃系磁器の端反碗である。いずれも口縁部の反りが大きい。3・5はやや厚手である。4はそれらより薄手で、高台もシャープな作りである。同文の別個体が1個体ある。

6～10までは湯呑碗としたが、7・8は坏に近い形状である。7のみ肥前系磁器、他は瀬戸美濃系磁器である。9は、外面に木型打ち込みと思われる陰刻状文が施された後、施釉される。10は赤・緑の色絵が施される。

11は瀬戸美濃系磁器である。上部の形状が不明であるが、筒形碗と考えられる。瀬戸美濃系磁器の筒形碗は少ない。12は瀬戸美濃系磁器の卵殻手酒坏である。内面にいわゆる江戸絵付けが認められる。13は瀬戸美濃系磁器の燗徳利である。

14は瀬戸美濃系陶器の坏で、黄色味を帯びた光沢の強い灰釉が施される。15は瀬戸美濃系陶器の灯明皿で、赤味の強い柿釉が施される。

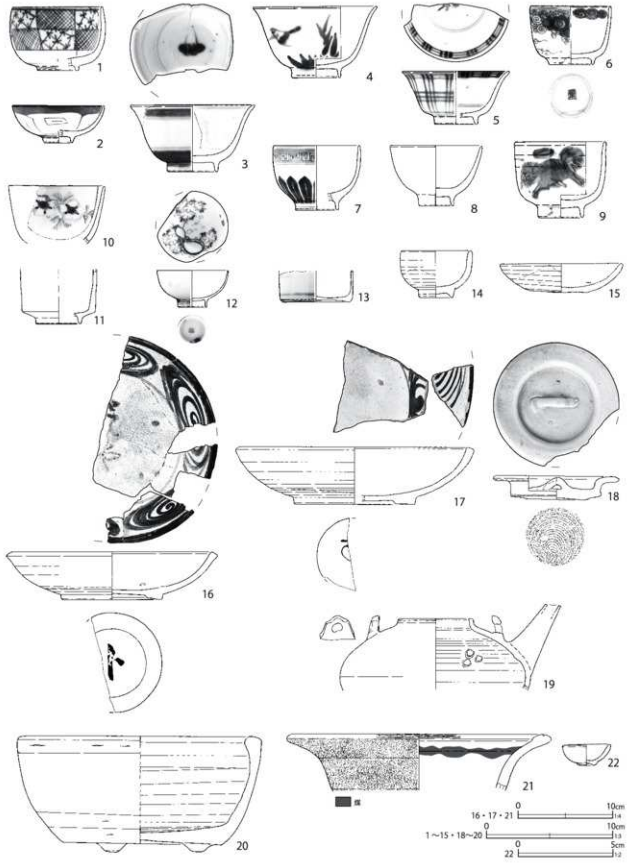
16・17は瀬戸美濃系陶器の馬目皿で、16の内面に釘書き「とらや」、高台内に墨書「卜」がある。第6地点区画Ⅰの『絵図』にみえる「煮賣屋　運平」（埼埋文2019c）に関わる資料である。

20・21は瓦質土器の火鉢である。20は丸火鉢で、白色味を帯びる硬質の胎土である。僅かにケズリ痕跡が認められ、工具ナデないしケズリで処理されていた可能性が高い。

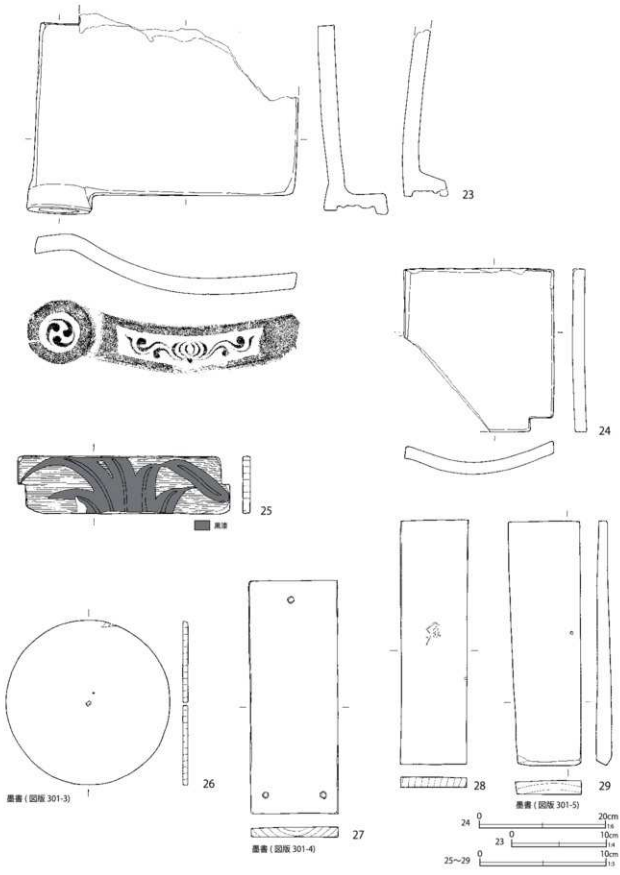
21は深手の火鉢で、肥厚する口縁部にミガキが施される。口唇部には円孔が設けられているが、遺存するのは1箇所のみであり、10cm以上の間隔を空けて口唇部に配されていたものらしい。外面はトビガンナ状の施文で、遺存部の下端には沈線の痕跡が確認できる。全体が被熱している。

22は瀬戸美濃系磁器の坏としたが、碗のミニチュアないし紅坏かもしれない。型成形で、外面は無文、内外面は施釉される。

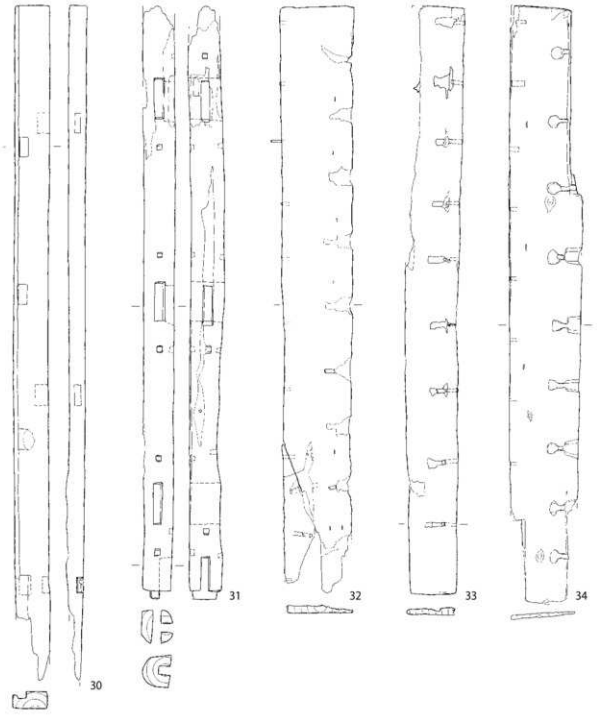
第93図23・24は瓦で、23は軒桟瓦である。江戸式に類似する瓦当文様だが、中心弁は三重で



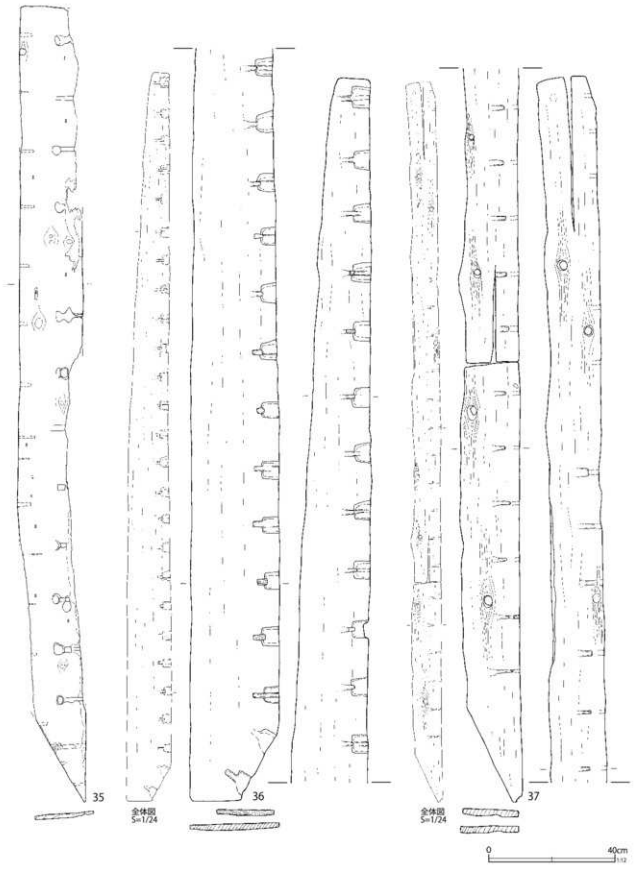
第92図　第3号池跡出土遺物（1）



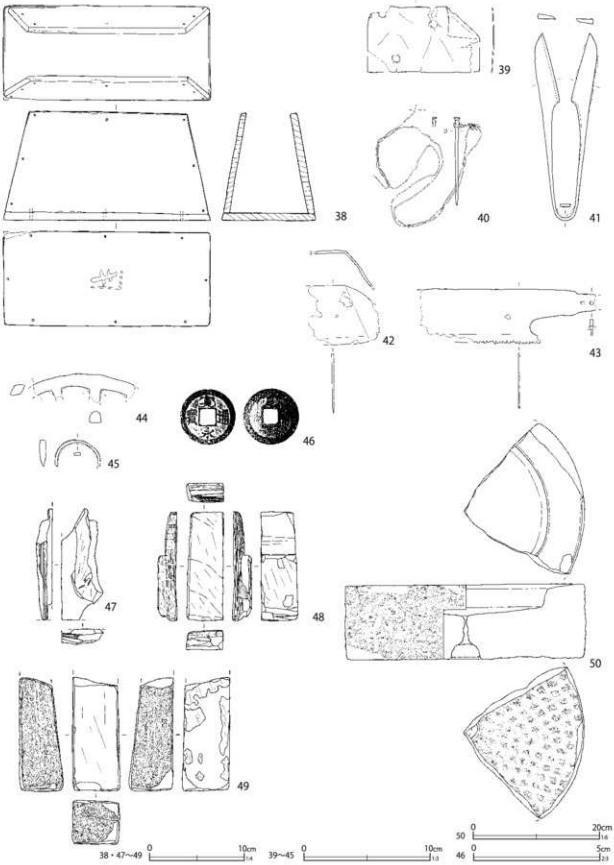
第 93 図　第 3 号池跡出土遺物（2）



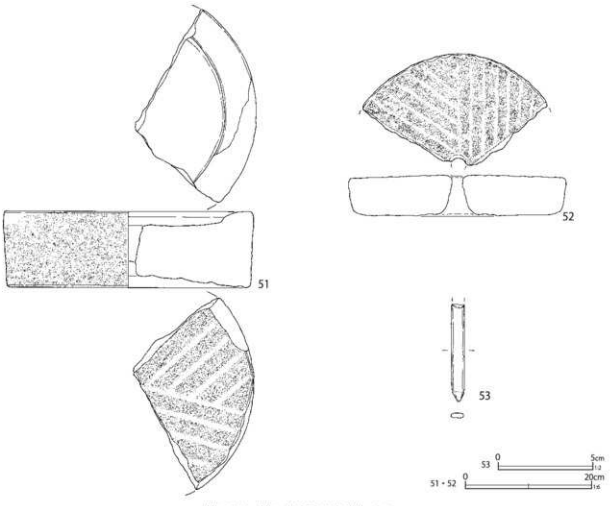
第94図　第3号池跡出土遺物（3）



第 95 図　第 3 号池跡出土遺物（4）



第96図　第3号池跡出土遺物（5）



第97図　第3号池跡出土遺物（6）

第40表　第3号池跡出土遺物観察表（1）（第92図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	(7.0)	5.0	(3.0)	—	40	良好	灰白	肥前系 内外面施釉 外面染付（小丸碗）	
2	磁器	坏	(7.1)	2.9	(2.1)	—	45	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面色絵	105-4
3	磁器	碗	(9.6)	5.2	3.9	—	35	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付（端反碗）	
4	磁器	碗	(9.8)	5.6	(3.8)	—	40	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付（端反碗）同文別個体1あり	
5	磁器	碗	(8.3)	4.2	(3.2)	—	40	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付（端反碗）	
6	磁器	碗	6.3	4.6	3.4	—	100	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付（湯呑碗） B514と接合	105-5
7	磁器	碗	(6.7)	5.1	(3.2)	—	35	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付（湯呑碗）	
8	磁器	碗	7.2	4.7	2.6	—	95	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉（外面瑠璃釉）口紅 同文別個体1あり（湯呑碗）	105-6
9	磁器	碗	7.0	6.0	3.4	—	95	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面陰刻状文・染付（湯呑碗）	106-1
10	磁器	碗	(7.5)	[4.5]	—	—	15	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面色絵（赤・緑）（湯呑碗）	
11	磁器	碗	—	[4.3]	(3.6)	—	5	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉	
12	磁器	坏	5.6	2.9	2.2	—	75	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 内面上絵付（青・金）外面染付（卵殻手酒坏）	106-2
13	磁器	蠟燭刑	—	[2.5]	5.2	—	10	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付	
14	陶器	坏	5.4	3.7	2.5	D	100	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉	
15	陶器	灯明皿	9.5	2.3	4.4	IK	100	良好	灰黄	瀬戸美濃系 内外面柿釉・底部拭き取り 内面直重ね焼き痕	
16	陶器	皿	(21.0)	5.0	10.5	K	40	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 内面鉄絵・釘書き「とらや」高台内墨書「ト」（馬目皿）堀方・SG2接合	106-3 167-4

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
17	陶器	皿	(24.4)	6.0	(12.6)	EK	15	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 内面鉄絵 高台内墨書 捺点無い上下2破片から図上復元（馬目皿）腰方	
18	陶器	蓋	9.0	1.9	4.6	I	80	良好	灰白	瀬戸美濃系 底部糸切痕（右） 外面灰釉 最大径9.9 cm 腰方	
19	陶器	土瓶	(5.7)	[6.7]	—	I	30	良好	淡黄	外面青緑釉	
20	瓦質土器	火鉢	17.2	9.1	12.5	CHK	100	普通	にぶい橙	体部下位ケズリ	106-4
21	瓦質土器	火鉢	(27.0)	[5.9]	—	CHK	10	普通	にぶい橙	外面トビガンナ状施文 口縁部ミガキ・孔あり 内面上位煤付着 被熱	
22	磁器	ミニチュア	2.5	0.9	1.1	—	100	良好	白	瀬戸美濃系 碗 内外面釉 重さ2.9g	240-7

第41表　第3号池跡出土遺物観察表（2）（第93図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	高さ	径	胎土	焼成	色調	備考	図版
23	瓦	軒桟瓦	[21.3]	29.2	1.7	6.8	6.1	AIK	普通	灰白	右巻き 三巴文	245-2
24	瓦	桟瓦	26.2	[24.1]	2.0	[5.3]	—	AIK	普通	灰白		245-3

第42表　第3号池跡出土遺物観察表（3）（第93～96図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	口径/径	高さ	底径	木取り	備考	図版
25	木製品	箱	4.5	16.8	0.6	—	—	—	柾目	側板 裏面赤漆 表・上・側面黒漆 表面文様（黒漆）	249-4
26	木製品	曲物	—	—	0.4	13.0	—	—	柾目	蓋 孔2 表面墨書（文字資料10）	
27	木製品	木札	18.3	7.0	8.0	—	—	—	板目	孔3 表裏面墨書（文字資料11）	
28	木製品	木札	19.8	5.3	0.8	—	—	—	板目	焼印「㐂」	
29	木製品	木札	19.3	5.7	1.2	—	—	—	板目	桶側板転用 孔1 表裏面墨書（文字資料12）	
30	木製品	建築材	209.6	10.8	5.2	—	—	—	分割材	長方形ホゾ穴7	
31	木製品	建築材	[183.4]	10.0	10.2	—	—	—	芯持材	長方形ホゾ孔3 方形ホゾ穴13 ホゾ1 鉄釘1	
32	木製品	角材	182.4	23.0	2.4	—	—	—	板目	両側面の9箇所ずつ釘孔あり（うち7箇所鉄釘残）表面に7箇所釘痕ヵ（未貫通）	
33	木製品	角材	182.6	16.6	2.3	—	—	—	板目	鉄釘6 釘孔3 池側板に転用	
34	木製品	角材	[199.6]	22.8	1.7	—	—	—	板目	木釘残 池側板に転用	
35	木製品	角材	256.0	19.6	1.8	—	—	—	板目	両側面に釘孔多数あり 池側板に転用	
36	木製品	角材	473.5	28.4	2.1	—	—	—	板目	池側板に転用	
37	木製品	角材	466.5	17.8	2.2	—	—	—	板目	切断痕（二次加工）あり 池側板に転用	
38	木製品	箱枕	10.0	21.9	—	—	11.5	—	板目	木釘21 裏面焼印「㞢」炭化	

第43表　第3号池跡出土遺物観察表（4）（第96図）

番号	種別	器種	法量	備考	図版
39	銅製品	不明	縦5.3 横8.9 厚さ0.1 重さ27.1	孔3	
40	銅製品 鉄製品	針金 釘	縦9.8 横8.5 厚さ0.2 長さ7.0 幅0.2 厚さ0.2 重さ合計5.0	釘に針金が括り付けられる	280-8
41	鉄製品	握鋏	長さ14.9 刃幅1.4 背幅0.4 重さ45.7		280-9
42	鉄製品	鎌	刃長[5.7] 刃幅4.7 背幅0.2 重さ12.4		
43	鉄製品	鋤	長さ[14.0] 刃幅4.4 背幅0.2 重さ28.8	アサリあり ナゲシ不明	281-1
44	鉄製品	火格子	縦[2.3] 横[8.1] 厚さ1.1 重さ44.4		
45	鉄製品	不明	縦[2.1] 横[3.6] 幅0.5 厚さ0.2 重さ2.4		
46	銅製品	銭貨	径22.4 厚さ1.2 重さ3.0	寛永通寶（新）背足ヵ	

第44表　第3号池跡出土遺物観察表（5）（第96・97図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考	図版
47	石製品	砥石	[11.7]	[4.4]	[1.7]	71.9	粘板岩	側面ノコギリ痕 砥面1 破損後被熱（一部黒色化）	
48	石製品	砥石	11.5	3.9	2.0	139.5	粘板岩	裏面削痕 側面ノコギリ痕 切断痕あり 砥面4	293-1
49	石製品	砥石	[11.9]	5.0	4.6	496.8	流紋岩	左側面ノコギリ痕遺存 側面刃物痕 被熱（剝落）	293-1
50	石製品	石臼	径(37.4) 器高11.8			6700.0	安山岩	上臼 下面摺目（格子状）中央芯棒受穴 側面ピシャン仕上げ状 上面摩耗	289-3
51	石製品	石臼	径(39.8) 器高12.3			9000.0	花崗岩	上臼 下面摺目・芯棒受穴 上面摩耗 被熱（一部黒化）	289-4
52	石製品	石臼	径(34.8) 器高6.4			5000.0	花崗岩	下臼 上面摺目 上・下面摩耗 芯棒受穴	289-5
53	硝子製品	笄	[5.1]	0.7	0.3	3.2	—	青色 中実	299-1

ある。24は桟瓦である。左側に僅かに隅切りが遺存する。

第93～96図25～38は木製品である。第93図25は箱の一部で、裏面に赤漆、表、上、側面に黒漆が塗布される。

27～29は木札である。27は表面に「武州栗橋宿／笹屋宗三郎様行」、「井関□□□□□□□」、「東京／浅草田原町／□□や／平源」の墨書がある。『営業便覧』の「凍氷貯蔵営業　笹屋號　池田宗三郎」に該当する。なお、「東京」の名称が使われるようになったのは明治元年（1868年）に東京府が置かれた後である。裏面には「陸上安全」、「三月廿五日午前三時」の墨書がある。

「平源」は遺物包含層1から出土した木札（第260図151）にも記載がある。裏面に「御肉」の墨書があることから、現在の台東区浅草田原町周辺の肉屋を示すと思われる。28は「會」の焼印がある。

29は表面に「蹇包壱［　］、「［長瀬カ］屋長次郎」の墨書がある。裏面にも文字があったが、ほとんど判読できなかった。栗橋宿跡第1地点の第2号土壙から出土した荷札には「會／畳屋長治郎様」の墨書がある（『栗橋宿跡Ⅰ』）。したがって、29にも畳屋長治郎のことが書かれていた可能性がある。畳屋長治郎は『絵図』の「古道具屋　長次郎　吉田長二郎」に該当する。

第94図30・31は建築材で、30は長方形のホゾ穴がある。31は端部にホゾがみられ、長方形のホゾ孔と、正方形のホゾ穴がみられる。

第94・95図32～37は池跡の側板に転用された舟材である。

第95図36は幅が広い方の端部が斜めにカットされており、全体的に先細りの形状である。37は全体の三分の一ほどの位置で切断されており、元は一枚板であったと思われる。また、先細りした方の先端部に斜めの切断がみられる。したがって、36は中部に相当する部材、37は舟側板の上部と考えられる。具体的には右側の側板で、先細りの方は船首側、幅が広い方は船尾であろう。なお、部材の同定には、『大田区の船大工』（大田区立郷土博物館 1996）を参照した。

舟材を転用する事例は江戸遺跡でみられる木製枡形穴蔵をはじめ、地下水位が高い低地遺跡を中心に認められる。栗橋宿でも転用事例は確認されており、第6地点では舟材を転用した木製枡形穴蔵が検出されている（埼埋文 2019c）。

第96図39～46は金属製品である。

41は握鋏である。42は鎌である。43は鋸である。44は火格子である。46は寛永通寶である。

第96・97図47～52は石製品である。47は粘板岩製砥石である。側面はノコギリ状工具痕と思われる痕跡がみられる。被熱により、黒化している。

48はやや黄色気味の灰白色を帯びる粘板岩製砥石で、硬質な石材が用いられている。側面に密なノコギリ状工具痕がみられる。裏面中央と下端部に、中心部まで届く二次的な切断痕が認められる。砥面は4面である。

50は安山岩製石臼の上臼である。外面中・下位に、ビシャン仕上げ状の凹凸がみられる。下面は格子状摺目である。

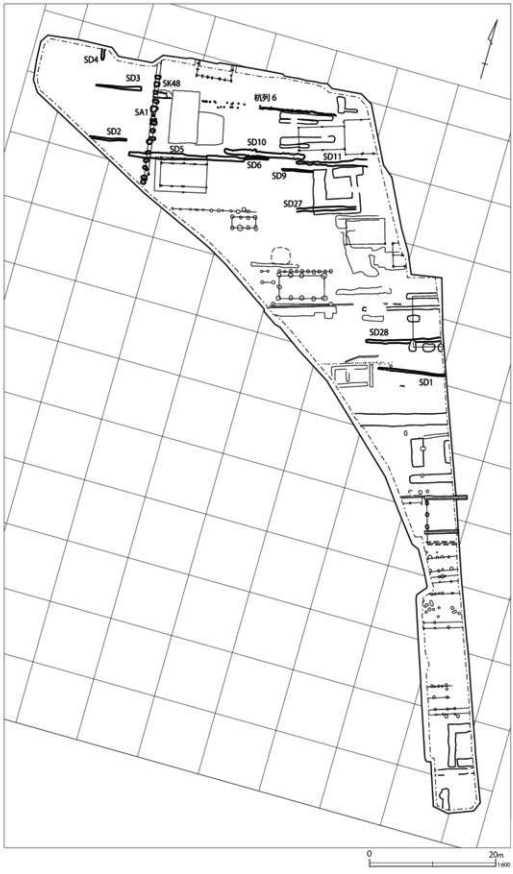
52は白色の花崗岩製石臼の下臼である。上面に摺目がみられ、下面は強く摩耗している。

53は硝子製の笄である。

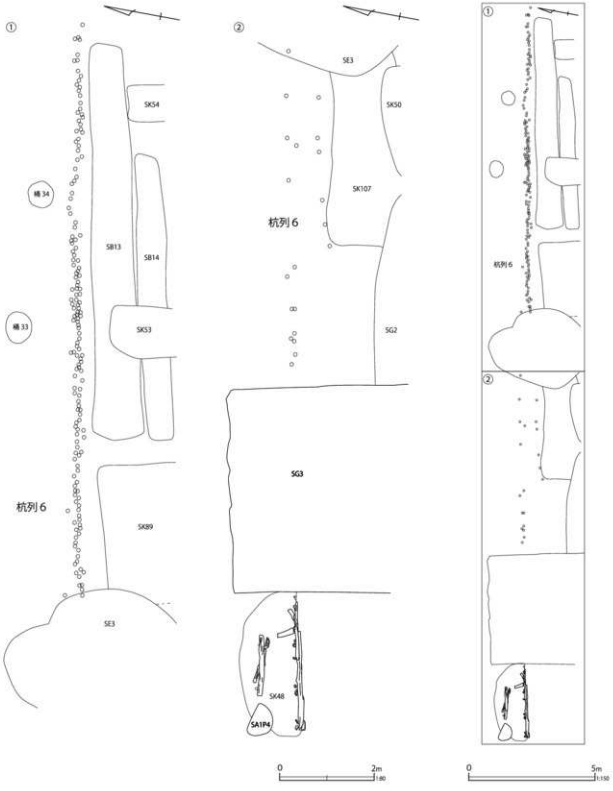
（7）杭列

多数の打ち込み杭が直線上に並ぶ遺構を杭列とした。本来は第5号溝跡（第102・103図）や第27号溝跡（第114図）のような側板を杭で支える木樋状の溝跡であったと考えられる。掘り方が削平されたため、打ち込み杭のみが遺存している状態であった。

第99図に遺構図を示した。なお、杭列、溝跡、柵跡・区画施設の多くは、短冊状地割を構成する区画施設と思われる。第98図には、区画に関わ



第 98 図　第一面区画施設配置図


①
②
SK54
SB13
SB14
SK53
SK89
SE3
杭列6
SE3
SK50
SK107
杭列6
SG2
SG3
SK48
SA1P4
杭列6
0
2m
1:80
0
5m
1:150

第99図　第6号杭列

る遺構の位置を、検出された建物跡と共に示した。

第６号杭列（第 99 図）

Ｂ５－Ｉ４～７グリッドに位置し、日光道中に直行するように東西方向へ延びていた。第３号井戸跡、第３号池跡より古い。

西部は重複する井戸跡、池跡により消失していた。これらの遺構検出時には、既に杭がみられなかったため、井戸、池を構築する際に壊されたと考えられる。

また、東部は平行する第 13 号建物跡の端を過ぎたところで消失しており、それ以上は追えなかった。延長線上の基本土層東壁１（第７図）でも杭列の続きは検出されず、区画施設と思われる掘り込みも確認されなかった。

杭は極めて密に打ち込まれていたが、第３号井戸跡から西側ではまばらであった。杭の南北の打設幅をみると幅約 30 ㎝程度の区画施設が想定される。西側で南北幅が広がっていることから、改修・付け替えの可能性もある。出土遺物はなく、構築・廃絶時期は不明である。

（８）溝跡

本書掲載分の第一面の溝跡は 11 条である。このうち、壁面を板材と杭で抑える区画施設の溝跡が２条（第５・27 号溝跡）、瓦樋（第６号遺跡）が１条検出された。また、埋設桶と一連の遺構と思われる溝跡が２条（第１・27 号溝跡）検出された。遺構が途中で途切れるものが多く、区画を意識したものか否かの判断が難しい。

位置・規模等の基本的な情報は第 45 表にまとめた。遺構は第 100・102・103・110・114 図、遺物は第 101・104 ～ 109・111 ～ 113 図に示した。各遺構の位置は、第 98 図を参照していただきたい。また、構築面を把握するために、可能な限り、基本土層東壁と対比しながら断面図を示した。

第１号溝跡（第 100・101 図）

Ｃ５－Ｂ９・10、Ｃ９グリッドに位置する。東西方向に延びていたが、日光道中に直交せず、やや北へ傾いて延びていた。東端は調査区域外である。西端は第７号埋設桶と重複しており、一連の遺構と思われる。

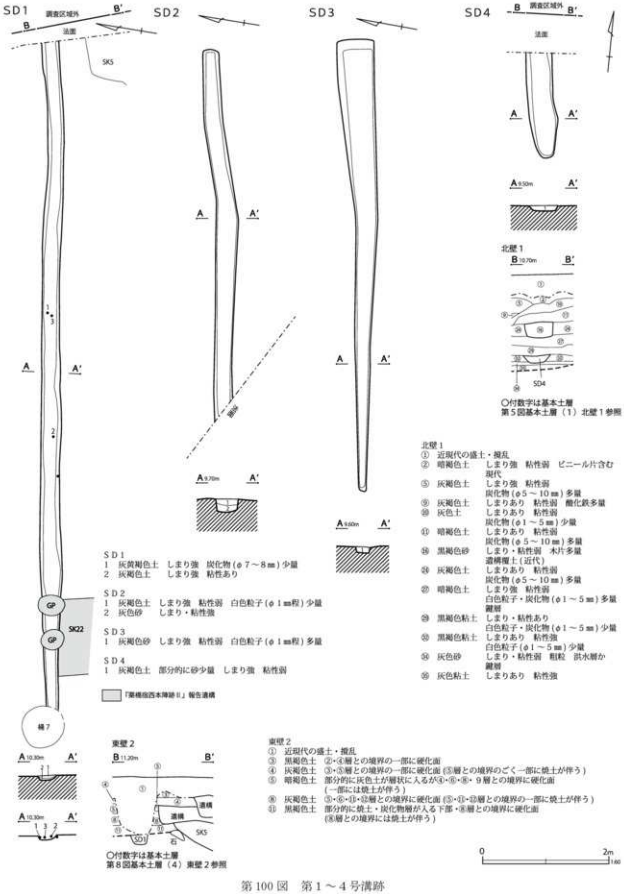
重複する第 22 号土壙、Ｃ５－Ｃ９グリッドのピット１・２（『栗橋宿西本陣跡Ⅱ』報告）より古い。

検出された長さは 10.65 ｍ以上、幅 0.20 ～ 0.35 ｍ、遺構確認面からの深さは 0.07 ｍで、走行方向はＮ－ 81° －Ｅであった。東から西へ向かって、低く傾斜していた。

遺物は極めて少なく、陶磁器の出土はなかった。基本土層東壁２（第８・100 図）を見ると、硬化した整地層（第 11 層）に覆われていた。この整地層を掘り込み面とした、第５号土壙から出土した陶磁器は、18 世紀末頃の様相である（第 210 図）。したがって、第１号溝跡は第５号土壙より古いとみなされ、18 世紀末以前に廃絶したと考えられる。

第 45 表　第一面溝跡一覧表　　単位：m

番号	区画	グリッド	長さ	幅	深さ	方位	備考
1	6	C5-B9/10, C9	[10.65]	0.20 ～ 0.35	0.07	N-81° -E	SK22・C5-C9P1・2 より古 桶７と重複
2	－	B5-J3/4	[5.95]	0.26 ～ 0.36	0.17	N-80° -E	遺物包含層１より新
3	－	B5-I3/4	7.20	0.12 ～ 0.57	0.12	N-80° -E	遺物包含層１より新
4	－	B5-I3	[1.66]	0.20 ～ 0.44	0.08	N-10° -W	遺物包含層１より新
5	2	B5-J4/5/6	[18.27]	0.48 ～ 1.00	0.30 ～ 0.60	N-76° -E	SA1P13 より古 SB15 と重複 SD6 と接続
6	2	B5-J6	4.11	0.20 ～ 0.53	0.24 ～ 0.26	N-77° -E	SD5 と接続
9	3	B5-J6/7	[4.93]	0.17 ～ 0.30	0.12 ～ 0.16	N-76° -E	SK96・97 より新 SB20 と重複
10	2	B5-J5/6	12.72	0.61 ～ 1.09	0.29	N-82° -E	桶 49 と重複
11	2	B5-I7, J6/7	[10.76]	0.27 ～ 1.05	0.07 ～ 0.15	N-74° -E	
27	3	B5-J7	[8.90]	0.37 ～ 0.60	0.30 ～ 0.35	N-73° -E	SB20 より新
28	5	C5-B8/9	[11.80]	0.45 ～ 0.58	0.18	N-72° -E	SB9 より古



第 100 図　第１～４号溝跡

出土遺物は第101図に銭貨を示した。１～３は寛永通寶である。そのうち１は古寛永である。

第２号溝跡（第100図）

Ｂ５－Ｊ３・４グリッドに位置し、東西方向に延びていた。西部は調査区域外であった。

検出された長さは5.95ｍ以上、幅0.26～0.36ｍ、深さ0.17ｍ、走行方向はＮ－80°－Ｅである。やや蛇行しながら、東から西へ傾斜しており西側が低かった。第３号溝跡と並行し、第４号溝跡と直交する位置関係であった。

本跡は、自然地形（池沼湿地帯）を埋め立てた19世紀後葉頃の土地造成（遺物包含層１）の上に開削されていた。

覆土の下層は砂質に近いシルト質土、上層はシルト質土で埋め戻されていた。ともに強くしまっていた。

出土遺物はないが、土地造成後の開削であったことから、遺構の時期は19世紀後葉以降である。

第３号溝跡（第100図）

Ｂ５－Ｉ３・４グリッドに位置し、東西方向に延びていた。

検出された長さは7.20ｍ、最大幅0.57ｍ、深さ0.12ｍ、走行方向はＮ－80°－Ｅである。やや蛇行しながら東から西へ傾斜しており西側が低かった。溝の幅は一定ではなく、東側は幅が徐々に広がっていた。西端の幅は0.12ｍ程度で非常に狭かった。東西端は途切れており、それ以上を追えなかった。第２号溝跡と並行していた。

本跡は第２・４号溝跡と同じく、土地造成後に開削されていた。覆土は単一層で、シルト質土で埋め戻されていた。しまりは強かった。

出土遺物はないが、土地造成後の開削であったことから、遺構の時期は19世紀後葉以降である。

第４号溝跡（第100図）

Ｂ５－Ｉ３グリッドに位置し、南北方向に延びていた。北側は調査区域外であった。

基本土層北壁１（第５・100図）をみると、三枚の水平堆積層を挟んだ直上に、同様の幅を持つ人為的な掘り込み（第16層）がみられた。同一地点に繰り返し掘られた区画溝の可能性がある。

検出された長さは1.66ｍ以上、幅0.20～0.44ｍ、深さ0.08ｍ、走行方向はＮ－10°－Ｗで、南から北へ傾斜しており北側が低かった。

本跡は第２・３号溝跡と同じく、土地造成後に開削されていた。覆土は単一層で、シルト質土で埋め戻されていた。しまりは強かった。

出土遺物はないが、土地造成後の開削であったことから、遺構の時期は19世紀後葉以降である。

第５号溝跡（第102～107図）

Ｂ５－Ｊ４・５・６グリッドに位置する。日光道中に直交するように、東西方向に延びていた。

検出された長さは18.27ｍ以上、幅0.48～1.00ｍ、深さ0.30～0.60ｍで、走行方向はＮ－76°－Ｅである。東から西へ傾斜しており、西側が低かった。東部は第６号溝跡と接続し、西部は遺物包含層１へ延びて途切れていた。

このことから、土地造成が行われる前の遺構と判断される。遺物包含層１は19世紀後葉頃の造成土で、それ以前には池沼湿地帯であったと考えられる（Ⅴ　自然科学分析３・４参照）。本跡は、より西方の池沼湿地帯へ排水する機能を有していたと考えられる。また、東部の第６号溝跡（瓦樋）から本跡へ排水する一連の区画施設とみられる。

壁面は板材等を杭で押さえており、第27号溝跡（第114図）のほか、栗橋宿跡の各地点で確認された区画施設と同様の構造であった。北部で検出された第６号杭列（第99図）は、このような土部構造であったと考えられる。

打ち込み杭は残存する長さが1.20ｍを測るものがあり、深く打ち込まれていた。杭は丸太杭、丸太を２分の１カットした杭、４分の１カットした杭の三種類を使用していた。杭の頭部は欠損していた。

また、掘り方の幅が一定ではなく、打ち込み杭

第 101 図　第 1 号溝跡出土遺物

第 46 表　第 1 号溝跡出土遺物観察表　（第 101 図）

番号	種別	器種	法量	備考	図版
1	銅製品	銭貨	径 24.9 厚さ 1.2 重さ 2.2	寛永通寶（古）	
2	銅製品	銭貨	径 23.7 厚さ 1.2 重さ 1.6	寛永通寶（新）	
3	銅製品	銭貨	縦 20.6 横 20.8 厚さ 1.1 重さ 1.2	寛永通寶（新）縁一部欠	

が密であることから、複数回の改修が行われたものと考えられる。

土留めの板材や杭は炭化しているものがあり、文化・文政期の火災を受けた可能性が考えられる。

覆土は砂とシルトの互層で、第 5 層の粘土は側板の裏込めであった。

最も時期の新しい出土遺物は、瀬戸美濃系磁器の湯呑碗や陶器のトビガンナ状に施文された土瓶である。また、極めて強く被熱した肥前系磁器皿の砕片がみられる。

推定廃絶時期は 19 世紀中葉だが、炭化板材や杭、被熱した陶磁器が文化・文政期の火災によるものであるならば、19 世紀前葉には機能していたと思われる。

第 104 ～ 107 図に出土遺物を示した。第 104 図 1 ～第 105 図 17 は陶磁器・土器である。

2 は瀬戸美濃系磁器の湯呑碗で、掘り方から出土した。3 も瀬戸美濃系磁器の湯呑碗で、底部に赤の焼継印が認められる。4 は瀬戸美濃系磁器の端反碗の蓋である。5 は肥前系磁器の有蓋壺ないし、土瓶の破片である。

6 は京都信楽系陶器の小杉碗である。釉薬の細かい貫入が黒化しているので、弱く被熱していると考えられる。体部の丸みが強いものである。

7 は瀬戸美濃系陶器の灯明皿（油受皿）である。外面下位の重ね焼き痕は径 7.1 ㎝、受部径は 6.9 ㎝である。

8 は瀬戸美濃系陶器の片口鉢で、黄色味の強い灰釉が掛けられる。内面にはピン痕状の目跡が 4 箇所みられる（中心に 1 箇所、周囲に 3 箇所）。また、底部に墨書がある。

10 は瀬戸美濃系陶器の小形の有耳壺である。蓋が伴うものである。体部下位の露胎部には細かいケズリが施される。

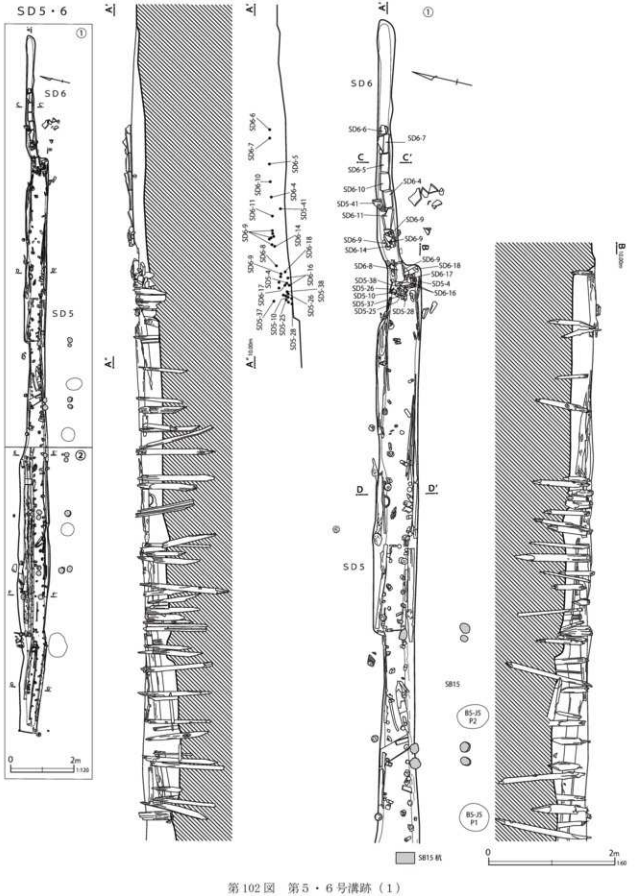
12・13 は瀬戸美濃系陶器の半胴甕である。12 は全体に赤みの強い柿釉が施される。13 は底部で、茶色味の強い柿釉が施された後、底部の釉は拭き取られる。高台畳付部が摩耗しているが、使用による磨り減りであろうか。

第 105 図 14 は陶器土瓶の蓋で、上面には貫入の多い糠白釉が施釉される。大堀相馬系陶器の可能性がある。内面（下面）に墨書（「中」ヵ）が認められる。15 は京都産の涼炉である。

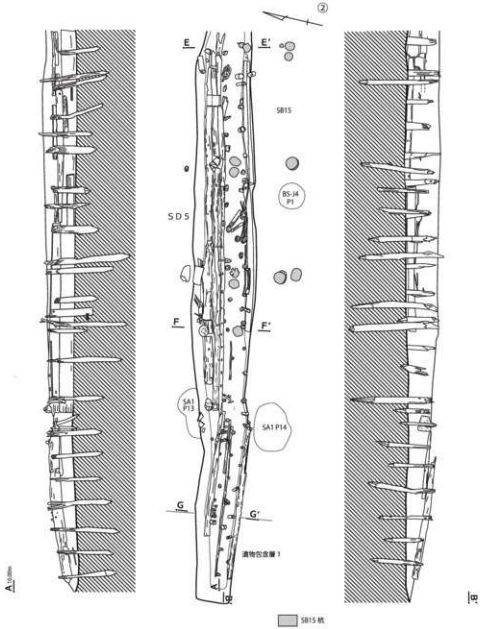
16 は瓦質土器で燻されているが、胎土は鈍い黄橙色で粉っぽく、輝石状の鉱物が少し混入する。内底面に突起状のものが剥がれた痕跡があり、仕切盤と判断した。

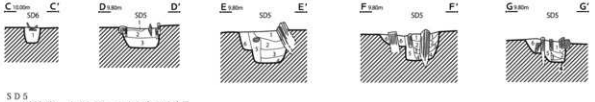
17 は土師質土器の焙烙である。胎土に赤色粒子・白色粒子等が多く含まれ、赤色粒子には径 5 ㎜を超える酸化した角礫状のものもみられる。角閃石はあまりみられない。ただし、底部の砂目には角閃石が一定量付着している。

第 105 図 18・19 は瓦である。18 は軒桟瓦である。江戸式に類似した瓦当文様だが、中心弁は三



第102図　第５・６号溝跡（１）

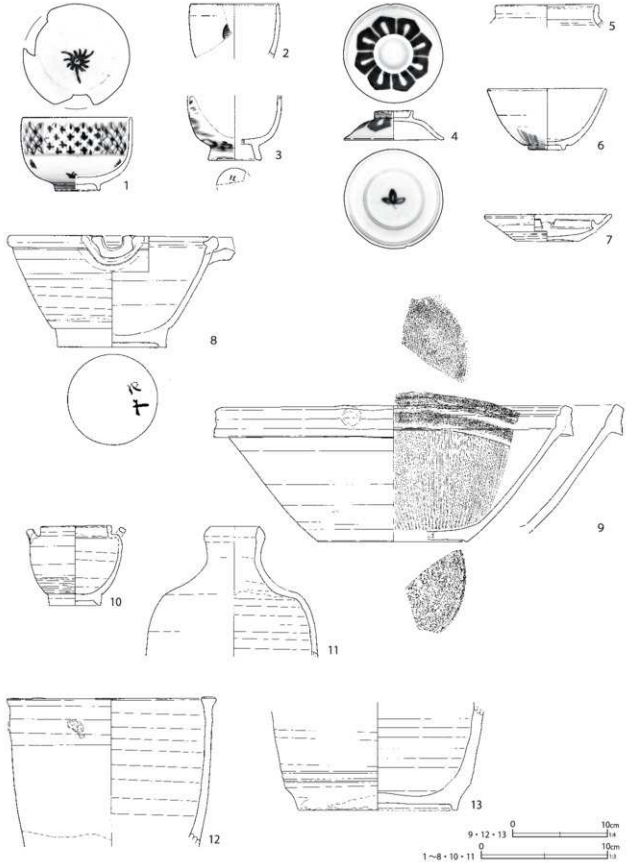




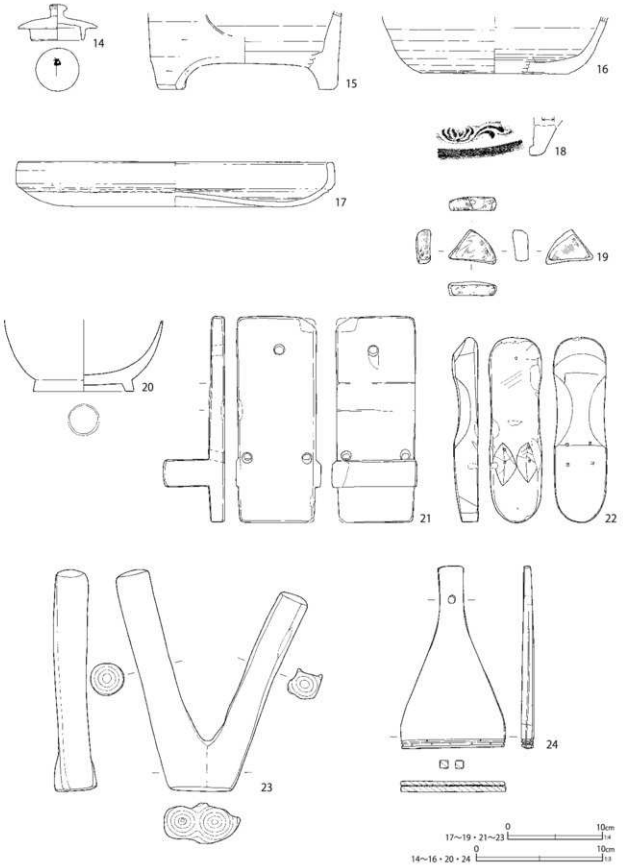
SD5
1　灰褐色砂　しまりなし　シルトブロック少量
2　灰褐色土　しまりなし　炭化物・木片少量　砂多量
3　灰褐色砂　しまりなし　シルトブロック少量
4　暗灰色土　しまり弱　粘性あり　炭化物・砂少量
5　暗灰色粘土　炭化物多量
6　暗灰色土　粘性あり　炭化物多量

SD6
1　暗灰色粘土　炭化物少量

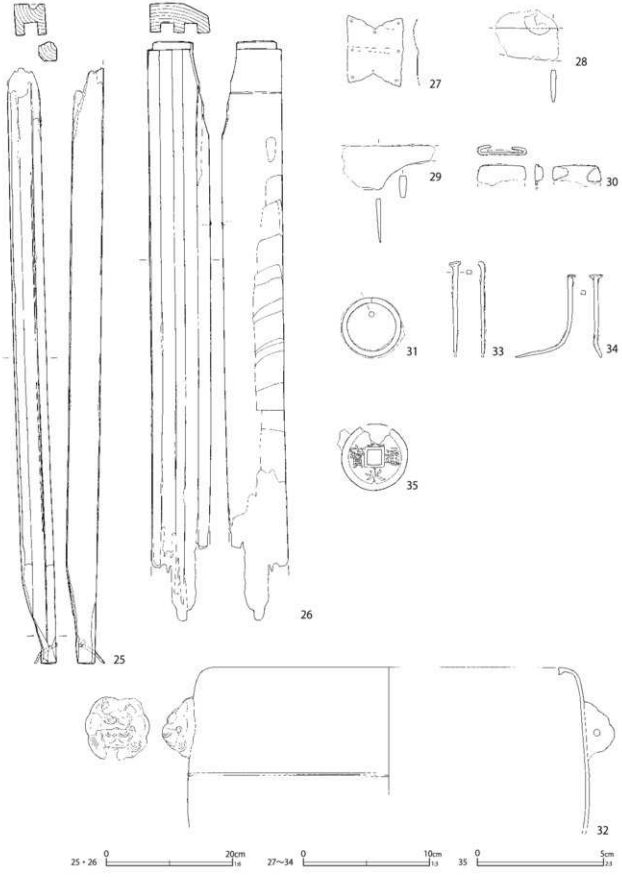
第 103 図　第 5・6 号溝跡（2）



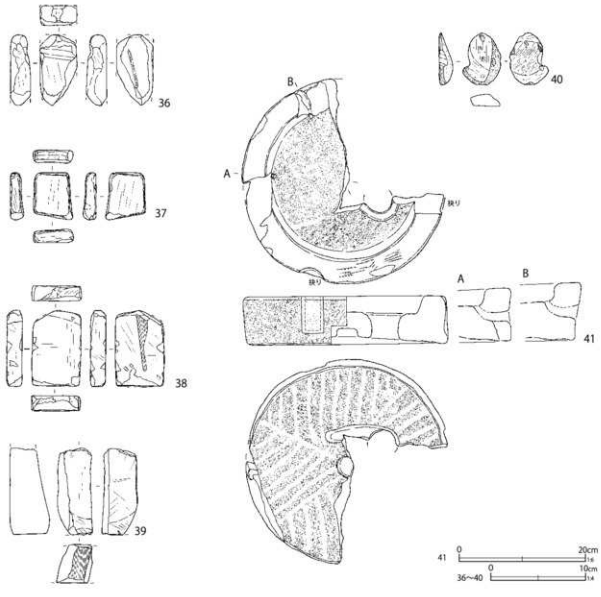
第 104 図　第 5 号溝跡出土遺物（1）



第 105 図　第 5 号溝跡出土遺物（2）



第 106 図　第 5 号溝跡出土遺物（3）



第 107 図　第 5 号溝跡出土遺物（4）

重である。

第 105・106 図 20 ～ 26 は木製品である。20 は腰丸椀である。内面に赤漆、外面に黒漆が塗布される。また、高台内に黒漆で「○」が描かれる。21 は連歯下駄である。22 は無眼下駄である。24 は刷毛である。25 は鴨居を転用した杭である。26 は鴨居である。裏面に加工痕がみられ、転用が示唆される。

第 106 図 27 ～ 35 は金属製品である。

27 は銅製の飾金具である。28 ～ 34 は鉄製品で、28 は刃物である。30 は尻鉄である。31 は環金具である。32 は獣面把手の火鉢である。35 は寛永通寶である。

第 107 図 36 ～ 41 は石製品である。

36 ～ 38 は白色の流紋岩製砥石である。36 は被熱により表面が激しく剥落している。38 はノコギリ状工具痕が僅かに遺存している。

39 はホルンフェルス製の砥石である。端面に密なノコギリ状工具痕がみられる。

40 は多孔質の角閃石安山岩転石を素材とした

第 47 表　第 5 号溝跡出土遺物観察表（1）（第 104・105 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	8.5	5.8	3.3	—	80	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付（小丸碗）	
2	磁器	碗	(6.8)	[4.2]	—	—	10	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付（湯呑碗）掛方	
3	磁器	碗	—	[5.1]	(4.0)	—	10	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付 焼継痕・焼継印（赤）（湯呑碗）	106-5 167-5
4	磁器	蓋	2.9	2.3	7.8	—	100	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付（端反碗の蓋）	
5	磁器	有蓋壺ヵ	(8.0)	[1.8]	—	—	5	良好	白	肥前系 内外面施釉 口頸部露胎 確認トレンチ内	
6	陶器	碗	(9.2)	4.8	2.8	IK	35	良好	灰白	京都信楽系 内外面施釉 外面鉄絵 弱く被熱（小杉碗）	
7	陶器	灯明皿	9.7	2.1	4.8	I	100	良好	にぶい黄橙	瀬戸美濃系 内外面柿釉 外面下位拭き取り・直重ね焼き痕 確認トレンチ内	
8	陶器	片口鉢	15.9	8.8	8.6	HIK	90	良好	灰黄	瀬戸美濃系 内外面灰釉 内面目跡 4 底部墨書	106-6 167-6
9	陶器	擂鉢	(36.2)	14.4	(15.8)	DIK	20	良好	赤	堺明石系 砂目底 内面擂目	
10	陶器	有耳壺	5.5	6.3	4.0	EIK	100	良好	灰白	瀬戸美濃系 外面灰釉	107-1
11	陶器	悪利	3.8	[10.3]	—	DI	35	良好	灰白	瀬戸美濃系 外面灰釉 厨部 3 箇所窯道具痕 被熱	
12	陶器	半胴甕	21.5	[15.8]	—	DEHIK	50	良好	橙	瀬戸美濃系 内外面柿釉 口縁上端部目跡（砂目）6 体部上位目跡（砂目）5	
13	陶器	半胴甕	—	[11.4]	16.8	K	30	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面柿釉 内底面目跡 4 高台畳付部摩耗	
14	陶器	蓋	—	2.8	4.0	IK	100	良好	灰白	大堀相馬系ヵ 上面輪白釉 最大径 6.2 cm 内面墨書	107-2 167-7
15	陶器	涼炉	—	[6.2]	(13.7)	AEHIK	5	普通	灰白	京都系 白色土器質 外面全面ケズリ	107-3
16	瓦質土器	仕切盤	—	[4.5]	(11.6)	HIK	5	普通	にぶい黄橙	底部ナデ 胎土紐貼 内面仕切り剥落痕	
17	土師質土器	焙烙	(32.5)	4.7	(33.4)	CHIK	45	普通	にぶい橙	砂目底・一部シワ状痕 底部外縁に煤付着	

第 48 表　第 5 号溝跡出土遺物観察表（2）（第 105 図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	高さ	径	胎土	焼成	色調	備考	図版
18	瓦	軒桟瓦	2.8	9.3	2.0	—	—	AIK	普通	灰白	磁具転用	245-4
19	瓦	不明	3.6	5.0	1.6	—	—	AIK	普通	灰白	磁具転用 使用痕・刃ならし痕	245-5

第 49 表　第 5 号溝跡出土遺物観察表（3）（第 105・106 図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	口径/径	高さ	底径	木取り	備考	図版
20	木製品	漆椀	—	—	—	—	[5.6]	8.0	横木取り	内面赤漆 外面黒漆 高台内に○（黒漆）	249-5
21	木製品	下駄	21.8	8.4	—	—	6.5	—	芯持材	連歯下駄	
22	木製品	下駄	19.6	5.0	—	—	2.7	—	板目	無眼下駄 木釘 6 釘孔 1	
23	木製品	不明	23.5	20.3	4.3	—	—	—	芯持材	枝元を加工	
24	木製品	刷毛	14.4	8.3	0.9	—	—	—	板目	木釘 2 木釘孔 5 孔 1	249-6
25	木製品	鴨居	[94.8]	5.3	5.0	—	—	—	分割材	先端に鉄釘 1 柾に転用	
26	木製品	鴨居	[92.7]	9.7	4.6	—	—	—	分割材	転用品 裏面加工痕	

第 50 表　第 5 号溝跡出土遺物観察表（4）（第 106 図）

番号	種別	器種	法量	備考	図版
27	銅製品	飾金具	縦 5.6 横 4.5 厚さ 0.1 重さ 8.4	孔対称に 8 あり	
28	鉄製品	刀物	刀長 [5.1] 刀幅 2.6 背幅 0.4 重さ 23.1	鉄銭付着	
29	鉄製品	包丁ヵ	長さ [7.4] 刃長 [3.3] 刃幅 3.5 背幅 0.3 重さ 26.0		
30	鉄製品	尻鉄	縦 [1.6] 横 3.9 厚さ 0.6 重さ 3.7		
31	鉄製品	環金具	径 4.7 厚さ 0.4 重さ 14.5		
32	鉄製品	火鉢	口径 (27.0) 器高 [12.8] 厚さ 0.3 重さ 539.2	獣面把手	281-2
33	鉄製品	釘	長さ [7.4] 幅 0.4 厚さ 0.3 重さ 4.3		
34	鉄製品	釘	長さ 6.6 幅 0.3 厚さ 0.3 重さ 4.6		
35	銅製品	銭貨	径 26.0 厚さ 1.7 重さ 3.3	寛永通寶（新）	

第51表　第5号溝跡出土遺物観察表（5）（第107図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考	図版
36	石製品	砥石	[7.5]	3.9	2.1	76.9	流紋岩	砥面5 刃物痕 被熱剥落	
37	石製品	砥石	5.0	4.2	1.4	39.8	流紋岩	砥面6 酸化鉄付着著しい	
38	石製品	砥石	8.1	5.2	1.6	130.3	流紋岩	裏面ノコギリ痕僅かに遺存 砥面6 酸化鉄付着著しい	
39	石製品	砥石	[9.2]	[3.7]	[4.1]	186.4	ホルンフェルス	側面ノコギリ痕 砥面2	298-3
40	石製品	磨石	5.5	4.0	1.4	11.1	角閃石安山岩	多孔質 自然面遺存 使用面3 縁条痕あり	295-2
41	石製品	石臼	径33.2	器高8.5		7222.2	安山岩	上臼 下面摺目 上・下面摩耗 上底面放射状削痕 芯棒受穴1 供給孔1 側面挟り2 側面貫通孔2 SK289の破片は被熱（黒化）SD6・SK289と接合	289-6

磨石である。自然面が残り、使用面には平行する浅い線条痕がみえる。裏面中央が僅かに窪む。

41は安山岩製石臼の上臼である。第289号土壙（次冊報告）から出土した被熱破片と接合した。側面から内底面にかけての貫通孔が2箇所にあり、側面には長方形の抉りがみられる。下面に摺目と軸受けの窪みがある。内面は摩耗している。

第6号溝跡（第102・103・108・109図）

B5－J6グリッドに位置する。西部は第5号溝跡と接続していた。検出された長さは4.11m、幅0.20～0.53m、深さ0.24～0.26mで、走行方向はN－77°－Eある。覆土は粘土の単層であった。

遺構検出面には、長さ2.40m、幅0.31m、厚さ1.7cmの木板が敷かれていた。その上に意図的に半裁した瓦樋が8個体連なって設置され、「U」字溝のようになっていた。

溝跡が廃絶した後に、同じ位置に瓦樋を設置したとみられる。また、第5号溝跡との接続部には、切石材等が積み上げられ、その上に瓦樋が設置されていた。

第5・6号溝跡は同時に機能していた時期があると考えられるが、構造、平面形状が異なることから設置時期は異なるのかもしれない。

出土遺物は少なく、陶磁器は数片のみである。瀬戸美濃系磁器の端反碗が出土していることから、少なくとも19世紀前半には機能しており、第5号溝跡と同時に廃絶した可能性がある。

第108・109図に出土遺物を示した。第108図1は瀬戸美濃系磁器の端反碗で、外面に「福」字文が染付される。2は瀬戸美濃系陶器の碗で、内外面に刷毛目釉が施される。3は瀬戸美濃系陶器の半胴甕である。

4～11は連なって検出された瓦樋である。意図的に半裁し、打ち欠いたり、工具で削ることで形状を整えている。挿図では、断面図に半裁された切断位置を示した。黒色粒子が目立つ硬質な胎土で、雲母と思われる細粒の鉱物がみられる。

12は軒桟瓦である。江戸式に類似する瓦当文様で、中心弁は三重である。

第109図は石製品である。13は軽石製の磨石で、使用により片面が平坦になっている。14は流紋岩製の砥石で、裏面に段が付くノコギリ状工具痕が遺存している。

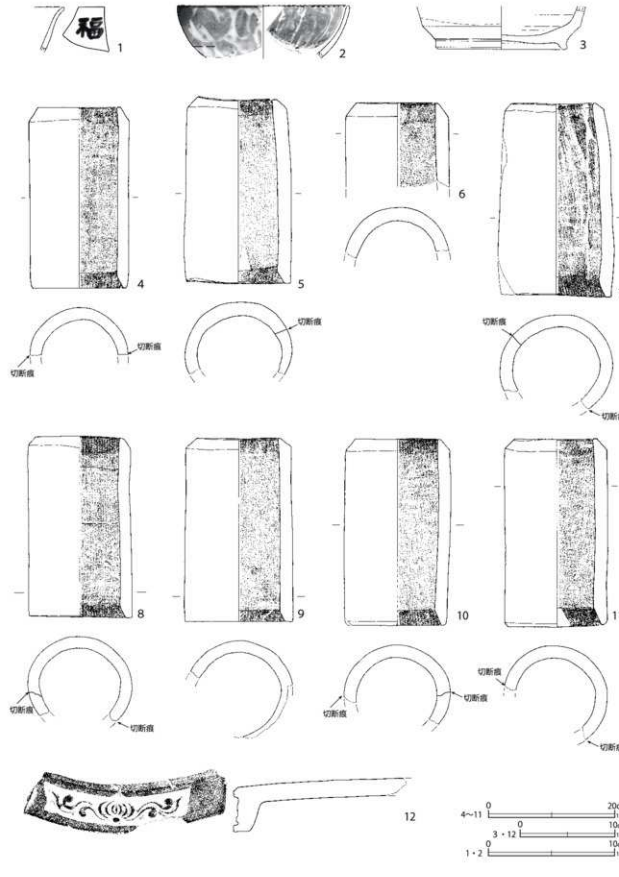
15・16は石臼の上臼で、15は花崗岩、16は安山岩製である。16の下面は斜格子状の摺目である。下面中央に、軸受けの窪みが遺存する。

17・18は凝灰岩製の切石材である。17は整形痕が明瞭で、正面にサキノミ状工具痕と刃幅の広い工具痕が残る。側面もやはり刃幅の広い工具で整形される。下面は摩耗している。18は工具痕が不明瞭だが、削痕が認められた。

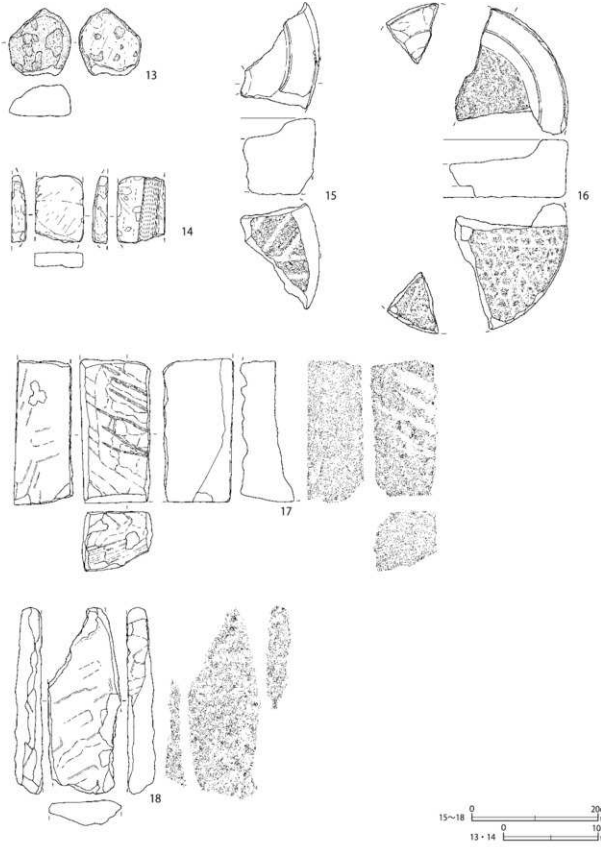
第9号溝跡（第110・111図）

B5－J6・7グリッドに位置し、第96・97号土壙より新しい。第20号建物跡と重複していたが、新旧関係は不明であった。

検出された長さは4.93m以上、幅0.17～0.30m、深さ0.12～0.16mである。走行方向はN－76°－Eで、東から西へ傾斜しており、西側が低かった。東西は次第に浅くなり、それ以



第 108 図　第 6 号溝跡出土遺物（1）



第 109 図　第 6 号溝跡出土遺物（2）

第 52 表　第 6 号溝跡出土遺物観察表（1）（第 108 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	－	[3.5]	－	－	5	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付（端反碗）	
2	陶器	碗	(13.4)	[4.1]	－	IK	15	良好	にぶい黄橙	瀬戸美濃系 内外面刷毛目釉	
3	陶器	半胴甕	－	[4.6]	(13.1)	DI	20	良好	にぶい橙	瀬戸美濃系 内外面柿釉	

第 53 表　第 6 号溝跡出土遺物観察表（2）（第 108 図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	高さ	径	胎土	焼成	色調	備考	図版
4	瓦	瓦燈	29.1	15.7	1.9	－	－	IK	普通	灰白	布目圧痕 半截・欠失部に削痕	242-6
5	瓦	瓦燈	30.5	17.0	2.2	－	－	AIK	普通	灰白	布目圧痕 半截・欠失部に削痕ヵ	242-7
6	瓦	瓦燈	[14.5]	16.5	2.3	－	－	AIK	普通	灰白	圧痕不明瞭 欠失部上端に削痕ヵ	242-8
7	瓦	瓦燈	32.5	18.6	2.1	－	－	AK	普通	灰白	ゴザメ状圧痕 半截・欠失部に削痕・摩耗 2 個体が接合	242-9
8	瓦	瓦燈	24.4	16.7	1.8	－	－	AIK	普通	灰白	布目圧痕 敲打による半截	242-10
9	瓦	瓦燈	29.4	(17.4)	1.9	－	－	AIK	普通	灰白	布目圧痕 敲打による半截	242-11
10	瓦	瓦燈	29.8	17.0	2.1	－	－	AIK	普通	灰白	布目圧痕僅かに残る 半截	242-12
11	瓦	瓦燈	30.1	16.5	2.1	－	－	AIK	普通	灰白	圧痕不明瞭 工具による半截	242-13
12	瓦	軒桟瓦	[18.3]	[23.5]	1.9	[5.7]	－	AIK	普通	灰白		245-6

第 54 表　第 6 号溝跡出土遺物観察表（3）（第 109 図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考	図版
13	石製品	磨石	7.1	6.5	3.3	45.5	軽石	使用面 1	295-2
14	石製品	砥石	[7.1]	5.1	1.5	94.4	流紋岩	裏面ノコギリ痕 砥面 4	293-1
15	石製品	石臼	器高 12.1			2831.9	花崗岩	上臼 上面摩耗 下面擂目	289-7
16	石製品	石臼	器高 9.3			3619.9	安山岩	上臼下面格子状擂目 側面ピシャン仕上げ状の凹凸 芯棒受穴 1 口唇部・内面摩耗	289-8
17	石製品	切石材	[23.0]	[11.3]	[9.5]	2730.2	凝灰岩	表面幅広工具痕・サキノミ状工具痕 右側面・端面幅広工具痕 裏面摩耗	290-1
18	石製品	切石材	[29.8]	11.6	4.5	956.3	凝灰岩	表・側面削痕 被熱（剥落）	289-9

上は追えなかった。

溝の幅が狭いことから、瓦樋や木樋、竹樋等の導水施設が存在した可能性があるが、その痕跡は見出されなかった。

第 111 図に出土した陶器を示した。1 は京都信楽系陶器の端反碗である。内面は透明釉が施釉される。外面には赤味が強く光沢の無い鉄釉が施され、イッチン状の絵付けが施される。陶磁器はこのほかに、磁器碗の細片 1 片と油壺の破片 1 片のみであった。

第 10 号溝跡（第 110・112 図）

B 5－J 5・6 グリッドに位置する。第 49 号埋設桶が溝跡の中に収まる位置で重複していたが、溝跡の幅が埋設桶より広く、同時期のものであるか判然としなかった。

検出された長さは 12.72 m、幅 0.61～1.09 m、深さ 0.29 m である。走行方向は N－82° －E で、東から西へ傾斜しており、西側が低かった。

壁面の崩落によるものか、平面形は部分的に波打つような不整形であった。覆土は砂層にシルトブロックが含まれており、埋め戻されたものと考えられる。

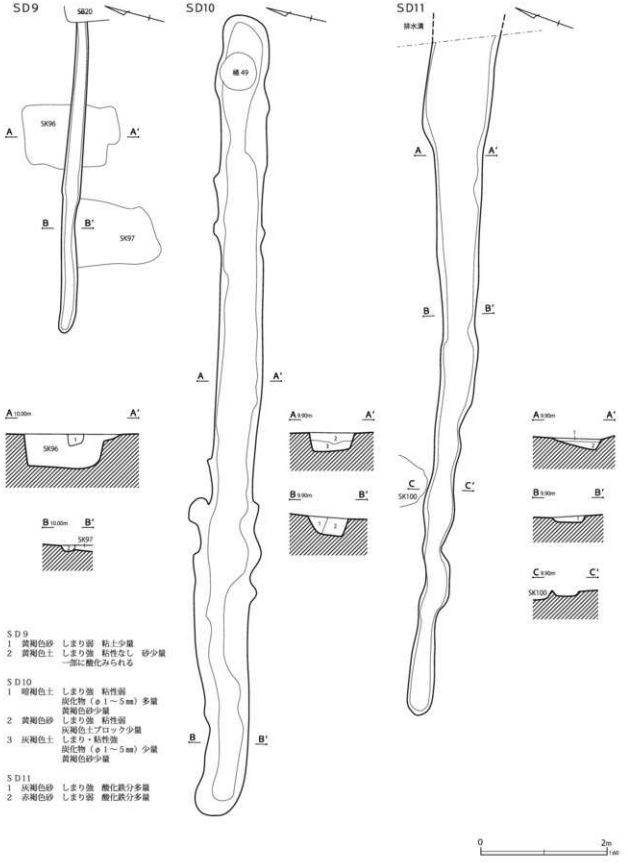
出土遺物は少なく、陶磁器は細片主体である。18 世紀代の陶磁器が多い。

第 112 図に出土遺物を示した。1 は肥前系磁器の坏で、口縁部は端反になる。外面に山水文が染付される。2 は肥前系磁器の紅皿である。外面に鎬状の施文がみられる。

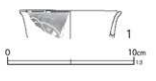
3 は瓦質土器の火鉢で、脚部である。外面には銀色に鈍く光る塗布物が部分的に遺存する。

4 は砥具への転用がみられる瓦製品で、元の器種は不明である。5 は鉄釘である。

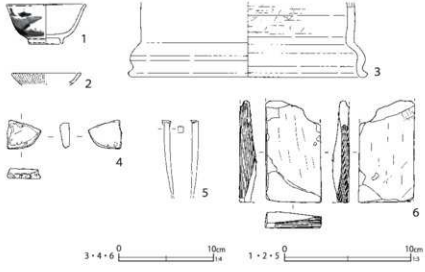
6 は粘板岩製の砥石である。側面に密なノコギリ状工具痕がみられる。砥面は 2 面である。



第 110 図　第 9 ～ 11 号溝跡



第 111 図　第 9 号溝跡出土遺物



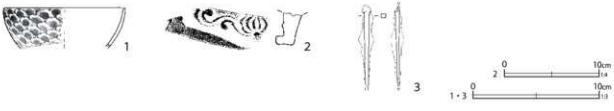
第 112 図　第 10 号溝跡出土遺物

第 55 表　第 9 号溝跡出土遺物観察表　（第 111 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	陶器	碗	(7.8)	[2.1]	—	K	10	良好	灰白	京都信楽系 内面透明釉 外面鉄釉・イッチン状の絵付（塩反碗）	

第 56 表　第 10 号溝跡出土遺物観察表　（第 112 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	坏	6.1	3.1	2.6	—	75	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	
2	磁器	紅皿	(5.4)	[0.9]	—	—	5	良好	白	肥前系 型成形 内外面施釉 外面縞状施文	
3	瓦質土器	火鉢	—	[7.9]	(24.7)	CHK	5	普通	にぶい褐	外面強布物 やや軟化炎焼成	
4	瓦	不明	長さ 3.1 幅 3.6 厚さ 1.0			AIK	—	普通	灰白	砥具転用	245-7
5	鉄製品	釘	長さ [5.9] 幅 0.4 厚さ 0.5 重さ 4.8								
6	石製品	砥石	長さ [10.7] 幅 5.9 厚さ 1.7 重さ 146.1						黄灰	結板岩 ノコギリ痕 砥面 2	293-2



第 113 図　第 11 号溝跡出土遺物

第 57 表　第 11 号溝跡出土遺物観察表　（第 113 図）

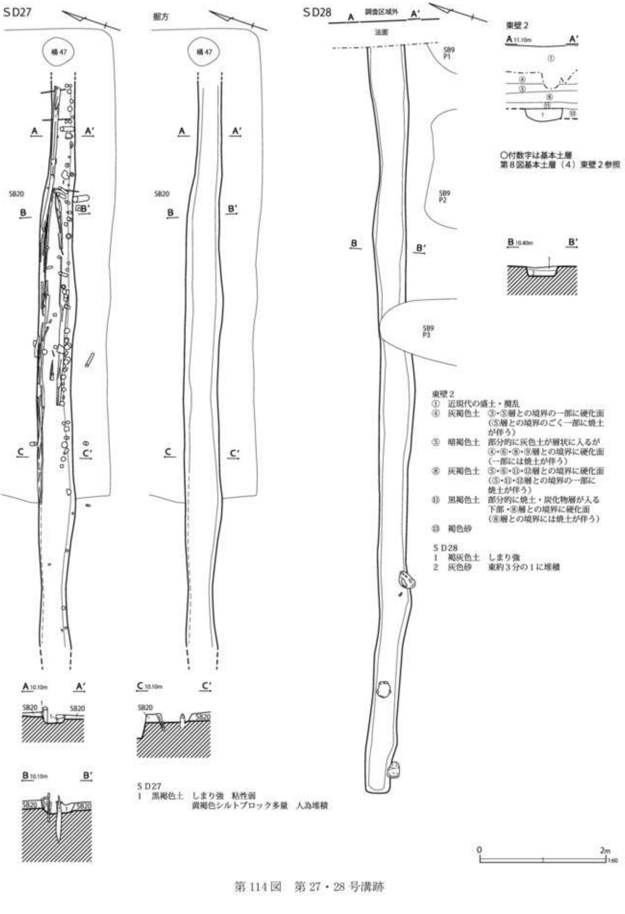
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	(9.5)	[3.2]	—	—	20	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	
2	瓦	軒桟瓦	長さ [2.7] 幅 [11.8] 厚さ 2.0			ACIK	—	普通	灰白		245-8
3	鉄製品	釘	長さ [6.5] 幅 0.4 厚さ 0.3 重さ 5.2								

図示した遺物から、推定廃絶時期は 19 世紀初頭以降である。

第 11 号溝跡（第 110・113 図）

Ｂ５－１７、Ｊ６・７グリッドに位置し、東部は調査区域外へ延びていた。西部は調査区中央付近で途切れ、それ以上は追えなかった。しかし、延長線上には第５・６号溝跡が位置していた。

検出された長さは 10.76 m 以上、幅 0.27 ～



第114図 第27・28号溝跡

1.05 m、深さ 0.07 ～ 0.15 mである。走行方向はN－74°－Eで、東から西へ傾斜しており、西側が低かった。

区画施設の一部と考えられるが、西部の延長線上に位置する区画施設である第5・6号溝跡との関連は不詳である。また、基本土層東壁2（第8・114図）には、対応する掘り込みが認められなかった。

出土遺物は少ないが、18 世紀の陶磁器が主体である。肥前系磁器の菊文が染付された筒形碗が最新である。推定廃絶時期は 18 世紀後葉である。

第113図に出土遺物を示した。1は肥前系磁器の半球形碗である。2は軒桟瓦である。江戸式に類似する瓦当文様で、中心弁は三重である。

3は鉄製の釘である。

第 27 号溝跡（第114図）

B5－J7グリッドに位置し、重複していた第20号建物跡より新しい。

発掘段階では、第20号建物跡の布地業の南部を構成するものとされたが、整理段階で側板と打ち込み杭を伴う溝跡と判断した。区画施設の一部と考えられる。延長線上の第47号埋設桶とは、直接の接続こそ確認されなかったが、一連の遺構と考えられる。

検出された長さは 8.90 m以上、幅 0.37 ～ 0.60 m、深さ 0.30 ～ 0.35 mである。走行方向はN－73°－Eで、東から西へ向かって低く傾斜していた。一部分のみ検出されており、東西端はそれ以上を追えなかった。

基本土層東壁で検出されなかったことから、第47号埋設桶に接続し、それ以上は延長しないと思われる。なお、溝跡の延長線上には第4号柵跡（次冊報告）が位置していた。

溝跡の壁面には土留めの側板が遺存し、杭で支えられていた。第5号溝跡と同様の構造である。

出土遺物は第20号建物跡と一括して取り上げられたため、廃絶年代の絞り込みが難しい。重複関係から、構築時期は19世紀以降であろう。

第 28 号溝跡（第114図）

C5－B8・9グリッドに位置する。第9号建物跡より古い。また、直接的な重複はないが基本土層東壁の観察から第10号建物跡、第6号基礎状遺構より古い。

発掘段階では、第10号建物跡を構成する地業跡として扱われた。しかし、基本土層東壁2（第8・114図）及び東壁の写真を精査した結果、各々の構造、構築面が異なっていたため、整理段階で異なる遺構と判断した。本跡は浅い溝状の掘り込みであったため、第28号溝跡とした。

西部には大形の自然礫が点在し、周辺にも同様の自然礫が点在する。本跡の周辺では自然礫の集中部もみられるが、遺構に伴うか判断が難しい。

覆土はしまりの強いシルトで、東部を中心に下層に砂が堆積していた。溝跡は基本土層東壁2（第8・114図）の第13層を構築面としており、第11層に覆われていた。

出土遺物は極めて少なく、図示し得なかった。瀬戸美濃系陶器の柿釉灯明皿等、18 世紀の陶磁器のみ出土した。位置は 7.50 m程離れているが、第5号土壙（第210図）の掘り込み面である第11層（第8図参照）に覆われていたことから、推定廃絶時期は 18 世紀後葉である。

（9）柵跡

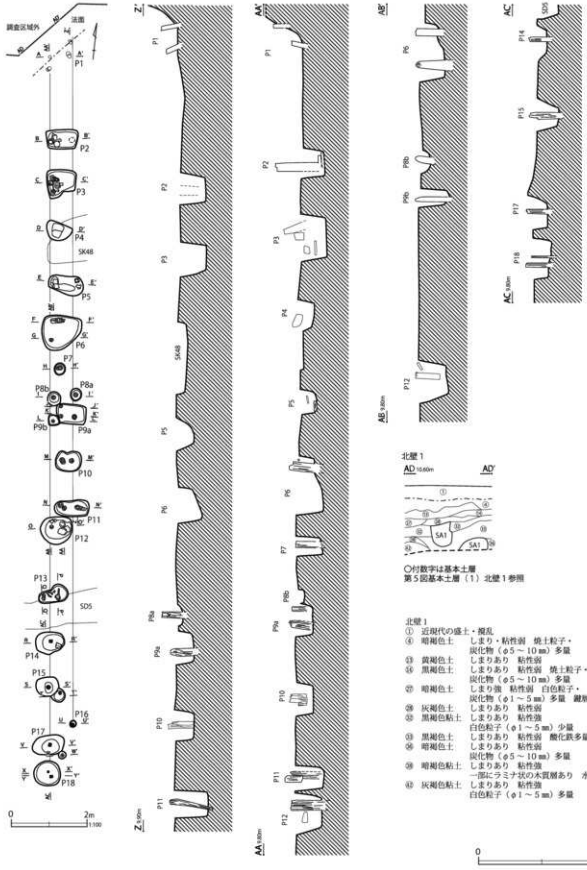
下端部に切断痕がみられる、木柱を据えたピットが直線状に並ぶものを柵跡と判断した。

本書掲載分の第一面の柵跡は1条である。敷地境を示す区画施設の一種と考えられる。

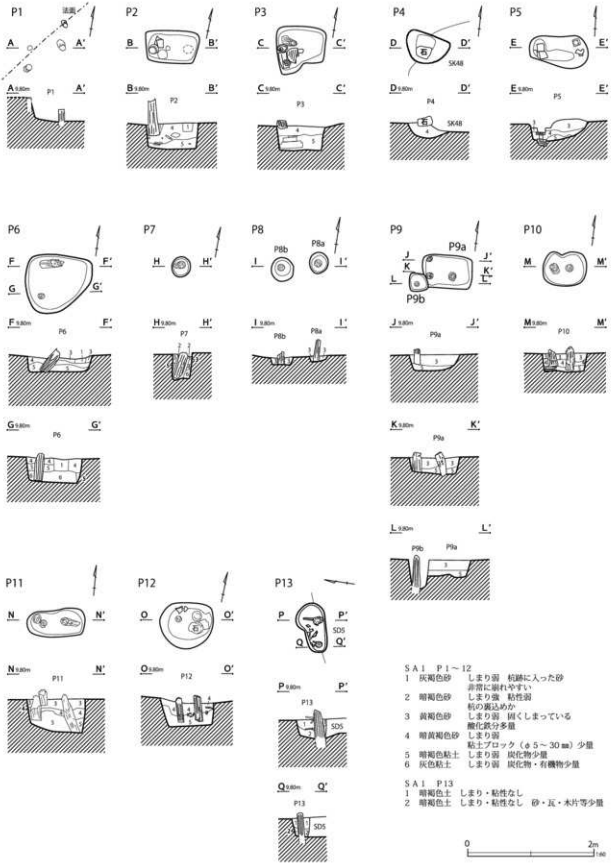
第58表に柵跡のピット一覧表、第115 ～ 117図に遺構、第118図に遺物を示した。

第1号柵跡（第115 ～ 118図）

発掘段階では重複する第1・3号柵跡として調査が行われたが、ピットの配列を明確に分けることができなかったため、一括して報告する。ただし、改修が行われている可能性については留意し



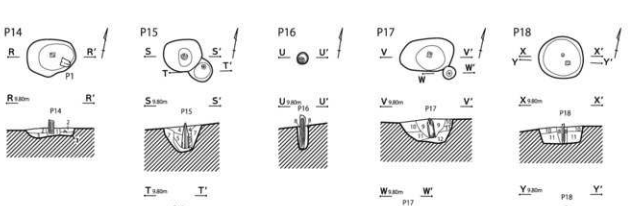
第115図　第1号柵跡（1）



SA1　P1～12
1　灰褐色砂　しまり弱　杭跡に入った砂
　　非常に崩れやすい
2　暗褐色砂　しまり強　粘性弱
　　杭の裏込めか
3　黄褐色砂　しまり弱　固くしまっている
　　酸化鉄分多量
4　暗黄褐色砂　しまり弱
　　粘土ブロック（φ5～30㎜）少量
5　暗褐色粘土　しまり弱　炭化物少量
6　灰色粘土　しまり弱　炭化物・有機物少量

SA1　P13
1　暗褐色土　しまり・粘性なし
2　暗褐色土　しまり・粘性なし　砂・瓦・木片等少量

第116図　第1号柵跡（2）



第 117 図　第 1 号柵跡（3）

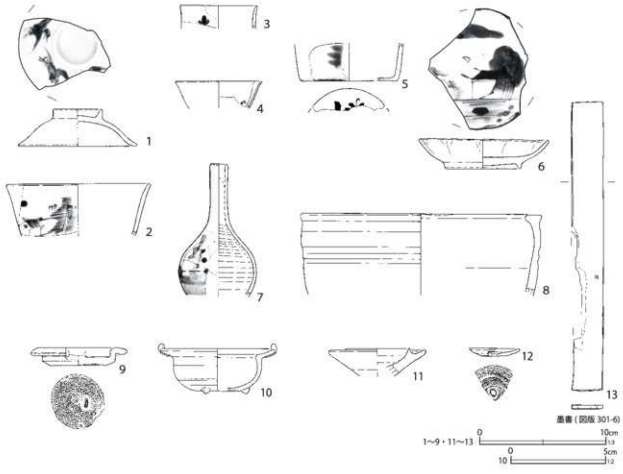
第 58 表　第 1 号柵跡ピット一覧表　　単位：m

番号	グリッド	長径	短径	深さ	備考
P1	B5-I4	－	－	－	
P2	B5-I4	0.84	0.50	0.40	芯間 P2 ～ 3：1.16
P3	B5-I4	0.80	0.76	0.40	芯間 P3 ～ 4：1.10
P4	B5-I4	0.66	0.50	0.25	芯間 P4 ～ 5：1.40　SK48 より古
P5	B5-I4	0.96	0.52	0.35	芯間 P5 ～ 6：1.20
P6	B5-J4	1.08	1.06	0.40	芯間 P6 ～ 7：1.00
P7	B5-J4	0.32	0.32	0.45	芯間 P7 ～ 8a：0.80
P8a	B5-J4	0.34	0.30	0.13	芯間 P8a ～ 8b：0.60
P8b	B5-J4	0.38	0.36	0.13	P9a と隣接
P9a	B5-J4	0.80	0.52	0.27	P9b と隣接
P9b	B5-J4	0.28	0.26	0.45	芯間 P9b ～ P10：1.00
P10	B5-J4	0.70	0.54	0.30	芯間 P10 ～ 11：1.12
P11	B5-J4	0.94	0.46	0.55	P12 と隣接
P12	B5-J4	0.84	0.72	0.45	芯間 P12 ～ 13：1.72
P13	B5-J4	0.80	0.45	0.30	SD5 より新　芯間 P13 ～ 14：1.10
P14	B5-J4	0.77	0.60	0.15	芯間 P14 ～ 15：1.18
P15	B5-J4	0.87	0.60	0.45	芯間 P15 ～ 17：1.58
P16	C5-A4	0.20	0.17	0.35	
P17	C5-A4	0.87	0.65	0.35	芯間 P17 ～ 18：0.69
P18	C5-A4	0.70	0.65	0.27	

ておきたい。

総延長 20.0 m で 18 基のピットが検出された。ピット内には、下端面に切断痕が残る木柱が据えられており、柵の柱と思われる。ピット 1・13 等、地山に打ち込まれた杭と思われるものも検出されたが、配列が揃うため、同一遺構として扱った。

柵跡は遺物包含層 1 と敷地の境に設置されており、土地造成前に池沼湿地帯であった遺物包含層 1 と町屋を区画する施設と考えられる。出土遺物の様相からも、造成前の構築とみられる。



第 118 図　第 1 号柵跡出土遺物

第 59 表　第 1 号柵跡出土遺物観察表　（第 118 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	蓋	(3.7)	2.9	(9.3)	—	35	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付（端反碗の蓋）P1	
2	磁器	碗	(11.2)	[4.1]	—	—	20	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面染付（端反碗）P10	
3	磁器	碗	(6.0)	[1.8]	—	—	5	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付 P4	
4	磁器	坏	(6.7)	[2.1]	—	—	15	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 内面上絵付（青）（卵殻手酒坏）	
5	磁器	端反皿	—	[3.0]	(7.5)	—	5	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付 底部朱書	
6	磁器	皿	10.0	2.4	5.8	—	75	良好	灰白	肥前系 内外面施釉 内面染付 口紅 P2	
7	磁器	徳利	1.3	[10.4]	—	—	60	良好	灰白	肥前系 外面施釉・染付 P4	
8	陶器	半胴甕	(18.6)	[6.4]	—	I	15	良好	淡黄	瀬戸美濃系 内外面柿釉 口縁部上端目跡 1 遺存 P2	
9	陶器	蓋	(6.0)	1.4	4.4	IK	95	良好	灰	瀬戸美濃系 上面柿釉 下面回転ケズリ（水注の蓋）P3	
10	陶器	鍋	(5.8)	2.5	(2.5)	K	25	良好	褐灰	内外面柿釉 P2	
11	施釉土器	灯火具	(3.0)	[2.2]	—	AHK	10	普通	橙	江戸在地系 内外面透明釉 P1	
12	かわらけ	小皿	(4.0)	0.6	(1.6)	K	30	普通	橙	江戸在地系 底部糸切痕（左）・焼成前穿孔 P4	
13	木製品	木札	長さ 22.7 幅 2.5 厚さ 0.4 樋目							孔 1 表面墨書（文字資料 13）	

第 118 図に各ピットから出土した遺物を示した。1 はピット 1 から出土した、瀬戸美濃系磁器端反碗の蓋である。口縁の反りはやや大きい。外面に飛鳥文が染付される。2 はピット 10 から出土した、肥前系磁器の端反碗である。崩れた山水楼閣文が染付される。

3 はピット 4 から出土した、瀬戸美濃系磁器である。湯呑碗かと思われるが、全体が薄手で、口

縁部が僅かに端反りになる点や、染付が若杉文であることが不自然である。サイズから坏類かもしれない。

4は瀬戸美濃系磁器の卵殻手酒坏で、口縁部が端反になる。内面に、いわゆる江戸絵付けが認められる。

5は瀬戸美濃系磁器の燗徳利である。底部に朱書きが認められる。大きく文字が書かれているらしく、焼継印ではなさそうである。

6はピット2から出土した、肥前系磁器の小皿である。口縁部は、輪花状に波打たせて成形される。内面全面に崩れた山水楼閣文が染付される。

7は肥前系磁器の徳利（御神酒徳利）で、外面には草花文が描かれる。

8は瀬戸美濃系陶器の半胴甕である。体部下半はケズリで仕上げる。口唇部に長さ3cm程の目跡が一箇所残る。

9は瀬戸美濃系陶器で、水注の蓋である。上面に柿釉が掛けられる。つまみが欠損する。

10は小サイズの陶器両手鍋であり、ミニチュアとすべきかもしれない。内面から外面上位に柿釉が掛けられる。煤の付着は認められない。

11は江戸在地系土器の灯火具である。12は小サイズのかわらけである。底部を糸切した後、内面側から焼成前穿孔される。

13は木札である。表面に墨書がみえる。

このほかの各ピット内から出土した非掲載陶磁器は、ピット2に瀬戸美濃系磁器の卵殻手酒杯、ピット4に堺明石系擂鉢の底部片、ピット6に瀬戸美濃系陶器の腰錆碗の細片、ピット14に瀬戸美濃系磁器の端反碗が2破片、ピット15に肥前系磁器の小丸碗、瀬戸美濃系陶器の油徳利、ピット17に陶器の鉄釉土瓶、瀬戸美濃系陶器の灯明皿が認められた。

ピット18は出土した陶磁器がやや多く、陶器の灰釉鉄絵土瓶、鉄釉土瓶、イッチン描き文土瓶等が出土した。鉄釉土瓶はピット17から同一個体が出土している。また、一括遺物には、瀬戸美濃系磁器の湯呑碗がみられる。構築時期は19世紀中葉頃である。

(10) 土壙

第一面の土壙のうち、本書掲載分は36基である。多くは隅丸長方形で、長軸方向が日光道中に直交する。ある程度の規格性が考えられる。

栗橋宿本陣跡で検出された文化・文政期の火災（『栗橋宿本陣跡Ⅰ』、『同Ⅱ』）に関わる土壙と、同時期と思われる火災処理土壙が多数検出された。文化期（1804～1818）、文政五年（1822）のいずれの火災に伴うものか検証するために、調査区城外へ続く土壙については、調査区東・南壁の基本土層にみえる火災層との先後関係と出土した陶磁器の組成について留意した。

位置・規模等の基本的な情報は、第60表にまとめた。文政期の火災処理土壙とみられる第51～54号土壙については、第119・195・204・208図に示し、出土遺物は第120～194、196～203、205～207、209図に一括して掲載した。

そのほかの土壙は第210～215図に遺構番号順に掲載した。出土遺物については、第216～229図（陶磁器・土器）、第230図（土製品玩具）、第231図（土製品人形）、第232・233図（瓦）、第234～238図（木製品）、第239～241図（金属製品）、第242図（銭貨）、第243図（石製品）にまとめ、遺構番号順に示した。

第51号土壙（第119～194図）

B5－I7グリッドに位置し、第12号建物跡と重複していたが、新旧関係は不詳であった。平面形は隅丸長方形であった。

覆土は5層に分けられる。焼けた壁材、焼土ブロック、炭化物を主体とした土で埋め戻し、その上は黄褐色砂で覆ったと思われる。

出土遺物は、炭化した木製品がみられ、強い被熱を受けた陶磁器・土器が多量にみられる。陶磁器・土器の割合が非常に高いため、土壙によって

ある程度の分別廃棄が行われていたと思われる。

隣接する第52・64号土壙と覆土が類似し、いずれからも焼土や炭化材、強い被熱を受けた陶磁器類がまとまって出土していた。このことから、文化・文政期の火災処理土壙と考えられる。

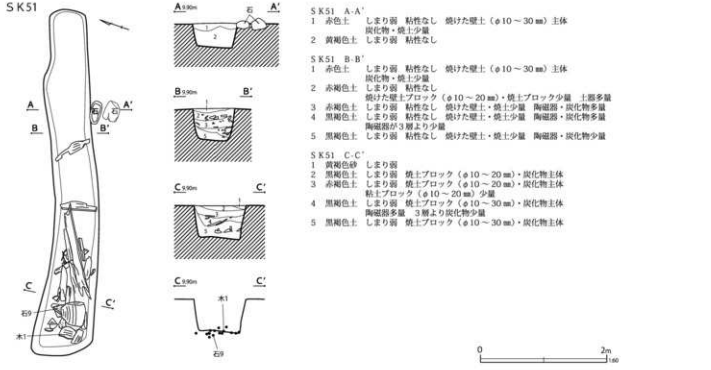
出土陶磁器は瀬戸美濃系磁器の端反碗を主体に、大振りの瀬戸美濃系湯呑碗が少量、大振りの肥前系磁器の八角鉢がみられる。以上の様相から、文政五年（1822）の火災処理土壙である可能性が高い。

第120～178図までに、第51号土壙から出土した陶磁器を示した。組物と思われる同形・同文の資料が多く確認できる。多くは被熱したものであり、第52～54号土壙から出土した陶磁器との接合も顕著に認められた。したがって、同文資料の個体数推定にあたっては、第52～54号土壙からの出土状況についても注意しながら記述する。

以下に示した「個体数」は「推定し得る最少の個体数」である。破片数をカウントした後、破片

第60表　第一面土壙一覧表　　単位：m

番号	区画	グリッド	形態	長軸	短軸	深さ	方位	備考
5	6	C5-B10, C10	不整形	2.03	[1.19]	0.65	N-19° -W	
48	1	B5-I4	楕円形	3.04	[1.18]	0.28	N-81° -E	SG3 より古 SA1 より新
50	2	B5-I5, J5	長方形	4.58	3.33	0.83	N-10° -W	SK107 より新
51	2	B5-I7	隅丸長方形	5.50	0.84	0.53	N-73° -E	SB12 と重複
52	2	B5-I7	長方形	4.50	1.40	0.74	N-76° -E	SB12 より古 基礎 8 と隣接
53	2	B5-I6	隅丸長方形	3.15	1.12	0.77	N-3° -W	SB13・14 より古
54	2	B5-I7	隅丸長方形	2.85	1.08	0.45	N-15° -W	SB12・13 より古
56	1	B5-I7	楕円形	1.23	1.21	0.20	N-70° -E	
58	4	B5-J8	不整形	[3.42]	1.28	0.23	N-74° -E	SK95 より新 SK60 と重複
60	4	B5-J8, C5-A8	隅丸方形	1.45	1.32	0.43	N-16° -W	SK58・92・95 と重複
61	4	B5-J7/8, C5-A8	楕円形	1.13	1.00	0.18	N-49° -E	SK92 より新
62	4	C5-A8	隅丸長方形	1.77	1.23	0.39	N-67° -E	SK92・95 と重複
64	2	B5-I7	隅丸長方形	4.00	1.02	0.46	N-70° -E	SB12 より古
65	3	B5-J6	隅丸長方形	3.54	1.12	0.33	N-74° -E	
66	3	C5-A6	楕円形	1.11	0.73	0.12	N-76° -E	
67	3	C5-A6	隅丸長方形	1.67	0.92	0.15	N-76° -E	
70	1	B5-I6	隅丸長方形	[2.67]	1.73	0.55	N-10° -W	
71	9	C5-E10, C6-E1	隅丸長方形	[1.43]	0.57	0.19	N-60° -E	
73	1	B5-I5	隅丸長方形	1.05	0.58	0.57	N-11° -W	
74	3	C5-A5	隅丸長方形	2.71	0.89	0.56	N-79° -E	
77	4	C5-A8	不整形	[4.30]	[0.95]	0.60	N-70° -E	SK78 より古 桶 46 より新 SB25 と重複
78	4	C5-A8	不整形	[4.40]	1.00	0.50	N-75° -E	桶 46, SK77 より新 SB25 と重複
89	2	B5-I6	方形	3.40	[2.97]	0.46	N-13° -W	SE4 より古
90	3	B5-J7/8	長方形	[3.23]	1.00	0.35	N-76° -E	SB20 より新
92	4	B5-J8, C5-A8	不整方形	2.35	[2.05]	0.33	N-28° -W	SK61 より古 SK95 より新 SK60・62 と重複 貼床有り
94	4	B5-J8, C5-A8	不整形	[2.40]	0.73	0.60	N-61° -E	SK95 より新
95	4	B5-J8, C5-A8	楕円形	[5.38]	[1.67]	0.66	N-73° -E	SK58・92・94 より古
96	3	B5-J6/7	隅丸長方形	1.52	1.02	0.55	N-15° -W	SD9 より古
97	3	B5-J6	隅丸長方形	[1.34]	1.08	0.11	N-15° -W	SD9 より古
99	3	B5-J6/7	隅丸長方形	3.60	1.44	0.32	N-77° -E	
100	2	B5-J7	楕円形	1.44	0.99	0.18	N-16° -W	
105	10	C6-F1	不明	0.68	[0.50]	0.20	N-23° -W	
107	2	B5-I5	隅丸長方形	[3.90]	1.62	0.45	N-83° -E	SE3, SG2, SK50 より古
391	14	C6-H2, I2	隅丸長方形	1.99	1.02	1.25	N-19° -W	
392	14	C6-I2	隅丸長方形	[2.40]	1.10	1.24	N-18° -W	
393	14	C6-I1/2	隅丸長方形	3.52	[1.20]	1.08	N-66° -E	SB42 より古



第 119 図　第 51 号土壙

のサイズ・位置から、同一個体になり得る破片を除いて、「個体数」を推定したものである。カウントは接合後に行った。なお、重複関係の無い遺構間での接合資料は、原則的に若い遺構番号に帰属させて図示・カウントした。

第 120 ～ 145 図 1 ～ 278 までは、磁器碗類である。

第 120 図 1 ～ 3 は、肥前系磁器の粗製碗である。1 は底部の破片で大形のものである。内底面の二重圏線内に五弁花文、高台内には「渦福」の崩しと思われる染付が施される。

2 も底部の破片で、円盤状製品に転用している。3 は内外面ともに二重網目文が染付される。

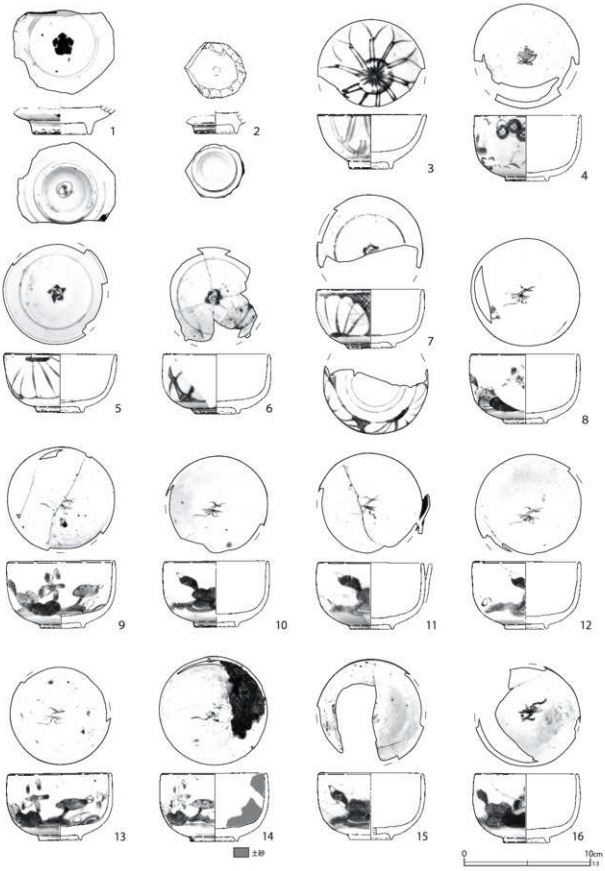
4 ～ 41 までは、肥前系磁器の小丸碗である。

4 は、外面に若杉文等が、内底面に昆虫文が染付される。図示した 1 個体のみの出土である。

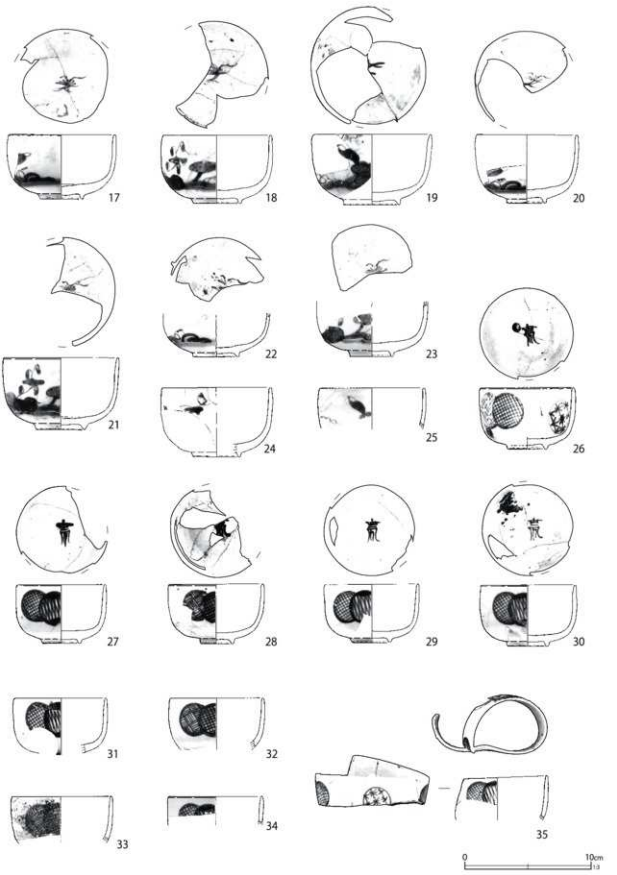
5・6・7 は同文の被熱資料で、外面に半菊文、内底面の圏線内に崩れた五弁花文が染付される。同文の破片が、第 52 号土壙に一片含まれていた（非掲載）。個体数は図示した点数と同じく 3 個体と推定する。

第 120・121 図 8 ～ 25 までは、外面に草花文や蝶が染付されるもので、同文の被熱資料である。非掲載資料を含めた破片数は、第 51 号土壙に 33 点（底部破片 19 点）認められたほか、第 53 号土壙に 1 点（底部破片無し）、第 54 号土壙に 1 点（底部破片 1 点）が認められた。このうち図示したのは 18 点で、個体数は 16 点と推定する。第 51 号土壙と第 54 号土壙で遺構間接合したものが多い（遺構間接合については、第 61 表の遺物観察表を参照）。

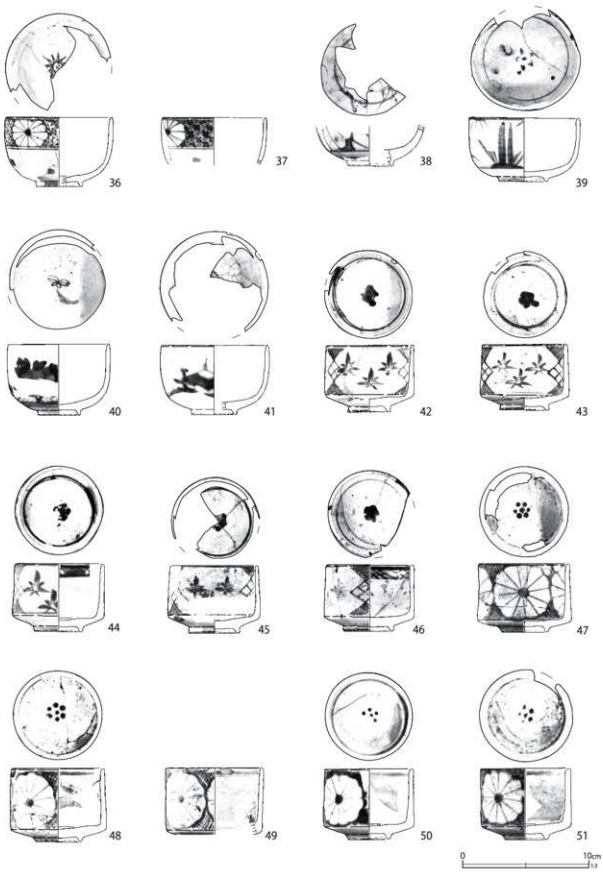
26 ～ 35 までは、外面の丸文内に格子・網目文が、内底面に崩れた「壽」文が染付された被熱資料である。被熱したものの中には、高熱で歪んで当初の形態を留めないもの（第 121 図 35）もある。非掲載資料を含めた破片数は 23 点（底部破片 7 点）で全て第 51 号土壙に帰属する。ただし、第 54 号土壙との接合資料が 3 点認められる。図示したのは 10 点で、個体数は 12 点と推定する。ほぼ同形であるが、第 121 図 28 のように高台径



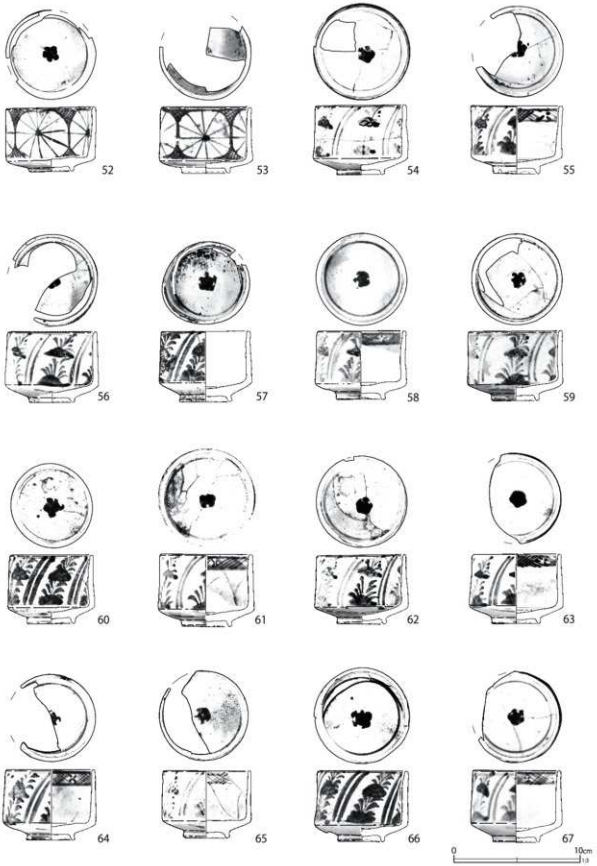
第 120 図　第 51 号土壙出土遺物（1）



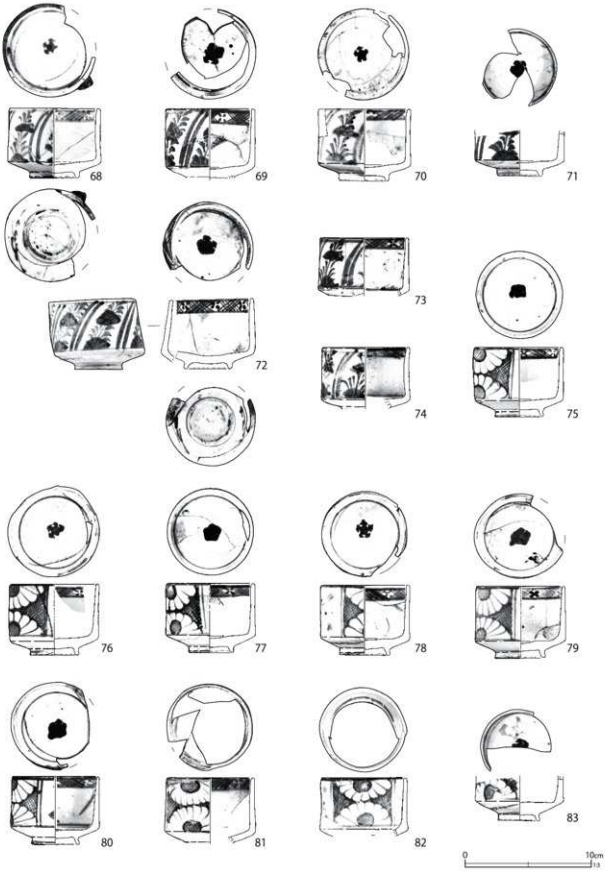
第 121 図　第 51 号土壙出土遺物（2）



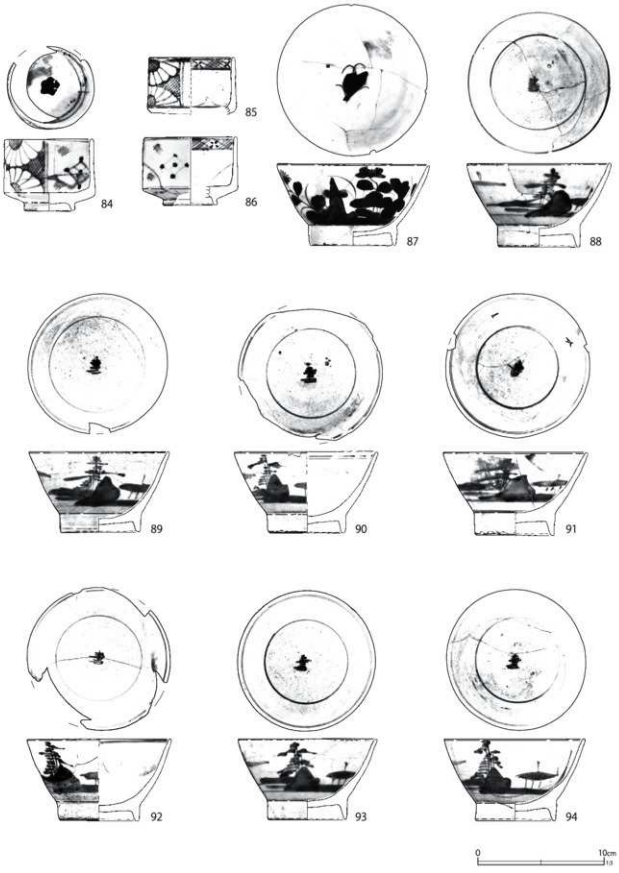
第 122 図　第 51 号土壙出土遺物（3）



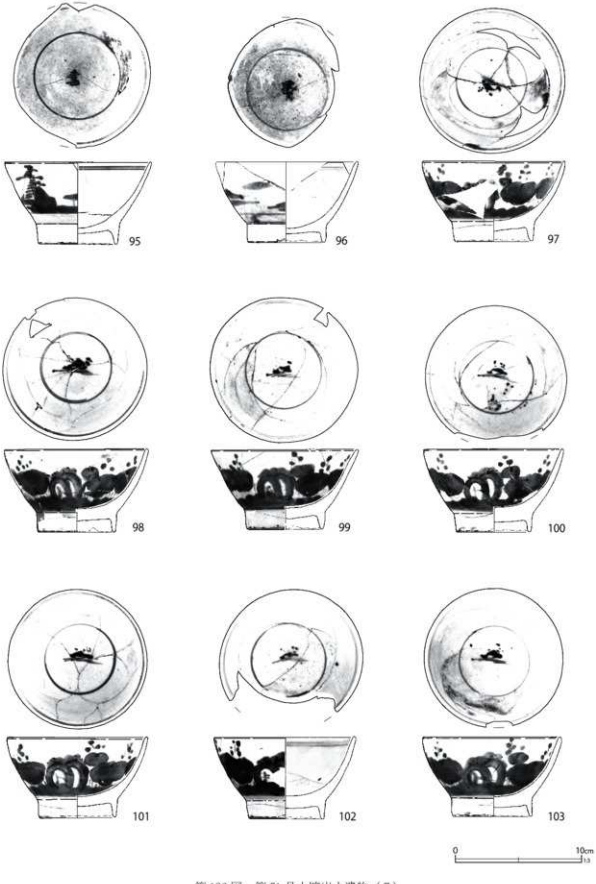
第 123 図　第 51 号土壙出土遺物（4）



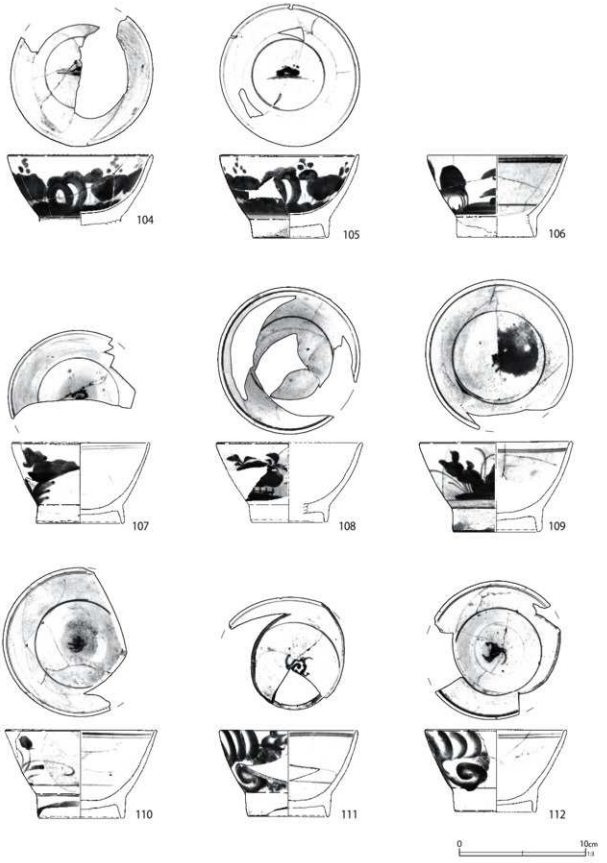
第 124 図　第 51 号土壙出土遺物（5）



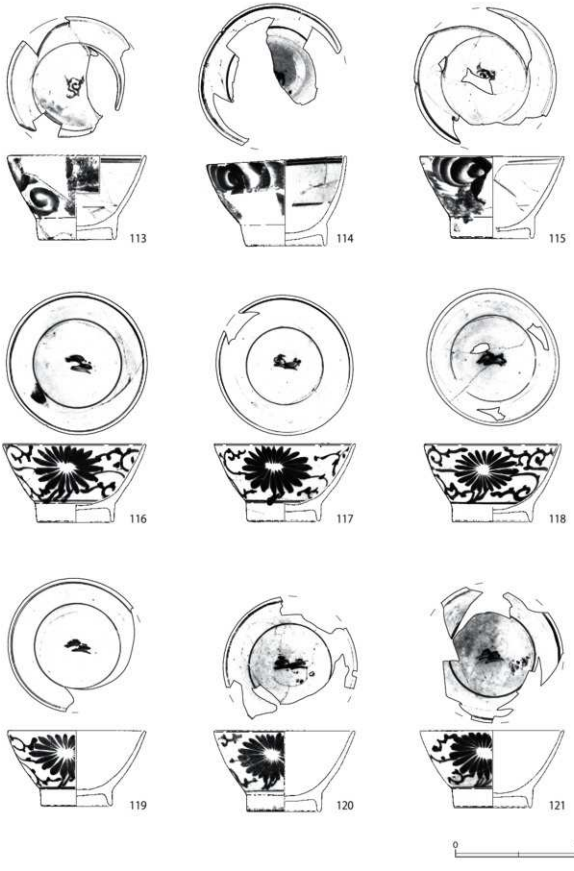
第 125 図　第 51 号土壙出土遺物（6）



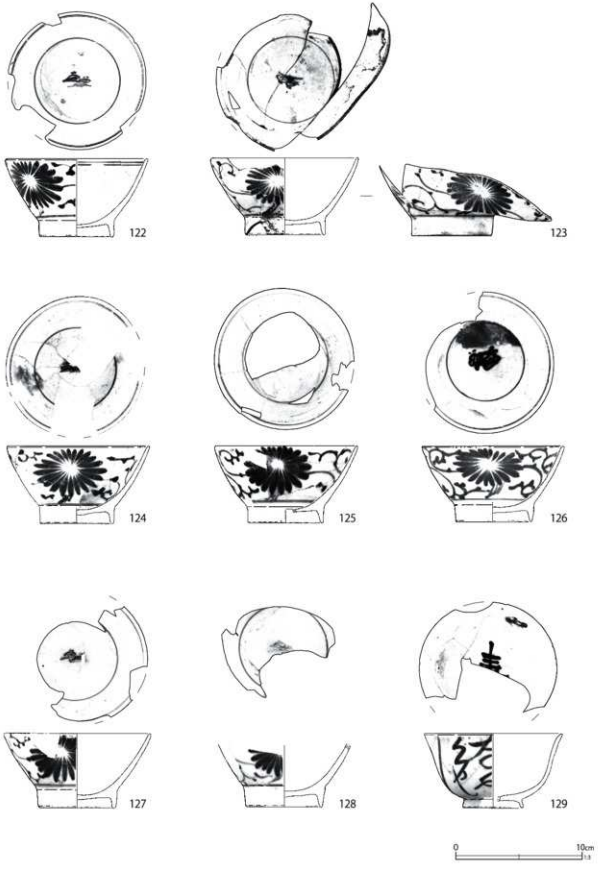
第 126 図　第 51 号土壙出土遺物（7）



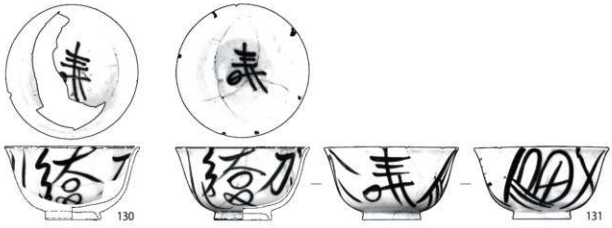
第 127 図　第 51 号土壙出土遺物（8）

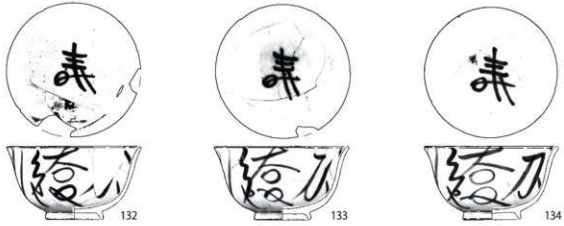


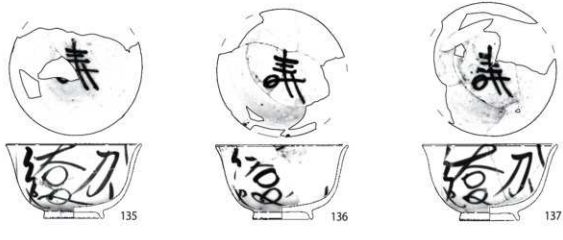
第 128 図　第 51 号土壙出土遺物（9）



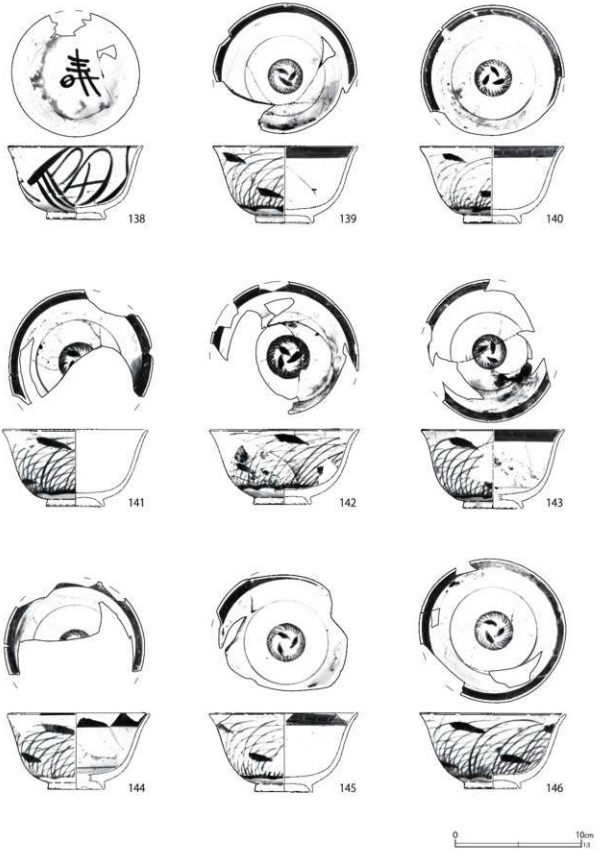
第 129 図　第 51 号土壙出土遺物（10）



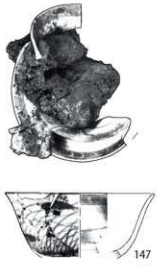


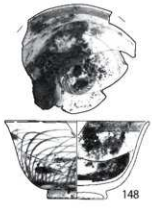


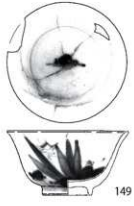
第 130 図　第 51 号土壙出土遺物（11）

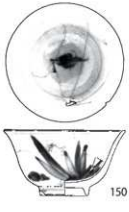


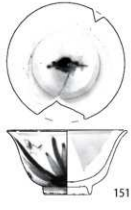
第 131 図　第 51 号土壙出土遺物（12）

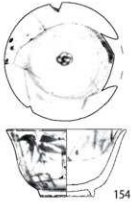




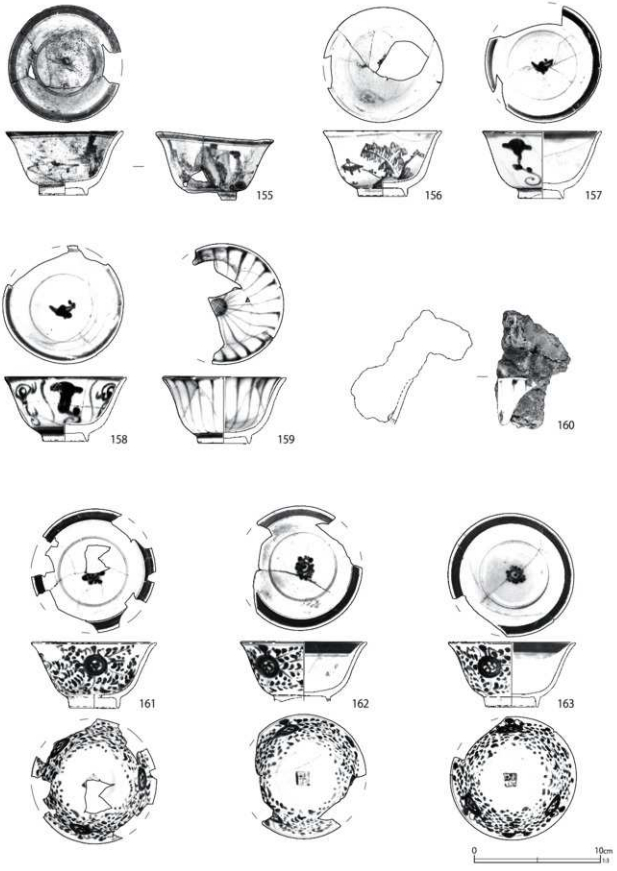




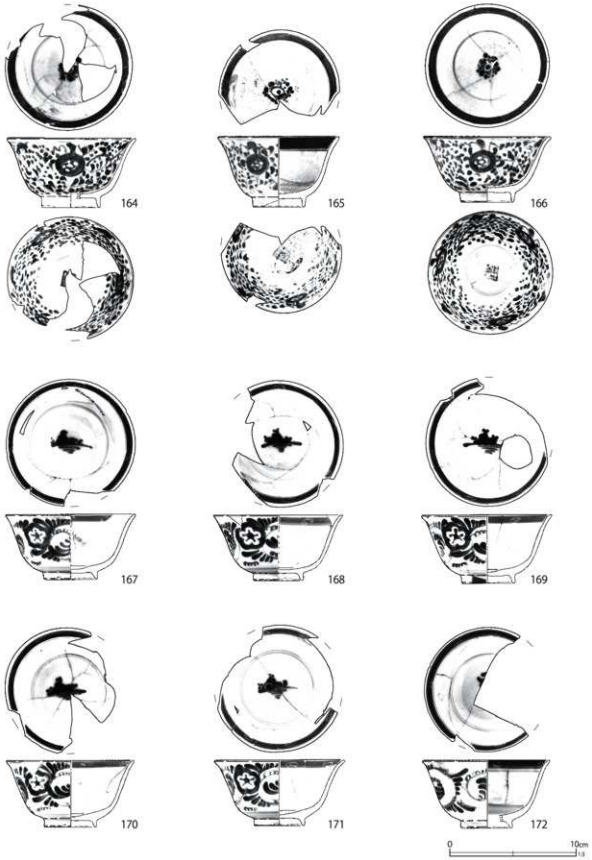




第 132 図　第 51 号土壙出土遺物（13）

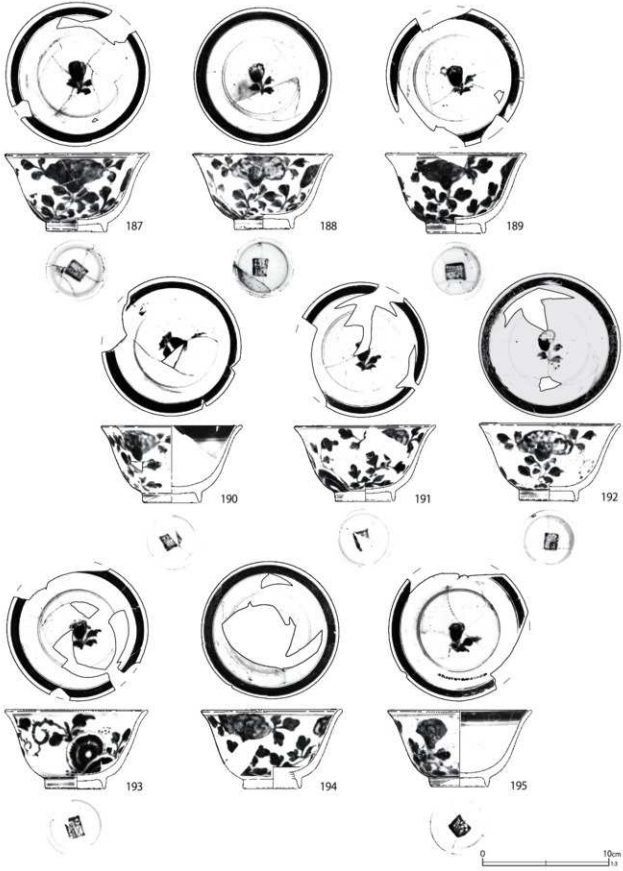


第 133 図　第 51 号土壙出土遺物（14）

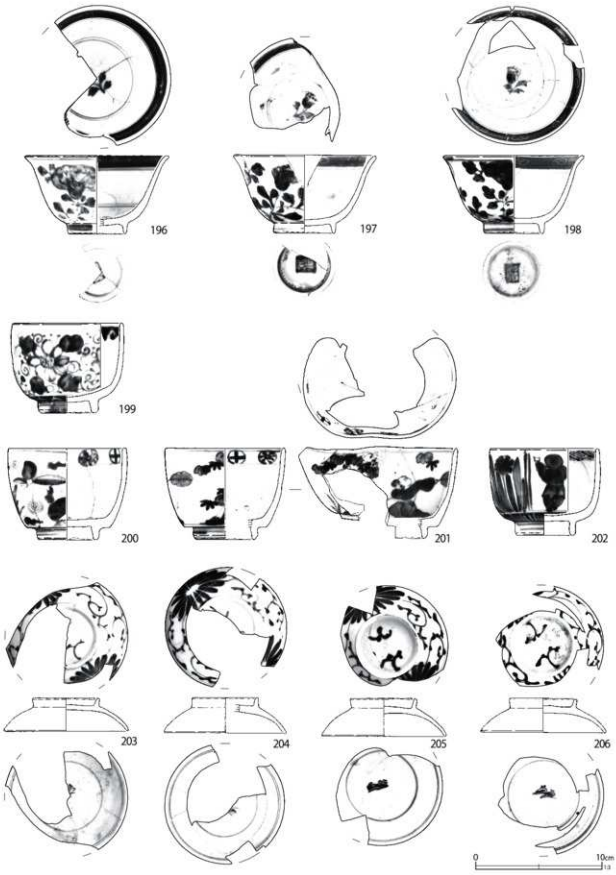


第 134 図　第 51 号土壙出土遺物（15）

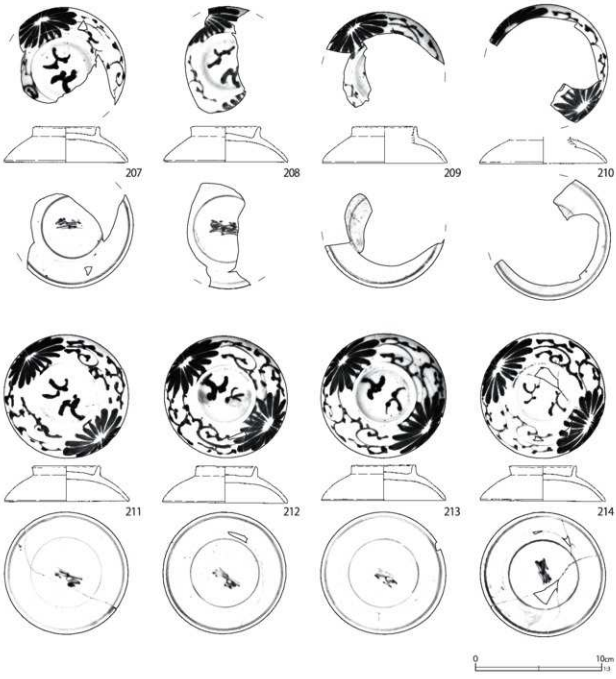
第 135 図　第 51 号土壙出土遺物（16）



第 136 図　第 51 号土壙出土遺物（17）



第 137 図　第 51 号土壙出土遺物（18）

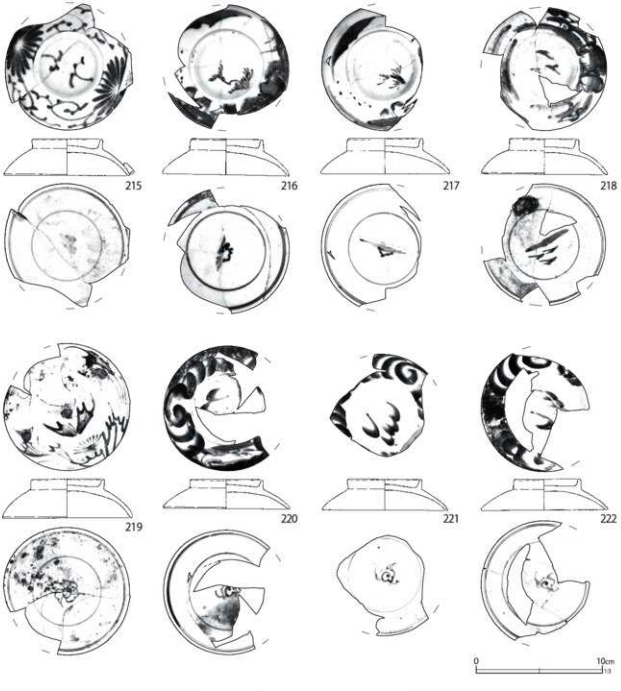


第 138 図　第 51 号土壙出土遺物（19）

が小さいものも認められる。

第 122 図 36・37 は、体部外面の上位に菊花文、下位に井桁状文を散らし、内底面には火焔宝珠文が染付される。破片 2 点を図示したが同一個体の可能性も否定できないので、個体数は 1 個体としておく。

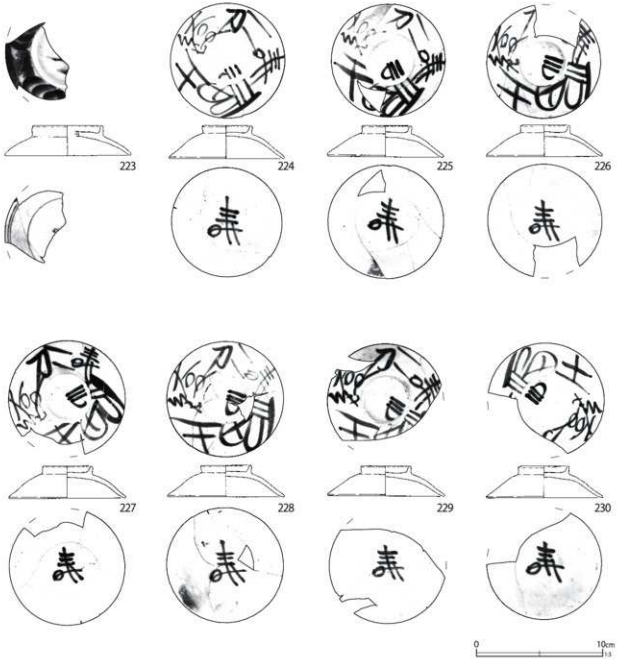
第 122 図 38 ～ 41 は同文の個体が認められず、各々 1 個体と考えられる。38 は外面に菊文が染付されるもので、やや厚手である。39 は内底面の五弁花文が著しく簡略化される。40 は内底面に蝶文が染付される。41 は外面に東屋の染付が認められ、風景文が描かれていたものと思われる。



第 139 図　第 51 号土壙出土遺物（20）

第 122 ～ 125 図 42 ～ 86 までは、肥前系磁器の筒形碗である。42 ～ 46 は、外面に紅葉、内底面に崩れた五弁花文が染付されるもので、同文の被熱資料である。破片を含め全てを図示しており、個体数は 5 個体である。基本的に第 51 号土壙から出土したものであるが、第 54 号土壙との接合資料が 2 点含まれる。

第 122 ～ 123 図 47 ～ 53 は、外面に菊文が染付され、その間を斜格子文で充填した構成である。大小の差があり、器形の細部の差も考慮すると、3 類に分けられる。便宜的にA～C類として記述する。

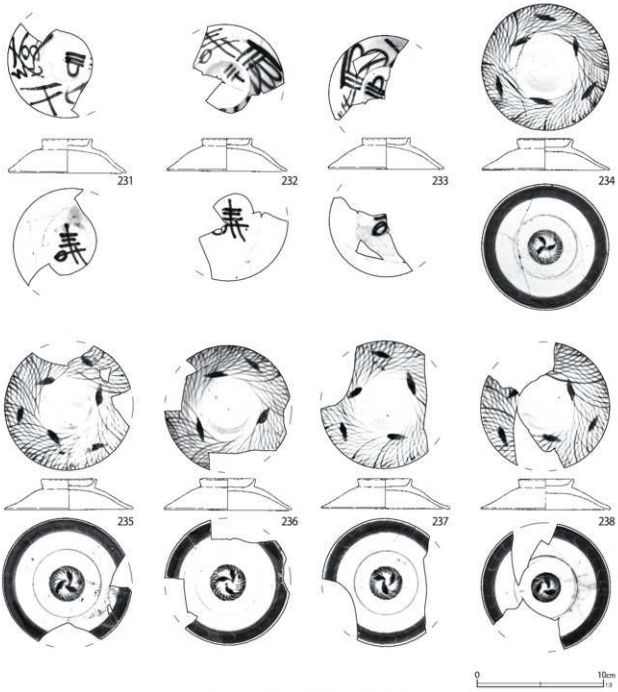


第140図　第51号土壙出土遺物（21）

A類は、口径7.0～7.4㎝、器高5.4～5.8㎝と径が大きく、47～49が該当する。また、第53号土壙からもう1個体出土している（第205図1）。第51・53号土壙を併せて、破片数5点（底部破片数3点）が出土しており、個体数は4個体である。内底面の五弁花文は簡略化して梅鉢文状に表される。

B類は小さいサイズで、口径6.8㎝、器高5.6㎝である。50・51が該当する。出土した全てを図示したもので、個体数も2個体である。内底面の五弁花文が梅鉢文状に表されるのは、A類と共通し、染付の筆致からもA類・B類が大小の組み物であった可能性がある。

C類も小さいサイズで、口径はB類と同じく

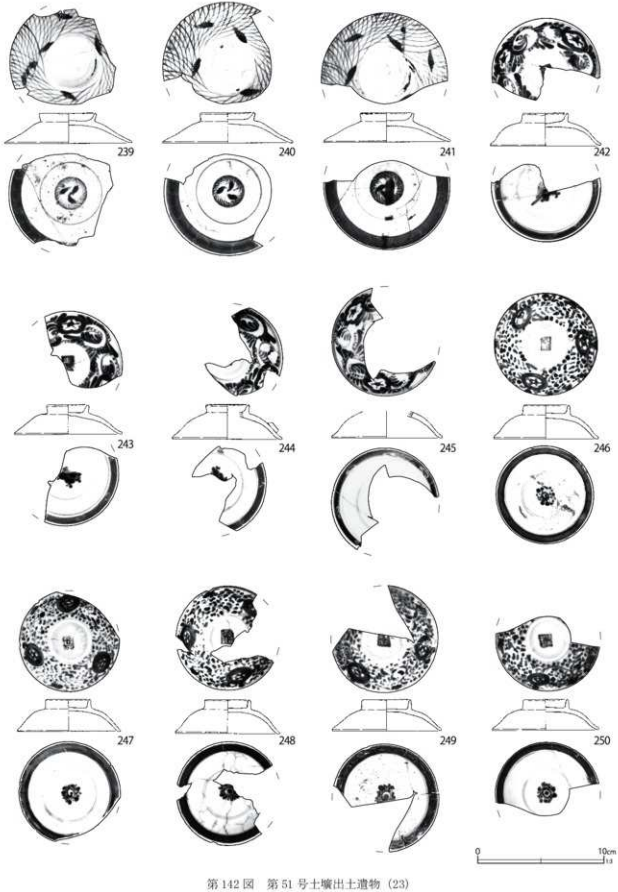


第 141 図　第 51 号土壙出土遺物（22）

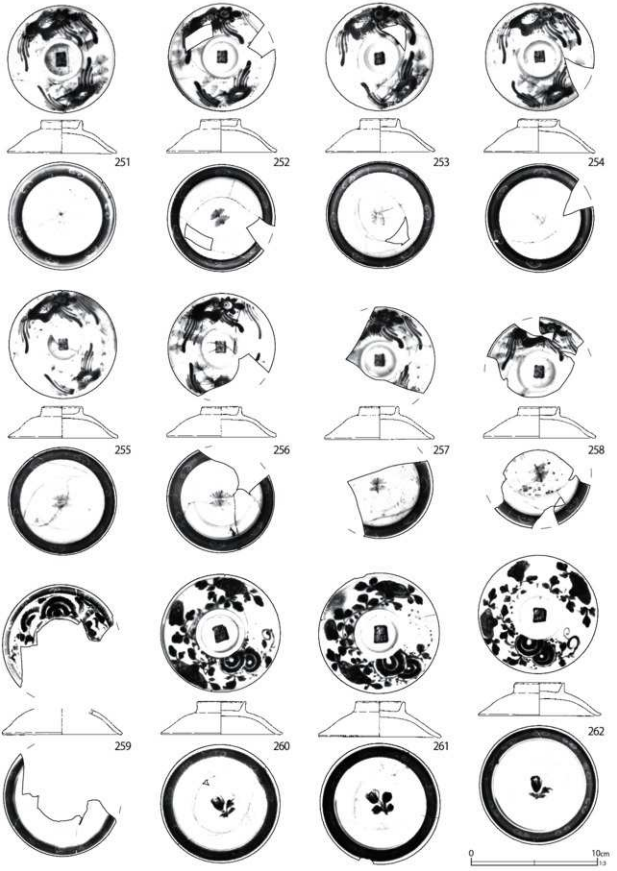
6.8 ㎝であるが、器高がやや低い。内底面の五弁花文は線が太く、輪郭は潰れている。出土した全てを図示したもので、個体数も 2 個体である。

第 123・124 図 54 ～ 74 までは、外面に草花文、内面口縁部に四方襷文、内底面に崩れた五弁花文を染付するもので、同文の被熱資料である。非掲載資料を含む破片数は 28 点（底部破片 21 点）で、ほとんどが第 51 号土壙に帰属するが、第 54 号土壙との遺構間接合も目立つ。掲載したのは 21 点、個体数は 22 個体と推定される。72 のように、強い熱を受けて、破損・溶着したものもある。

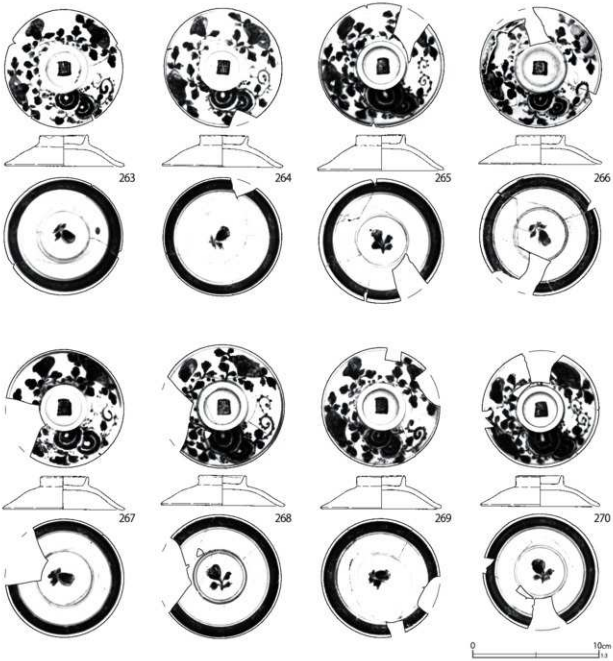
第 124・125 図 75 ～ 86 は、体部の上下に半菊



第 142 図　第 51 号土壙出土遺物（23）



第 143 図　第 51 号土壙出土遺物（24）



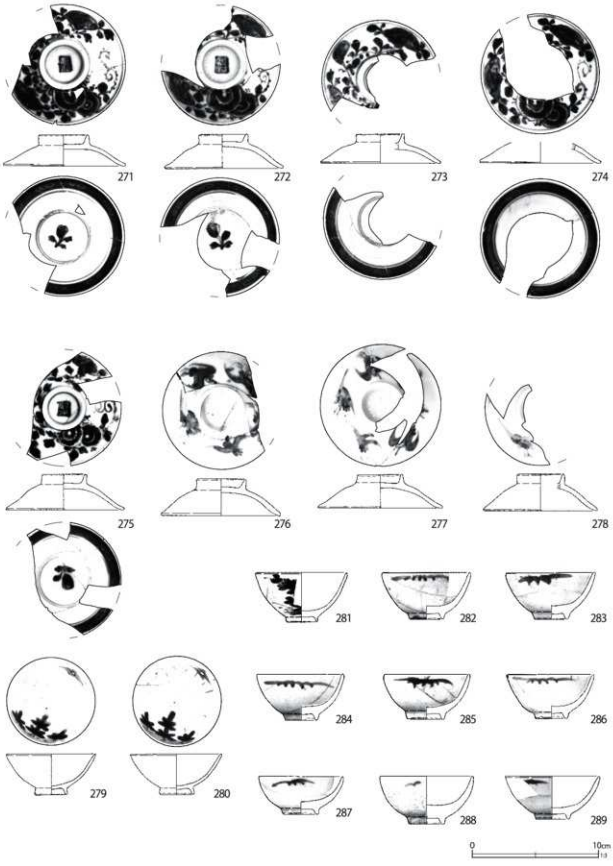
第 144 図　第 51 号土壙出土遺物（25）

文を、その間に井桁状文が染付される。内面口縁部には四方襷文、底面には崩れた五弁花文が染付される。非掲載資料を含めた破片数は 23 点（底部破片数 9 点）である。第 54 号土壙の破片 1 点を除き、第 51 号土壙の出土である。ただし、第 52・53 号土壙とで遺構間接合したものがある。掲載したのは 12 点、個体数は 14 個体と推定される。

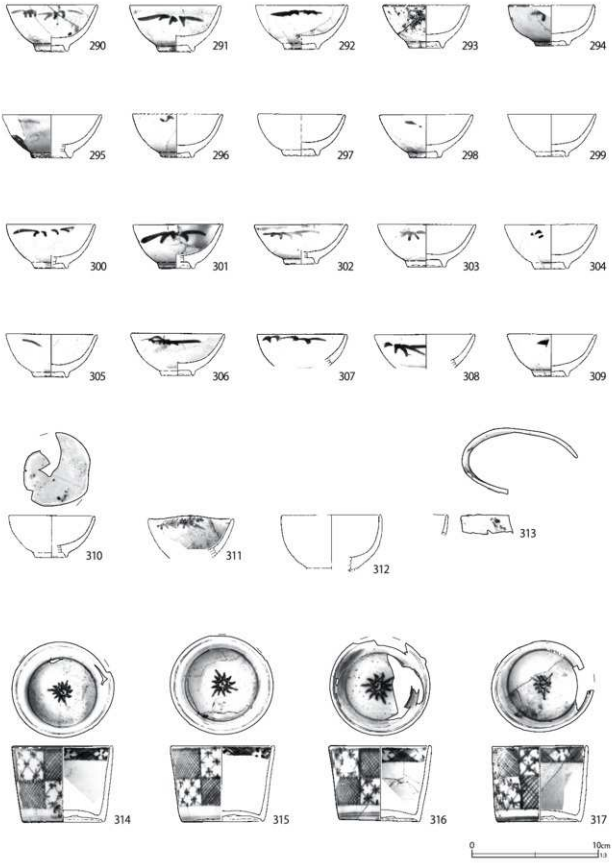
第 125 ～ 129 図 87 ～ 128 は、肥前系磁器の広東碗である。

第 125 図 87 は外面に大きく草花文を染付する。同文の資料は見られない。

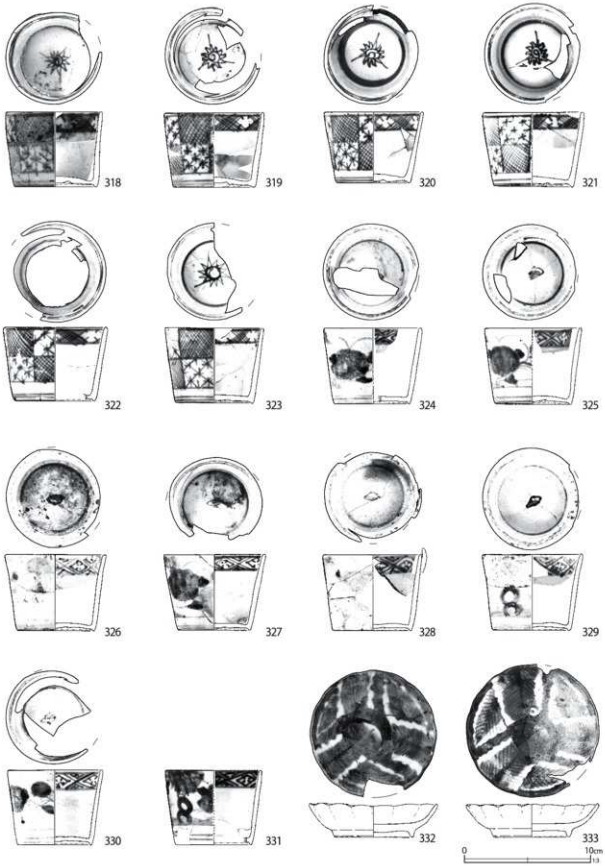
第 125・126 図 88 ～ 96 は、外面に山水文や東屋を、内底面に崩れた「壽」文が染付される。非



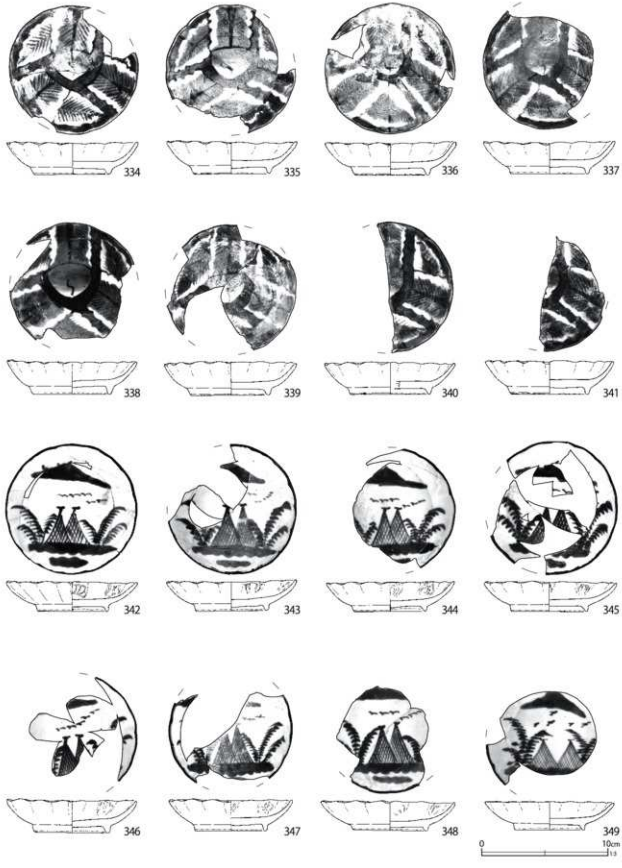
第 145 図　第 51 号土壙出土遺物（26）



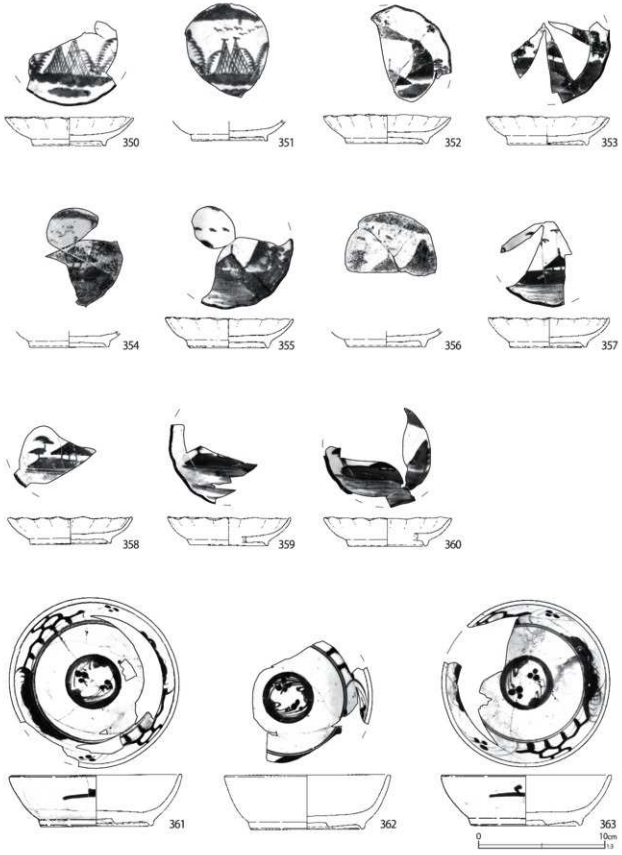
第 146 図　第 51 号土壙出土遺物（27）



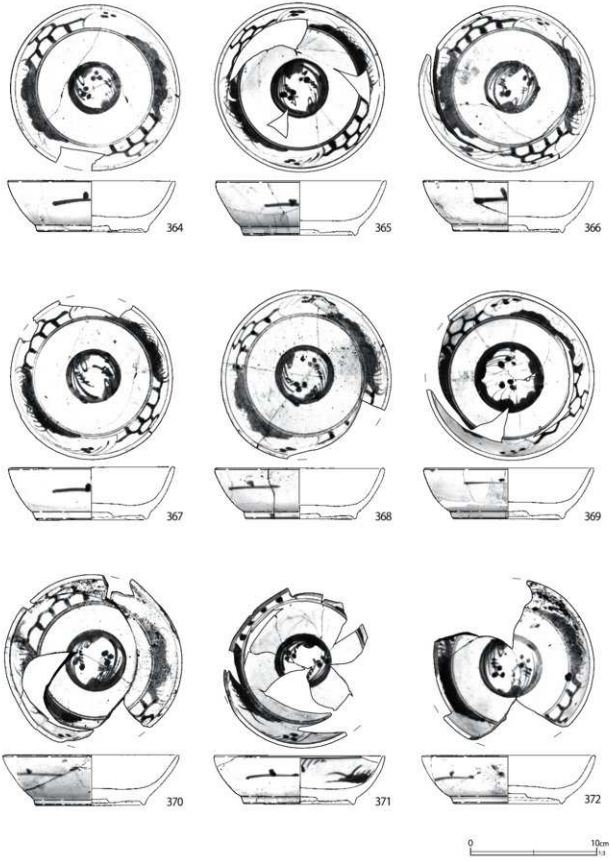
第 147 図　第 51 号土壙出土遺物（28）



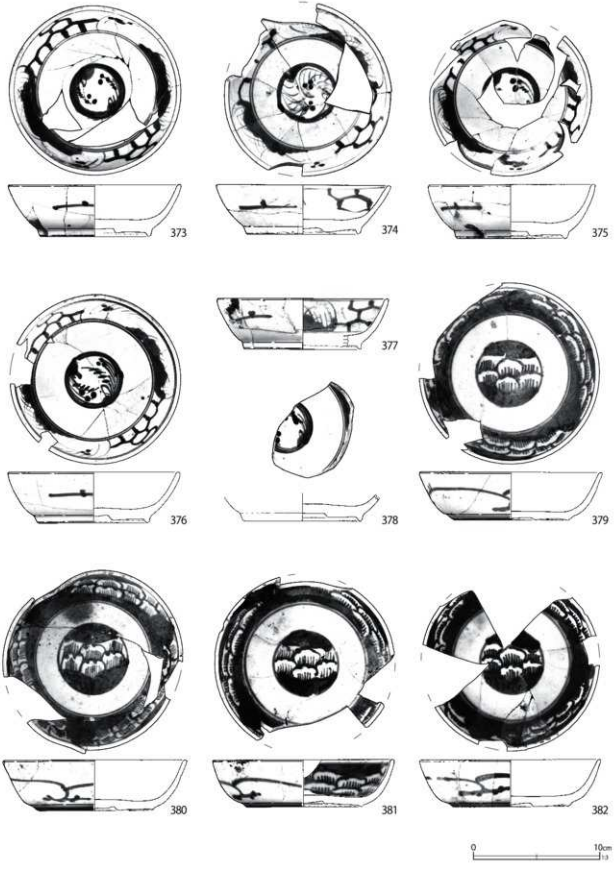
第 148 図　第 51 号土壙出土遺物（29）



第 149 図　第 51 号土壙出土遺物（30）



第 150 図　第 51 号土壙出土遺物（31）



第 151 図　第 51 号土壙出土遺物（32）